

波照間島総合調査報告書

— 自然・歴史・民俗・考古・美術工芸 —

1998年

沖縄県立博物館

波照間島総合調査報告書

—自然・歴史・民俗・考古・美術工芸—

1998年

沖縄県立博物館

ま え が き

本県は数多くの島々から成り、各島毎に豊かな自然と歴史があり、それぞれに特徴ある文化が育まれています。

波照間島は八重山郡竹富町の一地域で、日本列島最南端の島として知られています。島内には祖先から伝承されてきた貴重な歴史や文化、そして自然が残されています。

これまでも波照間島の調査は人類学、民族（俗）、考古、言語、芸能、伝統行事のほか、自然、歴史分野等、幅広く実施されて、多くの成果がまとめられています。

しかし、美術工芸をはじめ、他の分野も含めた総合的な取り組みは少なく、基礎的な調査資料が未だ十分でないように思われます。

波照間島総合調査は当博物館主要事業の一環として、平成8（1996）年度から平成9（1997）年度までの2年間、自然、考古、歴史、民俗、美術工芸の五分野で実施致しました。

各調査員は多忙な中を波照間島の調査に専念し、分野毎に調査結果をまとめ、詳しい報告を寄稿されています。その成果が、この総合調査報告書であります。今後、本報告書が波照間島の自然や歴史、文化の各分野を理解するため、そして調査研究の基礎資料になれば幸いです。

最後に、今回の総合調査を実施するに当たり、竹富町役場や竹富町教育委員会、波照間小中校、そして島の皆様に多大な御協力を頂きましたので、関係各位に対して深く感謝申し上げます。

平成10（1998）年3月

沖縄県立博物館
館長 當 間 一 郎

波照間島総合調査報告書目次

まえがき	館長 當 間 一 郎	
波照間島総合調査にあたって	島 村 修	1

自 然

波照間島の地形と地質	神谷 厚昭・山田 真弓	7
波照間島のシダ植物相	豊見山 元	25
波照間島の小動物	比 嘉 ヨシ子	32
波照間島で記録された鳥類とその方言名について	嵩原建二・島村修・加治工真市	65
波照間島の鳥類調査	与那城 義 春	87

考 古

波照間島の人骨調査	土 肥 直 美	96
波照間島の考古学	當 眞 嗣 一	115
毛原第一墓・庸原第一墓の調査	仲 間 留 美	137

歴 史

※八重山群雄割拠時代の波照間島における村落と英雄	通 事 孝 作	147
波照間と皇民化	前 田 真 之	168
波照間島の日撰曆クリヨンとその周辺	萩 尾 俊 章	177

民 俗

波照間方言動詞の活用	加治工 真 市	191
波照間島の芸能—ムシャーマを中心に—	當 間 一 郎	220
波照間島の神行事について～プーリン(豊年祭)を中心に～	仲 底 善 章	240

美術工芸

資料紹介・波照間の古墓出土の陶磁器	瑞慶山 昇・津波古 聡	255
昭和初期における波照間島の織物(聞き書き)	與那嶺 一 子	263
波照間文献目録		

沖縄県立博物館波照間島総合調査 調査員

- | | | |
|------|--------|-----------------|
| 総論 | 島村 修 | (元石垣市立石垣中学校 校長) |
| 自然 | 豊見山 元 | (県立北中城高等学校教諭) |
| | 比嘉 ヨシ子 | (元県環境衛生研究所研究員) |
| | 山田 真弓 | (県立向陽高等学校教諭) |
| | 神谷 厚昭 | (県立博物館指導主事) |
| | 嵩原 建二 | (県立博物館指導主事) |
| | 与那城 義春 | (県立博物館指導主事) |
| 歴史 | 通事 孝作 | (竹富町役場町史編集室主事) |
| | 前田 真之 | (県立博物館教育普及課長) |
| | 萩尾 俊章 | (県立博物館学芸員) |
| 考古 | 土肥 直美 | (琉球大学医学部助教授) |
| | 當眞 嗣一 | (県立博物館学芸課長) |
| | 仲間 留美 | (県立博物館学芸員補) |
| 民俗 | 加治工 真市 | (県立芸術大学教授) |
| | 當間 一郎 | (県立博物館 館長) |
| | 太田 健一 | (県立博物館指導主事) |
| | 仲底 善章 | (県立博物館指導主事) |
| 美術工芸 | 津波古 聡 | (県立博物館指導主事) |
| | 與那嶺 一子 | (県立博物館学芸員) |
| | 瑞慶山 昇 | (県立博物館指導主事) |

波照間島総合調査にあたって

島 村 修

日本最南端の島：波照間島は北緯24度2分24秒、東経123度47分12秒にあり、四面を海に囲まれた隆起珊瑚礁よりなる小島で、面積は14.96平方キロメートル、海岸線総延長15キロメートルで東西に長い楕円形の島である。有人島では日本最南端の島である。因みに日本最南端は北緯20度25分に位置する南鳥島で、満潮時には海面下に没する環礁である。しかし、200海里の経済水域を確保するために、人為的に補強された無人島である。従って人間の住む島としては名実ともに、最南端と言ってよい。高那崎には1970（昭和45）年に観光の一青年によって「日本最南端の碑」が建立されたが、1995（平成7）年には、終戦50年を期して「日本最南端平和の碑」が行政によって建立された。

島の中央の標高最高部（海拔60メートル）には、1954（昭和29）年に灯台が建設され、付近を航行する船舶に最南端の光を送る重要な標識となっている。

波照間の名称については古く（15世紀中頃）「李朝実録」に「^{ホティローマイジマ}補月老麻伊是麻」と記されており、可成古くから「ハティローマ」と呼ばれていたと思われる。現在は、パチラー（波照間）・パチルマ（白保）・ハティローマ又はハティロー（石垣）等と呼ばれている。語源については、「果てのウール（珊瑚礁）の島」という意味で「パチウルマ」が転訛して「パチルマ」や「ハティローマ」になり「ハテルマ」になったというのが通説のようである。「波照間」という漢字の三字がいつ頃宛てられたかは詳らかでない。その他に島の人々や島出身者同志で「ベスマ」という呼び方があるが、これは島の名称でなく、「我が島」という意味である。ややもすると島外の人々に誤解されがちであるので付け加えておく。尚南端にあるのを強調して「パイパティローマ」と呼ばれることもあるが、島の人々は殆どそう呼ばない。島の人々のいう「パイパティローマ」は、波照間島の遙か南にあるといい伝えられている幻の島のことである。人頭税時代の1648年、楽土パイパティローマを求めて、40～50人位の人びとが島抜けをしたという八重山島年来記の記録があり、且つ島ではこれにまつわる「ヤグアカマリ」や「鍋カキマス」の伝説もあって「島抜け」の事実はあると考えられる。そういう事で「パイパティローマ」の存在は島民も、郷土誌研究家の間であっても関心事で、台湾の蘭嶼への探訪など試みられている。

島の自然とくらし：気候は亜熱帯海洋性気候で台風常襲地帯である。年平均気温は摂氏24

度・年平均降水量は1770ミリメートルで八重山群島内では少ないほうである。この気象条件、とくに台風と降水量が島の生活を左右する最大条件となっている。従って、島の歴史も文化も台風対策と水問題の解決に他ならない。昭和初期から戦後にかけて、波照間の人々は「セメント民族」と揶揄されていた。それは竹富町のセメント消費量の約90パーセントが波照間の人々によって占められていたからである。四隅や外壁をセメントで囲った頑丈な住居、天水を貯めた大きなコンクリート造りの水タンク等、今も島の各所で見られる。最近の沖縄の住宅は鉄筋コンクリート建てが主流を占め、上水道が普及し、波照間でも鹹水の淡水化プラントが導入されているが、地球にやさしい水問題として、「雨水利用」が地球的にクローズアップされている。コンクリート造り住宅の先取りといい、雨水タンクといい、波照間の先人の慧眼を見逃してはいけない。尚波照間の古い祭事や神行事は、雨乞や雨への感謝と水に関するものが主軸をなしていることを付け加えておく。

土質は珊瑚石灰岩を母岩とする島尻マージが主で、海岸地帯にはカニヤグ地又はシィサバと呼ばれる砂土ないし、ササラと呼ばれる砂礫土や砂と島尻マージが適当に交じったメーラ地と呼ばれる砂質壤土等が僅かに見られる。尚最近、土地改良により地中から掘り出したクチャー（島尻層の泥灰岩）を客土した新しい土壌が造られている。

植物相は至って単純で蘚苔類を含めても300種内外程度と考えられる。植生は本来なら常緑広葉樹林で覆われていると思われるが、殆ど人為的に攪乱され（農地として開墾）僅かに島の中央部の白朗原御嶽や阿幸俣御嶽・真徳利御嶽等の拝所に見られるにすぎない。海岸の岩磯や砂浜地帯にはそれぞれ典型的な「隆起珊瑚礁上植生」や「亜熱帯性海浜植生」が見られる。

動物相も貧相で、家畜・家禽や犬猫などのペットの他に脊椎動物は鳥類を除けば、10指を僅かに越える程度であると考えられる。甲殻類や昆虫類以下の無脊椎動物についても狭い島嶼のうえ、最近の土地改良事業による森林や草原の減少、水田の畑化等による植生の単純化により、その減少や絶滅が危惧される。野鼠駆除のため導入されたイタチが野鳥（ミフウズラ）やヤシガ二等を捕食し、その数の激減が報告されている。

日本最南端という地理的な条件と、海洋中の一孤島で人間生活による大気汚染度が低く、尚大気透明度が高いという好条件で、1992（平成4）年国立地球環境モニタリングステーションが建設され、1994（平成6）年星空観察タワーが建設された。

政治権力に翻弄された島：波照間の歴史は先史時代に於いても前近代に於いても八重山の歴史の上で重要な地位を占めており、且つ有史時代に入っては、ときの政治権力に翻弄された悲劇の歴史といえる。

即ち先史時代やスク時代を自主独立の時代とするなら、有史時代に入っては屈従の時代

である。

考古学の調査研究によると下田原貝塚は八重山では最古の仲間第一貝塚に次ぐ古い貝塚とされており、その出土の土器は下田原式土器と名づけられ、歴史編年の重要な資料となっている。従って八重山の考古学には必ずでてくる用語である。その他にも波照間には大泊貝塚や、スク時代のブリブチ・タカフク・ヨウブチ等の遺蹟や城址があり、それにまつわる豪傑や女傑の伝説等も多い。アラブチブラとパーミシクブラとの戦いや、カンチアジマグとユナチマヤの戦い、女傑ピタブパメやヤマダブパメの伝説など枚挙に暇がない。

1500年オヤケ赤蜂の乱の双壁長田大翁主や、赤蜂に従わず殺害された明宇底獅子嘉殿も波照間島の生まれである。その後琉球王朝支配下にあっても、波照間は八重山歴史の中心的な史実が多い。前掲のヤグアカマリの「島抜け」事件や1755（宝暦5）年、祭温の政策、寄百姓によって西表島の崎山へ新村建のための強制移住。1771（明和8）年、大津波の時の大浜村や白保村への強制移住などはあまりにも有名である。話は前後するが、その他にも1713（正徳3）年に白保村へ。1734（享保19）年に西表島南風見村へと実に、約60年の間に四度も強制移住をさせられたのである。歴史は繰り返すというが、まさに、1945（昭和20）年、第二次世界大戦末期の西表島南風見へ、日本軍による全島民の強制疎開等、何か因縁めいたものを感じずにはおれない。

今一つ波照間の歴史研究の上で重要なことは、琉球王朝時代、波照間島は、政治犯流刑の地であったということである。これが島の文化や、島民性や色々な面で深い関わりをもってきたと考えられる。このように多彩な歴史を持ちながら、波照間島の歴史は先史時代の下田原貝塚の研究はさておき、スク時代や、その後の歴史はよく知られていない。特に琉球王朝時代の歴史、なかでも、前記寄百姓時代の島の百姓の生活、政治犯流刑の状況や、住民との関わり、当時の島の役人の人事往来など。今後の大きな研究課題といえよう。口承によれば、当時のオーセ（村番所）が前後二度にわたる火災により、古文書、記録などすべて焼失してしまったというが、これを補完する資料はないだろうか。因みに筆者は戦後1947（昭和22）年、オーセ（現在は公民館）で公文書を見せてもらったが、いちばん古い文書は明治初期（年月日忘却）の三条実美公より発せられたものであった。

昔は波照間はユンタ、ジラバのメッカで、波照間の人とはユンタ、ジラバの「かけ」はするなど言われていたという。ユンタ、ジラバは人頭税によって束縛され、苛酷な労働を強いられ、虐げられた百姓が、逃れる術がなく、互いに肩を寄せあって畑を耕し、家を立て、助け合って生活を支え合う原始共同体的生活の中から生まれたという。従ってそれは、畑仕事や家造り、オーデラー（公の労務賦課）など共同作業の場で生まれ、謡い継がれて来たといえる。したがってユンタ、ジラバに強いという事は、共同作業が盛んであるということである。波照間における共同作業は「ボー」と呼ばれる仕組みで行なわれていた。

いわゆる「結い廻」である。5～6人の小さいボー。40～50人の大きなボー。開墾、草とり、収穫等の畑仕事。冠婚葬祭の薪とり、精米。家造り等労力の結い廻の他に、金銭や物品の結い廻も盛んに行なわれていた。「ボー」は戦後昭和30年代まで盛んに行なわれていたが、大型製糖工場導入を節目に農業も五穀中心から甘庶作へと変わり、鍬、籠農業より、自動耕耘機、ハーベスターへと機械化された。生活様式も変わって昔の面影はない。しかし、今も甘庶収穫には「結い廻」の精神は生き続け、「刈取組」として残り、運営も現代化されて威力を発揮している。因みに昔あれほど強いといわれたユンタ、ジラバも、第二次世界大戦の戦争マラリアで謡手の古老の殆どが亡くなり、ユンタ、ジラバも彼らと共にあの世に持ち去られたのも多いという。

島の生業の移り変わり：島の生業は有史以来数百年五穀中心の農業であった。その中で一時時期漁業が大繁盛し幅をきかした時代もあったが、1963（昭和38）年波照間製糖工場（100トン）の導入によって画期的変革を遂げ、自給自足的農業から脱却して現在にいたっている。今その移り変りを少々立ち入って考察してみる。

1952（昭和27）年下田原貝塚の発見により、波照間でも狩猟を生業とした時代もあったことがわかった。しかし島の口承、伝説には、貝塚時代と結びつくのは殆どない。ただ石斧の存在は知られ、「ムガヌブヤイシピラ」（大昔の爺さんの石籠）と言われていた。スズメノコビエの方言名を「ユスパリヤ」という。その由来は、ムガヌ（大昔の）ブヤ（爺さん）が、イシピラ（石籠）でユスパリ（小便）のぬける程苦勞してようやくそれを根こそぎしたことに由来するという。又、島には珊瑚石灰岩の石垣が至る所にあった。（現在は採石や土地改良でなくなった）それは開墾時にでた石を積んだものであろう。その石垣の上ではノビル（野蒜）が生い茂っていた。その昔、人口稠密で、畑の少ない人々が、雨上りに大草鞋をはいて、他人の畑を歩き、草鞋に付いた土を体よく盗んで石垣の上に乗せ栽培したという伝説がある。石斧で農耕をしたかどうかは定かでないが、可成古くから農耕が営まれ生活の手段にしていたのは間違いないようだ。

戦前の島の農業は原始的、粗放農業で、生産性至って低く、降水と台風の如何に左右され一度早魃や台風に襲われると、飢饉となり、いわゆる蘇鉄地獄の到来となる。でも波照間では、如何なる大きな飢饉でも餓死者は殆ど無かったという。それは蘇鉄を食糧として利用する生活の知恵があったからである。それは第二次世界大戦後、昭和20～21年で証明済みである。もし波照間に蘇鉄が無かったら、戦争マラリアの被害は倍増し、島は全滅状態になっていたであろう。島の生活史で蘇鉄の存在は見逃せないので特記した。因みに、島民が戦争マラリアを克服してようやく生きる望みがでた昭和24年頃、蘇鉄への感謝祭が島をあげて挙行された。それは波照間における蘇鉄の元祖といわれる大泊海岸東端岩上の

蘇鉄に感謝の祈りを捧げ、その実を公民館の祭壇に飾って行なわれた。

さて、大型製糖工場導入以前の農業は天水田の耕作と、畑作の他、役用牛馬に養豚、養鶏、養蚕等細々ではあるが割りに多角的に経営されていた。天水田の特殊な耕作も興味深い。ここでは農業の中心であった畑作についてその概要を述べる。

シイサバ畑・メーラ畑：海岸沿いの砂土とそれと隣り合う砂質壤土である。稀にササラ畑と呼ばれる砂礫土がある。いずれの場合も当時の主食、甘藷の連作が行なわれた。冬、整地をして2～3月植え付け、夏、収穫するいわゆる夏いも畑である。アリモドキゾウムシ等の害虫が少ないのが特徴である。でも台風の影響があれば、一時にして塩ゆでにされ枯れてしまう。夏の収穫がすめば後の半年は休耕して牛や山羊の繋ぎ場となり、地力をつけて来年を待つのである。

ウガリ畑：ウガリとは小高い丘陵状の地形をいい、それは隆起珊瑚石灰岩で出来ている。その上の極く薄い層の腐植質の多い畑で、水はけがよく、旱魃に至って弱い。主に冬季に粟をまきその間に約1メートル間隔に甘藷を植え付ける。粟収穫後は甘藷畑となる。収穫（いも掘り）は先の尖ったいも掘へらで「探り掘り」をする。その際、長くのびた蔓の中段を地中にうめて、節からの発根を促し、そこに芋を太らせる。これをシーヌソーという。これに対して、植え付けた蔓にできる芋をニーヌソーという。こうして一年おきに更新し繰り返す。10年ほど耕作すると地力が衰えるので休耕して蘇鉄や阿壇、灌木を繁茂させて地力をつける。10年ほどして地力のついた頃、焼畑開墾をする。

トー畑：トーとは「低くて平ら」という意味があり、一般に広くて平坦で土層も深い赤土（島尻マーヅ）で出来た畑をいう。各家庭で、一番広くて耕作しやすく便利な位置にあり、生産の主力となるトー畑をその家の「ブシドーマシドー」と定め、種取祭など農耕祭事を中心とする。トー畑の作付けは、一年次は秋の終わり頃粟をまき、その除草、間引きのとき、小豆を適当な距離にまく。粟は5～6月、小豆は7～8月収穫する。二年次は、秋の初めに小麦をまき、3月頃収穫したらすぐ鋤起こして下大豆をまく。下大豆は秋の終わり頃収穫する。このように粟、小豆、小麦、下大豆と二か年サイクルの輪作を行なう。

漁業については、大正初期に従来の生活に飽き足りない進歩的青年達によって、鱈漁業が導入された。その後は帆船から、焼玉、ジーゼルと動力つき漁船へと発展し、一時期（昭和10～20年）はその総数9～10隻に及び隆盛を極めた。当時の漁業組合長故仲本信幸氏の話によれば、島の戸当たりの年間所得は沖縄県平均をはるかに上回り、貯蓄高は県一位であったという。

鉱業については大正から昭和初期にかけて燐鉱石（グアノ）の採掘が試みられた。一時期は、二つの会社を吸収合併した大阪朝日化学肥料株式会社が華々しく操業したが、第二次世界大戦のため、鉱石の輸送が困難となり、且つ貧鉱で採算が取れないとの事で、昭和

16年には閉山している。しかし操業中は数百人の従業員が来島し、島の男女青年も多数雇用され、島の経済を大いに潤し賑わったという。

島が一番賑わったのは、昭和10～20年頃である。鯉漁業の隆盛、燐鉱山の操業・それにその頃は珍しく降雨多く、天水田の豊作が続いた。でもそれは、日中戦争から第二次世界大戦と戦時統制経済のなかで、食糧増産、国内資源の開発という国策による景気であったという。まもなく昭和20年には軍命による西表島南風見へ疎開、そして戦争マラリアですべての物を失ってしまうのである。

マラリアを克服した1949～1950年頃から漁業は戦前の余勢を借りて、鯉漁業を復活させた。農業も現代化を目指し、換金作物として玉葱栽培や動力による小型製糖工場の導入、養豚、養蚕、養鶏等も試みたがいずれも、国の工業化政策による労働力の都市集中、農漁村の過疎化の波には勝てず、大正元年導入され、半世紀余り続いた鯉漁業は昭和40年代には遂に姿を消した。農業も前述のように、昭和38年大型製糖工場導入により甘庶単作の時代となり現在に至るのである。

これからの課題：農業基盤整備事業（土地改良）前の波照間を知る者が、久しぶりに島を訪ねて驚くのは島の景観の変貌である。それは農道によって碁碁目のように整然と仕切られ整備された広い甘庶畑である。岩石の掘削や客土・土地の分合整理・農道整備等により、機械化農業が可能になり、地力は増大した。従って生産力が著しく向上し、人々の生活が豊かになった。しかし、その反面、いろいろ負の現象を惹起しているのも事実である。赤土による海の汚染、豪雨時の洪水や表土の流失、地下への浸透水の減少、地下水汚染、森林や草原の減少による潮害、その他生態系の攪乱単純化により、小動物の絶滅にも繋がりがねない。小さな島ほど生態系は小さく脆い。この負の面をいかに克服し改善していくか、農業後継者問題やその他農業経営問題とともに重要な課題である。

参考文献

- | | |
|---------------|--------------|
| 宮 良 高 弘 著 | 「波照間島民俗誌」 |
| コウネリウス・アウエハント | 「HATERUMA」 |
| 波照間民俗芸能保存会発行 | 「波照間島のムシャーマ」 |

波照間島の地形と地質

Geography and Geology of Hateruma Island, Okinawa Prefecture, Japan.

神谷 厚昭・山田 真弓

Kosho KAMIYA · Mayumi YAMADA

はじめに

波照間島は、八重山諸島石垣市の南西約56km、北緯24° 03′、東経123° 47′ に位置し、日本最西端の島である。東西が約5.7km、南北が約2.8kmの、東西方向に長軸をもつ楕円形の島である。島の最高所が海拔59.5mに過ぎない低平な島で、大きく見て4段の平坦面が確認できる。

島の地形や地質については、すでに第二次世界大戦前のHanzawa (1935) の研究にはじまり、戦後は兼島 (1963) の応用地質的研究を皮切りに、復帰後、沖縄県内の島じまの地形・地質等の調査が盛んに行われるに伴って、波照間島についても多くの研究がなされた (国分,1972、矢崎,1976、沖村雄二,1978、古川博恭・富田友幸,1978、河名俊男・大城逸朗,1978a、河名俊男・大城逸朗,1978b、松丸国照・瀬名波任,1979、木崎甲子郎編,1985、Omura,1984、河名俊男・中田 高,1994)。

Hanzawa (1935) によると、島の地質は大部分が琉球石灰岩からなるが、一部島の西中央部 (富嘉付近か?) に八重山挟炭層 (八重山層群) 類似の赤色の砂岩の分布が報告されている。しかし、今回の調査の結果、八重山層群の分布は確認されなかった。おそらく、富嘉層 (島尻層群) の泥岩層に石灰分がしみ込み、黄褐色に固くなったものの誤認であろうと考えられる。

今回の研究は、前記研究者によってなされた研究成果を総括すると同時に、新たな調査結果に基づいて明らかになったことについて報告する。

〈謝辞〉本研究にあたり、富嘉層の貝化石の同定に関して平田義浩氏に、また波照間層の底性有孔虫の同定では瀬名波任氏にたいへんお世話になった。深く感謝申し上げます。

1. 波照間島の地形

波照間島は、島のほとんどが琉球石灰岩に覆われ、全体としては盾を伏したような低平な地形である。しかし、石灰岩がいくつかの地形的急斜面と緩斜面を作りながら段丘地形をつくり、島の中央部から海岸に向かって次第に高度を減少している。高那崎から西側に

かけての島の南東部においては、10数mの急崖をもつ海岸線をつくっているが、その他の海岸線では、数m以下の岩場かまたは海浜および砂丘である。

波照間島の地形については、島における現地調査と、地形図や航空写真による解析を通して沖縄総合事務局（1978）や河名・大城（1978a,b）等による詳しい研究がある。彼らによると、波照間島は4段の段丘から形成されている。今回の調査でも同様な結果が得られたので、ここでは河名・大城（1978a）の区分に準じて各段丘面の特徴を説明する。

1) I面

島の各集落がのる一番高い平坦面である。標高が25~59.5mの範囲で変化し、かなり高低差をもった面で、東側の灯台近くで最も高く標高が59.5mあり、西側に向かって緩やかに傾斜して富嘉集落の西方で25mまで降下している。この面には、波照間小中学校東側、富嘉集落南側など、各所にドリーネが発達し、凹地部には樹木が茂っている。灯台の南側には北西-南東方向の断層によって形成された急崖が見られ、相対的に南側が約7mの高度差で落ちている。また、富嘉集落北側から波照間電業所南、庸原用水池南、前集落南にかけて、富嘉集落西側から南東にかけても、直線的な地形的なギャップが認められる。

II面との境をなす急斜面は、島の一周道路に沿ってよく発達している（図1）。特に、南側の道路沿いの急斜面は見事である。しかし、島の西部富嘉集落の西側では、I面とII面の境界の急傾斜の面は他の地域ほど地形的に明瞭ではない。



図1 境界の急傾斜部とII面

2) II面

I面の周辺に分布し、波照間島の段丘面では最も広い範囲を占める。前述したように、I面との境界は明瞭な急傾斜で接している。II面は、I面との境界近く、特に南側と東側でかなり平坦な地形を示し、その幅は、南側で約200~350m、東側で約600mもある。しかし、その平坦面の端の方から海側では、海に向かって緩く傾斜した地形を示し、徐々に高度を減じている。北側では、I面との境界近くの平坦面は見られず、II面は全体として海に緩く傾斜した面のみで構成されている。

II面の南東部には、I面からII面を切って北西-南東方向に伸びる急崖が見られ、最大7mの高度差で南側が落ちている（白原断層）。また、この急崖の東方には、西北西-東南

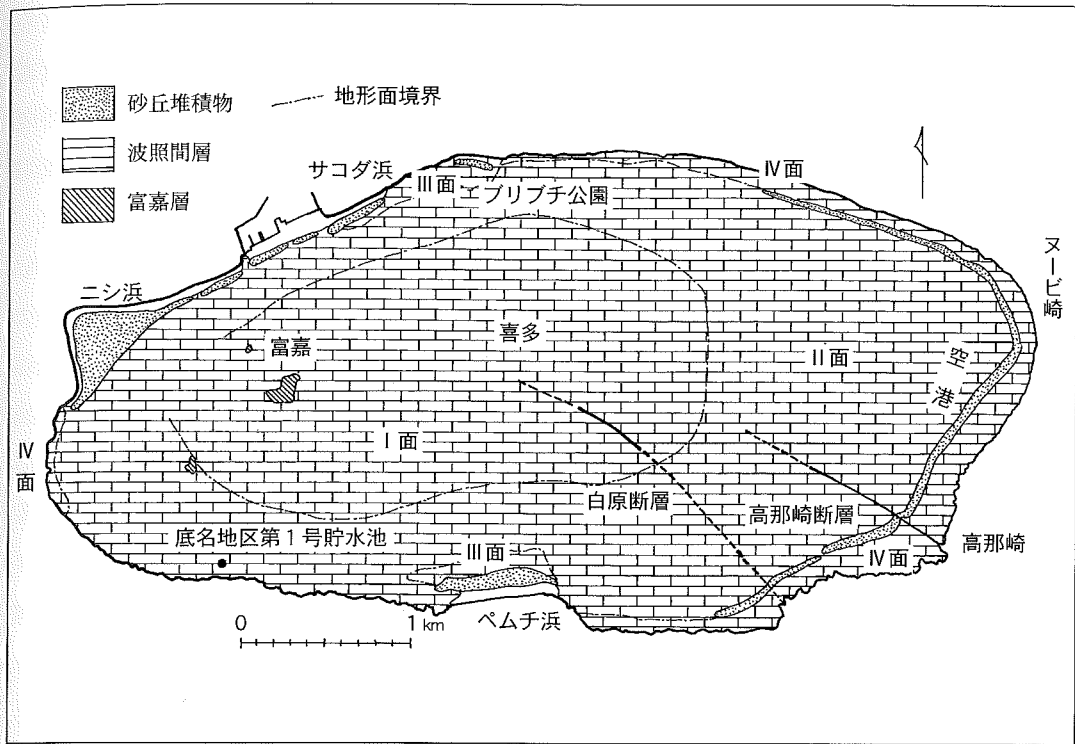


図2 波照間島の地質図

東方向の急崖が発達し、高那崎へ伸びている。比高は最大7mで、北側が落ちている（高那崎断層、図2）。

3) III面

III面は、島の北側、ブリブチ公園の北方下田原から波照間港にかけての海岸沿いと、南海岸のペムチ浜北に、局所的に帯状に分布している。標高10m前後で、ほぼ平坦な地形を示し、II面とは急傾斜でもって接し、その境界は明瞭である。平坦面の前面には、サコダ浜とペムチ浜にいずれも砂丘層の堆積があり、10~20mの地形的高まりを形成している。

北部の下田原においては、アワ石状の石灰岩がIII面を覆っており、アワ石石灰岩の堆積面を示しているが、南部のペムチ浜付近では露頭がなく面を構成する岩石を決定することはできない。しかし、II面との境界を示す急傾斜面を構成する岩石が、サコダ浜では現地性のサンゴ石灰岩、ペムチ浜では下部に碎屑性石灰岩、上部の方に現地性のサンゴ石灰岩が見られることから、ペムチ浜付近もアワ石状石灰岩で構成されていることが予想される。つまり、いずれもサンゴ礁に取り囲まれたラグーン的環境の堆積物であることが推定されるわけである。

4) IV面

IV面は、島の北側海岸から、東側海岸を通過して南東海岸にかけてと、西海岸の毛崎付近に分布する。標高は、毛崎で2~3m、北海岸で1~5m、南東海岸から高那崎にかけては5~16mと高度変化の大きな面である。高那崎で極端に高度を増しているのは、断層運動による変位の結果である。

毛崎付近および南東海岸付近の面を構成する岩石は、現地性のサンゴ石灰岩である。しかし、ヌービ崎付近から北海岸にかけては、有孔虫や石灰藻を中心にウニの棘、サンゴの破片等を含み、サンゴ礁の周辺部（リーフの外側）を構成する岩石である。河名・大城（1978a）は、この面の形成を完新世と推定し、採集したサンゴ化石を用いて年代測定を実施したが、いずれも30,000y.b.p.の結果を得た。これらの結果を基に、河名・大城（1978b）は、IV面を構成する石灰岩を、いわゆる30,000年段丘と捉え、世界的な海水準変動の一安定期に形成された段丘であると見なした。

高那崎付近のIV面上には多数の石灰岩の転石（いわゆるニガーヘッド）が見られる。特に、断層崖の北側に多い。転石はサンゴ石灰岩より構成され、IV面を構成する石灰岩である。長径が1~8mで、長径がほぼ海岸線（砂丘の伸張方向）に平行で、平らな面を海側に向けて傾斜しているものが多い。このことは、サンゴ石灰岩が、形成された後に海岸方向から何らかの力を受けて剥ぎ取られ、面上に乗ったものであることを示している。Ota et al（1985）は、IV面上の砂丘から採集したサンゴ片年代測定を



図3 IV面上の石灰岩転石

実施し、 $150 \pm 80 \sim 165 \pm 80$ y.b.p.を得た。この値は浜堤が明和の津波によって形成されたことを示している。このことは、IV面上のサンゴ石灰岩の転石も同様に明和の津波による可能性を示している（図3）。

2. 波照間島の地質

(1) 富嘉層（島尻層群）

波照間島には、後述の波照間層（琉球石灰岩）の基盤として、わずかながら青灰色の泥岩層が見られる。沖村（1978）の調査結果によると、これら泥岩層の分布は、富嘉の井戸底、北部ブリブチ公園リン鉱採掘跡などである（今回の調査では確認できなかった）。また、古川・富田（1978）は、電気探査や地質ボーリングによる調査の結果、地下に広く泥岩層が分布することを確認している。筆者は今回の地質調査により、新たに富嘉西方に風化の

進んだ泥岩層の小露頭を、また南西方800mの地点の溜め池周辺に泥岩の露頭を確認した。また、富嘉の南方には、最近石灰岩土壌の改良を目的とした客土に利用するために泥岩の採掘が試みられ、200m四方の広い範囲に泥岩層の露出が見られる。これら一連の地層に、筆者は富嘉層と命名した。

富嘉南の露頭における観察では、厚さが約10mの全体に単調な青灰色泥岩層からなり、厚さ数mm~1cm程度の薄い凝灰岩層を数枚挟む地層である。走向がN50° E、10° Sで緩く南東に傾斜している。泥岩層には散在的に貝、浮遊性有孔虫、炭化木片、ウニ化石および褐鉄鉱ノジュールが含まれている。浮遊性有孔虫化石は、泥岩中に散在するほかに、下部の凝灰岩中にも密集している（後述）。また、沖村（1978）は有孔虫以外に植物化石を報告している（ハマビワ *Listea sp.*と単子葉植物）。

泥岩と凝灰岩は、北西走向、北東傾斜の幾つかの小正断層で断ち切られ、階段状の断層を形成している。含有化石の産状、地層の構成、地層の走向傾斜、小正断層の発達、いずれの特徴も沖繩島に広く分布する島尻層群与那原層に酷似している。しかし、沖村（1978）も植物化石の産出、海底地形や海底地質などから堆積盆の地域的差異を指摘しているが、後述の貝化石の種類からも同様なことが推定できる。

（2）波照間層（琉球層群）

波照間島には、Hanzawa（1935）による“琉球石灰岩”が島のほとんどを占めて分布する。そこで、筆者は島の地質を代表する意味で波照間層と命名した。

沖村（1978）が指摘したように、明瞭な上下関係を示す大きな崖が少なく、波照間層の層序区分は難しい。島の東部、高那崎には比較的層序のそろった崖があって、その崖や北海岸近くのブリブチ公園付近の崖の観察結果から、沖村（1978）は、下部から順に褐色・堅硬・緻密な石灰岩礫岩、灰色で比較的緻密なサンゴ片や石灰藻をかなり含む碎屑性石灰岩、灰白色多孔質のサンゴ・石灰藻を主体とする生物岩からなることを報告している。今回の調査では、ブリブチ公園近くの露頭は確認できなかったが、新たに富嘉南に現れた露頭で富嘉層（島尻層）と波照間層（琉球層群）下部の関係が観察できた。（図4）

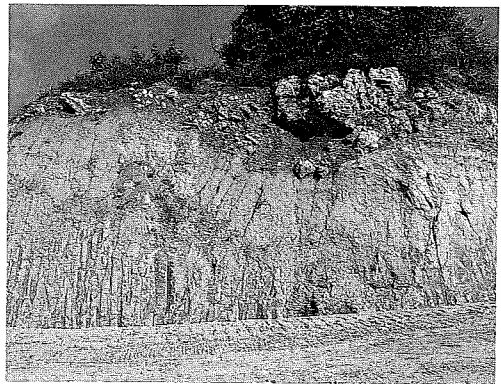


図4 富嘉層と波照間層の不整合

富嘉南における富嘉層と波照間層の間の不整合面は、南に向かって緩く傾斜しており、不整合面直下の泥岩層は石灰分のため固結してノジュール状になっている。基底礫には、

円磨のよい石灰岩の中礫が多量に含まれており、波照間層の本体が形成される前にすでに石灰岩が存在していたことを示している。基底礫岩の上部は碎屑性石灰岩の巨礫が多量に含まれている。礫中のあるものはドロマイト化作用で暗灰色に変化している。基底礫の上には現地性サンゴを含む生物岩が乗っている。

上記の波照間層は段丘のⅠ～Ⅲ面の構成層で、地表に露出するその大部分は含サンゴ化石の礁性石灰岩である。碎屑性石灰岩は、崖をなす段丘の境界等でよく観察でき、一般的に礁性石灰岩の下位を占めて分布する。碎屑性石灰岩は、アンフィステギナ、カルカリナなどの底性の有孔虫を主体とし、石灰藻、サンゴ、二枚貝、巻貝、ウニ類、苔類などの化石が含まれる(表1、PLATE 1)。また、碎屑性石灰岩は浮遊性有孔虫を普遍的に含み、外海のおそらく大陸棚的な環境で堆積したものと推定される。基質は基盤に近いところにおいて泥質であるが、全般的には再結晶がすすみ結晶質である。

表1 波照間層中の化石

産地番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
有孔虫名・その他										
アンフィステギナ	◎	◎	○	○	◎		○	○	◎	
カルカリナ	◎		○		○		○		◎	
バキュロシプシナ	◎	△			○					
バキュロジプシノイデス				△			○		△	
オバキュリナ							△			
ヘテロステギナ	△				△					
サイクロクリペウス				△	△		△		△	
マルギノポーラ	○				△		△			
ミニアジア?	△			△				△		
ジプシナ		△	△				△	△		
ホモトレマ		◎								
スポラドトレマ	△		○	○			○	○	○	
底棲有孔虫の一種		△	△	○			△	△	△	△
浮遊性有孔虫		○	○	○	○	○	○	○	◎	◎
石灰藻類		○		○	△		○			
ハリメダコーラル	○	○		○						
サンゴ		△								
ウニ									△	

1: 970809-3, 2: 970810-1, 3: 971023-2, 4: 971024-1, 5: 970810-2,
6: 970810-4, 7: 960823-1, 8: 971024-3, 9: 971024-2, 10: 971024-4

Ⅱ面を構成する礁性石灰岩は、島の南東部と南西部において特徴的な地形を形成している。つまり、地形図で波打った等高線を示し、尾根状地形と谷状地形を交互に繰り返す、いわゆる spur and groove 地形が見られる。典型的なものは南西海岸の底名地区第1号貯水池工事現場において観察できるが、尾根状地形のところにはみごとな現地性サンゴ塊が、谷状地形のところにはサンゴ片の混じった碎屑性有孔虫石灰岩が観察される。このことは、これらの地形が現在のリーフにできた溝状水路と同じようにして形成されたものであることを示している。

一方、Ⅲ面を構成する石灰岩は、有孔虫砂からなる碎屑性石灰岩である。顕微鏡下での観察でも浮遊性有孔虫が見られないこと、野外において礁性石灰岩と同時異相の関係が認められることから礁湖内の堆積物であることが推定できる。

(3) 砂丘堆積物

砂丘堆積物は、南西部の海岸を除いて、ニシ浜、サコダ浜、ペムチ浜および波照間空港東側等の標高5-15m付近に細長く、広く分布する。風成の砂および砂礫層からなる堆積物である。堆積物の構成が比較的良好に観察できる場所は、空港南端の排水溝沿いとニシ浜に開口する潤れ谷の河口付近である。前者の場所においては、碎屑性石灰岩の上に厚さ30-60cmの風化赤褐色土を挟んで不整合に乗っている。砂は、淘汰の悪い有孔虫を主体とする石灰質砂で、赤褐色土の直上において石灰岩、サンゴの亜円礫の密集が見られ、さらに上部に比較的礫の多い層準を2枚挟む。

上部の礫の多い層準より下位は腐植物質の影響で暗色を呈している。さらに上位には灰色の軽石の小礫を特徴的に含む層準が見られる。この砂層の比較的上位には八重山式土器片や類須恵器が含まれる(古川・富田、1978)。

ニシ浜の露頭で観察される砂層は、下部が径数mm~5cm大の軽石と炭化物小片を含み、ラミナの見られる暗色砂層である。その上に、厚さ30cmで数cm径の石灰岩亜円礫の密集層が乗り、さらにその上に、枝サンゴや石灰岩礫の散在する厚い砂層が堆積している。少し



図5 spur and groove 地形

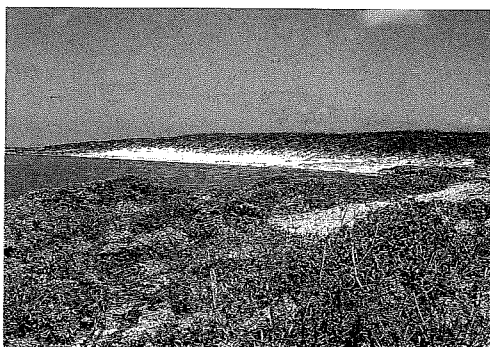


図6 ペムチ浜

離れた露頭で直接石灰岩と接触するのが観察できるが、赤褐色土は認められない。

ペムチ浜では、軽石の密集する砂層が直接赤褐色土の上に存在しているのが観察できる。このように、砂丘堆積物の様子は、地域によって構成物に多少の違いがあることがわかる。軽石の包含される層準がいくつあるか確認されていないのでお互いを対比することは困難であるが、軽石包含層が一枚と仮定すれば、空港東側の砂丘堆積物は比較的下部層が発達し、他の地域には上部層が発達しているものと考えられる。古川・富田(1978)によれば、空港東側の砂丘堆積物はさらに南に伸び、高那崎断層によって切られている。そして、南側の砂層には軽石が含まれていない。このことから、高那崎断層の活動時期は下位の軽石を含まない砂層の堆積以後、上位の軽石を含む砂層の堆積前、すなわち、約1000年B.P.前後と考えられる。

(4) ビーチロック

最も大規模に発達の見られる場所はサコダ浜で、250mにわたって海岸沿いに分布している。他に小規模のものがペムチ浜と西海岸のハマシタン群落のある浜で観察できる。

サコダ浜のビーチロックは、厚さが20~30cmで、数枚の板状の層が海に向かって緩く傾斜しているのが観察できる。

3. 富嘉層(島尻層群)中の化石

富嘉集落の南において、島尻層群に対比される富嘉層は、客土用の土を採るために広い範囲に渡って採掘されている。その富嘉層には、多くの貝化石や有孔虫が産出する。とくに下部の凝灰岩層中には浮遊性有孔虫の密集する層準がある。ここでは、それらの貝化石や浮遊性有孔虫の観察結果について記述する(TABLE 1, 2)。

(1) 有孔虫化石

有孔虫とは、原生動物の中でも肉質類の属する一群で、珪藻、放散虫などとともに微化石と呼ばれ、数cm~数mmおよびそれ以下の大きさのものである。大部分の有孔虫の殻は、石灰質で、化石として保存されやすく、殻の外形・内部構造、殻の組成・構造で分類をしていく。

有孔虫の生息場所は、ほとんど海水域で、底生有孔虫と浮遊性有孔虫に分けることができる。現生種では、前者は4000種以上に達するが、後者はわずか30種あまりである。特に浮遊性有孔虫は、その生活史のほとんどを海水中で送るため、海流によって汎世界的に分布し、進化速度も速く、地層の同時性を証明する示準化石として世界各地の地層対比に有用である。底生有孔虫は、それが生息する海底環境の諸条件(水温、深度、酸素濃度など)に

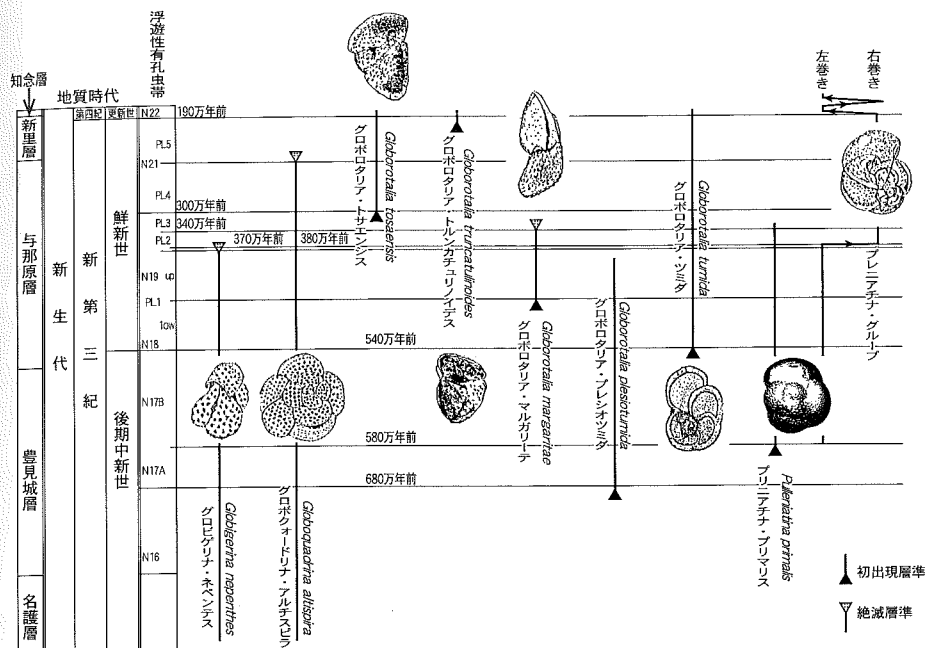


図7 島尻層群の浮遊性有孔虫区分 (氏家,1986、一部改変)

支配されて、さまざまな種の組み合わせからなる群集をつくっている。そのため、地層の堆積環境 (古環境) を示す示相化石になる。

今回の観察は、試料を過酸化水素水処理後、有孔虫を無作為に250種余り拾い出し、浮遊性有孔虫と底生有孔虫に分け、それぞれを種ごとに分類して解析した。そして、氏家 (1986) (図7) をもとに、それぞれの地質区分の種を調べ、沖縄本島と比較した。

上記のような観察の結果、富嘉層 (島尻層群) の有孔虫含有率は、沖縄本島の島尻層群泥岩中の浮遊性有孔虫含有率に比べ、非常に多いことがわかった (約35%、本島10%以下)。また、浮遊性有孔虫と底生有孔虫の比率は圧倒的に浮遊性有孔虫が多く (約98%)、特に外洋熱帯性の浮遊性有孔虫 (*Pulleniatina obliquiloculata*, *Globorotalia crassafomis* など) を含むことがわかった。このことより、富嘉層が熱帯の外洋的環境で堆積したことが推論できる。これは、後述する貝化石の結論とも整合的である。また、沖村 (1978) によれば、今回の調査地の北東方向の地点で浮遊性有孔虫を採集し、N21の層準の存在を推定し、一部にN22が存在することの可能性を示唆している。今回の調査では、特徴的に *Globorotalia tosaensis*, *Globorotalia truncatulinoides*, *Globorotalia tumida* などが識別され、N22の存在が明らかになった。調査地は走向傾斜の傾向から推定して、間に断層の存在がなければ沖村 (1978) の検討した層準より上部が現れている可能性が高い。従って、沖村 (1978) の結果とは整合的である。以上の結果から、富嘉層は沖縄本島の新里層上部に相当すると考えられる。

表2. 島尻層の貝化石

綱 (亜綱)	学名、和名、その他
<p>腹足綱</p> <p>クダマキガイ科</p> <p>トウガタガイ科</p> <p>タマガイ科</p> <p>エゾバイ科</p> <p>オニノコブシ科</p> <p>リュウテン サザエ科</p>	<p><i>ptychosyrinx</i> 属 日本初の属と思われる <i>Micantapex</i> sp.</p> <p><i>Propella</i> sp. (平田案)</p> <p><i>Makiyamaia subdeclivis acuticarinata</i> (Shuto, 1961) ヌリツヤイグチ <i>Kuroshioturris</i> sp. ボラ</p> <p><i>Elaeocyma (Splendrilla) mammillata</i> Kuroda et Oyama モモイロモミジ cf. <i>Pseudetrema fortilirata</i> (Smith, 1879) ホソシャジク=スジプトヌノ メシャジク、生息深度：10-60m、分布：沖縄～九州～四国</p> <p><i>Leucotina sagamiensis</i> タママキノガイ、生息深度50-200m</p> <p><i>Cryptonatica bougi</i> (Sowerby, 1908) カノコタマガイ</p> <p><i>Colus (Aulacofusus) haterumaensis</i> Kamiya, MS, 1997 ハテルマイトマキツムバイ</p> <p><i>Benthovoluta gracilior</i> Rehder, 1968 ホソツノキフデ、分布：フィリピン～沖縄。</p> <p><i>Benthovoluta barthelowi</i> (Bartsh, 1942) = <i>B. delicatuda</i> Shikama 1959 ヒメツノキフデ</p> <p><i>Puha</i> cf. <i>Puha fulgida</i> Marwick 1631</p> <p><i>Awateria (Mioawateria) cf. A. (M.) . personata</i> Powell, 1942.</p> <p><i>Phanerolepida rehderi</i> MacNeil</p>
<p>二枚貝類</p> <p>シラスナガイ科</p> <p>スミゾメソ デガイ科</p> <p>オトヒメゴ コロガイ科</p> <p>ワタゾコツ キヒガイ科</p>	<p><i>Crenulilimopsis oblonga</i> (A.Adams) = <i>C.crenata</i> A.Adams = <i>C.tumidwa</i> ナミジワシラスナガイ</p> <p><i>Malletia humilor</i> Prashad ヒメスミゾメソデガイ (仮名)</p> <p><i>Euciroa millegemmata</i> Kuroda et Habe チリメンギンスナゴガイ?、生息 深度：200-400m</p> <p><i>Propeamussium jeffreysi</i> (Smith) ハナヤカツキヒガイ</p>
<p>掘足類</p> <p>ツノガイ科</p> <p>クチキレツ ノガイ科</p>	<p><i>Fissidentalium kawamura</i> Kuroda et Habe カワムラツノガイ、生息深 度：100-200m、砂泥底、分布：伊豆沖～高知県沖</p> <p><i>Striodetalium rhabdotum</i> (Philsbry, 1905) ムチツノガイ、 生息深度：200-600m</p> <p><i>Striodetalium hosoi</i> (Habe, 1964) ヤセツノガイ、生息深度：200-760m</p> <p><i>Cadulus (Platyschides) opportunus</i> (Kuroda et Habe) ハラプトツノガイ、生息深度：100-200m、砂泥底、分布：鹿島灘～相模湾</p>
<p>後鰓類</p> <p>カメガイ科</p>	<p><i>Cavolinia gibbosa</i> (D.Orbigny) シロカメガイ</p>

(2) 貝化石

今回の調査で富嘉層から採集した貝化石は、腹足類が14種、二枚貝類が4種、掘足類が4種、後鰓類が1種である(表2)。二枚貝類は、採集した以上に種類が豊富であると考えられるが、保存が悪く完全な形のまま採集することが困難で、今回同定した種類は少ない。二枚貝採集を含めた調査研究は今後の課題としたい。

特に多くの貝化石が産出する層準は、露頭上部の凝灰岩と下部の凝灰岩の間に位置する泥岩層で、産出状況は散在的かつ異地性である。またときには、貝化石や炭化木片化石を核として褐鉄鉱のノジュールが形成されている。

貝化石の種類は、二、三の例外的なものを除いて小型種が多く、カワムラツノガイ *Fissidentalium kawamurai* Kuroda et Habe やチリメンギンスナゴガイ *Euciroa millegemmata* Kuroda et Habe などのように、沖縄島およびその周辺離島に分布する島尻層と共通の種も産出するが、異なった種も多く見られる。そして、波照間の島尻層中では南方型の種の混在が顕著になっているようである。中には、日本初の属と考えられる *ptychosyrinx* 属、またエゾバイ科ツムバイ属のヒライトマキツムバイに近似する種で、殻表面の螺肋や螺溝などの特徴から新種と思われるハテルマツムバイ *Colus (Aulacofusus) haterumaensis* Kamiya, MS. 1997 などが産出する。ヒライトマキツムバイは、千葉県銚子沖から東北沖の200-1650mの砂泥底に生息する種であるのに対し、ハテルマツムバイはおそらくその南方型であることが推定される。

幾つかの種について、生息深度を見てみると、ホソシャジクのように数10m以浅のものもあるが、多くは数10~数100mの大陸棚ないし大陸斜面に生息する種が多い。また、化石の産出状況が異地性であることから、島尻層の堆積は大陸斜面的な環境が推定される。

3) その他の化石

富嘉層には前記貝化石以外に、サンゴ化石や耳石、ウニの棘、炭化木片等の化石が産出する。サンゴ類はすべて単体サンゴの類でセンスガイ *Flabellum distinctum* (M. Eow et H.)、タケノコサンゴ *Fragilocyathus conotrochoides* Yabe et Eguchi、ハナツツサンゴ *Conotrochus parhipidus* Yabe et Sugiyama、*Doltocyathus* sp.、*Stephanophyllia* sp. 等である。

耳石は全体に産出数は少ない。ウニの棘は数は少ないが特定層準に集中する傾向があり、そこではかなりまとまって産出する。そして、化石の周りの泥岩層がやや固結する傾向があり、ノジュールの初期の段階を示唆している。炭化木片はの多くはノジュールの核として産出し、周囲が褐鉄鉱で包まれているものが多い。これらの化石はいずれも散在的に地層の中に包含され、異地性化石であることは貝化石と同様である。

4. 地質構造および地下水

波照間島における大きな地質構造は、高那崎断層およびそれとほぼ平行に灯台の南側を走る断層である。高那崎断層は、走向がほぼ北西～南東で、垂直に北側が落ちた左横ずれの断層である(古川・富田、1978、木崎、1985)。垂直の落差が7m、横ずれ成分は約100mである。一方、灯台南側の白原断層は南側が垂直に約5mほど落ちた垂直断層である。その横ずれ成分は明らかでない。波照間島付近の海底地形図を見ると、島の南東の海底に波照間海底谷と呼ばれる線状の構造地形が認められる。この海底谷の陸上延長に高那崎断層が位置している。つまり、高那崎断層の活動は、波照間海底谷の形成運動の陸上での表れであることがわかる。また、波照間海底谷の南西にも複数の小規模な海底谷が、波照間海底谷にほぼ平行に発達している。この中の西側の1つが白原断層の形成に関連したものと推定される。白原断層は、段丘のI面上では明らかな断層崖を形成している。しかし、II面上ではその崖が認められない。そして、南東延長方向の海底で再び海底谷として現れることから、白原断層の形成時期はI面の形成後、II面の形成前と推定される。



図8 高那崎断層

一方、基盤構造、つまり富嘉層(島尻層群)と波照間層(琉球石灰岩)の境界に、については、古川・富田(1978)による調査の結果、明らかにされている。それによると、富嘉から喜多・南にかけて基盤の富嘉層の高まりが認められる。そして、島の周辺に向かって同心円状に低下している。しかし、その等高線を詳細に見ると、ペムチ浜、下田原の海岸、シムスケ東方において、海に向かって広く開口した地下の谷状地形が認められる。この谷状地形に沿って、地下水が集積し、海に向かった流れ出ているものと推定される。その1つがプリブチ公園や下田原における湧水として地表に現れているのである。

波照間村民が現在利用する水は海水と地下水である。飲料用水としては、島の北部にある鍾乳洞内の滞留水などを利用しており、「波照間簡易水道海水鹹水淡水化施設」において淡水化した1日300トンの淡水によってまかなっている。また、島の製糖工場の工場用水には前記プリブチ公園に湧出する地下水を利用している。

〈参考文献〉

古川博恭・富田友幸(1978)：沖縄県波照間島の水理地質。琉球列島の地質学研究, No.3, p.205-214.

海上保安庁水路部(1988)：5万分の1沿岸の海の基本図(波照間島)。

兼島 清(1963)：琉球諸島におけるリン鉱の産地と品質。琉大文理紀要, 理学, 6, 11~26.

河名俊男・大城逸朗(1978a)：八重山諸島・波照間島の地形と地質—平坦面の形成過程及び地殻変動についての予察—。沖縄県立博物館紀要, No.4, p.1-16.

河名俊男・大城逸朗(1978b)：波照間島の地形と地質—特に新しいサンゴ礁堆積物に関連して—。琉球列島の地質学研究, No.3, p.139-146.

河名俊男・中田 高(1994)：サンゴ質津波堆積物の年代からみた琉球列島南部周辺海域における後期完新世の津波発生時期。地学雑誌, Vo.103, No.4, p.352-375.

木崎甲子郎編(1985)：琉球列島の地質誌.278p.

沖村雄二(1978)：波照間島の琉球層群。琉球列島の地質学研究, No.3, p.129-138.

松丸国照・瀬名波任(1979)：波照間島の更新世有孔虫について。琉球列島の地質学研究, No.4, p.119-122.

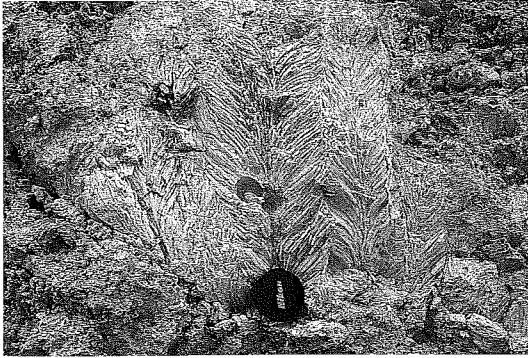
沖縄総合事務局(1978)：波照間島。昭和52年度農業用地下水調査水理解析業務報告(その3)。p.148-168.

Omura, A(1984) : Uranium-series age of the Ryukyu Limestone on Hateruma Island, southwestern Ryukyus. Transactions and Proceedings of the Paleontological Society of Japan, New Series, No. 135, p. 415-426.

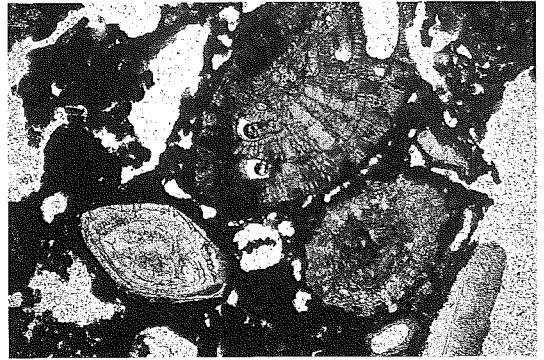
Ujii, Hiroshi(1985) : A Standard Late Miocrobiostratigraphy in Southern Okinawa-jima, Japan Part 2. Details on the Occurrence of Planktonic Foraminifera with Some Taxonomic Annotations. Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo, ser. C11.

氏家 宏(1986)：琉球弧の海底—底質と地質— 新星図書出版

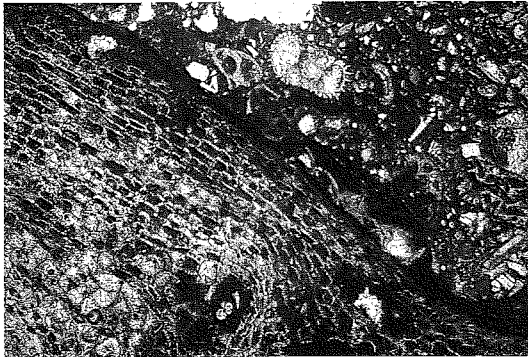
PLATE 1



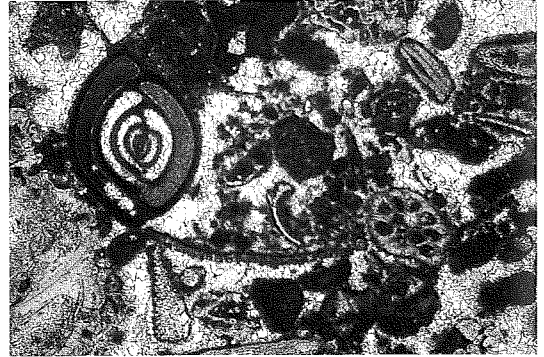
1: 現地性サンゴ化石 (底名地区第1号貯水池)



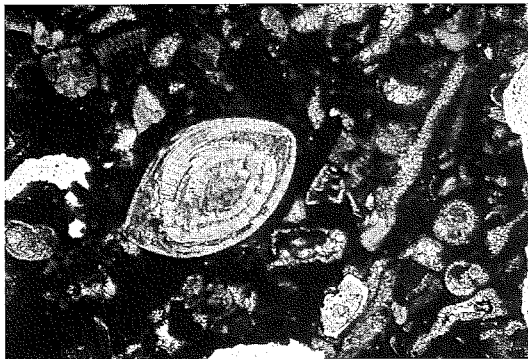
2: 970809-3 (下田原)



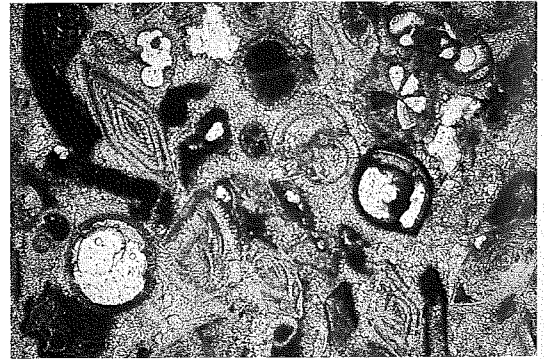
3: 970810-1 (空港東)



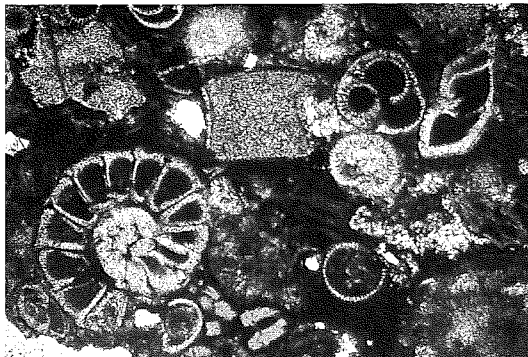
4: 971024-1 (灯台東南東)



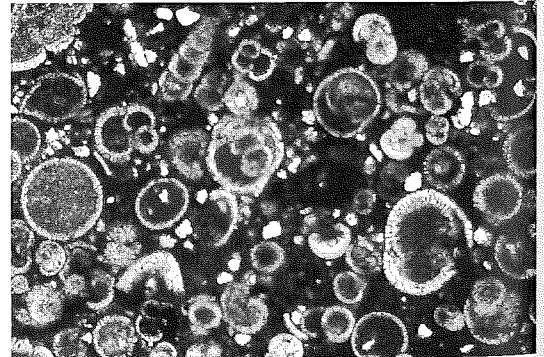
5: 971023-2 (ニシ浜)



6: 960823-1 (富嘉南)

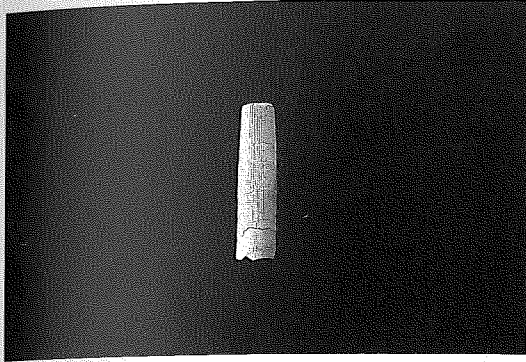


7: 971024-2 (富嘉南)

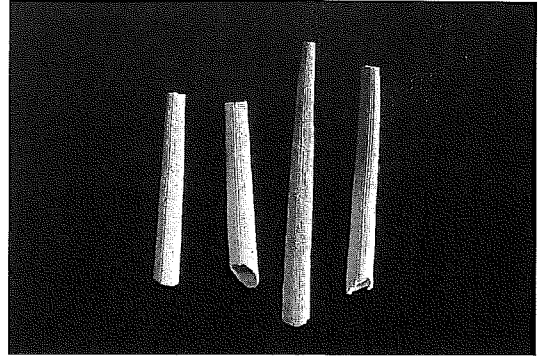


8: 971024-4 (富嘉南)

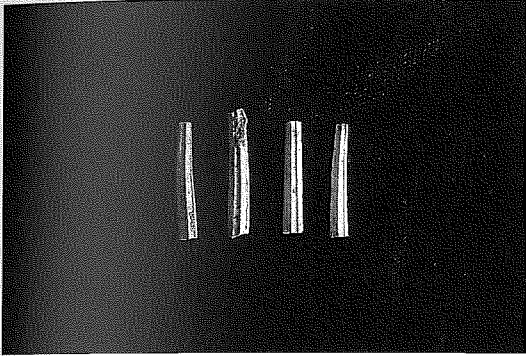
PLATE 2



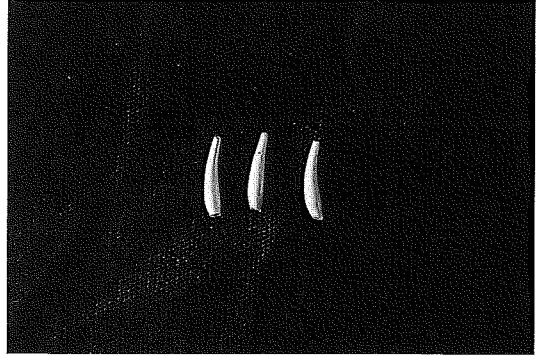
1: カワムラツノガイ ×0.7



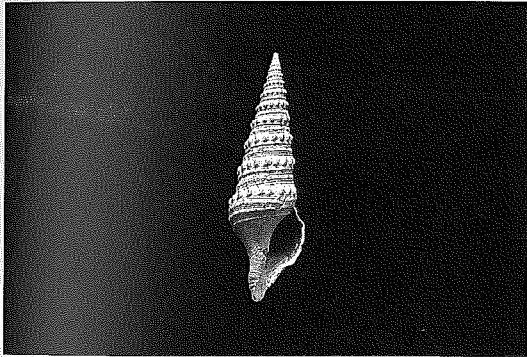
2: ムチツノガイ ×1.2



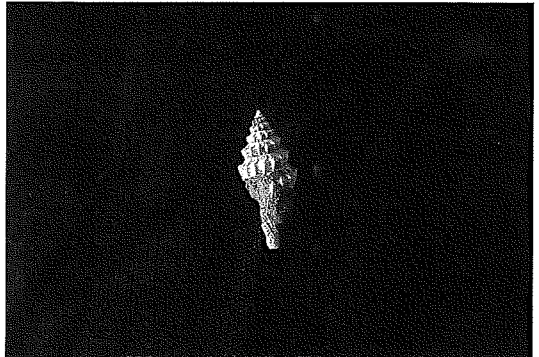
3: ヤセツノガイ ×1.2



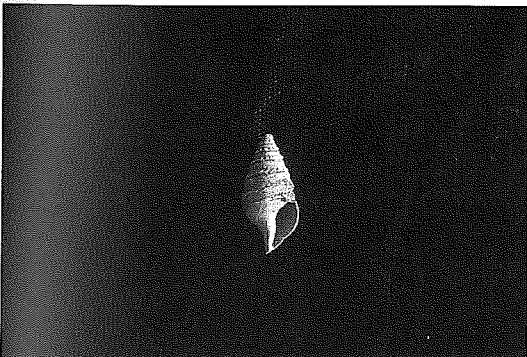
4: ハラプトツノガイ ×1.2



5: *Ptychosyrinx*属 ×0.7



6: *Propella* sp. ×1.2

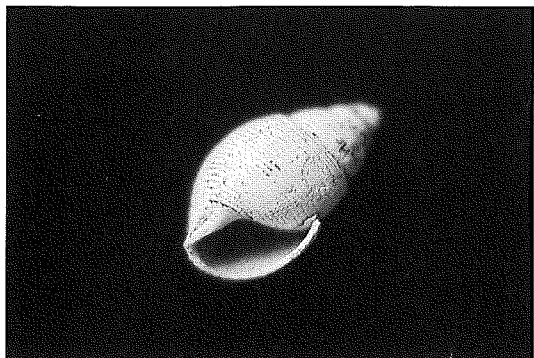


7: ヌリツヤイグチ ×1.2

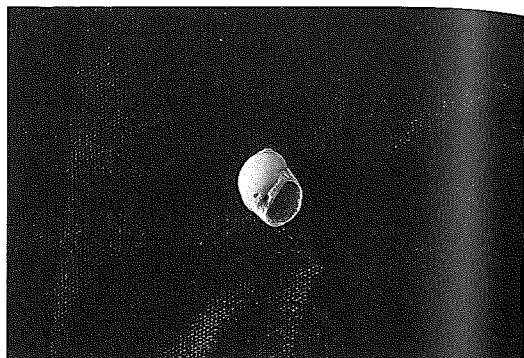


8: モモイロモミジボラ ×2.6

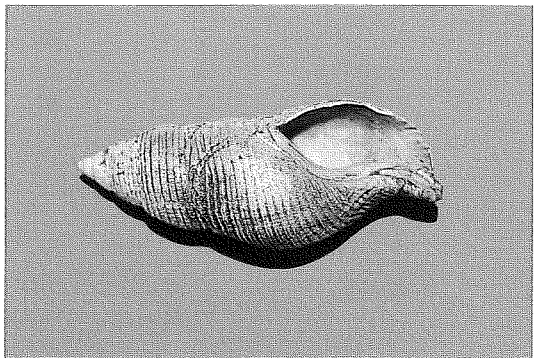
PLATE 3



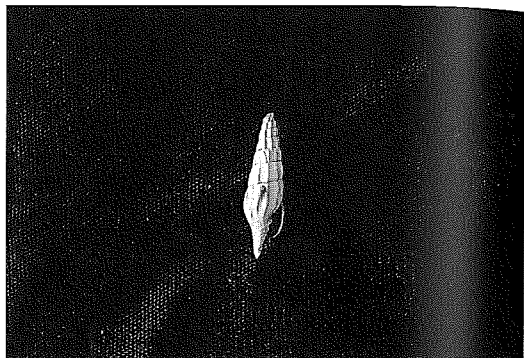
1: タマキモノガイ ×4.6



2: カノコタマガイ ×1



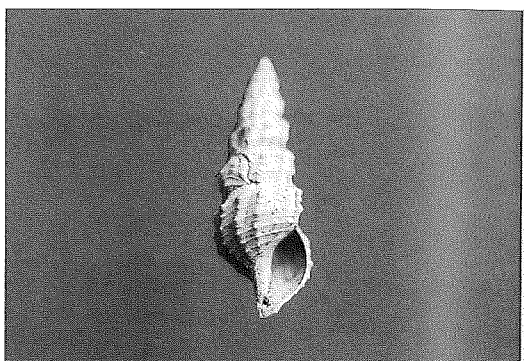
3: ハテルマイトマキツムバイ' ×0.8



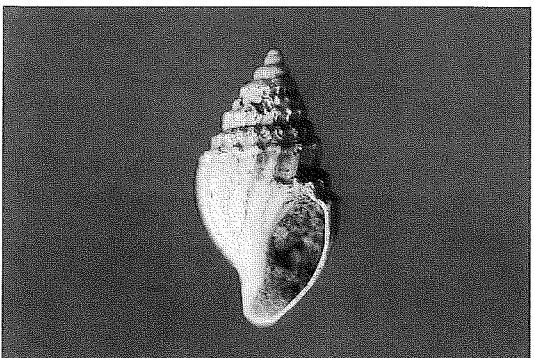
4: ホソツノキフデ ×1



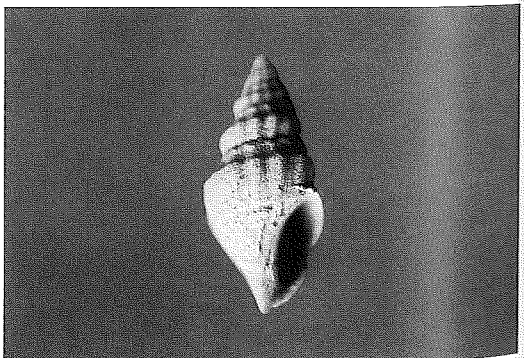
5: *Kuroshioturris* sp. ×1



6: ホソシャジク ×3.5

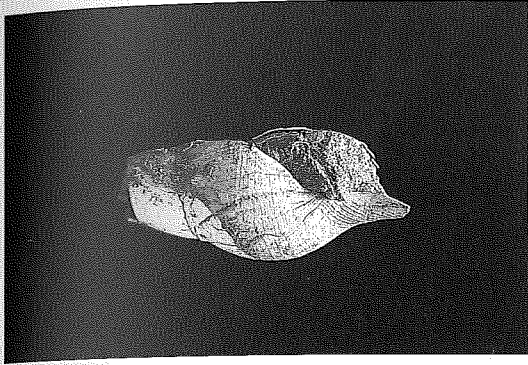


7: *Awateria*属 ×5.3

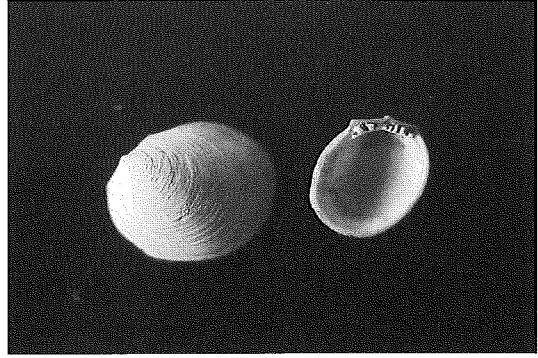


8: *Puha*属 ×3.8

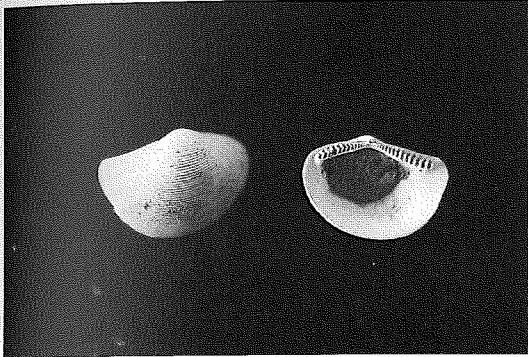
PLATE 4



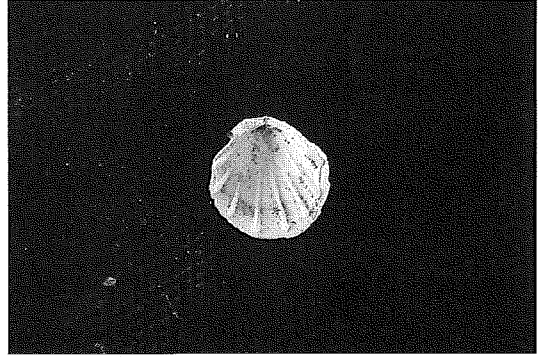
1: ヒメツノキフデ × 1



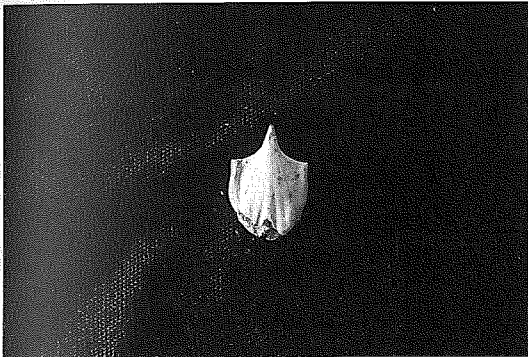
2: ナミジワシラスナガイ × 3



3: ヒメスミゾメソデガイ × 3



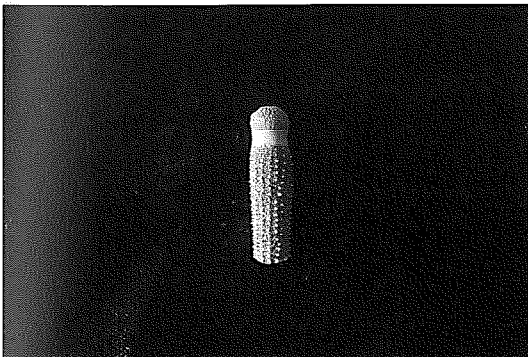
4: ハナヤカツキヒガイ × 3



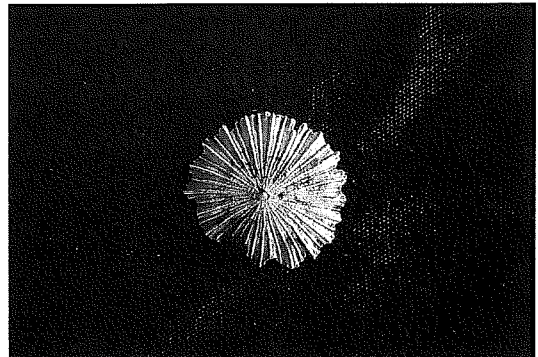
5: シロカメガイ × 1



6: 耳石 × 1

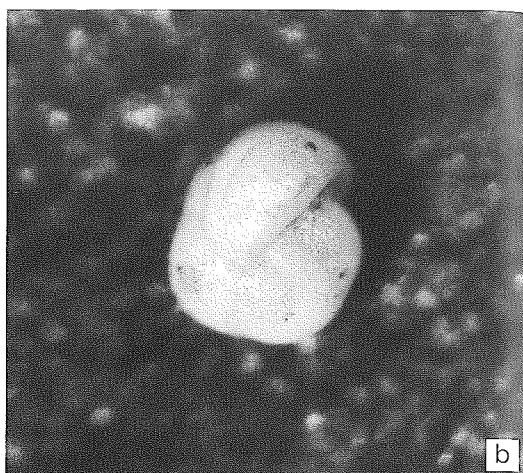
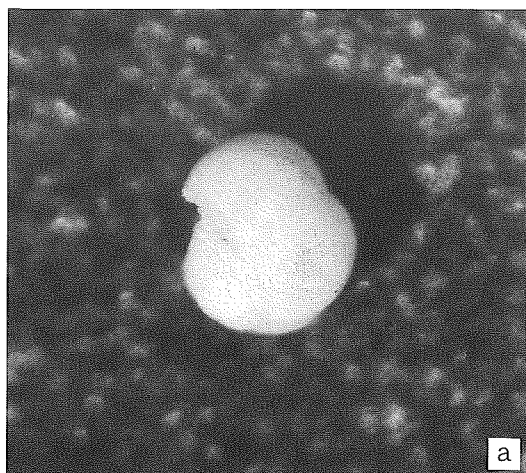


7: ウニの棘 × 1

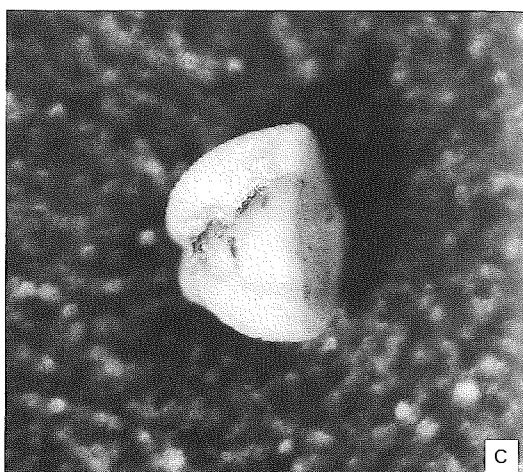
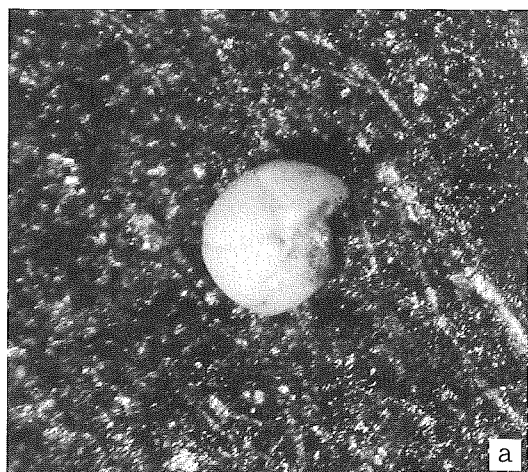


8: *Deltocyathus* sp. × 1

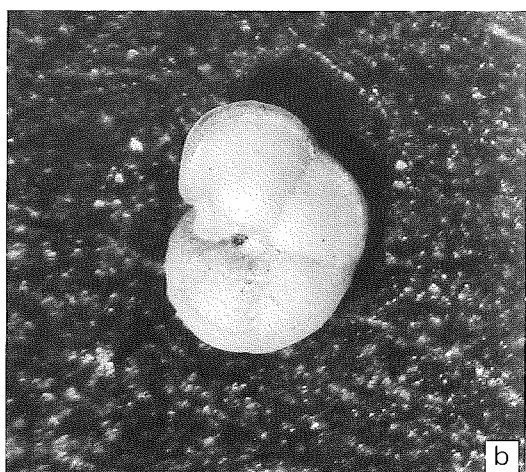
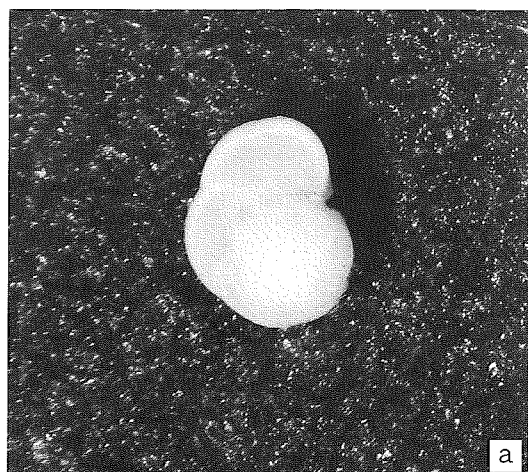
PLATE 5



1 : *Globorotalia (Globorotalia) plesiotumida*



2 : *Globorotalia (Globorotalia) truncatulinoides* (D'ORBIGNY)



3 : dextral *Pulleniatina* spp.

波照間島のシダ植物相

豊見山 元

1. はじめに

波照間島は石垣島の南西43kmに位置し周囲14.8km、面積12.46km²の小島である。島の基盤は島尻層群の泥・砂岩で上層は珊瑚礁石灰岩で覆われており、突出した高い山も、海まで届く川もないなだらかな地形である。島の中央部が標高59.5mと一番高くなっている。

波照間島の植生は畑地がほとんどで自然林は少ない。島の海岸近くの岩礁地帯の土壤の発達の浅いところは海岸植生が発達しており、砂地ではハテルマギリの群落やヤラボを優先種とする林が防潮林の様に生育しているが、それ以外の島の大部分は耕地や牛の放牧地として利用されており、自然林は御嶽林以外にはほとんど残っていない。特に耕作地はそのほとんどで、長期にわたる客土を伴う基盤整備と区画整理事業が行われ、そこに自生していたほとんどの植物が移動させられたり、失われてしまっており、波照間島本来の植生の特徴は残っていない。しかしわずかに残る御嶽林は島の人々により入域が厳しく制限され保護されてきたので波照間島の極相林と思われる植生が小面積ではあるが非常に良い状態で残っている。

波照間島の植物相については多和田眞淳が1カ月以上にわたる滞在中に島の植物相の調査を行い、「八重山群島波照間島の植物」の中で島に産するシダ類以上の高等植物334種36変種を報告している。琉球列島の植物相の解明を続けた島袋敬一は自身の精力的な調査と、さく葉標本や文献の探索により琉球列島の植物の島毎の分布を明らかにしその中で波照間島についても標本の所在の明らかな種について取り上げている。波照間の植生については新納義馬、宮城康一、宮城邦治、宮脇明が調査報告を行っている。

今回沖縄県立博物館の波照間島総合調査の一環として、1996年8月23～8月25日、1997年9月4日～6日までの2回にわたりシダ植物を調査する機会を得た。短期間で十分な調査とはいえないが前述の文献に若干の新たな知見を加え、波照間島のシダ植物の現在の分布状況について報告する。

2. 調査の方法

島のおもな林でシダ植物の分布調査を行った。出現したシダ植物は採集して標本を作成したが、複数回出現した種は採集せず、記録にだけとどめた。自然林が残っている地域では生育環境としての植生調査も行った。

3. 調査の結果と考察

①主な調査地と出現したシダ植物

1) 港近く北側海岸林

土質は腐植土混じりの砂地で海岸に沿って堤防の様に盛り上がり内陸の畑の防潮林の様になっている。高木層はヤラボで占められ低木層にヤラボ、イボタクサギ、ヤエヤマアオキ、トベラ、シマグワ、シマヤマヒハツ、トウツルモドキが出現する。

シダ植物はタマシダとオキナワウラボシの2種を記録した。

2) ぶりぶち公園

島で珍しく石灰岩の下から湧水が流れている。岩の窪みは風葬に利用されていたようで所々に人骨が見られる。リュウキュウガキ、ガジュマル、タブ、クロヨナ、センダン、ハマヌビワ、オオバアコウ、ゲッキツ、フクギ等が生育している。

シダ植物はカニクサ、リュウキュウイノモトソウ、ホウビカンジュ、ミナミタニワタリ、ホシダを記録した。水生シダの自生も期待されたが観察されなかった。

3) 村落及び周辺の石灰岩陥没地

学校と民家に挟まれるようにしてドリーネ状のかなり大きな窪地があり小さな流れや水たまりもある。生活排水が流れ込み、一部にごみなども投棄されているが発達したきれいな森林を形成している。高木層にはクロヨナ、ハマヌビワ、リュウキュウガキ、アカテツがあり低木層にクロツグ、リュウキュウガキ、オオムラサキシキブ、ナガミボチョウジ、グミモドキ等が生育している。

立派な林にもかかわらずシダ植物は種類も個体数も意外に少なくカニクサ、ホコシダ、リュウキュウイノモトソウ、ミナミタニワタリ、ホシダ、ケホシダの6種のみが出現している。

この林の林縁部は村落につながり、村落内ではタマシダ、ミナミタニワタリ、オキナワウラボシ、ウスバシダ（井戸の中）を記録した。

4) 白郎原御嶽（スサバルワ）付近

白郎原御嶽（スサバルワ）は御願所として保護されており、貴重な天然林として残っている。タブノキ、フクギ等では島の他の地域には見られないような大木がよく保存されており、島の人々がいかにこの御嶽を大切にしてきたかがわかる。クワノハエノキ、リュウキュウガキ、フクギ、ツゲモドキ等が優占する群落であるが、御嶽の一面にクロボウモドキの純群落がありマスト状に直立した樹型は他の群落では見られない独特の景観を呈し

ている。高木層は10mに達しリュウキュウガキ、タブノキ、フクギ、ガジュマル、クワノハエノキ、ツゲモドキ、カキバカンコノキ、トウズルモドキ、亜高木層は高木層の構成種の低木とミナミタニワタリ、低木層はクロツグ、シマヤマヒハツ、アカテツ、オオシマコバンノキ、リュウキュウコクタン、グミモドキ、草本層はあまりなくクワズイモと上層の構成種の小苗が出現している。

周辺部を含めた地域からシダ植物はカニクサ、ホウビカンジュ、ホコシダ、リュウキュウイノモトソウ、ミナミタニワタリ、カレンコウアミシダ、ホシダ、オオイワヒトデ、オキナワウラボシを記録した。

5) リン鉱石採掘跡

波照間島ではかつて肥料用のリン鉱石の採集が行われており、現在でもその採取跡が残っている。調査した鉱跡はおよそ10m四方、深さ10m位の人工のたて穴で壁面が適当な湿り気を帯びているため植物がびっしりついている。

シダ植物はホコシダ、ハチジョウシダ、リュウキュウイノモトソウ、モエジマシダ、ミナミタニワタリ、ウスバシダ、ホシダ、ケホシダ、アイノコホシダ、オキナワウラボシを記録した。

基盤整備がなされたためか畑地ではシダ植物は1種も記録する事ができなかった。また海岸付近の岩礁地帯でも確認することはできなかった。上記以外の小さな森や林にも入り調査を行ったがいずれの場所でも2種か3種位しか出現せず、特徴的な種は記録していない。

②波照間島のシダ植物目録

1) この報告書のシダ植物目録は、今回の2回の調査で確認できた種に、今回確認できなかったが別記参考文献で波照間島に産すると報告されている種を加えて作成した。参考文献で琉球での分布を各島とだけ記してあるものは波照間島での生育の確認が難しいので除外した。この目録に総数10科13属21種2雑種のシダを掲げた。

2) 目録の中で、和名の後に記した番号は著者の採集したシダ植物の標本番号である。番号のない種は他の文献から引用しているものである。

3) 学名については島袋に従った。

波照間島シダ植物目録

Fern flora of Hateruma island the Ryukyus

OPHIOGLOSSACEAE ハナヤスリ科

Ophioglossum thermale Komarov ハマハナヤスリ
 多和田が *O.vulgatum* L. ハナヤスリとして報告している

SCHIZAEACEAE フサシダ科

Lygodium japonicum (Thunb.)Sw. カニクサ 5707

OLEANDRACEAE ツルシダ科

Nephrolepis auriculata (L.)Trimen タマシダ 5709
Nephrolepis biserrata (Sw.)Schott ホウビカンジュ 5706
Nephrolepis hirsutula (G.Forst)Presl ヤンバルタマシダ 多和田、島袋
N.biserrata X *N.hirsutula* アイノコホウビカンジュ 初島・天野
 (タラマシダ)

PARKERIACEAE ミズワラビ科

Ceratopteris thalictroide (L.)Brongn ミズワラビ 島袋
 現在波照間島には基盤整備事業により人工的なため池はあるがミズワラビや
 ナンゴクデンジソウの生育できるような湿地帯は残っていない

PTERIDACEAE イノモトソウ科

Pteris ensiformis Burm. ホコシダ 5714,5723
Pteris fauriei Hieron. ハチジョウシダ 5726
 波照間島新記録 1株だけ確認できた
Pteris ryukyuensis Tagawa リュウキュウイノモトソウ 5708,5711,5725
Pteris vittata L. モエジマシダ 5728
 波照間島新記録 1株だけ確認できた

ASPLENIACEAE チャセンシダ科

Asplenium australasicum (J.Sm.)Hooker ミナミタニワタリ 5717
 (リュウキュウトリノスシダ)

Asplenium nidus Linnaeus

シマオオタニワタリ

多和田が *A.nidus* オオタニワタリで報告しているがこの当時ミナミタニワタリが認識されていなかったなのでこの報告はミナミタニワタリの可能性がある

DRYOPTERIDACEAE オシダ科

Cyrtomium falcatum (L.f.) Presl

オニヤブソテツ

島袋

他の島では普通であるが今回の調査で確認できなかった

(Tectarioideae ナナバケシダ亜科)

Tectaria simonsii (Bedd.) Ching

カレンコウアミシダ

5713

波照間島新記録 主に石灰岩地域に生育し希である。特に八重山諸島では採集例は少ない。

Pleocnemia devexa (Kunze) v. A. v. Rosenburgh

ウスバシダ

5715, 5727

THELYPTERIDACEAE ヒメシダ科

Thelypteris acuminata (Hourtt.)

ホシダ

5710, 5718, 5720

Thelypteris parasitica (Linn.) Fosberg

ケホシダ

5719, 5721

Thelypteris torresiana (Gaud.) Alston

アラゲヒメワラビ

5724

波照間島新記録

T.acuminata x *T.parasitica*

アイノコホシダ

5722

波照間島新記録 ホシダとケホシダの雑種で琉球各地で発見され両者の混在する場所では珍しいものではない

POLYPODIACEAE ウラボシ科

Colysis pothifolia (Don) Presl

オオイワヒトデ

5712

波照間島新記録 1カ所で記録。ここの個体は羽片がシシ状になる傾向がある

Microsorium scolopendria (Burm.) Copeland

オキナワウラボシ

5716

MARSILEACEAE デンジョソウ科

Marsilea crenata Presl

ナンゴクデンジョウ

島袋

波照間島のシダ植物相の概要

- 1) 今回の調査で波照間島のシダ植物相の調査を行い、7科9属15種1雑種を確認した。
- 2) 島袋で報告されている水生のシダ植物については今回確認できなかった。かつてはイネの栽培の記録もあるが現在は水田は見られない。現在では水生シダ植物は存在していない可能性がある。
- 3) 確認された波照間島のシダ植物は全て石垣島又は西表島と共通しており、特異な分布をする種は見あたらない。しかし八重山諸島では稀なカレンコウアミシダの生育が確認された。
- 4) 波照間島のシダ植物相は石垣島や西表島に比べて種類数が少ないだけでなく、個体群密度も小さく天然林の林床下でもまばらに点在し大きな群落は形成していない。

4. おわりに

今回の調査に際し同行していただきました波照間島総合調査の委員の方々、車の便宜をいただきました波照間中学校の校長先生、波照間島の植物資料を提供していただいた琉球大学の横田昌嗣先生に感謝申し上げます。

参考文献

- 初島住彦, 1975. 琉球植物誌 (追加・訂正), 那覇.
- 初島住彦・天野鉄夫, 1994. 琉球植物目録, 沖縄生物学会, 沖縄・西原.
- 角川日本地名大辞典編纂委員会, 1986. 角川日本地名大辞典 沖縄県.
- 倉田悟・中池敏之, 1979~1996. 日本のシダ植物図鑑. 1~7, 東京大学出版会, 東京.
- 宮城邦治, 1982. 波照間島の植生概観と動物相. 波照間島調査報告書,
沖縄国際大学南島文化研究所.
- 宮脇明, 1989. 日本植生誌 沖縄・小笠原, 至文堂, 東京.
- 沖縄県, 1978. 特定植物群落調査報告.
- 沖縄大百科事典刊行事務局, 1983. 沖縄大百科事典, 沖縄タイムス社.
- Serizawa S., 1975. 1977. 1978. Pteridophytes of the Ryukyu Island(1-3).
Sci. Rep. Takao Mus. 7:1-53. 8:1-30. 9:1-24, Tokyo.
- 島袋敬一, 1981. 琉球シダ植物目録, 那覇.
- 島袋敬一, 1984. 1985. 琉球列島シダ植物分布図集, 琉球大学理学部紀要,
沖縄・西原.
- 島袋敬一, 1990. 琉球列島維管束植物目録, ひるぎ社, 那覇.
- 多和田眞淳, 1954. 八重山郡島波照間島の植物, 琉球林試報告書, 2:61-76.



林内のミナミタニワタリ



洞入口のカレンコウアミシダ



アラゲヒメワラビ



集落石垣に着生するミナミタニワタリ



石灰岩の林内の小道



岩上着生しているホウピカンジュ

波照間島の小動物

比 嘉 ヨシ子

1. はじめに

日本列島の最南端の島として知られている波照間は、石垣島の南西42km・西表島の南方24kmに位置し、面積が14.90km²、周囲14.80kmの石灰岩を基盤とした隆起珊瑚礁からなる平坦な地形の島である。八重山諸島の中でも、西表島、石垣島、与那国島に次いで4番目に大きな島であるが(図1)、1970年代までは交通の不便さもあってか、動物相の調査報告書は少なかったようである。

過去において、風土病のヤキーと言われたマラリアとの関係もあって、公衆衛生の立場から1945年以降に、行政による媒介蚊調査があった。また、ゴケグモに関することでは、1958年と1964年にKeeganによる報告がある。1970年代に入って、下謝名松栄氏(1976)により真正クモ類を主に、数種の昆虫類と両生・爬虫類やヤケヤスデなどについての報告がなされている。

1980年代になって、宮城邦治氏(1982)により、波照間島の植生概観と動物相についての調査報告がなされ、その後、蝶類について上杉兼司氏(1984)や太田英利氏ら(1986)の報告があり、ヤモリ類については太田英利・山下晶子氏(1985)による報告がある。しかし、多足類を始めとする土壌動物についてのまとまった報告はない。今回、沖縄県立博物館の波照間島総合調査の一環として、自然分野の調査に参加する機会を得て、土壌動物の目録を作成し、土壌動物を含む小動物を記録することができたので報告する。

2. 調査方法

1) 期間

初年度は1996年8月22日から25日までと、10月31日から11月3日までの2回、次年度は1997年9月4日から6日までの1回で、合計3回・延べ日数にして11日間に渡って実施した。

2) 方法

土壌動物の調査に当たっては、植生や環境の違いを考慮して、集落内・草地・耕作地周辺・原野・森など島内10ヶ所に調査区を設定し(図2)、25×25cm方形枠を使って、定量採集を行った。採集したリター層は、その日のうちにハンドソーテングを行い、大型土壌動物は80%のアルコールに液浸し、残った採集腐葉土は持ち帰って、ツルグレン法によ

て土壤中の動物を分離し、同定を行った。同定は基本的には、青木淳一編の日本産土壤動物検索図説に従った。土壤動物以外の小動物については、スィーピング法で採集し、目視したものを含めて野帳に記録した。採集した小動物は持ち帰り、標本を作成し同定を行った。

3. 採集地の概況

四方を海に囲まれた島では自然条件の影響が大きく、防潮・防風林として、屋敷囲いや集落道沿いにフクギの植生が目立つ。夕暮れともなると、コノハズクやオオコモリなどの休む観察場所となる当り、島の自然の一部を見せてくれる。サトウキビ作を主産業とする島では、農地及び灌漑用水池の整備で、土地改良事業が推進されてきた。農業に関わる基盤整備は大きく環境を改変し、正の部分をもたらしているようである。反面、島の石灰岩台地の浅い土壤に加えて、林・林床の消失は保水力を失い、土壤動物の貧相に繋るものと危惧される。土壤動物の持つ資源再生（土壤改良）にも配慮し、妥協できる選択がなされることを期待したい。幸いにも、南の森と呼ばれる一帯には聖なる御嶽があって、その聖域の保護に伴って自然植生が残っているとのこと（宮城,1982）。今後とも保護の対象域として、島の自然のバランスを保つものと期待する。集落内の人為的環境では、フクギ・リュウキュウコクタン・センダン・バンジロウ・ハイビスカスなどが植生され、その木々の枯れ葉やセンダグサなどの刈り取った雑草の堆積地・バナナ畑・菜園内の腐葉層も土壤動物の採集場所となった（図3-①~③）。点在する小さな御嶽と称する場所はフクギ・リュウキュウコクタン・ガジュマルなど、中木の植生があるものの、土壤が乾燥状態で、稀薄ながら乾生動物の生息を確認した（図10）。

集落外の自然林や二次林の植生環境下においては、リュウキュウガキ・コミノクロツグ・アカテツ・クワノエノキ・リュウキュウガキなどの御嶽林を中心に、島の自然植生が形成され、適度の湿度が保たれた林床は南の森一帯に広がり、土壤動物を含む小動物の生息場所となっていた。植物調査担当の豊見山元先生の先導で、白郎原御嶽と言われている場所一帯の御嶽林の中にバンレイシ科のクロボウモドキ群落の植生を観察する機会があり、その林床内での堆積した腐葉層を採集することができた。また、図2-⑤と⑥に跨がるハテルマギリ林内では、キシタアゲハの食草となるリュウキュウウマノスズクサやタチアワユキセンダグサなどの雑草が茂り、キシタアゲハの発生地ともなって、多くの蝶類が観察された（図3-⑥、図9-①~③・⑤~⑥）。その他に、ぶりぶち公園一帯でも自然植生と共にススキ・バナナなどの人為的な影響を受けた腐葉層が堆積し（図3-⑦）、また、南の森にはゴミ捨て場に利用された自然洞が残されていた。島の南側ペムチ浜より内陸の砂土地にはハテルマギリ・アダン・テリハボクなどの植生が見られ、林床内の腐葉層には乾生

動物の生息場所となっていた (図10)。島の東側高那崎のプラネタリウム周辺に、イリオモテアザミやゲンバイヒルカオが群生している一帯では、シロオビアゲハの雌のベニモンアゲハ型の個体が多く観察された (図9-④)。農耕地の人為的な環境においては、主産業であるサトウキビ栽培やスイカ・野菜などのハウス栽培が行われているが、加亭良原 (図2-⑨) のスイカハウス栽培棟一帯では、畦の側溝蓋の下、ハウスのビニールの下、土壌の割れ目、石の下などが散在し、ゴケグモの餌となる土壌動物の生息場所となっていた (図6-①~③)。毛原の古い屋敷跡では枯れ木・朽ち木の下からヤスデを採集することができた (図2-⑨)。

4. 結果及び考察

1) 波照間島の土壌動物相

島の土壌は石灰岩の風化した土壌層で薄く、加えて保水力のある樹木が少ない。そのためリター層は稀薄になり、土壌動物相にも影響を及ぼすものと考えられたので、可能な限りリター層の厚い場所を選んで採集した (図2~3)。

表1 波照間島の土壌動物

{3門7綱23目53科64種}	
1. 節足動物門	
1). ヤスデ綱 (倍脚綱) ……	2 亜綱 3 目 …… 3 科 4 種
2). ムカデ綱 (唇脚綱) ……	2 亜綱 4 目 …… 4 科 5 種
3). クモ綱 ……	3 目 5 亜目 18 科 23 種
4). 甲殻綱 ……	2 目 2 亜目 3 科 3 種
5). 昆虫綱 ……	8 目 7 亜目 19 科 23 種
2. 軟体動物門	
6). マキガイ綱 (腹足綱) ……	2 亜綱 2 目 …… 5 科 5 種
3. 環形動物門	
7). ミミズ綱 (貧毛綱) ……	1 目 …… 1 科 1 種

調査期間中に採集された土壌動物は23目53科64種を確認することができた (表1・図4~5)。八重山地域からの土壌動物に関する報告は断片的なもので、まとまった報告がない。今回の調査で得た結果は、その目的を果たしたものと考えられる。作成した目録は以下の通りである。

波照間島の土壌動物目録

ヤスデ綱 (倍脚類) DIPLOPODA

フサヤスデ目 POLYXENIDA

リュウキュウフサヤスデ科 Lophoproctidae

1. リュウキュウフサヤスデ *Lophoturus okinawai* Nguyen Duy-Jacquemin et Conde

オビヤスデ目 POLYDESMIDA

ヤケヤスデ科 Paradoxosomatidae

2. ヤケヤスデ *Oxidus gracilis* (Koch)
3. ナンヨウヤケヤスデ *Orthomorpha coarctata* (Saussure)

ヒキツリヤスデ目 SPIROSTREPTIDA

ヒモヤスデ科 Cambalopsidae

4. リュウキュウヤハズヤスデ *Glyphiulus septentrionalis* Murakami

ムカデ綱 (唇脚類) CHILOPODA

ゲジ目 SCUTIGEROMORPHA

ゲジ科 Scutigeridae

5. オオゲジ *Thereuopoda clunifera* (Wood)

イシムカデ目 LITHOBIOMORPHA

イシムカデ科 Lithobiidae

6. ヤエヤマヒトフシムカデ *Monotarsobius sunagawai* sp. nov.

オオムカデ目 SCOLOPENDROMORPHA

オオムカデ科 Scolopendridae

7. タイワンオオムカデ *Scolopendra morsitans* Linne

ジムカデ目 GEOPHILOMORPHA

ナガズジムカデ科 Mecistocephalidae

8. ツメジムカデ *Prolamnonyx holstii* (Pocock)
9. ゴシチナガズジムカデ *Mecistocephalus diversisternus* (Silvestri)

クモ綱 ARACHNIDA

カニムシ目 PSEUDOSCORPIONES

キカニムシ科 Cheliferidae

10. キカニムシ科の一種 *Withius* sp.

ダニ目 ACARI

フリソデダニ科 Galumnidae

11. フリソデダニ科の一種 *Galumnidae* sp.
12. チビゲフリソデダニ *Trichogalumna nipponica* Aoki
コソデダニ科 Haplozetidae

13. コソデダニ科の一種 *Haplozetidae* sp.
ニセイレコダニ科 Mesoplophoridae
14. ニセイレコダニ *Mesoplophora japonica* Aoki
イレコダニ科 Phthiracaridae
15. クゴウイレコダニ *Hoplophthiracarus kugohi* Aoki
16. ハナビライレコダニ *Hoplophorella cucullata* (Ewing)
ヘソイレコダニ科 Euphthiracaridae
17. ヒメヘソイレコダニ *Rhysotritia ardua* (C. L. Koch)
ニオウダニ科 Hermanniiidae
18. カノウニオウダニ *Hermannia kanoi* Aoki
クモスケダニ科 Eremobelbidae
19. ヤマトクモスケダニ科 *Eremobelba japonica* Aoki
イトノコダニ科 Gustaviidae
20. イトノコダニ *Gustavia microcephala* (Nicolet)
クワガタダニ科 Tectocephidae
21. ツバサクワガタダニ *Tegeozetes tunicatus breviclava* Aoki
ツブダニ科 Oppiidae
22. オオツブダニ *Lasiobelba remota* Aoki
ウデナガダニ科 Podocinidae
23. ウデナガダニ科の一種 *Podocinidae* sp.
ホコダニ科 Parholaspididae
24. タカネコシビロホコダニ *Neparholaspis monticola* Ishikawa
25. アキモトカマゲホコダニ *Gamasholaspis akimotoi* (Ishikawa)
26. ホコダニ科の一種 *Parholaspididae* sp.
イトダニ科 Uropodidae
27. イケザキタマゴイトダニ *Uroobovella ikezakii* Hiramatsu et Hirschmann
28. ミタケタマゴイトダニ *Uroobovella mitakensis* Hiramatsu et Hirschmann
コナダニ科 Acaridae
29. コナダニ科の一種 *Acaridae* sp.
ジョンストンダニ科 Johnstonianidae
30. ジョンストンダニ科の一種 *Johnstonianidae* sp.

クモ目 ARANEAE

ヒメグモ科 Theridiidae

31. ヤエヤマゴケグモ *Latrodectus* sp.
アシダカグモ科 Heteropodidae
32. コアシダカグモ *Heteropoda forcipata* (Karsch)

甲殻綱 CRUSTACEA

ワラジムシ目 (等脚目) ISOPODA

ワラジムシ科 Porcellionidae

33. ホソワラジムシ *Porcellionides pruinosis* (Brandt)
コシビロダンゴムシ科 Armadillidae
34. セグロコシビロダンゴムシ *Sphaerillo dorsalis* (Iwamoto)

ヨコエビ目 (端脚目) AMPHIPODA

ハマトビムシ科 Talitridae

35. ヤエヤマオカトビムシ *Parorchestia* sp.

昆虫綱 INSECTA

トビムシ目 COLLEMBOLA

アリノストビムシ科 Cyphoderidae

36. アリノストビムシ科の一種 *Cyphoderidae* sp.

ツチトビムシ科 Isotomidae

37. ツチトビムシ科の一種 *Isotomidae* sp.

マルトビムシ科 Sminthuridae

38. マルトビムシ科の一種 *Sminthuridae* sp.

ゴキブリ目 BLATTODEA

オガサワラゴキブリ科 Pycnoscelidae

39. オガサワラゴキブリ *Pycnoscelis surinamensis* (Linnaeus)

ゴキブリ科 Blattidae

40. ワモンゴキブリ *Periplaneta americana* Linnaeus

41. コワモンゴキブリ *Periplaneta australasiae* (Fabricius)

チャバネゴキブリ科 Blattellidae

42. ウスヒラタゴキブリ *Onychostylus pallidiolus pallidiolus* (Shiraki)

バッタ目 (直翅目) ORTHOPTERA

コオロギ科 Gryllidae

43. タイワンエンマコオロギ *Teleogryllus taiwanemma* (Ohmachi et Matsuura)

ハサミムシ目 DERMAPTERA

マルムネハサミムシ科 Anisolabididae

44. コヒゲジロハサミムシ *Euborellia annulipes* (Lucas)

カメムシ目 (半翅目) HEMIPTERA

ツチカメムシ科 Cydnidae

45. ミナミマルツチカメムシ *Aethus indicus* (Westwood)

甲虫目 COLEOPTERA

ゴミムシダマシ科 Tenebrionidae

46. ミナミエグリゴミムシダマシ *Uloma excisa* Gebien

ゴミムシ科 Harpalidae

47. ヒラタヨツボシアトキリゴミムシ *Dolichoctis tetraspilotus* (Macleay)

ハネカクシ科 Staphylinidae

48. ハネカクシ科の一種 *Staphylinidae* sp.

ミジンムシダマシ科 Discolomidae

49. ミジンムシダマシ科の一種 *Discolomidae* sp.

コケムシ科 Scydmaenidae

50. コケムシ科の一種 *Scydmaenidae* sp.

双翅目 DIPTERA

ノミバエ科 Phoridae

51. チビクロノミバエ *Conicera (Tritoconicera) breviciliata* Schmitz

52. クサビノミバエ *Megaselia (Megaselia) scalaris* (Loew)

ショウジョウバエ科 Drosophilidae

53. ショウジョウバエ科の一種 *Drosophilidae* sp.

クロバネキノコバエ科 Sciaridae

54. クロバネキノコバエ科の一種 *Sciaridae* sp.

ミズアブ科 Stratiomyidae

55. アメリカミズアブ *Hermetia illucens* Linnaeus

膜翅目 HYMENOPTERA

アリ科 Formicidae

56. ニセハリアリの一種 *Hypoconera* sp.

57. ケアリの一種 (ヤマアリ亜科) *Lasius* sp.

58. アメイロアリの一種 (ヤマアリ亜科) *Paratrechina* sp.

マキガイ綱 (腹足綱) GASTROPODA

ニナ目 (中腹足目) MESOGASTROPODA

ヤマタニシ科 Cyclophoridae

59. ヤエヤマヤマタニシ (オキナワヤマタニシ類) *Cyclophorus radians*

マイマイ目 (柄眼目) STYLOMMATOPHORA

キセルガイ科 Clausiliidae

60. キセルガイの一種 (キセルガイ類) *Clausiliidae* sp.

クチミゾガイ科 Strobilopsidae

61. ヤエヤマクチミゾガイ *Enteroplax yaeyamensis* Habe et Chinen

タワラガイ科 Streptaxidae

62. ソメワケタワラガイ *Gulella bicolor*

オカクチキレガイ科 Subulinidae

63. オカチヨウジガイ *Allopeas kyotoense*

ミミズ綱 (貧毛綱) OLIGOCHAETA

イトミミズ目 TUBIFICIDA

ヒメミミズ科 Enchytraeidae

64. ヒメミミズの一種 *Enchytraeidae* sp.

ヤスデ類は3科4種で種類や個体数は少なかったが、比較的水分を含んだりター層から採集された。ムカデ類では4科5種が採集されたが、オオゲジは自然洞で確認され、タイワンオオムカデは少々乾いたりター層に多く、ジムカデは比較的水分を含んだりター層から採集できた。以上のことから、多足類が土壌の含水量に対して依存度に違いがあり、その出現状況から生息場所を推定できることが分かった。

カニムシ類、ダニ類、クモ類を含むクモ網では18科23種も採集された。この網で特筆すべきこととして、ササラダニ類は比較的水分を含んだりター層を好むが、少々乾いたりター層でも生息していることが分かった。集落内の人為的な場所で多く採集された。カニムシ類やクモ類は、少々乾いたりター層から採集された。ヤエヤマゴケグモの場合、ビニールハウスの栽培地において、石の下・乾いた溝の中や土壌の割れ目・ハウスのビニールの下などの少々乾いた場所を好み、コオロギやオガサワラゴキブリなどを餌に繁殖していることを確認した(図6-①)。甲殻類は幾らか含水量のあるりター層から3科3種が採集された。最多の科からなる昆虫類では比較的水分を含んだりター層を好むフシトビムシ類や甲虫の幼虫、ハエ・アブの幼虫などと、少々乾いた場所を好むカメムシ・ハサミムシ・マルトビムシ・アリ・オガサワラゴキブリなど19科23種が採集された。腹足類やミミズ類も比較的水分を含んだりター層を好み、前者は5科5種、後者は1種が採集された。

当初、水の少ない島との印象が強く、稀薄な土壌動物相になるのではと危惧していたが、表3の採集状況に示すように、集落内では人の生活や人為的な関わりが深いヤスデ・オオムカデ・ゴキブリ・ノミバエなどが各所で採集された。それらの動物は資源再生に関わったり、捕食者及び掃除屋としての関わりで、生態系のバランスを保つ有用な動物として知られているが、刺傷被害をもたらすオオムカデ、病原微生物の媒介に関与するゴキブリ、不快感を与えるヤケヤスデやゴキブリ、食品異物となり得るノミバエなど、衛生上重要な位置付けをされた動物群でもある。林縁部に近い北と南の集落では、縁がもたらすりター組成と関係し、動物の種数も増えている。自然植生の保護されている南の森一帯やぶりぶち公園では、やはり種数が多くなっている。そのことは豊かな緑が豊かな土壌を作り、豊富な生物を許容させていることの証しと考えられる。

2) 波照間島の小動物相

土壌動物の採集地や集落内の御嶽、南の森一帯、高那崎、ペムチ浜、毛崎のハマシタン群落地などで、目視による確認とスリーピング法による採集をおこなった。今回の調査で得た土壌動物を含む小動物相は80科112種であった(表2)。採集対象は節足動物と腹足類、食毛類、ヤモリ科に限定した。

表 2. 波照間島の小動物

{27目80科112種}

1. 節足動物門

昆虫類

- 1). 鱗翅目…………… 6科18種
- 2). 半翅目…………… 4科 5種
- 3). 鞘翅目……………10科11種
- 4). 双翅目…………… 7科10種
- 5). 膜翅目…………… 4科 7種
- 6). ゴキブリ目…………… 3科 4種
- 7). 直翅目 (バッタ科・コウロギ科) …… 2科 3種
- 8). トビムシ目…………… 3科 3種
- 9). ハサミムシ目…………… 1科 1種
- 10). ナナフシ目…………… 1科 1種
- 11). 蜻蛉目…………… 2科 3種

多足類

- 12). オビヤスデ目…………… 1科 2種
- 13). ヒキツリヤスデ目…………… 1科 1種
- 14). フサヤスデ目…………… 1科 1種
- 15). ゲジ目…………… 1科 1種
- 16). オオムカデ目…………… 1科 1種
- 17). ジムカデ目…………… 1科 2種
- 18). イシムカデ目…………… 1科 1種

甲殻類

- 19). ワラジムシ目…………… 2科 2種
- 20). ヨコエビ目…………… 1科 1種

クモ綱

- 21). ダニ目……………15科20種
- 22). 真正クモ目…………… 4科 5種
- 23). カニムシ目…………… 1科 1種

2. 軟体動物門

腹足類

- 24). マイマイ目 (柄眼目) …… 4科 4種
- 25). 中腹足目 (ニナ目) …… 1科 1種

3. 環形動物門

貧毛類

- 26). イトミミズ目…………… 1科 1種

4. 爬虫類

- 27). ヤモリ科…………… 1科 2種

波照間島の小動物目録

目視や採集による目録 (1996~1997・延べ11日間)

昆虫綱 INSECTA

鱗翅目 LEPIDOPTERA

アゲハチョウ科 Papilionidae

1. アオスジアゲハ *Graphium sarpedom* Linnaeus 稀
2. シロオビアゲハ *Papilio polytes* Corbet 多
- ♀による型分け
- I型 (パンモン型) …♂と同様な型
- II型 (ポリテス型) …♀でベニモンアゲハに擬態する型
3. キシタアゲハ *Troides aeacus kaguya* Nakahara et Esaki 稀
- シロチョウ科 Pieridae
4. ウラナミシロチョウ *Catopsilia pyranthe pyranthe* (Linnaeus) 多
5. タイワンキチョウ *Eurema blanda arsakia* (Fruhstorfer) 多
6. ツマベニチョウ *Hebomoia glaucippe liukuensis* Fruhstorfer 稀
- シジミチョウ科 Lycaenidae
7. シルビアシジミ *Zizina otis* (Fabricius) 多
8. ウラナミシジミ *Lampides boetieus* (Linnaeus) 稀
- マダラチョウ科 Danaidae
9. リュウキュウアサギマダラ *Ideopsis similis similis* (Linnaeus) 多
10. オオゴマダラ *Idea leuconoe* (Erichson, 1834) 多
11. カバマダラ *Anosia chrysippus chrysippus* (Linnaeus) 稀
12. スジグロカバマダラ *Salatura genutia genutia* (Cramer) 多
- タテハチョウ科 Nymphalidae
13. リュウキュウムラサキ *Hypolimnias bolina* (Linnaeus) 稀
14. メスアカムラサキ *Hypolimnias misippus* (Linnaeus) 稀
15. ヒメアカタテハ *Cynthia cardui* (Linnaeus) 稀
16. タテハモドキ *Junonia almana* (Linnaeus) 稀
17. リュウキュウミスジ *Neptis hylas luculenta* Fruhstorfer 稀
- セセリチョウ科 Hesperidae
18. ネットアイアカセセリ *Telicota colon stinga* Evans 稀

半翅目 HEMIPTERA

カメムシ科 Pentatomidae

19. ナナホシキンカメムシ *Calliphata nobilis* (Linnaeus) 多
20. クサギカメムシ *Halyomorpha mista* Uhler 稀
- ツチカメムシ科 Cydnidae
21. ミナミマルツチカメムシ *Aethus indicus* Westwood 稀
- へりカメムシ科 Coreidae
22. ホソへりカメムシ *Cletus trigonus* (Thunberg) 稀
- セミ科 Cicadidae
23. リュウキュウクマゼミ *Cryptotympana facialis okinawana* Matsumura 稀

鞘翅目 COLEOPTERA

- テントウムシ科 Coccinellidae
 24. ダンダラテントウ *Menochilus sexmaculatus* (Fabricus) 稀
 ミツギリゾウムシ科 Brentidae
 25. アリモドキゾウムシ *Cylas formicarius* (Fabricus) 稀
 コガネムシ科 Scarabaeidae
 26. フチトリアツバコガネムシ *Phaeochrous asiaticus* 稀
 27. アオドウガネ *Anomala albopilosa* Hope 稀
 28. イシガキシロテンハナムグリ *Protaetia ishigakia* (Fairmaire) 稀
 オサムシ科 Carabidae
 29. イツホシマメゴモクムシ *Stenolophus quinquepustulatus* (Wiedemann) 稀
 ゴミムシダマシ科 Tenebrionidae
 30. ミナミエグリゴミムシダマシ *Uloma excisa* Gebien 多
 ゴミムシ科 Harpalidae
 31. ヒラタヨツボシアトキリゴミムシ *Dolichoctis tetraspilotus* (Macleay) 稀
 ハネカクシ科 Staphylinidae
 32. ハネカクシ科の一種 *Staphylinidae* sp.
 ミジンムシダマシ科 Discolomidae
 33. ミジンムシダマシ科の一種 *Discolomidae* sp. 稀
 コケムシ科 Scydmaenidae
 34. コケムシ科の一種 *Scydmaenidae* sp. 稀

双翅目 DIPTERA

蚊科 Culicidae

35. オオクロヤブカ (クロヤブカ属) *Armigeres subalbatus* (Coquillet, 1898) 多
 36. ヒトスジシマカ (ヤブカ属) *Aedes albopictus* (Skuse, 1895) 多
 イエバエ科 Muscidae
 37. イエバエ *Musca domestica* Linne, 1758 多
 クロバエ科 Calliphoridae
 38. ヒロズキンバエ *Phaenicia sericata* (Meigen, 1826) 稀
 39. オビキンバエ *Chrysomya megacephala* (Fabricus) 稀
 ノミバエ科 Phoridae
 40. チビクロノミバエ *Conicera (Triticoconicera) breviciliata* Schmitz 稀
 41. クサビノミバエ *Megaselia (Megaselia) scalaris* (Loew) 多
 ショウジョウバエ科 Drosophilidae
 42. ショウジョウバエ科の一種 *Drosophilidae* sp. 稀
 クロバネキノコバエ科 Sciaridae
 43. クロバネキノコバエ科の一種 *Sciaridae* sp. 稀
 ミズアブ科 Stratiomyiidae
 44. アメリカミズアブ *Hermetia illucens* Linnaeus 稀

膜翅目 HYMENOPTERA

スズメバチ科 Vespidae

45. ツマグロスズメバチ *Vespa affinis* Linnaeus 稀
 46. ヤエヤマアシナガバチ *Polistes yaeyamae* Matsumura, 1911 稀
 ケブカハナバチ科 Anthophoridae
 47. アカアシセジロクマバチ *Xylocopa albinotus* Matsumura 稀
 ミツバチ科 Apidae
 48. ミツバチ *Apis indica japonica* 多
 アリ科 Formicidae
 49. ニセハリアリの一種 *Hypoconera* sp. 多
 50. ケアリの一種 (ヤマアリ亜科) *Lasius* sp. 多
 51. アメイロアリの一種 (ヤマアリ亜科) *Paratrechina* sp. 多

ゴキブリ目 BLATTODEA

ゴキブリ科 Blattidae

52. ワモンゴキブリ *Periplaneta americana* Linnaeus 多
 53. コワモンゴキブリ *Periplaneta australasiae* (Fabricius) 多
 チャバネゴキブリ科 Blattellidae
 54. ウスヒラタゴキブリ *Onychostylus pallidolus pallidolus* (Shiraki) 多
 オガサワラゴキブリ科 Pycnoscelidae
 55. オガサワラゴキブリ *Pycnoscelis surinamensis* (Linnaeus) 多

直翅目 ORTHOPTERA

バッタ科 Locustidae

56. ショウリョウバッタ *Acrida tarrita* Linnaeus 稀
 57. モリバッタの一種 *Traulia* sp. 稀
 コオロギ科 Gryllidae
 58. タイワンエンマコオロギ *Teleogryllus taiwanemma* (Ohmachi et Matsuura) 多

トビムシ目 COLLEMBOLA

アリノストビムシ科 Cyphoderidae

59. アリノストビムシ科の一種 *Cyphoderidae* sp. 多
 ツチトビムシ科 Isotomidae
 60. ツチトビムシ科の一種 *Isotomidae* sp. 多
 マルトビムシ科 Sminthuridae
 61. マルトビムシ科の一種 *Sminthuridae* sp. 多

ハサミムシ目 DERMAPTERA

マルムネハサミムシ科 Anisolabididae

62. コヒゲジロハサミムシ *Euborellia annulipes* (Lucas) 多

ナナフシ目 PHASMIDA

コブナナフシ科 Bacillidae

63. コブナナフシ *Datames mouhoti* Bates 稀

蜻蛉目 ODONATA

ヤンマ科 Aeshnidae

64. リュウキュウギンヤンマ *Anax panybeus* Hagen

稀

トンボ科 Libellulidae

65. ウ斯巴キトンボ *Pantala flavescens* (Fabricius)

稀

66. ショウジョウトンボ *Crocothemis servilia* (Drury)

稀

ヤスデ綱 (倍脚類) DIPLOPODA

フサヤスデ目 POLYXENIDA

リュウキュウフサヤスデ科 Lophoproctidae

67. リュウキュウフサヤスデ *Lophoturus okinawai* Nguyen Duy-Jacquemin et Conde

稀

オビヤスデ目 POLYDESMIDA

ヤスデ科 Paradoxosomatidae

68. ヤケヤスデ *Oxidus gracilis* (Koch)

稀

69. ナンヨウヤケヤスデ *Orthomorpha coarctata* (Saussure)

稀

ヒキツリヤスデ目 SPIROSTREPTIDA

ヒモヤスデ科 Cambalopsidae

70. リュウキュウヤハズヤスデ *Glyphiulus septentrionalis* Murakami

稀

ムカデ綱 (唇脚類) CHILOPODA

ゲジ目 SCUTIGEROMORPHA

ゲジ科 Scutigerae

71. オオゲジ *Thereuopoda clunifera* (Wood)

稀

イシムカデ目 LITHOBIOMORPHA

イシムカデ科 Lithobiidae

72. ヤエヤマヒトフシムカデ *Monotarsobius sunagawai* sp. nov.

稀

オオムカデ目 SCOLOPENDROMORPHA

オオムカデ科 Scolopendridae

73. タイワンオオムカデ *Scolopendra morsitans* Linne

多

ジムカデ目 GEOPHILOMORPHA

ナガズジムカデ科 Mecistocephalidae

74. ツメジムカデ *Prolamnonyx holstii* (Pocock)

稀

75. ゴシチナガズジムカデ *Mecistocephalus diversisternus* (Silvestri)

稀

クモ綱 ARACHNIDA

カニムシ目 PSEUDOSCORPIONES

キカニムシ科 Cheliferidae

76. キカニムシ科の一種 *Withius* sp.

稀

ダニ目 ACARI

フリソデダニ科 Galumnidae

77. フリソデダニ科の一種 *Galumnidae* sp. 多
 78. チビゲフリソデダニ *Trichogalumna nipponica* Aoki 稀
 コソデダニ科 Haplozetidae
 79. コソデダニ科の一種 *Haplozetidae* sp. 多
 ニセイレコダニ科 Mesoplophoridae
 80. ニセイレコダニ *Mesoplophora japonica* Aoki 稀
 イレコダニ科 Phthiracaridae
 81. クゴウイレコダニ *Hoplophthiracarus kugohi* Aoki 稀
 82. ハナビライレコダニ *Hoplophorella cucullata* (Ewing)
 ヘソイレコダニ科 Euphthiracaridae
 83. ヒメヘソイレコダニ *Rhysotritia ardua* (C. L. Koch) 稀
 ニオウダニ科 Hermanniidae
 84. カノウニオウダニ *Hermannia kanoi* Aoki 稀
 クモスケダニ科 Eremobelbidae
 85. ヤマトクモスケダニ科 *Eremobelba japonica* Aoki 多
 イトノコダニ科 Gustaviidae
 86. イトノコダニ *Gustavia microcephala* (Nicolet) 稀
 クワガタダニ科 Tectocephidae
 87. ツバサクワガタダニ *Tegeozetes tunicatus breviclava* Aoki 稀
 ツブダニ科 Oppiidae
 88. オオツブダニ *Lasiobelba remota* Aoki 多
 ウデナガダニ科 Podocinidae
 89. ウデナガダニ科の一種 *Podocinidae* sp. 稀
 ホコダニ科 Parholaspididae
 90. タカネコシビロホコダニ *Neparholaspis monticola* Ishikawa 稀
 91. アキモトカマゲホコダニ *Gamasholaspis akimotoi* (Ishikawa) 稀
 92. ホコダニ科の一種 *Parholaspididae* sp. 稀
 イトダニ科 Uropodidae
 93. イケザキタマゴイトダニ *Uroobovella ikezakii* Hiramatsu et Hirschmann 多
 94. ミタケタマゴイトダニ *Uroobovella mitakensis* Hiramatsu et Hirschmann 稀
 コナダニ科 Acaridae
 95. コナダニ科の一種 *Acaridae* sp. 稀
 ジョンストンダニ科 Johnstonianidae
 96. ジョンストンダニ科の一種 *Johnstonianidae* sp. 稀

クモ目 ARANEAE

ヒメグモ科 Theridiidae

97. ヤエヤマゴケグモ *Latrodectus* sp. 多
 アシダカグモ科 Heteropodidae
 98. コアシダカグモ *Heteropoda forcipata* (Karsch) 稀
 コガネグモ科
 99. チブサトゲグモ *Gasteracantha mammosa* 稀

100. オオジョロウグモ *Nephila maculata* 多
ハエトリグモ科 Salticidae
101. アダンソンハエトリグモ *Hasarius adansoni* 稀

甲殻綱 CRUSTACEA

ワラジムシ目 (等脚目) ISOPODA

ワラジムシ科 Porcellionidae

102. ホソワラジムシ *Porcellionides pruinosus* (Brandt) 多
コシビロダンゴムシ科 Armadillidae
103. セグロコシビロダンゴムシ *Sphaerillo dorsalis* (Iwamoto) 多

ヨコエビ目 (端脚目) AMPHIPODA

ハマトビムシ科 Talitridae

104. ヤエヤマオカトビムシ *Parorchestia* sp. 多

マキガイ綱 (腹足綱) GASTROPODA

ニナ目 (中腹足目) MESOGASTROPODA

ヤマタニシ科 Cyclophoridae

105. ヤエヤマヤマタニシ (オキナワヤマタニシ類) *Cyclophorus radians* 多

マイマイ目 (柄眼目) STYLOMMATOPHORA

キセルガイ科 Clausiliidae

106. キセルガイの一種 (キセルガイ類) *Clausiliidae* sp. 稀

クチミゾガイ科 Strobilopsidae

107. ヤエヤマクチミゾガイ *Enteroplax yaeyamensis* Habe et Chinen 稀

タワラガイ科 Streptaxidae

108. ソメワケタワラガイ *Gulella bicolor* 稀

オカクチキレガイ科 Subulinidae

109. オカチョウジガイ *Allopeas kyotoense* 稀

ミミズ綱 (貧毛綱) OLIGOCHAETA

イトミミズ目 TUBIFICIDA

ヒメミミズ科 Enchytraeidae

110. ヒメミミズの一種 *Enchytraeidae* sp. 稀

爬虫類 REPTILIA

ヤモリ科

111. ホオグロヤモリ *Hemidactylus frenatus* 稀

112. オンナダケヤモリ *Gehyra mutilata* (Wiegmann) 稀

土壌動物以外の種については、宮城邦治氏（1982）、上杉兼司（1984）のデータに含まれるものが多かったが、特筆すべきは、シロオビアゲハについて、沖縄本島ではパンモン型が目立つのに、雌のベニモンアゲハに擬態するポリテス型が多かったことと、キシタアゲハの迷蝶に出会ったことである。また、沖縄島で普通種となっている双翅目の蚊・ハエ・ゴキブリを始め、先島地域で刺傷害虫となっているスズメバチなどの衛生上重要な種類が、やはり、生息していること、しかもワモンゴキブリのような都市型のゴキブリが定着していることは人為的な影響があったことを意味する。

台湾からの迷入が推定されたキシタアゲハについて、1995年に発見されて以来、1996年までの約2年間に、全国の蝶愛好家による乱獲騒動があって、1997年の10月には目視することはできなかった。このような珍重種が一過性にならぬよう願わずにはいられない。山口県宇部市在の蝶愛好家の後藤和夫氏によると、この蝶はワシントン条約の規制対象種であったとのことである。波照間島には食草となるウマノスズクサも植生し、徐々に定着のきざしがみえたにもかかわらず、マニアによる食草や蝶の乱獲は一過性の現象に終ることになりかねないので、危惧するものである。今後のこともあるので、衛生上問題となる移入種はこまりものだが、自然の資源となる種の保護には行政も積極的に関わって欲しいと思った。

5. 要約

波照間島において、1997年から1998年にかけて、土壌動物及びその他の小動物の調査を行い、目録を作成することができた。

1) 波照間島は保水力のある自然林が少なく、乾燥ぎみの土壌にもかかわらず、3門7網23目53科64種の土壌動物を記録することができた。その内訳は、ヤスデ綱3科4種、ムカデ綱4科5種、ダニ目を含むクモ綱が18科23種、甲殻綱3科3種、昆虫綱19科23種、腹足綱5科5種、貧毛類1科1種であった。

2) 今回、波照間島で確認された土壌動物を含む小動物は、昆虫類が全対比の58.93%、ダニ類を含むクモ綱が23.21%で、両綱の占める割合は82.14%と多かったが、土壌動物を特徴づけるヤスデ類やムカデ類などの多足類は全体比の8.04%で、甲殻類が2.68%、腹足類が4.46%、貧毛類が0.89%と少なかった。

3) 今回の調査で確認した土壌動物を含む小動物相は27目80科112種であった。

4) 乾燥傾向にある島にもかかわらず、自然度の高い土壌動物及び小動物相を確認することができた。その中で特筆すべきこととして、ヤエヤマゴケグモが6月から11月にかけて、卵嚢を保護する親グモや孵化した子グモなどが観察された。また、キシタアゲハの迷蝶の侵入があげられる。

報告を終えるにあたって

波照間島の自然及び地理的条件からして、今後とも、飛翔・飛行昆虫類の侵入や迷入などによる偶産種が記録されることが予想される。キシタアゲハを例にみると定着の可能性を見せてくれた珍重種であるが、食草や蝶の乱獲による絶滅が心配される。

したがって、乱獲に対する一定の規制と定着を許容できる自然環境保全への配慮が望まれる。

最後に、調査の機会と様々な便宜を与えて下さった沖縄県立博物館の与那城義春先生、崇原健二先生を始め、貴重な序言と協力を下さった多足類(分類・生態)研究者の篠原圭三郎先生、沖縄県衛生環境研究所の岸本高男氏、Zeroの森の会の佐藤文保氏、沖縄愛蝶会の後藤光男氏に、厚くお礼申し上げます。

参考文献

ア

青木淳一編, 1991. 日本産土壌動物検索図説, 東海大学出版会.

青木淳一, 1980. 土壌動物学, 北隆館.

安部琢哉・前田敦, 1979. 琉球列島に分布するアリ属の検索, 沖縄生物学会誌.

17:29-35.

朝比奈正二郎, 1991. 日本産ゴキブリ類, 中山書房.

東清二・堀繁久・金城政勝・湊和雄・村山望・上杉兼司, 1987. 沖縄昆虫野外観察図鑑.

第3巻・半翅目・双翅目・膜翅目・脈翅目, 沖縄出版.

-----, 1987. 沖縄昆虫野外観察図鑑.

第2巻・甲虫目, 沖縄出版.

-----, 1987. 沖縄昆虫野外観察図鑑.

第1巻・鱗翅目, 沖縄出版.

-----, 1987. 沖縄昆虫野外観察図鑑.

第4巻. トンボ目・直翅目その他の昆虫, 沖縄出版.

猪又敏男, 1990. 原色蝶類検索図鑑, 北隆館.

伊藤修四朗・奥谷禎一・日浦勇, 1987. 原色日本昆虫図鑑, 保育社.

- 上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝, 1994. 原色日本甲虫図鑑(Ⅱ), 保育社.
- 海野和男・青山潤三, 1996. 日本のチョウ; 自然観察シリーズ・12, 小学館.
- 上杉兼司, 1984. 琉球列島の蝶類Ⅰ・波照間島の蝶類相とその特徴, 沖縄生物学会誌, No. 22.
- 江原昭三, 1980. 日本ダニ類図鑑, 全国農村教育協会.
- 太田英利・山下晶子, 1985. オンナダケヤモリ *Gehyra mutilata*(Wiegmann)の波照間島からの記録, 沖縄生物学会誌, 23: 33-34.

カ

- 金子清俊・古川悦子・加納六郎・比嘉ヨシ子, 1981. 沖縄県で採集されたノミバエ類について, 衛生動物, 32(2): 188.
- 金子清俊・加納六郎・岡崎常太郎, 1961. 日本産ノミバエ科に関する研究・第1版, 1未記録種を含むノミバエ6種について, 衛生動物, 12(4): 238-247.
- 金子清俊・古川悦子・楠井善久, 1978. 日本産ノミバエ科に関する研究・第3版. わが国で初めて見出されたノミバエ, 愛知医科大学医学会誌, 6(4): 261-265.
- 環境片編, 1993. 日本産野生生物目録—本邦産野生動物植物の種の現状—無脊椎動物編 I. 環境庁.
- 加納六郎・田中寛, 1979. 医動物学, pp 354. 續文堂.
- Kiyoshi ISHII, 1993. Taxonomic Study of the Order Lithobiomorpha (Chilopoda) in Asia. 1. A New Species of Genus *Monotarsobius* (Lithobiidae) from Yonaguni and Iriomote Islands of Okinawa, Japan. Japanese Society of Systematic Zoology, 49: 33-36.
- 岸本高男・野崎真敏・福村圭介・下謝名松栄・佐々木建志・田里綾子・比嘉ヨシ子, 1997. 沖縄県におけるヤエヤマゴケグモ *Latrodectus* sp. の採集記録と毒性試験, 沖縄県衛生環境研究所報, 31: 75-80.
- 久保弘文・黒住耐二, 1995. 沖縄の海の貝・陸の貝, 沖縄出版.
- 小濱琢哉, 1996. King of Kings 捕獲類未記, 蝶研フィールド・vol.11, No.7(124).
- 小路嘉明・米谷敦子, 1996. 波照間島産キシタアゲハの飼育記録, 蝶研フィールド・vol. 11, No. 7(124).
- 後藤和男, 1996. キシタアゲハ採集記—ついに海を越えたかキシタアゲハ、波照間島に舞う—, 蝶研フィールドvol. 11, No.1(118).

サ

- 篠原圭三郎, 1985. 3. 多足類の簡易検索図解の作成, 都生研会誌・No. 21.
- 白水隆, 1996. 波照間島で採れたキシタアゲハについて, 蝶研フィールド・vol.11.

No.1(118).

白水隆・川副昭人・若林守男, 1991. 原色日本蝶類図鑑, 保育社.

ナ

Moritaka NISHIHIRA, 1962. Notes on Pseudoscorpions of the Ryukyus,
Biological Department, Arts and Science Division, University of the Ryukyus.

中根猛彦・日本甲虫学会, 1995. 原色日本昆虫図鑑・甲虫編, 保育社.

中玉利澄男, 1978. 八重山群島のササラダニ, 沖縄生物学会誌, 16:35-37.

日本自然保護協会編, 1985. 指標生物-自然をみるものさし-, 思索社.

マ

宮城邦治, 1982. 波照間島の植生概観と動物相. 地域研究シリーズ・No.3. 波照間島
調査報告書. p105-123, 沖縄国際大学南島文化研究所.



図1 波照間島の位置と遠景

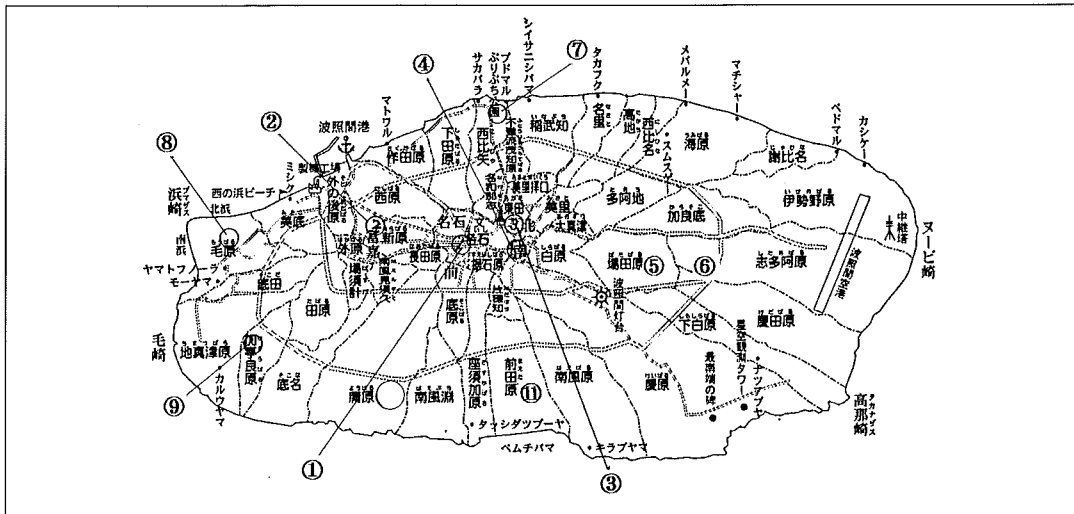
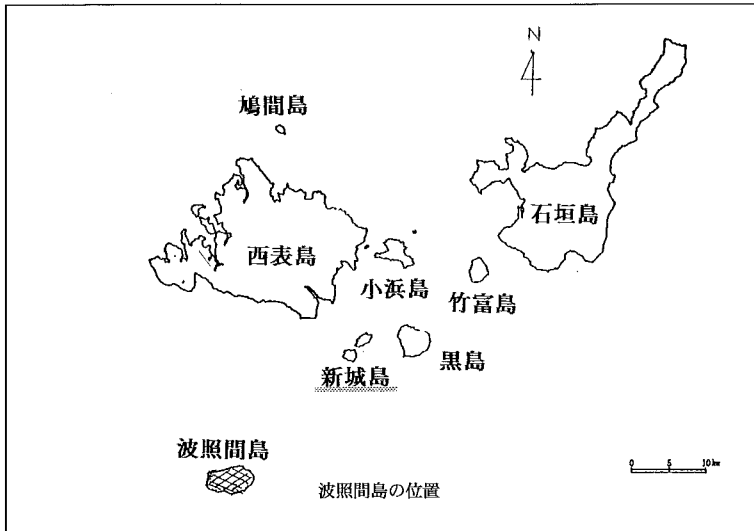


図2 土壌動物の採集場所 (①~⑨) と地名



①名石集落外れの原野



②富嘉集落内のバナナ畑



③北集落の人工林内

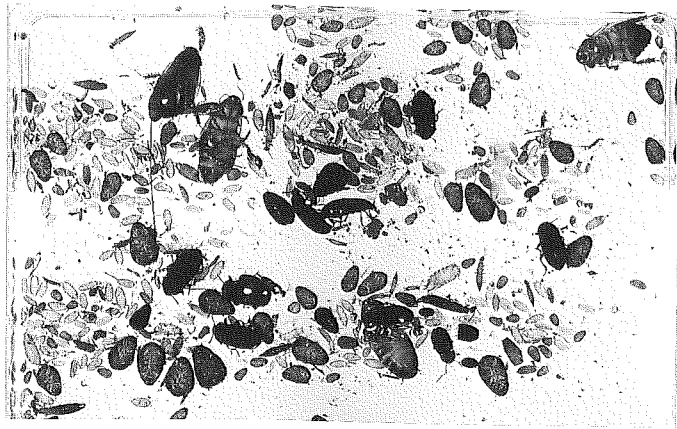


⑥南の森

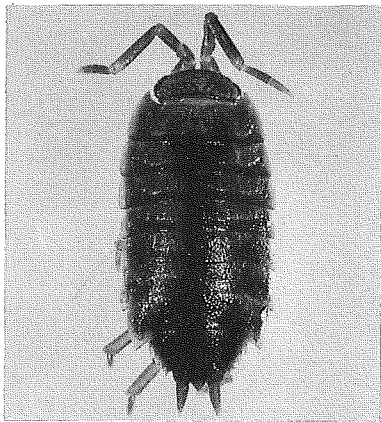


⑦ぶりぶち公園

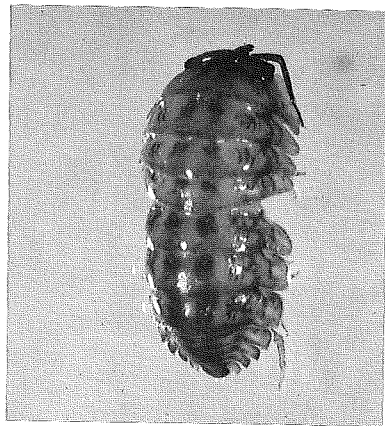
図3 調査場所



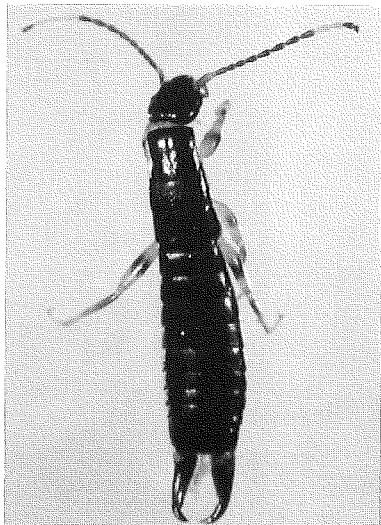
1. 顕微鏡で観察された土壌動物群



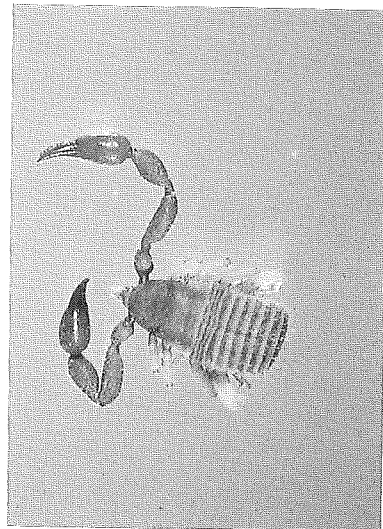
2. ホソワラジムシ
(ワラジムシ科)



3. セグロコシビロランゴムシ
(コシビロダンゴムシ科)

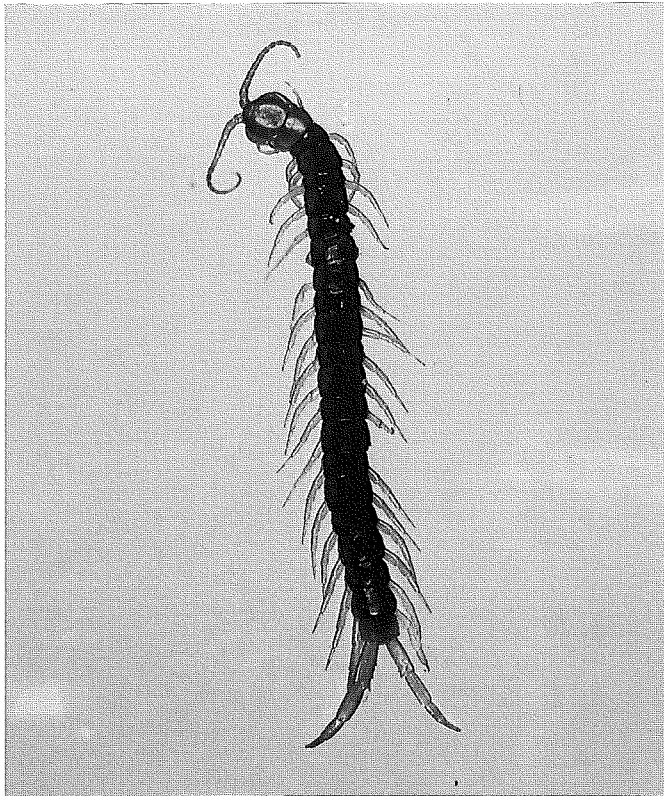


4. コヒゲジロハサミムシ
(マルムネハサミムシ科)

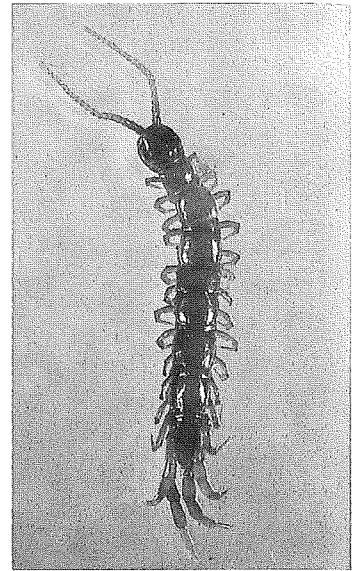


5. キカニムシの一種
(キカニムシ科)

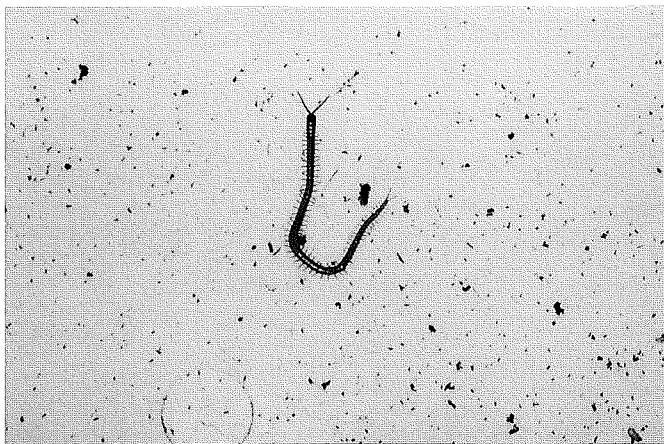
図4 土壌動物



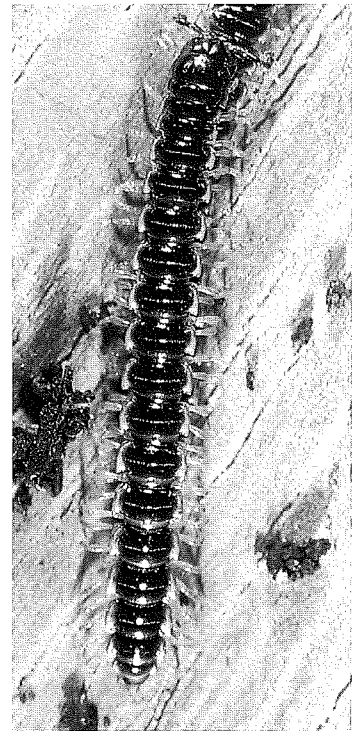
6. タイワンオオムカデ (オオムカデ科)



7. ヤエヤマヒトフシムカデ (イシムカデ科)

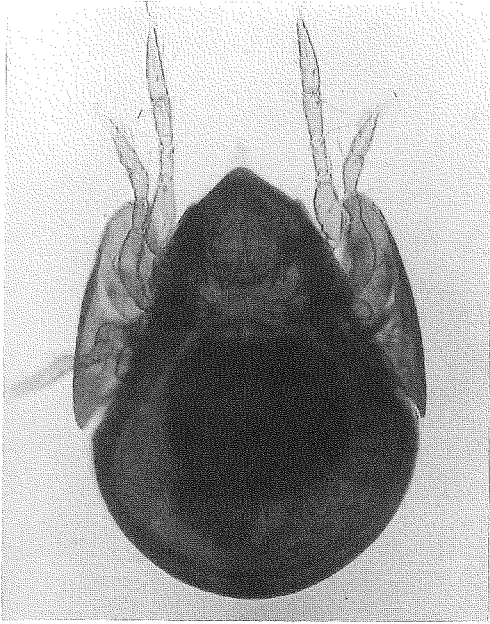


8. ツメジムカデ (ナガズジムカデ科)

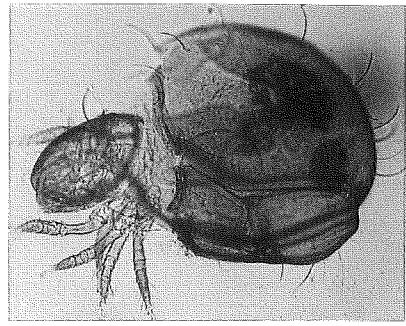


9. ヤケヤスデ (ヤケヤスデ科)

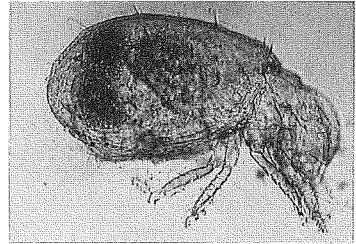
図4 土壤動物



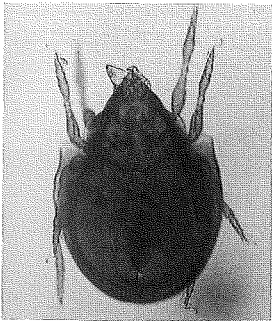
1. チビフリソデダニ (フリソデダニ科)



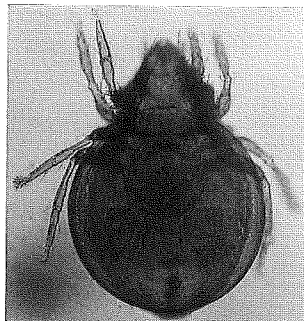
2. クゴウイレコダニ (イレコダニ科)



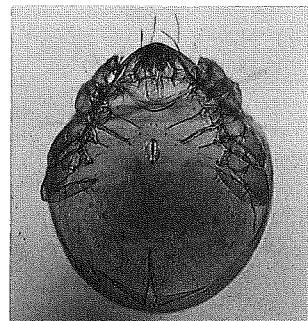
3. ハナビライレコダニ (イレコダニ科)



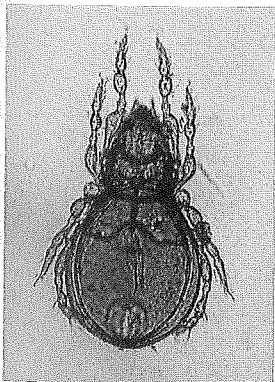
4. コソデダニ



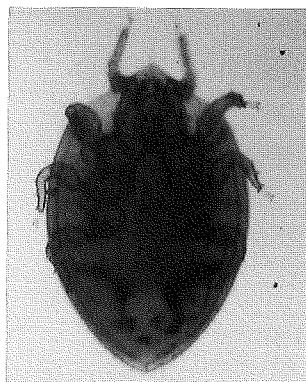
5. ヤマトクモスケダニ (クモスケダニ科)



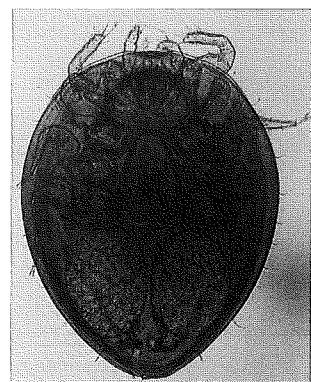
6. イトノコダニ (イトノコダニ科)



7. オオツブダニ (ツブダニ科)

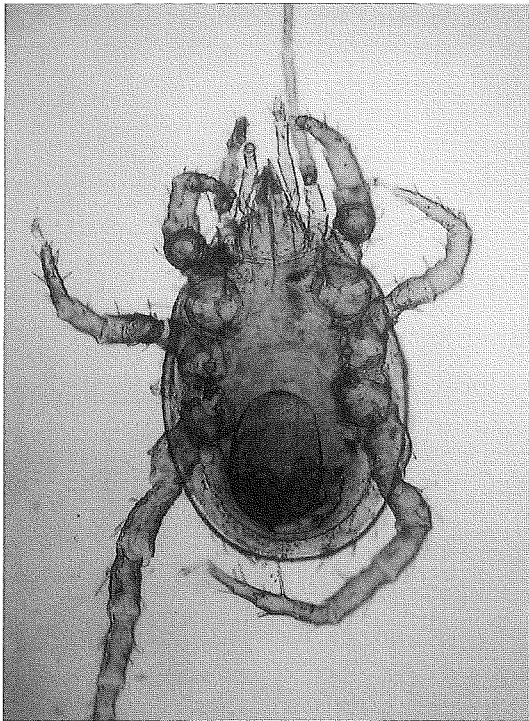


8. ミタケタマゴイトダニ (イトダニ科)

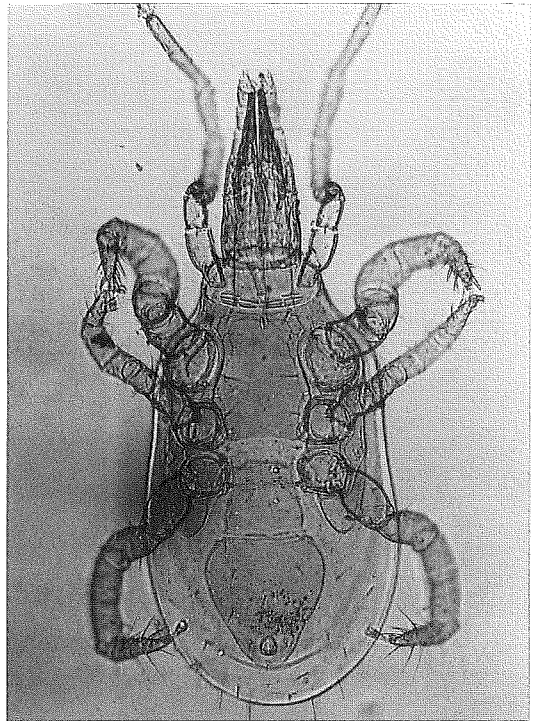


9. イケザキタマゴイトダニ (イトダニ科)

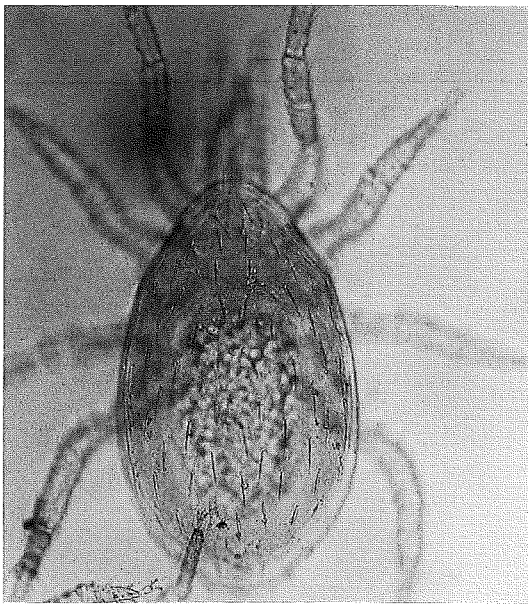
図5 ダニ類 (1~7 隠気門亜目・8~12 中気門亜目・13 無気門亜目)



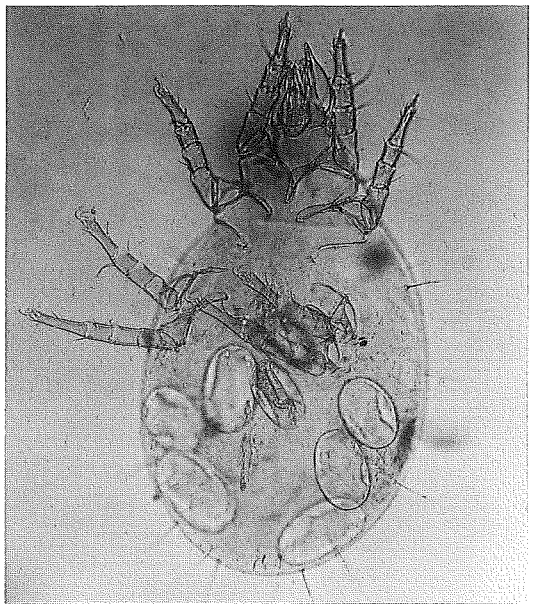
10. タカネコシピロホコダニ (ホコダニ科)



11. アキモトカマゲホコダニ (ホコダニ科)

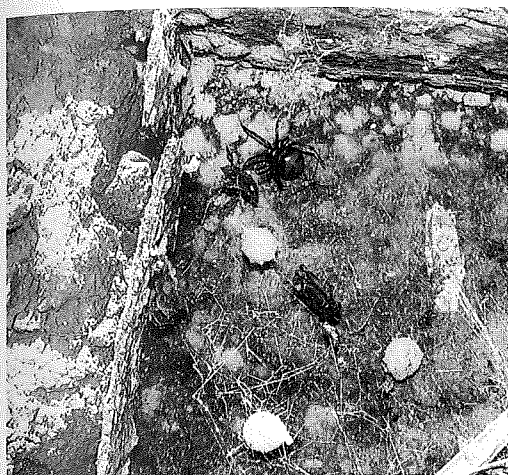


12. ホコダニの一種



13. コナダニの一種

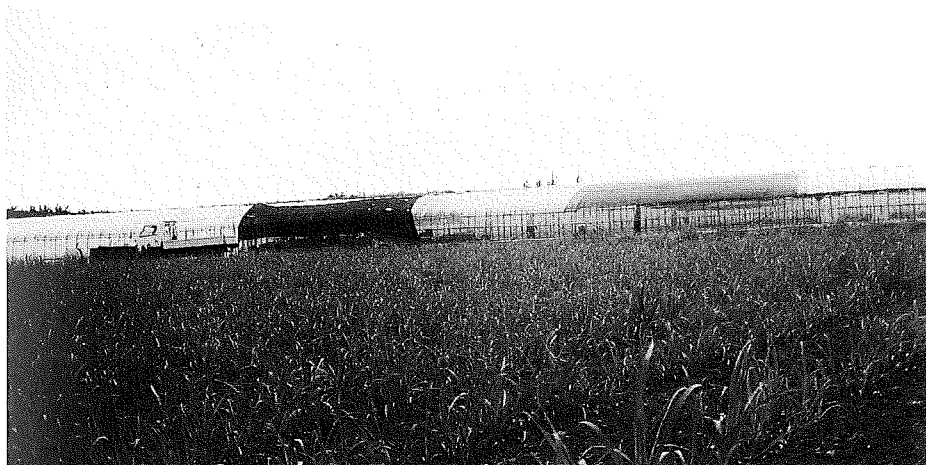
図5 ダニ類 (1~7 隠気門亜目・8~12 中気門亜目・13 無気門亜目)



1. 側溝蓋の裏（暗橋）暗い所に生息する
ヤエヤマゴケグモ（雌と卵囊）



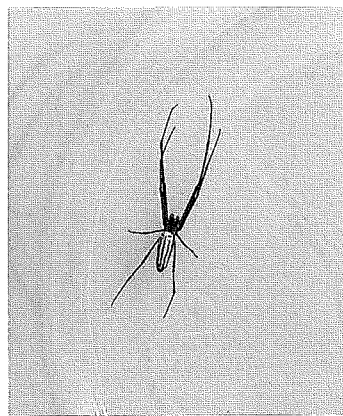
2. ヤエヤマゴケグモの雄



3. ヤエヤマゴケグモの生息する加亭良原の農耕地（スイカ栽培ビニールハウス）

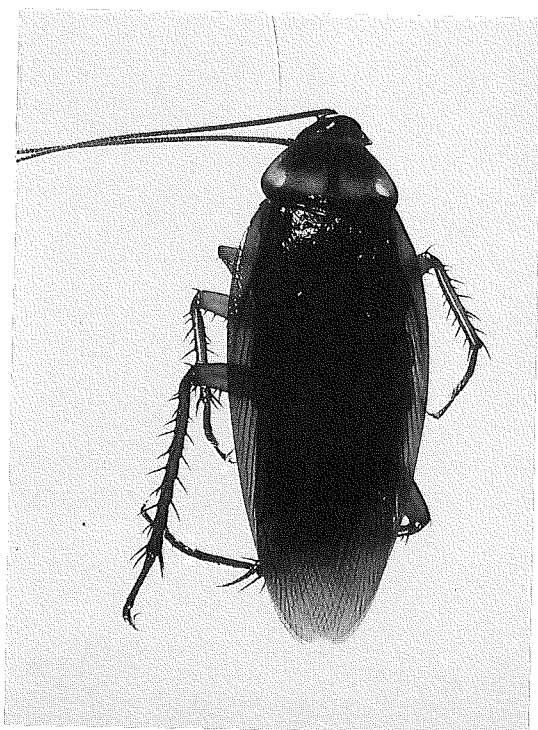


4. 南の森の自然洞で採集したコアシダカグモ

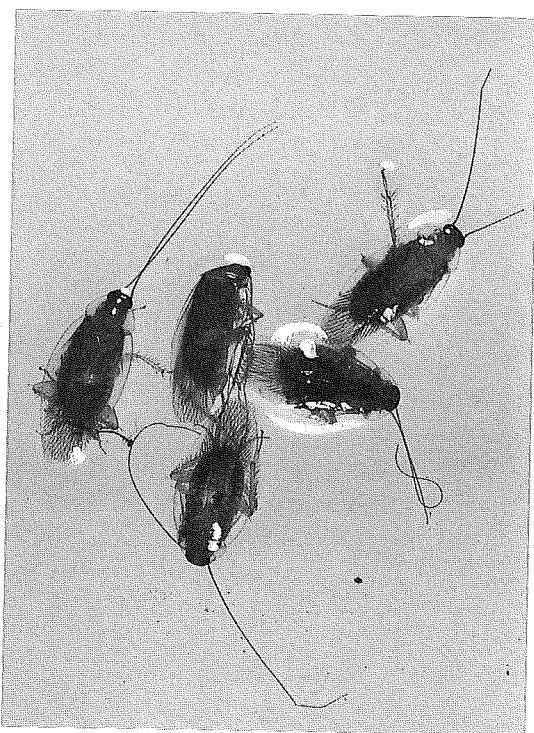


5. コガネグモ科

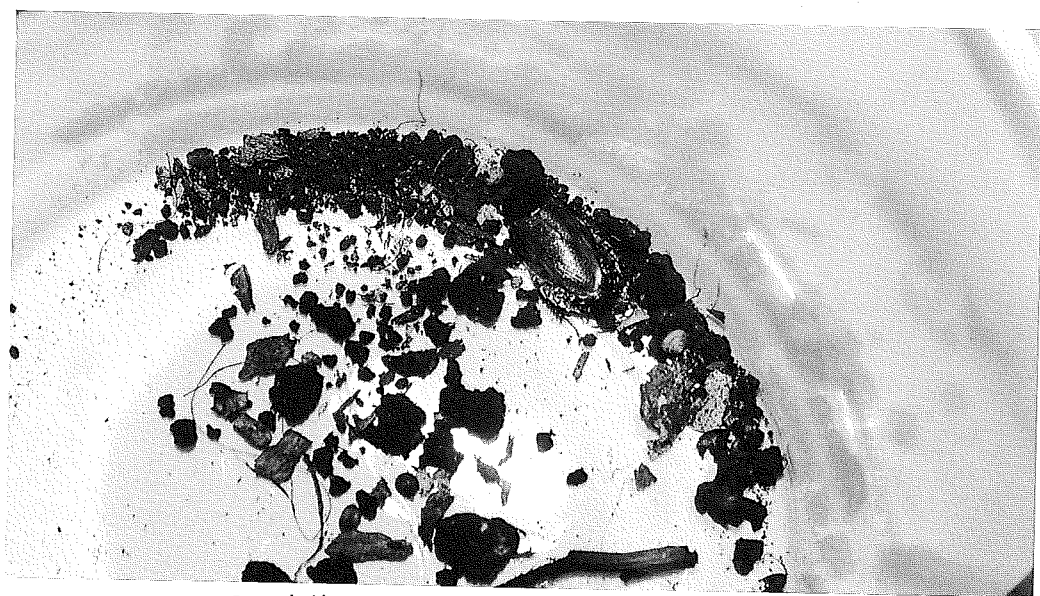
図6 クモ類



1. 集落内の家屋内外及びゴミ捨て場となつた自然洞に生息しているワモンゴキブリ

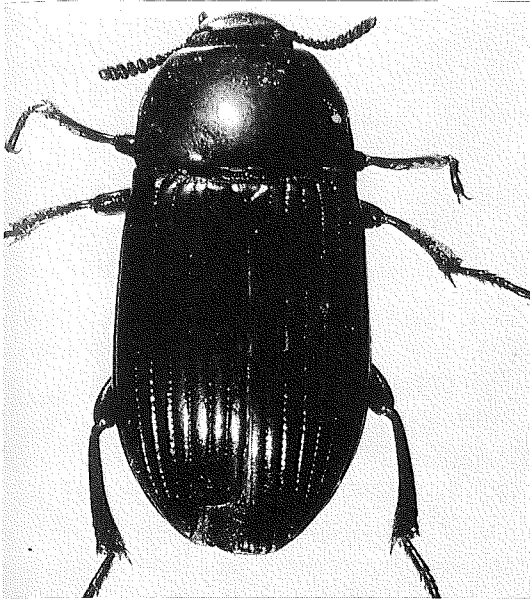


2. ウスヒラタゴキブリ
(チャバネゴキブリ科)



3. オガサワラゴキブリ (オガサワラゴキブリ科)

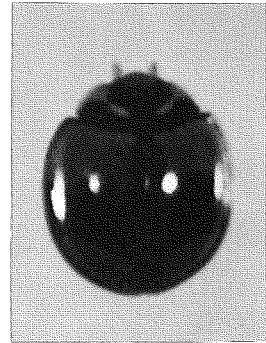
図7 ゴキブリ類



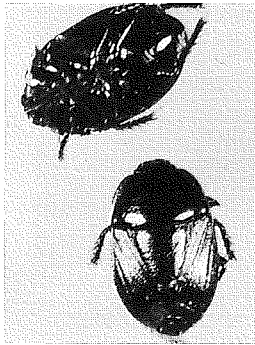
1. ミナミエグリゴミムシダマシ
(ゴミムシダマシ科)



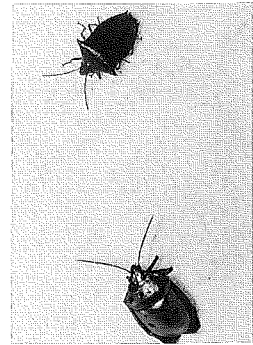
2. イツホシマゴモクムシ
(ゴモクムシ科)



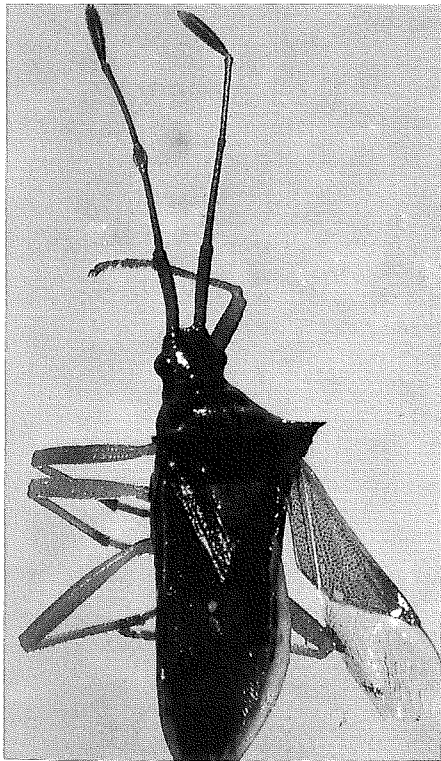
3. ダンダラテントウ
(テントウムシ科)



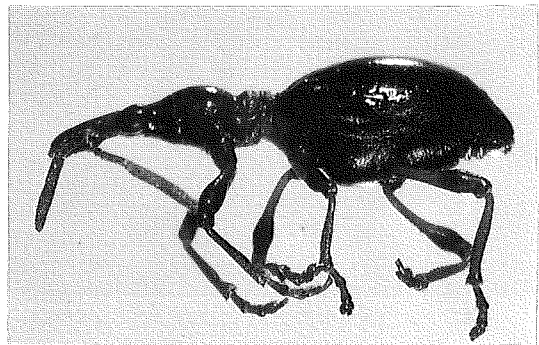
4. ミナマルツチカメムシ
(ツチカメムシ科)



5. ナナホシキンカメムシ
とクサギカメムシ
(カメムシ科)



6. ホソヘリカメムシ
(ヘリカメムシ科)



7. アリモドキゾウムシ
(ミツギリゾウムシ科)

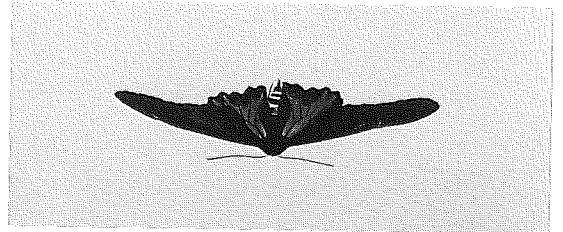
図8 通常見かけられる小動物



1. キシタアゲハの食草・
リュウキュウウマノスズクサ (南の森)



2. キシタアゲハの雌 (アゲハチョウ科)

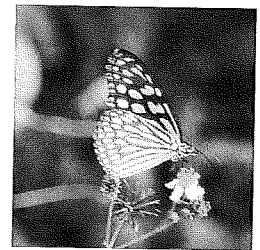


3. キシタアゲハの雄

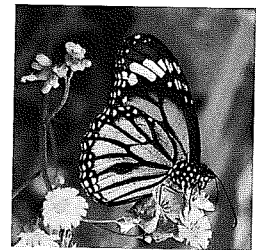


4. シロオビアゲハ (アゲハチョウ科)

♀の斑紋変異 — (左) ……II型 (ポリテス型またはベニモンアゲハ型)
— (右上) ……I型 (パンモン型), ♂と同じ型



5. リュウキュウアサギマダラ
(マダラチョウ科)



6. スジグロカバマダラの雄
(マダラチョウ科)

図9 鱗翅目 (1~3 侵入種・迷蝶 / 4~6 多く目視される種)

種類 土壤水分	土壤動物
R.H. 100%以下 乾生動物	<div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-bottom: 10px;"> クモ · カメムシ · オオムカデ · ハサミムシ · アザミウマ </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-bottom: 10px;"> トカゲ · オオギトビムシ · キカニムシ · マルトビムシ </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-bottom: 10px;"> ウズタカダニ · ハネカクシ · ゴキブリ · アリ </div> <div style="display: flex; justify-content: space-between; margin-bottom: 10px;"> ササラダニ — ザトウムシ — ダンゴムシ </div>
R.H. 100%以下 湿生動物	<div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-bottom: 10px;"> ワラジムシ · ジムカデ · ヤスデ · カタツムリ · フシトビムシ </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-bottom: 10px;"> カマアシムシ · キセルガイ · ガロアムシ · ハエ · アブの幼虫 </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-bottom: 10px;"> 甲虫の幼虫 · ツチカニムシ · ケラ · アギトダニ </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-bottom: 10px;"> イボイモリ · モグラ · コウガイビル · ナメクジ </div> <div style="display: flex; justify-content: space-between; margin-bottom: 10px;"> ミミズ ヒメミミズ — ソコミジンコ — ヨコエビ — ヒル — </div>
水中 水生動物	<div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-bottom: 10px;"> 線虫 · クマムシ · タイヨウチュウ · コルボダ </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> ミドリムシ · ゾウリムシ · ツボワムシ · ウズムシ · アメーバ </div>

図10. 土壤動物の土壤水分への依存度 (青木原図の変型)

…今回採集された土壤動物

表3. 土壤動物の採集状況

種 類	調査地	集落内 (人為的環境)				集落外 (二次林や自然林の残った場所や農耕地周辺に散在する原野)						
		名石 ①	富嘉 ②	北 ③	南 ④	南の森A ⑤	南の森B ⑥	ぶりふち公園 ⑦	毛原 ⑧	加亭良原 ⑨	自然洞 ⑩	前田原 ⑪
ヤスデ綱												
リュウキュウフサヤスデ					○	○	○					
ヤケヤスデ	●		●	●			●	●	●			
ナンヨウヤケヤスデ		●		●	●	●	●	●			●	
リュウキュウヤハズヤスデ				○	○	○	○	○				
ムカデ綱												
オオゲジ											○	
ヤエヤマヒトフシムカデ		○	○	○	○	○	○					
タイワンオオムカデ	●	●	●	●	●	●	●			●	●	
ツメジムカデ		○	○	○								○
ゴシチナガズジムカデ		○	○	○		○	○			○		
クモ綱												
キカニムシの一種						○						
フリソデダニ科の一種					○	○	○					
チビゲフリソデダニ				○	○	○	○					
コソデダニ科の一種			○	○	○	○	○			○		
ニセイレコダニ				○	○	○	○					
クゴウイレコダニ				○	○	○	○					
ハナビライレコダニ			○	○	○	○	○					
ヒメヘソイレコダニ	○	○	○	○	○	○	○					
カノウニオウダニ				○	○	○	○					
ヤマトクモスケダニ				○	○	○	○			○		
イトノコダニ				○	○	○	○					
ツバサクワガタダニ				○	○	○	○					
オオツツダニ			○	○	○	○						
ウデナガダニ科の一種				○	○	○				○		
タカネコシピロホコダニ		○		○	○	○				○		
アキモトカマゲホコダニ		○		○	○	○				○		
ホコダニ科の一種				○	○	○				○		
イケザキタマゴイトダニ					○	○	○					
ミタケタマゴイトダニ				○	○	○						○
コナダニ科の一種	○	○	○	○		○	○			○		
ジョンストンダニ科の一種		○					○					
ヤエヤマゴケグモ									●			
コアシダカグモ		○								○		
甲殻綱												
ホソワラジムシ	○	○	○	○		○	○		○	○	○	
セグロコシピロダンゴムシ			○	○		○	○					
ヤエヤマオカトビムシ		○	○	○		○	○					○
昆虫綱												
アリノストビムシ科の一種	○											
ツチトビムシ科の一種	○	○	○	○	○	○	○		○	○		
マルトビムシ科の一種				○		○	○			○		

種 類	集落内 (人為的環境)				集落外 (二次林や自然林の残った場所や農耕地周辺に散在する原野)						
	調査地 名石 ①	富嘉 ②	北 ③	南 ④	南の森A ⑤	南の森B ⑥	ぶりふち公園 ⑦	毛原 ⑧	加亭良原 ⑨	自然洞 ①	前田原 ②
オガサワラゴキブリ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ワモンゴキブリ	●	●	●	●						●	
コワモンゴキブリ	●	●	●	●						●	
ウスヒラタゴキブリ	○	○	○	○					○		
タイワンエンマコオロギ	○	○	○	○	○	○	○		○		
コヒゲジロハサミムシ	○	○	○				○		○	○	
ミナミマルツチカメムシ					○	○			○		
ミナミエグリゴミムシ			○	○	○	○	○				
ヒラヒラタヨツボシアトキリゴミムシ						○					
ハネカクシ科の一種				○	○	○	○				
ミジンムシシダシ科の一種			○	○	○	○	○				○
コケムシ科の一種			○	○	○	○	○				
チビクロノミバエ	○			○							
クサビノミバエ	●	●		●						●	
ショウジョウバエ科の一種	○			○							
クロバネキノコバエ科の一種					○	○	○				
アメリカミズアブ		●	●	●						●	
ニセハリアリの一種				○	○	○	○	○			
ケアリの一種	○	○	○	○	○	○					
アメイロアリの一種				○	○	○	○				○
マキガイ綱											
ヤエヤマヤマトアシ					○	○	○	○			○
キセルガイの一種					○	○	○			○	
ヤエヤマクチミソガイ					○	○	○				
ソメワケタワラガイ		○	○	○					○		
オカチョウジガイ	○	○	○	○	○	○	○				
ミミズ綱											
ヒメミミズの一種		○	○	○					○		

(備考) ●：衛生上重要な種類

ヤケヤスデ・ナンヨウヤケヤスデ・アメリカミズアブ……………異常発生すると不快な虫。

ワモンゴキブリ・コワモンゴキブリ……………媒介動物であり、不快な虫でもある。

ヤエヤマゴケゲモ・タイワンオオムカデ……………刺傷動物

クサビノミバエ・ワモンゴキブリ・コワモンゴキブリ……………食品異物混入の原因になる。

表4. 小動物の採集状況

種 類	調査地	(人為的環境)		(林縁域)		(海岸草地・海岸林)		
		集落内・路傍	荒地	集落内・ぶりぶち公園	南の森一帯	高那崎・ハマシタン群落		
(鱗翅目)								
アオスジアゲハ		○		○				
シロオビアゲハ		○	○	○	○	○	●	○
キシタアゲハ				○	○	○		
ウラナミシロチョウ				○		○		
タイワンキチョウ				○		○		
ツマベニチョウ		○		○		○		
シルビアシジミ				○		○		
ウラナミシジミ			○			○		
リュウキュウアサギマダラ				○	○	●	○	○
オオゴマダラ								●
カバマダラ		○		○				
スジグロカバマダラ				○		○		
リュウキュウムラサキ						○		
メスアカムラサキ			○	○		○		
ヒメアカタテハ			○			○		○
タテハモドキ			○			○		
リュウキュウミスジ						○		
(半翅目)								
ナナホシキンカメムシ				○		○		
クサギカメムシ				○		○		
ミナミマルツチカメムシ						○		
ホソハリカメムシ				○	○	○		
リュウキュウクマゼミ					○	○		
(甲虫類)								
ダンダラテントウ				○	○	○		
アリモドキゾウムシ		○						
フチトリアツバコガネムシ						○		
アオドウガネ		○	○					
イシガキシロテンハナムグリ				○		○		
(真正クモ類)								
チブサトゲグモ		○	○	○	○	○		
オオジョロウグモ						○		
アダンソンハエトリグモ		○						
コアシダカグモ		○						
(双翅目)								
オオクロヤブカ		○		○				
ヒトスジシマカ		○	○	○	○	○		
キイロショウジョウバエ		○						
イエバエ		○						
ヒロズキンバエ		○						
オビキンバエ		○						
キノコバエの一種					○	○		
クサビノミバエ		○						
チビクロノミバエ		○						
(膜翅目)								
ツマグロスズメバチ						○		
ヤエヤマアシナガバチ						○		
アカアシセジロクマバチ						○		
ニセハリアリ属の一種		○						
(ゴキブリ目)								
ワモンゴキブリ		○						
コワモンゴキブリ		○						
ウスヒラタゴキブリ		○						
(直翅目)								
タイワンエンマコウロギ		○				○		
ショウリョウバッタ		○		○	○		○	
モリバッタの一種						○		
(ナナフシ目)								
コブナナフシ						○		
(蜻蛉目)								
リュウキュウギンヤンマ		○		○	○			
ウスバキトンボ		○			○			
ショウジョウトンボ					○		○	
(爬虫類)								
ホオグロヤモリ		○						
オンナダケヤモリ		○						

● 特に個体数が多く観察された所

波照間島で記録された鳥類とその方言名について

嵩原建二
島村修
加治工真市

はじめに

波照間島は日本最南端の島で、北緯 $24^{\circ} 01'$ ~ $24^{\circ} 03'$ 、東経 $123^{\circ} 45'$ ~ $123^{\circ} 48'$ に位置し、八重山諸島の石垣島から南へ約56km洋上に浮かぶ、島面積 12.46km^2 、周囲 14.62km の島である。波照間島の地質については、図1に示したように大部分が隆起サンゴ礁からなる石灰岩で占められ、最高標高も59.9mとほぼ平らな島である。

波照間島の植生については、新納(1981)によって調査され、御嶽林で見られる植生についての報告がある。これによると概ね高木層にクワノハエノキ、テリハボク、クロヨナ、アカテツ、シマグワ、タブノキ、リュウキュウガキ、オオハマボウなど石灰岩地域や海岸林に特徴的に出現する種を報告している。しかしながら、今日では農耕地の拡大によって、森林地域は少なくなり、島の中央部の集落近くの拝所(御嶽)や島のまわり植林されたと思われるフクギやテリハボク等の防風・防潮林などがわずかに残存しているだけである。

波照間島を含む八重山諸島の鳥類については、八重山野鳥の会(1983)によって56科294種の野鳥が報告されている。しかしながら、その報告には波照間島から記録された鳥類については明確に示めされておらず、野鳥の方言名を紹介した章で23種の野鳥が波照間島の方言名で示されているにすぎない。それ以外には琉球新報社編(1983)、宮城(1974)、嵩原(1994)などに一部報告が見られるが、波照間島で確認されている鳥類は少なく、鳥類に関する知見は不十分であるように思える。

今回の総合調査ではさらに島の人々が野鳥とどのような関わりをもっているかを知るため、野鳥の方言名についても収集するように努めた。生物の方言名を収集することは、民俗学的な無形文化財の収集としての重要性もあるものと思われるが、島にすむ人々がどのように自然を認識しているかの手がかりとなり、同時に生物学的な意味では潜在的な生物相をうかがい知る一つ方法に成り得るものと思われる。これまで南西諸島における生物の方言名については、当山(1983, 1984, 1987)や野原・宮城(1988)などの報告が見られる。植物の方言名については、天野(1979)の先駆的な著書が知られており、さらに天野(1981)は、波照間島を含む先島諸島に所在する御嶽林に出現する植物の方言名が報告されている。

筆者らは波照間総合調査の一環として、1996年8月から1998年3月までの足掛け3年間に、3回にわたって波照間島を訪れる機会を得ることができ、波照間島に生息する鳥類の

記録や方言名について若干の知見を得たのでここに報告する。なお、波照間島における野鳥の方言名については、前述したように八重山野鳥の会編（1983）によってなされているが、さらに方言名の収集を試み、名前の由来や人との関わりなどを整理し、さらに言語学的にみた語彙の転訛などについて若干の検討を加えた。

本報告においては鳥類調査については嵩原が担当した。また、野鳥の方言名は島村が採集・録音し、その音声表記については加治工が担当した。この報告が波照間島の鳥類相や野鳥の方言名を理解する一助になれば幸いである。

本報告をまとめるにあたり、波照間島における現地調査の際、車両の提供等に協力いただいた波照間中学校校長の普天間朝光氏、また貴重な鳥類情報を提供していただき、かつ現地調査に同行していただいた波照間中学校の西里正善氏、さらに沖縄電力波照間営業所の金城裕光氏には、貴重な鳥類情報を提供していただいたので感謝申し上げます。

調査方法

現地調査では図2に示したように特に調査ルートや時間を定めず、車両を使って島全体の町道や農道をくまなく走り、目撃された鳥類の記録に努めた。特に島内数カ所設置された農業用溜め池では重点的に調査を実施した。また、図2に示したように、環境庁が作製した自然環境保全基礎調査用の基準メッシュ図をもとに、波照間島を1.3km×0.9kmの広さで15区画に区分したメッシュの内、13メッシュについて、30分間同一メッシュ内に

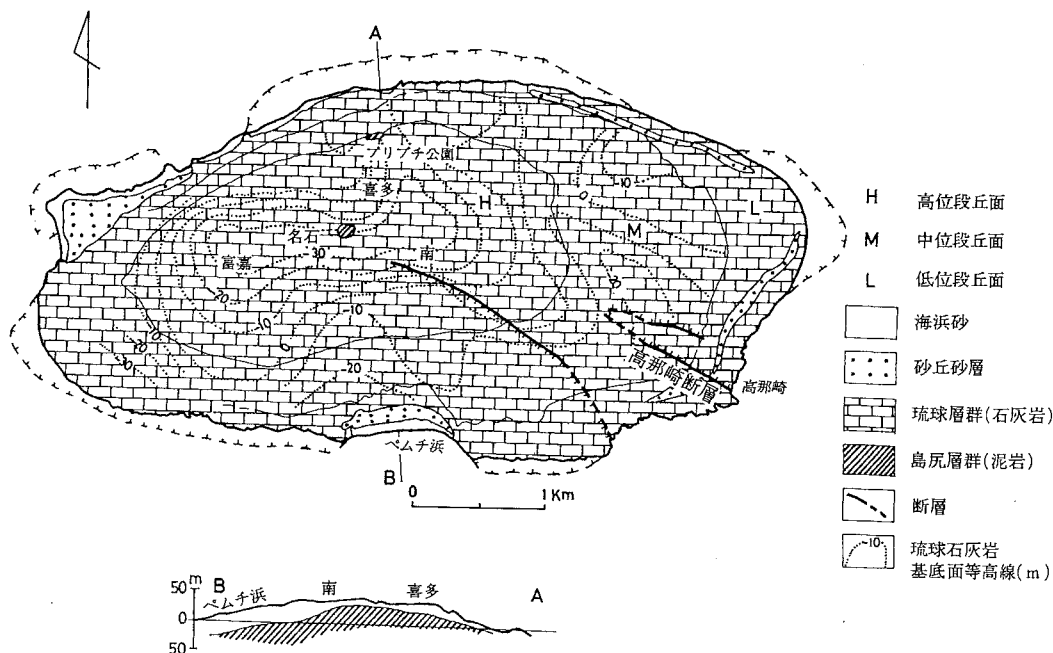


図1. 波照間島の地質図 (木崎1985を改変)

留まり、出現鳥類を記録する定点メッシュ法により鳥類調査を実施した。なお、鳥類の目撃には8倍の双眼鏡も使用した。その調査日や時間等の調査概要は、表1に示したとおりである。さらに、調査資料の一部には現地での聞き取り調査や波照間中学校野鳥クラブで確認された種についても採用し、鳥類目録に加味した。

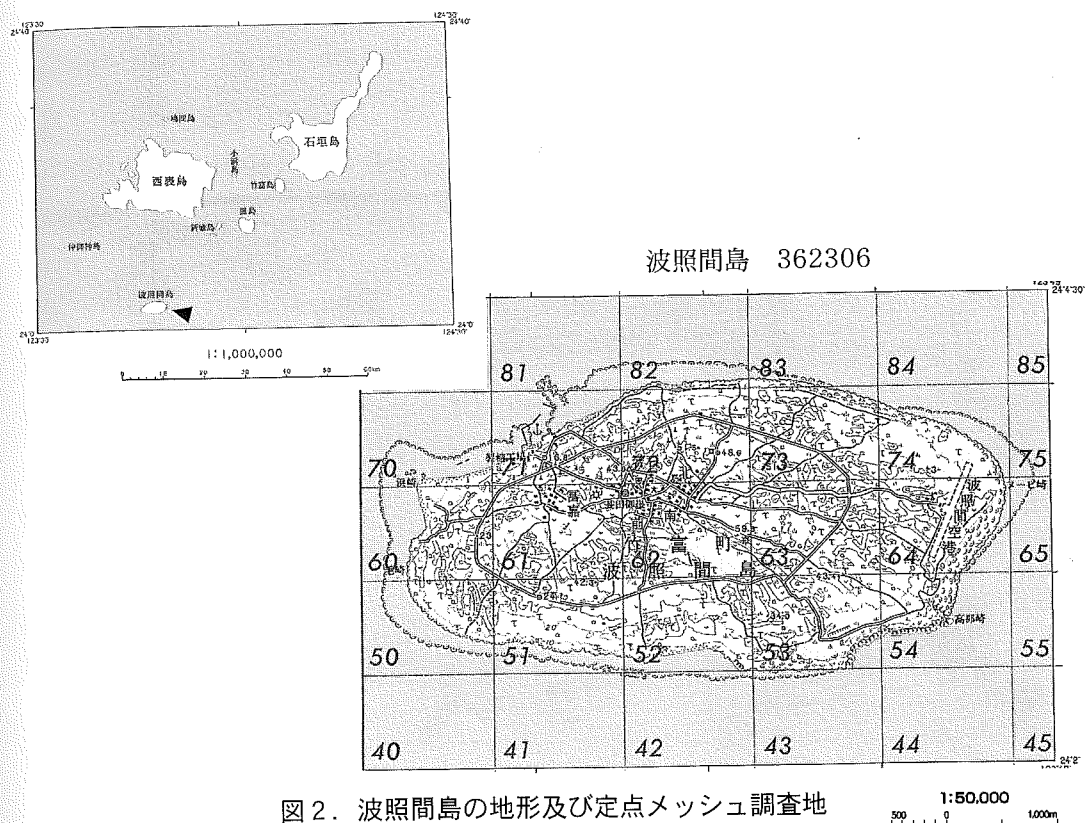


図2. 波照間島の地形及び定点メッシュ調査地
(環境庁自然環境保全基礎調査用メッシュ図を改変)

表1. 鳥類調査概要

調査日	天気	時間	備考
1996/8/21	晴	13:00-18:00	島内全域
1996/8/22	晴	6:00-18:00	"
1996/8/23	晴	6:00-18:00	"
1996/8/24	晴	6:00-18:00	"
1996/8/25	晴	6:00-18:00	"
1996/8/26	晴	6:00-18:00	"
1997/9/3	晴	6:00-18:00	"
1997/9/4	晴	6:30-19:15	"
1997/9/5	曇	6:30-13:00	"
1998/2/24	雨	12:00-20:00	" 定点メッシュ調査
1998/2/25	曇	7:00-16:00	" 定点メッシュ調査

調査結果と考察

1. 波照間島で観察された鳥類

今回の調査では、延べ3回、12日におよぶ現地調査で表2にまとめて示したように、60種の鳥類が確認された。その中にはこれまでに波照間島で報告されていないセイタカシギ、ウズラシギ、エリマキシギ、カワセミ、アカアシシギ、アカヒゲ、タゲリ、ツバメチドリなど36種の鳥類が確認された (PLATE)。

今回の調査記録にこれまでの鳥類記録や聞き取り調査などを総合して波照間島の「鳥類目録」作成を試みてみると、巻末に示したように、11目30科77種 (亜種含む) の鳥類が記録されているものと思われる。その内訳は便宜的に生息現状でおおまかに分けてみると、留鳥19種、渡り鳥が56種 (夏鳥6種、冬鳥及び旅鳥50種)、不明が2種であった。

留鳥の出現状況では、県内では留鳥とされるウグイスとカルガモの2種の生息は冬季に確認され、繁殖の有無が不明であるので、留鳥の種数からは除外した。また、沖縄島や石垣島、西表島など島面積の広い島の森林地域で生息するシジュウカラ科とキツツキ科に属する種が確認できなかった。さらに、渡りを行う鳥類の確認状況は、波照間島では河川や干潟が存在せず、このため水辺を利用するシギ・チドリ類やカモ類が15種と少ない傾向が見られた。しかしながら、島内には数カ所の農業用水用の溜池が所在し、こうしたわずかな水辺環境にセイタカシギ、エリマキシギなどのシギ類や、コガモ、カルガモ、ハシビロガモなどのカモ類の渡来が確認された。おそらく、今後調査がすすむことで、留鳥や渡り鳥の種数については若干変動するであろう。

1-1. 各種の生息現状の概要

1) 留鳥の生息状況

波照間島で調査期間中に確認された留鳥は、セッカ、オサハシブトガラス、ヒヨドリ、メジロ、キジバト、シロガシラ、カワセミ、アオバズク、コノハズク、ミフウズラ、バン、シロハラクイナ、スズメ、ツミ、クロサギ、イソヒヨドリ、カイツブリ、シロチドリの18種であった。この記録に聞き取り調査でオオクイナが確認されたので、全体で19種になる。しかしながら、今回の現地調査では出現しなかった鳥類で、後述するように野鳥の方言名で識別され、留鳥として生息しているものと思われるズアカアオバト、ヒクイナ、リュウキュウヨシゴイなど3種を加えると合計22種の留鳥が生息しているものと思われる。これが波照間島における潜在的な留鳥の生息状況と思われるが、ズアカアオバトやヒクイナなどは、土地改良事業等による森林地域や湿地の減少により生息地の減少がすすみ、個体数が激減しているものと思われる。なお、オオクイナについては、波照間中学校の西里正善氏 (私信) によって1997年9月に鳴き声が確認されているので、少数が生息しているもの

と思われる。しかし、現地調査で生息確認をした地上を徘徊するミフウズラは、調査期間中にわずか2個体が目撃されただけで、個体数の減少が考えられる。これは1960年代に野鼠の害を減らす目的でイタチが導入（移入）されており（Uthida, 1969）、地上を徘徊するミフウズラはイタチに捕食される可能性が高いことが考えられるので、イタチはミフウズラの個体数維持に何らかの影響を与えているものと思われた。

1997年8月の調査で確認されたカワセミは、島に散在する農業用水を確保する溜池等で目撃され、亜成鳥も見られたのでここで繁殖していることは明らかである。

興味深いことに、県内では普通に生息しているリュウキュウツバメの生息を確認することができなかった。なお、シロガシラは、中村・花輪（1987）で亜種が明確にされていないので、*Pynonotus sinensis*とした。

表2 調査期間内で確認された鳥類

調査年度	1996	1997	1998	セイタカシギ	◎	◎	◎
調査期日	8.21-8.24	9.3-9.5	2.24-2.25	ツバメチドリ			◎
種名				クロハラアジサシ		◎	
カイツブリ	◎		◎	ベニアジサシ	◎		
ゴイサギ		◎		エリグロアジサシ	◎		
アマサギ	◎	◎	◎	クロアジサシ	◎		
アオサギ			◎	キジバト	◎	◎	◎
ダイサギ			◎	コノハズク	◎	◎	◎
チュウサギ		◎	◎	アオバズク	◎	◎	◎
コサギ			◎	アカショウビン	◎		
クロサギ	◎		◎	カワセミ		◎	
コガモ			◎	ツバメ	◎	◎	◎
ミサゴ			◎	ツメナガセキレイ		◎	
ツミ	◎		◎	キセキレイ		◎	◎
サシバ			◎	マミジロタヒバリ			◎
チョウゲンボウ			◎	タヒバリ			◎
ミフウズラ	◎			シロガシラ	◎	◎	◎
バン	◎	◎	◎	ヒヨドリ	◎	◎	◎
シロハラクイナ	◎	◎	◎	アカモズ	◎	◎	◎
コチドリ		◎	◎	アカヒゲ			◎
シロチドリ		◎		ノゴマ			◎
ムナグロ	◎	◎	◎	イソヒヨドリ	◎	◎	
タゲリ			◎	シロハラ			◎
キョウジョシギ		◎		ウグイス			◎
ウズラシギ			◎	セッカ	◎	◎	◎
エリマキシギ		◎		メボソムシクイ			◎
アカアシギ		◎		キマユムシクイ			◎
アオアシギ		◎		サンコウチョウ		◎	
タカブシギ	◎		◎	メジロ	◎	◎	◎
キアシギ		◎		スズメ	◎	◎	◎
イソシギ	◎	◎	◎	オサハシブトガラス	◎	◎	◎
タシギ			◎	合計60種	27種	32種	43種

2) 夏鳥の生息状況

波照間島ではサンコウチョウ、アカショウビン、ベニアジサシ、エリグロアジサシ、クロアジサシ、カツオドリの6種の夏鳥が記録された。サンコウチョウとアカショウビンはおそらく森林地域で繁殖している可能性があるが、一部は渡りの中途に立ち寄ることもあるものと思われる。

アジサシ類は波照間島の西方海上に所在し、海鳥の繁殖地として国の天然記念物にもなっている仲御神島や八重山諸島に所在する無人の岩礁等で繁殖した個体の飛来と思われるが、一部は波照間島の西の浜西方にある岩礁で繁殖している可能性がある。

なお、本州では夏鳥として渡来するアオバズクは、県内には冬季にも生息している亜種リュウキュウアオバズクとされているので、波照間島でも留鳥として扱った。また、本州では夏鳥として渡来するホトトギスは、波照間で傷病鳥として保護例があったが、本種については県内での託卵の報告が無いことから、旅鳥として扱った。

3) 旅鳥及び冬鳥の生息状況

夏鳥以外の渡り鳥である旅鳥や冬鳥には、サシバ、アカハラダカ、シロハラ、ムナグロ、ツメナガセキレイ、ウズラシギ、エリマキシギ、タシギ、セイタカシギ、ダイサギ、アマサギ、タゲリ、マミジロタヒバリ、ツバメチドリなど50種が記録された。その種数は波照間島で記録された鳥類全体の約7割(64.9%)を占めていた。これは波照間島がいかに渡り鳥にとって、その越冬地や中継地として重要な島であることを示している結果であろうと思われた。

2. 定点メッシュ調査で確認された鳥類

表3に示したように、1998年2月(冬季)の調査で、13メッシュで36種の鳥類が確認された。そのうち留鳥は12種で、波照間島で冬鳥としての越冬や、もしくは旅鳥として一時的に立ち寄るものと考えられる渡り鳥が24種あった。その中にはほぼ全体のメッシュで出現した種はヒヨドリやキジバトなどの留鳥であった。したがって、これらの留鳥は島内全域に広く生息分布していることが示唆された。また、草原やギンネム林などで生息確認されたツバメチドリやマミジロタヒバリ、キマユムシクイ、タゲリなどはこれまで波照間島での記録が知られておらず初確認と思われた。さらに、名石集落と南集落の間にあるドリーネに残存する御嶽林(広葉樹林)でさえずっているアカヒゲの1個体を確認した。本種については、これまで八重山諸島に留鳥として生息するとされるウスアカヒゲではなく、渡りを行っていると思われるナミアカヒゲと思われた。したがって、波照間島は留鳥の生息地であるとともに、冬鳥や旅鳥にとって一時的な生息地を提供してくれる重要な地域

表3 定点メッシュ調査 (集計1)

調査期日	98/02/24	98/02/24	98/02/24	98/02/24	98/02/25
調査地名	名石集落前溜池	星座観測センター	星座観測センター西	名石・南集落	空港西
調査メッシュ	39230661	36230653	362306-52	39230662	36230663
調査時間	12:30-13:00	14:00-14:30	14:45-15-15	7:35-8:05	8:20-8:50
調査天気	小雨	小雨	小雨	曇り	くもり
調査環境	ため池・住宅地	草原・ギンネム林	放牧地・農耕地	広葉樹林・集落	ギンネム林
	農耕地・屋敷林	放牧地・海岸	ギンネム林	屋敷林・ドリネ	農耕地
種名	個体数	個体数	個体数	個体数	個体数
シカシ	15			1	1
ヒヨドリ	2	1	1	5	4
キジバト	2	2	5	2	2
スズメ	5				
メジロ	2		2	7	4
アカモズ	1				
クビナ	4				
ツバメ	1	8	2		
イソギ	1				
コガモ	12				
ヒバリ	1				
コトドリ	1				
タシ	1				
カイツブリ	3				
ツバメチドリ		2	2		
セッカ		3	3	1	6
ムナグロ		21			11
シロドリ		3			
マジロクビナ		6			
オサハシブトガラス		5	1	4	
アマギ			2		
コギ			1		
シハラ				1	1
シハラカケ				1	
アヒゲ				1	
サシ					1
ウグイス					1
キマユシイ					
チュウギ					
タケリ					
ツバメチドリ					
アサギ					
タシギ					
クロギ					
バン					
ホトトギス					
個体数合計	51	51	18	23	31
種数	14	9	9	9	9

表3 定点メッシュ調査 (集計2)

調査期日	98/02/25	98/02/25	98/02/25	98/02/25	98/02/25
調査地名	空港	空港南	富嘉の南	富嘉の南西	毛原岬
調査メッシュ	36230664	362306-54	362306-51	362306-50	362306-60
調査時間	10:45-11:15	11:20-11:50	12:30-13:00	13:30-14:00	14:03-14:33
調査天気	くもり	くもり	くもり	くもり	くもり
調査環境	草地・農耕地	アダン林・海岸	ギンネム林	農耕地・アダン林	ギンネム林
	海岸林	草原・放牧地	牧草地・溜池	ギンネム林	海岸・農耕地
種名	個体数	個体数	個体数	個体数	個体数
シガシガ	4				1
ヒヨドリ	3	1	2		2
キジバト	6	1	2	2	
スズメ					1
メジロ	1	1	6	1	2
アカモズ					1
タヒバリ					
ツバメ		2			1
イソギ					2
コガモ					
キキレイ					
コチドリ					
タシギ					
カイツブリ					
ツバメチドリ					
セッカ	6	5	1	1	
ムナグロ					
シロチドリ					
マミシロタヒバリ					
オサハシブトガラス	2		3		
アマギ			1		
コギ			1		
シロハラ					
シロハラクイ					
アカヒゲ					
ザンバ					1
ウグイス	1	1			
キマユシクイ			1		
チュウギ			2		
タケリ			1		
ツバメチドリ			1		
アオギ			3		
グイギ			1		
クロギ			1		
バン					
メボロムシクイ					
個体数合計	23	11	26	4	11
種数	7	6	14	3	8

表3 定点メッシュ調査 (集計3)

調査期日	98/02/25	98/02/25	98/02/25	
調査地名	波照間港	ブリヂ公園	シムカ	
調査メッシュ	362306-71	362306-72	362306-73	
調査時間	14:35-15:05	15:08-15:38	15:40-16:10	
調査天気	くもり	くもり	曇り	
調査環境	ギンネム林・港	広葉樹林・公園	農耕地・ため池	
	海岸林	ため池・海岸林	ギンネム林	
種名	個体数	個体数	個体数	総個体数
シガシ	1			23
ヒドリ	1	1		22
キジバト			1	25
スズメ	2			8
メジロ	5		1	32
アカモズ				2
タヒバリ				4
ツバメ	1		11	26
イソギ			1	4
コガモ				12
キセキレイ				1
コチドリ				1
タシギ				1
カイツブリ				3
ツバメチドリ				4
セッカ		1		27
ムナグロ				32
シロチドリ				3
マミジロタヒバリ				6
オサハシトカラス	10	7	21	53
アマサギ				3
コサギ				2
シロハラ		1	1	4
シロハラクイナ				1
アカヒゲ				1
サシバ		1		3
ウグイス				3
キマユシクイ				1
チュウサギ		1		3
タケリ				1
ツバメチドリ				1
アオサギ	4			7
ダイサギ				1
クロサギ				1
バン		3		3
メボロシクイ			1	1
個体数合計	24	15	37	325
種数	7	7	7	7.3

となっていることが示唆される。

3. 波照間島で記録された貴重種

ここで扱う貴重種の範疇は、①琉球列島の固有種、②天然記念物などの保護すべき種、③環境庁編（1991）による「日本の絶滅のおそれのある野生生物」（日本版レッドデータブック、NRDBと略す）の掲載種や沖縄県自然保護課編（1996）による「沖縄の絶滅のおそれのある野生生物」（沖縄版レッドデータブック、ORDBと略す）の掲載されている種をその範囲とした。波照間島で記録されている鳥類の中で該当する種は、表4に示したとおり17種であった。その中で主な鳥類についての生息概要や確認状況について、以下に述べる。

(1) アカヒゲ (*Erithacus komadori*)

国の天然記念物で琉球列島固有種のナミアカヒゲと思われる1個体が、1996年10月に電力会社の窓ガラスに衝突して保護された。また、1998年2月の定点メッシュ調査では、南集落と名石集落との間にある大底御嶽の林内で囀っている1個体を確認した。本種は環境庁編（1991）の「日本の絶滅のおそれのある野生生物」では「危急種」として掲載されている貴重種である。本個体は脇に黒帯がでることから沖縄産と異なり、奄美諸島や男女群島に産するナミアカヒゲ *E. komadori komadori* と考えられた。川地ら（1989）は琉球列島北部に生息するアカヒゲが琉球列島南部に渡ることを確認し、これまで八重山諸島に生息しているとされるウスアカヒゲ *E. K. Subrufus* をナミアカヒゲのシノニムとする考えを提唱している。したがって、この考えにしたがうと今回波照間島で見つかったアカヒゲは、ナミアカヒゲの可能性が高いように見え、ナミアカヒゲの渡りを支持しているものと考えられた。

なお、本亜種の記録は、おそらく波照間島における初めての確認であろう。

(2) セイタカシギ (*Himantopus himantopus himantopus*)

県内では秋期や冬季に旅鳥もしくは冬鳥として渡来するが、波照間島では島内に設置された2カ所の溜池で最高5個体が確認された。本種は日本版レッドデータブック（環境庁編 1991）で希少種とされている種であり、波照間島からの初めての記録と思われる。波照間島にはシギ・チドリ類が渡来する湿地が少なく、農業用の溜池がかろうじて水辺の鳥類の生息地となっているので、本種も溜池でのみ確認された。

(3) チュウサギ (*Egretta intermedia intermedia*)

県内では秋期や冬季に旅鳥もしくは冬鳥として渡来し、牧草地や干潟などに生息する種

である。波照間島では島内に設置された溜池と島の南部にある牧草地や農耕地で目撃された。

(4) リュウキュウツミ (*Accipiter gularis iwasakii*)

ブリブチ公園近くの森林部や名石集落にある溜池のフェンスに止まっている個体が目撃された。おそらく本個体は八重山諸島に留鳥として生息する亜種リュウキュウツミであろうと思われた。

(5) カワセミ (*Alcedo atthis bangalensis*)

県内では留鳥として河川や池沼などに生息し、沖縄版レッドデータブック (沖縄県自然保護課編 1996) では希少種として扱われている。本種は島の南西部の溜池で亜成鳥1個体が目撃され、波照間島でも繁殖していることが裏付けられた。

(6) カイツブリ (*Podiceps ruficollis poggei*)

県内では留鳥として河川や池沼などに生息し、沖縄版レッドデータブック (沖縄県自然保護課編 1996) では希少種として扱われている。本種は島の北部の溜池で成鳥1個体が目撃された。おそらく、波照間島でも留鳥として生息しているのであろう。

(7) リュウキュウコノハズク (*Otus elegans elegans*)

集落周辺にある御嶽林や街路樹、農耕地の間にわずかに残る森林部で夜間鳴き声が聞か

表4. 波照間島で記録されている貴重種

種名	天然記念物	琉球列島固有種	NRDB			ORDB		
			絶滅危惧	危急	希少	絶滅危惧	危急	希小
ナミアカヒゲ	◎	◎	◎					◎
オオクイナ				◎			◎	
カイツブリ								◎
ツバメチドリ					◎			◎
カツオドリ								◎
チュウサギ					◎			◎
ミサゴ				◎			◎	
リュウキュウツミ				◎			◎	
ミフウズラ								◎
シロチドリ								◎
アカアシシギ						◎		◎
セイタカシギ						◎		◎
エリグロアジサシ						◎		◎
ベニアジサシ						◎		◎
ヤツガシラ								◎
カワセミ								◎
リュウキュウコノハズク								◎

4. 波照間島の鳥類の方言名

今回の調査で収集された野鳥の方言名については、表5に示したように該当する種が不明な方言名やサギ類やウ類などのようにグループを総称する方言名、同じ種であるが鳴き声により2つの呼び名を持つウグイスやアオバズクなどを含めて38個の方言名が得られた。その中には今回の現地調査で確認できなかった水辺に生息するリュウキュウヨシゴイやオオクイナ、ヒクイナ、カルガモと、森林地域に生息するズアカアオバトなど5種が含まれている。しかしながら、オオクイナとカルガモについては聞き取り調査での生息確認がされた。したがって、リュウキュウヨシゴイやヒクイナなどは水田や湿地など水辺に生息する種であるので、水田地域が全く見られない今日では、環境の変化に伴い個体数が減少していることが考えられる。また、同様に森林面積の減少に伴いズアカアオバトなど森林性の留鳥であるハト類も減少していることが考えられる。したがって、方言名から3種の未確認種が識別でき、潜在的な鳥類相を伺わせる資料が得られた。しかしながら、調査期間が短く、方言名については、鳥類に限定したものであり、しかも集落間の方言名等の差異を示した方言地図の作成までには至らなかった。天野(1981)は植物名については集落間の差異は見られなかったとしているので、野鳥の方言名でも差異は少ないものと思われるが、これは鳥類以外の生物方言名の収集と合わせて今後の調査課題であろう。

おそらく、鳥類以外にも動植物の方言名は残っているものと思われ、潜在的な自然を伺い知る貴重な資料として、今後とも収集しておく必要があるものと思われる。

以下に採集された方言名について、その由来等について検討を加えた。

4-1. 野鳥の方言名の由来について

1) 鳴き声に由来するもの

グワッグワッ [gwa?gwa?] のリュウキュウヨシゴイ、ヨータケのアオバズク、ヤマフチウリウ [jamafutsiri] のウグイス、ゴカル [gokaru] のアカショウビンなどがそれにあたる。ヨーガラシウ [jo:garasi] のゴイサギは、夕刻に姿も見えないのに「ガアー、ガアー」とカラスに似た声で一声づつ鳴いて飛び回ることから名付けられ、ファードウリウ [fa:duri] のオオクイナは赤ん坊の鳴き声に似ていることから名付けられている。

ウグイスについては「ホーホケキョ」と繁殖期のさえずりをウグイスとし、「チャ、チャ、チャ」と冬季の「地鳴き(笹鳴き)」を別の種類と考え、ヤマフチリ [jamafutsiri] としている。同様に、アオバズクは鳴き声の「ホウホウ、ホウホウ」をヨータケとし、アオバズクそのものをスククル [sukukuru] としているなど鳴き声と鳥体の不一致がみられるものもある。

2) 生態や生息地に由来するもの

ガヤブリヤ [gajaburja] のセッカ、ガヤクムリヤ [gajakumurja] のヒクイナ、タナクムリヤ [tānakumurja] のバンなどがそれにあたる。これらの種の主な生息地としてのススキ原や水田などに隠れてすむことからきているものと思われる。興味深いことにアンタグ [ʔantagu] と呼ばれるウ類は、魚を捕らえて頭からスムーズに丸のみするウ類の習性を持っている。このことから、子どもが小魚を食べるときに喉にかからないように「アンタグ、アンタグ」と言っておまじないとして使われている。子を思う親の気持ちが如実に表れている。

フキタガ [fukitaga] と呼ばれているタカは該当種がなく、種は不明であるが、名前の由来は遅れて渡ってくるタカ、あるいはのんびりとゆったりとはばたきながら飛ぶタカをさすものとされ、大型のタカである可能性がある。このことから一番考えやすいのは西表にすむカンムリワシが飛来してきて目撃されたか、あるいは森林面積が多く自然環境が良好であった時期には生息していて目撃された可能性が高い。

3) 色彩や形態に由来するもの

オーパト [ʔorpatō] のズアカアオパト、ダイバンドウリウ [daibandurī] のカツオドリ、アガヨーラ [ʔagajoɾa] のリュウキュウヨシゴイなどがそれにあたる。

アガヨーラ [ʔagajoɾa] のリュウキュウヨシゴイは赤いヨーラ（サギ）の意味である。ダイバンドウリウ [daibandurī] のカツオドリは、大型鳥の意であり、近海カツオ船がカツオの群を探す時に、その目標となる鳥群を構成するアジサシ類やミズナギドリ類などの海鳥に混じって、その中では目立って大型の海鳥であることに由来するものと思われる。おそらく、波照間島でカツオ漁が始まった頃（1910年代）に生まれた呼び名と考えられ、その起源は新しいものと思われる。カツオドリと同じようにセグロアジサシやベニアジサシなども「インドリ」（海鳥）であるが、尾羽がツバメのように特に切れ込んでいることからマタサ [matasa]（ツバメ）と呼ばれ、クロアジサシは色が黒いことからガリウシ [gariʃi]（カラス）と呼ばれて、漁師がカツオの群を探し出す重要な目印の鳥として名付けられたようである。

4) 渡来する時期からくるもの

ズグヤドリウ [dzugujadurī] のキセキレイ、ツメナガセキレイ、キセキレイなどがそれにあたる。ちょうどこれらのセキレイ類は県内には秋口に旅鳥として渡来してくるため、「ズグヤ」は、つまり「十五夜」のことで、中秋名月である十五夜の頃に見られることに由来しているものと思われる。

アカハラダカはタカマー [takamar] (小型のタカの意) とされ、タカ (サシバ) の前に渡ってくる小型のタカとして認識されている。県内でアカハラダカの渡りが確認されたのは、1980年の宮古島における観察記録が最初であるが、島の人たちは経験的にこのタカが琉球列島を渡っていたことを知っていたことが伺える。

5) 瑞鳥としての扱いから由来するもの

ユガドゥリウ [jugaduri] の白鷺類 (コサギ、チュウサギ、ダイサギ、アマサギなど) は、「ユガドリ」の転訛と考えられる。「ユガフ」、つまり白鷺類は五穀豊穡や果報をもたらすものとして認識されていることがわかる。

6) 古語 (古名) から転訛したと考えられるもの

シギ・チドリ類はまとめてシヌリ [sīnurī] と呼ばれているが、これは「チドリ」の古語からの転訛と考えられる。また、ハヤブサをさすペフチャ [pefutsa] は「ハヤブサ」の古語からの転訛だと思われる。しかしながら、波照間島では留鳥と考えられるツミもこう呼ばれていることから、冬鳥のハヤブサと同じ種の扱いをしていて混同が見られる。

4-2. 波照間島における野鳥の方言名の言語学的な特徴について

波照間方言の音韻についての研究は、加治工 (1996) により詳細に報告されている。加治工 (1996) を元に今回採集された波照間方言の野鳥名に現われる発音の特徴を見てみると、一定の法則性が認められ、ほぼ次のようにまとめることができる。

(1) 奈良時中央語のス、ズ、ツの後の u 母音は、波照間方言ではイウ [i] に対応する。

(例: [garasi] カラス: 「可良須」万、3522.)

(2) 奈良時中央語のラ行イ段音は、波照間方言では、リウ [ri] に対応する。

(例: [turi] 鳥: 「等利〜」万、876.)

表5. 波照間島における野鳥の方言名
 話手：島村修（大正15年生・男・波照間島富嘉出身）

和名	方言名	音声表記	備考（由来、いわれ、注記等）
カツオドリ	ダイバンドウリウ	daibanduri	鰹漁が始まった頃に名付けられたと考えられる。「ダイパン」は大きいの意。
ウ類	アンタグ	?antagu	子どもに小魚などを食べさせるとき、喉にかからないように「アンタグ、アンタグ」とまじないのように言って食べさせた。「アンタグ」とはカワウとウミウの両方と呼ぶ。
リュウキュウヨシゴイ	アガヨーラ グワッグワツ	?agajo:ra gwa?gwa?	鳴き声から「グワッ、グワ」と付けた。ヨーラは五位の仲間、サンは鷺（サギ）の仲間の意。アガヨーラは赤いヨーラの意。
ゴイサギ	ヨーガラシウ	jo:garasi	夜ガラスの意で、不吉な鳥として嫌われる。
アマサギ	ソンサミヤ (ユガドウリウ)	sonsamja jugaduri	夏羽で頭部が赤褐色になったものを「ユガドリ」という（ユガフドリの転訛）。白鷺類（コサギ、チュウサギ、ダイサギ）も同様に「ユガドリ」という。
クロサギ	イナーサン	?ina:saŋ	海鷺（ウミサギ）の意。黒色型・白色型とも同じ呼称。
カルガモ	ガードウリウ	ga:duri	
コガモ	ピマンガードウリウ	p'i:maŋga:duri	ヒヨドリのように小型の鴨（カモ）の意。
ミサゴ	タンタグ	tantagu	
アカハラダカ	タカマー	ta:kama:	小型のタカの意。
ツミ	ペフチャ	pefu:ʃa	
サシバ	タカ	taka	越冬するサシバをさす。ウチダカ（落ちダカ）と同義。
チョウゲンボウ	マシウパン	masi:paŋ	パンは歯の意。
ハヤブサ	ペフチャ	pefu:ʃa	ツミとハヤブサを同じ種として混同している可能性がある。
不明	フキタガ	fukitaga	対応する種名が不明で、トビやカンムリワシ、チュウヒなどをそう呼んだ可能性がある。
ミフウズラ	ウジウラ	?udzira	
オオクイナ	ファードウリウ	fa:duri	鳴き声が赤んぼうの鳴き声ににている。

和名	方言名	音声表記	備考(由来、いわれ、注記等)
ヒクイナ	ガヤクムリヤ	gajakumurja	カヤ原の中にもっているの意。
バン	タナクムリヤ	tãnakumurja	水田の中にもっているの意。
シギ・チドリ類	シウヌリウ	sĩnurĩ	チドリの転訛。シギ・チドリ類は総称して「シウヌリウ」と呼んでいる。
アジサシ類	インドウリウ マタサ ガリウシウ	matasa garĩsĩ	海鳥の意。セグロアジサシ、ベニアジアシエリグロアジサシは特に「マタサ(ツバメの意)」と呼ばれ、クロアジサシは「ガリウシ(カラスの意)」と呼ばれる。カツオ漁に従事する人たちが付けた名前。
キジバト	パトン	patoŋ	
ズアカアオバト	オーバト	?oɔpato	波照間産はチュウダイズアカアオバト。
コノハズク	マシカク	maʃĩkaku	マヤスクグルの転訛。マヤはネコの意。
アオバズク	スククル ヨータケ	sũkukuru	夜の鳴き声(ホウホウ)を「ヨータケ」と言う。鳴き声は別の種類と考えたらしい。
アカショウビン	ゴカル	gokaru	
ツバメ	マタサ	matasa	
セキレイ類	ズグヤドリウ	dzugujadurĩ	中秋の十五夜頃に渡来してくるためその名がついた。外にツメナガセキレイやハクセキレイ、キセキレイも同様の呼び名。
ヒヨドリ	ピマン	pĩmaŋ	波照間産はイシガキヒヨドリ。
ウグイス	ウグイス ヤマフチウリウ	jamafutsĩrĩ	囀りは「ウグイス」、地鳴き(笹鳴き)は「ヤマフチウリウ」と呼び、それぞれ別の種類と考えたらしい。
セッカ	ガヤブリヤ	gajaburja	カヤ原の中にいるものの意。
メジロ	フナドリウ	funadurĩ	
スズメ	ミシュドウリウ	miʃudurĩ	
コムクドリ	ジンフナドリウ	dzinfunadurĩ	
オサハシブトガラス	ガリウシ	garĩʃi	

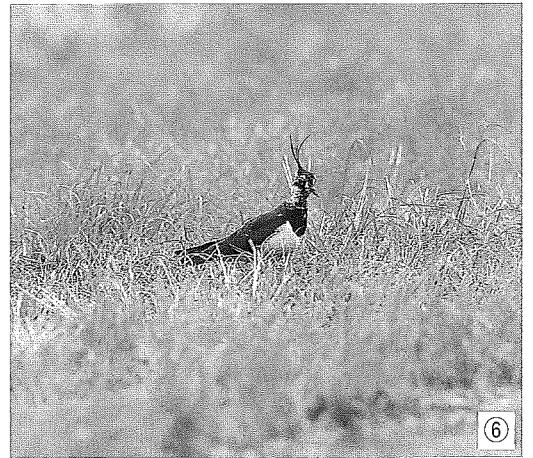
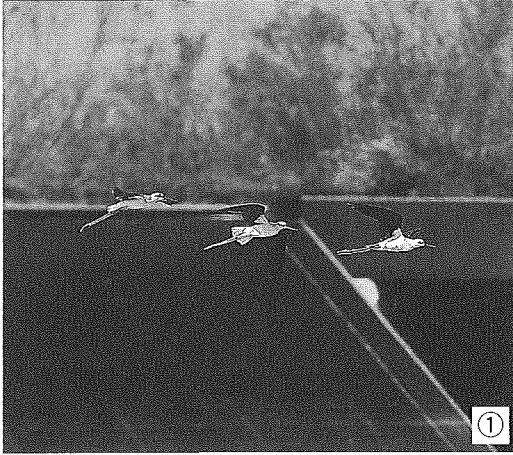
<要約>

1. 1996年から1998年の足掛け3カ年間に3回にわたり波照間島で鳥類調査を行い、59種の鳥類を記録し、暫定的にこれまでの鳥類記録をまとめ、77種の鳥類目録作成を試みた。
2. 観察された鳥類の中には、エリマキシギ、セイタカシギ、タゲリ、ツバメチドリ、アカヒゲなど36種の鳥類が波照間島における初めての記録と思われた。
3. 鳥類と島の人々との関わりや潜在的な自然を知るため野鳥の方言名調査を実施し、38種の方言名を採集して、その方言名の由来や言語学的転訛について若干の考察を試みた。

<引用文献>

- 天野鉄夫 1979. 琉球列島植物方言集. 新星図書出版. 303pp.
- 天野鉄夫 1981. 先島群島の主要御嶽の植物方言名. 沖縄県社寺・御嶽林調査報告VI, 沖縄県天然記念物調査シリーズ第21集. 283-316. 沖縄県教育委員会.
- 琉球新報社編 1983. 奄美・沖縄鳥類目録, 写真集沖縄の野鳥; 誠文堂新光社. 54-62.
- 川路則友・樋口広芳 1989. アカヒゲ *Eritacus komanori* の分布ならびに亜種の問題について. 昭和63年度環境庁委託調査. 71-88. 環境庁.
- 木崎甲子郎 1985. 琉球弧の地質誌. 沖縄タイムス. 278pp.
- 加治工真市 1996. 波照間方言の音韻研究. 法政大学沖縄文化研究所紀要. 沖縄文化研究(22) 137-181
- 野原三義・宮城邦治 1988. 加計呂麻島の動物方言語彙. 地域研究シリーズNO.11. 鹿児島県大島郡瀬戸内町調査報告書(2). 沖縄国際大学南島文化研究所. 125pp.
- 新納義馬 1981. 竹富町波照間の御嶽林. 沖縄県社寺・御嶽林調査報告IV. 247-267. 沖縄県教育委員会
- 宮城邦治 1982. 波照間島の植生概観と動物相. 地域研究シリーズNO.3. 波照間島調査報告書. 沖縄国際大学南島文化研究所.
- 中村一恵・花輪伸一 1987. 琉球諸島産シロガシラの分類と分布変遷. 昭和61年度環境庁委託調査, 特殊鳥類調査(ノグチゲラ・ヤエヤマシロガシラ). 日本野鳥の会: 39-58.
- 日本鳥学会目録編集委員会編 1997. 日本産鳥類リスト. 日本鳥学会誌(46) 1: 59-91.
- 嵩原建二 1993. 波照間島の鳥類と哺乳類. 沖縄県立博物館紀要第19号.
- 当山昌直 1987. 伊計島の動物の方言. 沖縄県立博物館総合調査報告書IV, 伊計島. 35-43.
- 当山昌直 1983. 阿嘉島の動物の方言について. 沖縄県立博物館調査報告書III, 座間味村. 23-29. 沖縄県立博物館.
- 当山昌直 1984. 浜比嘉島の動物方言. やちむん8. 53-61.
- Utida, T. 1969. Rat-control procedures on the Pacific islands, with special reference to the efficiency of biological control agents. II. Efficiency of the Japanese weasel, *Mustela sibirica itatsi* Temminck & Schlegel, as a rat-control agent in the Rryukyus.
- 八重山野鳥の会編 1983. 10周年記念誌. 八重山野鳥の会: 75pp.

PLATE



①：セイタカシギ
④：ウズラシギ

②：エリマキシギ
⑤：ツバメチドリ

③：カワセミ
⑥：タゲリ

波照間島の鳥類目録 (暫定)

カイツブリ目 PODICIPEDFORMES

カイツブリ科 PODICIPITIDAE

カイツブリ *Podiceps ruficollis poggei*

ペリカン目 PELECANIFORMES

ネットアイチョウ科 PHAETHONTIDAE

シラオネットアイチョウ *Phaethon lepturus dorotheae* ⁽¹⁾
(1996/5)

カツオドリ科 SULIDAE

カツオドリ *Sula leucogaster plotus*

コウノトリ目 CICONIIFORMES

サギ科 ARDEIDAE

ゴイサギ *Nycticorax nycticorax nycticorax*

ササゴイ *Butorides striotus amurensis*

アマサギ *Bubulcus ibis coromandus*

ダイサギ *Egretta alba modesta*

チュウサギ *Egretta intermedia intermedia*

コサギ *Egretta garzetta garzetta*

クロサギ *Egretta sacra sacra*

アオサギ *Ardea cinerea jouyi*

カモ目 ANSERIFORMES

カモ科 ANATIDAE

カルガモ *Anas poecilorhyncha zonorhyncha*

コガモ *Anas crecca crecca*

ハシビロガモ *Anas clypeata*

タカ目 FALCONIFORMES

タカ科 ACCIPITRIDAE

ミサゴ *Pandion haliaetus haliaetus*

アカハラダカ *Accipiter soloensis*

リュウキュウツミ *Accipiter gularis iwasakii*

サシバ *Butastur indicus*

ハヤブサ科 FALCONIDAE

チョウゲンボウ *Falco tinnuncius innterstinctus*

ツル目 GRUIFORMES

ミフウズラ科 TURNICIDAE

ミフウズラ *Turnix suscitator okinavensis*

クイナ科 RALLIDAE

- オオクイナ *Rallina eurizonoides sepiaria* ⁽¹⁾
シロハラクイナ *Amaurornis phoenicurus chinensis*
バン *Gallinula chloropus indica*

チドリ目 CHARADRIIFORMES

チドリ科 CHARADRIIDAE

- コチドリ *Charadrius dubius curonicus*
シロチドリ *Charadrius alexandrinus nihonesis*
ムナグロ *Pluvialis fulva*
タゲリ *Vanellus vanellus*

シギ科 SCOLOPACIDAE

- キョウジョシギ *Arenaria interpres interpres*
ウズラシギ *Calidris acuminata*
エリマキシギ *Philomachus pugnax*
アカアシシギ *Tringa totanus ussuriensis*
アオアシシギ *Tringa nebularia*
クサシギ *Tringa ochropus*
タカブシギ *Tringa glareola*
イソシギ *Tringa hypoleucos*
キアシシギ *Tringa brevipes*
タシギ *Gallinago gallinago gallinago*

セイタカシギ科 RECURVIROSTRIDAE

- セイタカシギ *Himantopus himantopus himantopus*

ツバメチドリ科 GLAREOLIDAE

- ツバメチドリ *Glareola maldivarum*

カモメ科 LARIDAE

- クロハラアジサシ *Sterna hybrida javanicus*
ベニアジサシ *Sterna dogallii bangsi*
エリグロアジサシ *Sterna sumatrana*
クロアジサシ *Anous stolidus pileatus*

ハト目 COLUMBIFORMES

ハト科 COLUMBIDAE MONARCHINAE

- リュウキュウキジバト *Streptopelia orientalis stimpsoni*
チュウダイズアカアオバト *Sphenurus formosae medioximus*

カッコウ目 CUCULIFORMES

カッコウ科 CUCULIDAE

- ホトトギス *Cuculus poliocephalus poliocephalus* ⁽¹⁾
-

フクロウ目 STRIGIFORMES

フクロウ科 STRIGIDAE

リュウキュウコノハズク *Otus elegans elegans*

リュウキュウアオバズク *Ninox scutulata totogo*

ブッポウソウ目 CORACIIFORMES

ヤツガシラ科 UPUPIDAE

ヤツガシラ *Upupa epops saturata* ⁽²⁾

カワセミ科 ALCEDINIDAE

アカショウビン *Halcyon coromanda*

カワセミ *Alcedo atthis bangalensis*

スズメ目 PASSERIFORMES

ツバメ科 HIRUNDINIDAE

ツバメ *Hirundo rustica gutturalis*

セキレイ科 MOTACILLIDAE

ツメナガセキレイ *Motacilla flava taivana*

キセキレイ *Motacilla cinerea robusta*

ハクセキレイ *Motacilla alba lugens*

マミジロタヒバリ *Anthus novaeseelandiae sinensis*

ムネアカタヒバリ *Anthus cervinus*

タヒバリ *Anthus spinoletta japonicus*

ヒヨドリ科 PYCNONOTIDAE

タイワンヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis amaurotis*

シロガシラ *Pycnonotus sinensis*

モズ科 LANIIDAE

シマアカモズ *Lanius cristatus lucionensis*

ツグミ科 TURDINAE

ナミアカヒゲ *Erithacus komadori komadori*

* 沖縄電力波照間営業所で保護 (1996/10/3)

ノゴマ *Erithacus calliope*

イソヒヨドリ *Monticola solitarius philippensis*

トラツグミ *Zoothera dauma aurea*

アカハラ *Turdus chrysolaus chrysolaus*

シロハラ *Turdus pallidus*

マミチャジナイ *Turdus obscurus*

ウグイス科 SYLVIINAE

ウグイス *Cettia diphone cantans*

キマユムシクイ *Phylloscopus inornatus inornatus*

メボソムシクイ *Phylloscopus borealis*

*波照間中学校で保護 (1996/10/21)

セッカ *Cisticola juncidis bruniceps*

カササギヒタキ科

サンコウチョウ *Terpsiphone atrocaudata atrocaudata*

*波照間中学校で保護 (1997/9/3)

メジロ科 ZOSTEROPIDAE

リュウキュウメジロ *Zosterops japonica loochooensis*

ハタオリドリ科 PLOCEIDAE

スズメ *Passer montanus saturatus*

ムクドリ科 STURNIDAE

コムクドリ *Sturnus philippensis* ⁽²⁾

カラス科 CORVIDAE

オサハシブトガラス *Corvus macrorhynchos japonensis*

- 備考：1. 本目録の種名の扱いや順序については、日本鳥学会目録編集委員会 (1997) によった。
2. 目録は宮城 (1982)、嵩原 (1993) および今回の調査結果をまとめて作成した。
3. 現地調査は1996年8月21日から8月26日までの7日間と1997年9月3日から5日までの3日間、1998年2月24日から2月25日の2日間の合計11日である。
4. (1) は西里私信、(2) は金城私信。

波照間島の鳥類調査

Birds Investigation Report in Hateruma Is., Yaeyama Islands, Okinawa Pref.

与那城 義 春

Yoshiharu YONASHIRO

はじめに

今回の総合調査は平成8年度から平成9年度にかけて八重山郡竹富町の波照間島で実施した。

波照間島は琉球列島の最南端（北緯24° 02' 25"、東経123° 47' 16"）に位置し、石垣港の南西方向約46kmの海洋上に存在する。島の面積は約12km²であり、東西方向に細長く、ほぼ楕円形を呈している。この島の地質は島域の大部分を石灰岩で形成され、その最下位に青灰色の泥岩から成る島尻層が広範囲に分布するとされている。

波照間島の鳥類生息地は各地に成育している常緑広葉樹林をはじめ、農耕地域（草原等も含む）、農業用貯水池、集落地域、海岸・海洋等に大別される。近海には海水面から突出している大小の岩塊が散見される。渡りの季節になると、エリグロアジサシ等の海洋性鳥類が島の西側近海に散在する岩上に飛来し、休息場所等に利用している。

1. 調査地の概況

波照間島の中央部は集落地域であり、各屋敷の周辺等に多数のフクギやテリハボク等の樹木が成育し、防風林を形成している。そのほか、屋敷の内外にはリュウキュウコクタン、アコウ、ガジュマル等が成育している。また、島内の御嶽・拝所周辺や農耕地付近、海岸近辺にも常緑広葉樹林が発達している。

この島の大部分を占める農耕地域は主に甘蔗畑として活用されているが、その地域内の6～7箇所に農業用貯水池が造成されている。また、農耕地域内には狭小な草原や雑草地も散在する。

2. 調査方法

本調査は島内の鳥類生息地を常緑広葉樹林、農耕地・草原、集落地域、農業用貯水池、海岸・海洋に大別し、可能な限り各調査地を踏査した。但し、海洋の鳥類調査は海岸地域の踏査時に、海岸から海洋上を眺望しながら飛翔中の個体群のほか、海面から突出している岩上の海鳥類も観察記録した。

調査中、鳥種の識別は鳥体の目撃や鳴き声に基づいて実施したが、必要に応じて双眼鏡（8×30）も使用した。

なお、波照間島の鳥類調査期日は下記の通りである。

1996（平成8）年8月22～24日、1997（平成9）年9月4～6日

3. 結果と考察

波照間島の鳥類調査結果は表1に示されている通りであり、調査期間中に観察確認されている鳥類は41種である。

表1. 鳥類の調査結果 ○印：1996年8月22日～24日の確認種／◎印：1997年9月4日～6日の確認種

種名	生息地	常緑 広葉樹林	農耕地 草原	集落地域	農業用 貯水池	海岸・海洋
カイツブリ <i>Podiceps ruficollis</i>					○	
アマサギ <i>Bubulcus ibis</i>			○ ◎			
コサギ <i>Egretta garzetta</i>					○ ◎	
クロサギ <i>Egretta sacra</i>					○	◎
ツミ <i>Accipiter gularis</i>					○	
ミフウズラ <i>Turnix suscitator</i>			○			
シロハラクイナ <i>Amaurornis phoenicurus</i>					○	
バン <i>Gallinula chloropus</i>					○	
コチドリ <i>Charadrius dubius</i>						◎
シロチドリ <i>Charadrius alexandrinus</i>						◎
ムナグロ <i>Pluvialis dominica</i>			○ ◎		○ ◎	
ダイゼン <i>Pluvialis squatarola</i>			◎			
トウネン <i>Calidris ruficollis</i>						◎
ヒバリシギ <i>Calidris minutilla</i>						◎
ウズラシギ <i>Calidris acuminata</i>						◎
オバシギ <i>Calidris tenuirostris</i>						◎
アオアシシギ <i>Tringa nebularia</i>						◎
タカブシギ <i>Tringa glareola</i>					○ ◎	
キアシシギ <i>Tringa brevipes</i>						◎
イソシギ <i>Tringa hypoleucos</i>					○ ◎	◎
タシギ <i>Gallinago gallinago</i>				◎	◎	
オオジシギ <i>Gallinago hardwickii</i>					◎	
セイタカシギ <i>Himantopus himantopus</i>					○ ◎	
エリグロアジサシ <i>Sterna sumatrana</i>						○ ◎
コアジサシ <i>Sterna albifrons</i>					◎	
キジバト <i>Streptopelia orientalis</i>		○ ◎	○ ◎	○		
コノハズク <i>Otus scops</i>		○				
アオバズク <i>Ninox scutulata</i>				○		
ツバメ <i>Hirundo rustica</i>			○ ◎	○ ◎	◎	
ツメナガセキレイ <i>Motacilla flava</i>			◎	◎	◎	◎
キセキレイ <i>Motacilla cinerea</i>			○ ◎	◎	◎	
ハクセキレイ <i>Motacilla alba</i>			◎		◎	
シロガシラ <i>Pycnonotus sinensis</i>		○ ◎		○ ◎		
ヒヨドリ <i>Hypsipetes amaurotis</i>		○ ◎		○ ◎		
アカモズ <i>Lanius cristatus</i>		○ ◎	○	○ ◎		
イソヒヨドリ <i>Monticola solitarius</i>						○
メボソムシクイ <i>Phylloscopus borealis</i>			◎			
セッカ <i>Cisticola juncidis</i>			○ ◎			
メジロ <i>Zosterops japonica</i>		○ ◎		○ ◎		
スズメ <i>Passer montanus</i>			○ ◎	○ ◎		
ハシブトガラス <i>Corvus macrorhynchos</i>		○ ◎	○ ◎	○ ◎		
計 (41種)		7種	14種	12種	25種	5種

表1より生息環境別に見ると、常緑広葉樹林では7種の鳥類が観察記録されている。その内訳を見ると、キジバト、コノハズク、シロガシラ、ヒヨドリ、メジロ、ハシブトガラスの6種は、本県内分布地域の生息実態から推測すると波照間島でも概ね留鳥であろう。

アカモズは島内の林縁付近に生息している渡り鳥であるが、各地域に飛来して採餌する本種は常に単独行動であった。

農耕地・草原では14種の鳥類が観察記録されている。その内訳を見ると、留鳥はミフウズラ、キジバト、セッカ、スズメ、ハシブトガラスの5種である。このうち、ミフウズラ、セッカの2種は農耕地・草原に周年生息している草原性鳥類である。スズメは主に農耕地域と集落地域を往来し、両地域を採餌場所や孵場所として巧妙に利用しているようである。キジバト、ハシブトガラスの2種は森林性鳥類であるが、採餌のために樹林付近の耕作地内にも飛来していた。



耕作地で採餌中のハシブトガラス

渡り鳥はアマサギ、ムナグロ、ダイゼン、ツバメ、ツメナガセキレイ、キセキレイ、ハクセキレイ、アカモズおよびメボソムシクイを含めて9種である。アマサギの個体群（9羽）は農耕地域にある牧場のほか、その周辺の甘蔗畑付近や雑草地で観察された。チドリ類のムナグロ（3羽）、ダイゼン（2羽）が耕作地で観察されたが、両種ともじっと休息していた。また、海岸付近の芝生地域では採餌中のムナグロ個体群（23羽）が観察記録された。ツバメの個体群（15羽）は主に農耕地域の上空を飛行しているが、付近の電線上で休息中の少数個体（2羽）もいた。セキレイ類のツメナガセキレイの個体群（17羽）、キセキレイ（3羽）、ハクセキレイ（2羽）は各種類毎に行動し、島内各地の耕作地等で採餌していた。単独行動のアカモズは農耕地域の草原に散在するギンネム群落等の樹上や甘蔗畑付近で観察された。また、キマユムシクイ（1羽）が西側の農耕地域に成育しているギンネムの樹枝上で観察確認された。本種は採餌のためにギンネムの枝から枝へと移動していた。

集落地域では12種の鳥類が観察記録されている。その内訳を見ると、留鳥はキジバト、シロガシラ、ヒヨドリ、メジロ、スズメ、ハシブトガラスの6種であり、スズメ以外の5種は森林性鳥類である。

集落地域の家屋周辺にはフクギ、テリハボク、ガジュマル、アコウ等の樹木が成育し、防風林が形成されている。森林性鳥類の中で特にヒヨドリ、メジロ、ハシブトガラスの3種は採餌のために各種類別の少数個体群で集落地域の防風林に飛来していた。

公民館付近のガジュマル等にシロガシラの少数個体群が時々飛来し、その果実を採食していた。スズメの少数個体群は屋敷内の樹木や屋根等に飛来したり、採餌のために公民館前の広場にある芝生地域にも時々飛来していた。キジバトは集落地域内に散在する野菜畑のほか人家の庭にも殆ど単独で飛来し、採餌していた。

集落地域で観察された渡り鳥はタシギ、ツバメ、ツメナガセキレイ、キセキレイ、アカモズの5種である。タシギ(1羽)は9月6日の午前10時50分頃、公民館前の広場の雑草地に飛来したが、直ちに飛去してしまった。ツバメの個体群は主に集落地域の上空を飛翔しているが、家屋付近の電線に止まっている少数個体群(5羽)も観察された。ツメナガセキレイとキセキレイは集落地域の野菜畑に各種別の少数個体群で飛来し、採餌していた。また、小学校の校庭や幼稚園内の芝生地でも採餌のために飛来しているツメナガセキレイの少数個体群が観察された。

夜間調査(1996年8月22日)の時、アオバズク(1羽)が集落地域の樹枝上で観察された。このアオバズクはその樹木付近の街灯に集まって来る昆虫類を捕食するためにじっとしているようであった。本種の亜種アオバズク *Ninox scutulata japonica* は日本各地に夏鳥として渡来し、平地や山地の森林に生息して繁殖する。また、琉球列島には別亜種リュウキウアオバズク *N. s. togo* も留鳥として生息し、繁殖している。ところが、今回の調査で波照間島から記録されているアオバズクの生息実態は殆ど究明されていない状況であり、野外観察1回だけによる両亜種の識別は困難である。従って、集落地域の樹枝上で観察されているアオバズクは移動の観点から留鳥と渡り鳥のうち、いずれに所属するか不明である。

農業用貯水池では25種の鳥類が観察記録されている。その内訳を見ると、留鳥はカイツブリ、クロサギ、ツミ、シロハラクイナ、バンの5種である。このうち、カイツブリ、シロハラクイナ、バンの3種は農耕地域の貯水池を主生息場所に行っているようである。通常、海岸地域に生息しているクロサギが庸原の農業用貯水池で観察された。多分、本種は採餌のために生息地の海岸から飛来したのであろう。また、ツミは庸原の農業用貯水池周辺のフェンスに止まって獲物を狙ったり、上空を飛翔したりしていた。

農業用貯水池で観察記録された渡り鳥はシギ類11種(トウネン、ヒバリシギ、ウズラシギ、オバシギ、アオアシシギ、タカブシギ、キアシシギ、イソシギ、タシギ、オオジシギ、セイタカシギ)のほか、チドリ類3種(コチドリ、シ



庸原の農業用貯水池に飛来したセイタカシギ

ロチドリ、ムナグロ)、セキレイ類3種(ツメナガセキレイ、キセキレイ、ハクセキレイ)のほか、コサギ、コアジサシ、ツバメを含めて20種である。

集落地域付近で南西側に在る庸原の農業用貯水池は最も大型であり、その貯水池の一部で北東側周辺に隣接する狭小な湿地がある。渡りの時季になると、その湿地域に多種多様な湿地性鳥類が渡来し、採餌場所および休息場所として利用しているようである。

海岸・海洋では5種の鳥類が観察記録されている。その内訳を見ると、留鳥はクロサギ、イソヒヨドリの2種であり、主な生息場所は両種とも海岸地域である。クロサギは採餌のために海岸以外の場所にも時々飛来している。しかし、イソヒヨドリは雄1羽を海岸地域で1回だけ観察したが、他の場所では未確認である。

渡り鳥はイソシギ、エリグロアジサシ、ツメナガセキレイの3種である。このうち、イソシギ(3羽)とツメナガセキレイ(4羽)の2種は西海岸のハマシタン(ミズガンピ)群落付近の砂浜で観察された。エリグロアジサシ(6羽)は西側の近海で海面から突出している岩上に飛来して休息したり、その周辺海域の上空を飛翔していた。

4. 要約

今回の総合調査で波照間島から記録された鳥類は8日19科28属41種である。その内訳を見ると、留鳥は15種(36.6%)であり、渡り鳥が大半の25種(61.0%)占め、1種(2.4%)は所属不明である。

本調査は鳥類の生息地を常緑広葉樹林のほか、農耕地・草原、集落地域、農業用貯水池、および海岸・海洋に大別して実施した。

この生息環境別調査で最も多種類の鳥類を観察記録した生息地域は農業用貯水池の25種であった。このうち、留鳥は5種であり、渡り鳥が大半の20種を占めている。留鳥の記録はカイツブリ、クロサギ、ツミ、シロハラクイナ、バンの5種であった。渡り鳥20種のうち、シギ類が11種(トウネン、ヒバリシギ、ウズラシギ、オバシギ、アオアシシギ、タカブシギ、キアシシギ、イソシギ、タシギ、オオジシギ、セイタカシギ)の記録であり、チドリ類3種(コチドリ、シロチドリ、ムナグロ)、セキレイ類3種(ツメナガセキレイ、キセキレイ、ハクセキレイ)のほか、コサギ、コアジサシ、ツバメも観察されている。渡りの時季になると、多種多様な渡り鳥が特に庸原の大型農業用貯水池の一部として北東側周辺に隣接している狭小な湿地域に渡来し、採餌場所等として利用しているようである。

二番目に多種類の鳥類を記録した生息地域は農耕地・草原であり、留鳥5種と渡り鳥9種の計14種の鳥類が観察確認されている。留鳥の5種はミフウズラ、キジバト、セッカ、スズメ、ハシブトガラスであり、渡り鳥の9種はアマサギ、ムナグロ、ダイゼン、ツバメ、ツメナガセキレイ、キセキレイ、ハクセキレイ、アカモズ、メボソムシクイである。

集落地域の鳥類は12種の記録であり、三番目に種類数の多い生息地域である。そのうち、留鳥はキジバト、シロガシラ、ヒヨドリ、メジロ、スズメ、ハシブトガラスの6種であり、渡り鳥はタシギ、ツバメ、ツメナガセキレイ、キセキレイ、アカモズの5種である。なお、夜間調査時に観察されているアオバズクは留鳥と渡り鳥のうちで、いずれに所属するか不明である。その理由として、本種の亜種アオバズク *Ninox scutulata japonica* は日本各地に夏鳥として渡来し、繁殖する。また、琉球列島には別亜種 リュウキュウアオバズク *N. s. totego* も留鳥として生息し、繁殖している。しかし、波照間島のアオバズクの生息実態はこれまでに殆ど究明されてないため、野外観察1回だけで両亜種の識別は困難な状況である。結局、今回のアオバズクは定着性と移動性のうち、どちらの個体であるか不明瞭であるため、所属不明種として取り扱うことにした。

四番目に鳥類の種類数を多く記録した生息地域は常緑広葉樹林内であり、7種の鳥類が観察確認されている。そのうち、留鳥はキジバト、コノハズク、シロガシラ、ヒヨドリ、メジロ、ハシブトガラスの6種あり、渡り鳥はアカモズ1種のみである。

海岸・海洋の鳥類は5種の記録であり、最も種類数の少ない生息地域であった。そのうち、クロサギ、イソヒヨドリの留鳥2種が海岸で観察記録された。また、渡り鳥のイソシギ、ツメナガセキレイの2種が海岸で、エリグロアジサシの1種が近海の上空や岩上で、それぞれ観察確認された。

波照間島の鳥類リスト

カイツブリ目 PODICIPEDIFORMES

カイツブリ科 PODICIPITIDAE

カイツブリ *Podiceps ruficollis* (Pallas)

コウノトリ目 CICONIIFORMES

サギ科 ARDEIDAE

アマサギ *Bubulcus ibis* (Linnaeus)

コサギ *Egretta garzetta* (Linnaeus)

クロサギ *Egretta sacra* (Gmelin)

ワシタカ目 FALCONIFORMES

ワシタカ科 ACCIPITRIDAE

ツミ *Accipiter gularis* (Temminck & Schlegel)

ツル目 GRUIFORMES

ミフウズラ科 TURNICIDAE

ミフウズラ *Turnix suscitator* (Gmelin)

クイナ科 RALLIDAE

シロハラクイナ *Amauornis phoenicurus* (Pennant)

バン *Gallinula chloropus* (Linnaeus)

チドリ目 CHARADRIIFORMES

チドリ科 CHARADRIIDAE

コチドリ *Charadrius dubius* Scopoli

シロチドリ *Charadrius alexandrinus* Linnaeus

ムナグロ *Pluvialis dominica* (Müller)

ダイゼン *Pluvialis squatarola* (Linnaeus)

シギ科 SCOLOPACIDAE

トウネン *Calidris ruficollis* (Pallas)

ヒバリシギ *Calidris minutilla* (Vieillot)

ウズラシギ *Calidris acuminata* (Horsfield)

オバシギ *Calidris tenuirostris* (Horsfield)
アオアシシギ *Tringa nebularia* (Gunnerus)
タカブシギ *Tringa glareola* Linnaeus
キアシシギ *Tringa brevipes* (Vieillot)
イソシギ *Tringa hypoleucos* Linnaeus
タシギ *Gallinago gallinago* (Linnaeus)
オオジシギ *Gallinago hardwickii* (Gray)
 セイタカシギ科 RECURVIROSTRIDAE
セイタカシギ *Himantopus himantopus* (Linnaeus)
 カモメ科 LARIDAE
エリグロアジサシ *Sterna sumatrana* Raffles
コアジサシ *Sterna albifrons* Pallas

ハト目 COLUMBIFORMES

ハト科 COLUMBIDAE

キジバト *Streptopelia orientalis* (Latham)

フクロウ目 STRIGIFORMES

フクロウ科 STRIGIDAE

コノハズク *Otus scops* (Linnaeus)
アオバズク *Ninox scutulata* (Raffles)

スズメ目 PASSERIFORMES

ツバメ科 HIRUNDINIDAE

ツバメ *Hirundo rustica* Linnaeus

セキレイ科 MOTACILLIDAE

ツメナガセキレイ *Motacilla flava* Linnaeus
キセキレイ *Motacilla cinerea* Tunstall
ハクセキレイ *Motacilla alba* Linnaeus

ヒヨドリ科 PYCNONOTIDAE

シロガシラ *Pycnonotus sinensis* (Gmelin)
ヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis* (Temminck)

モズ科 LANIIDAE

アカモズ *Lanius cristatus* Linnaeus

ヒタキ科 MUSCICAPIDAE

ツグミ亜科 TURDINAE

イソヒヨドリ *Monticola solitarius* (Linnaeus)

ウグイス亜科 SYLVIINAE

メボソムシクイ *Phylloscopus borealis* (Blasius)

セッカ *Cisticola juncidis* (Rafinesque)

メジロ科 ZOSTEROPIDAE

メジロ *Zosterops japonica* Temminck & Schlegel

ハタオリドリ科 PLOCEIDAE

スズメ *Passer montanus* (Linnaeus)

カラス科 CORVIDAE

ハシブトカラス *Corvus macrorhynchos* Wagler

参考文献

- 日本鳥学会編, 1974. 日本鳥類目録. P.1-120. 学習研究社, 東京.
- 清 棲 幸 保, 1978. 日本鳥類大図鑑 I~II (贈改版). 講談社, 東京.
- 黒 田 長 禮, 1980. 新版 鳥類原色大図説 I~II. 講談社, 東京.
- 黒 田 長 久, 1982. 鳥類生態学. P.220-260. (株) 出版科学総合研究所, 東京.
- 木崎甲子郎編著, 1985. 琉球弧の地質誌. P.183-185. 沖縄タイムス社, 沖縄.
- 竹富町企画課編, 1997. 竹富町勢要覧. P.4. 竹富町役場, 沖縄.

波照間島の人骨調査

土 肥 直 美

1. はじめに

日本列島の最南端に位置する波照間島では約三千年前の下田原貝塚が発見されており、古くから人が住み着いていたことが確認されている。しかし、人骨についての情報が得られるのは、やっと12～13世紀になってからで、わずかに大泊浜貝塚等で発見された人骨の報告があるだけである。日本人の起源を解明するための重要な地域であるにもかかわらず、波照間島の人々の形質はほとんど分かっていないのが現状である。

今回、県立博物館の波照間島総合調査が企画され、願ってもない人骨調査の機会が与えられた。しかし、予備的に行った風葬墓調査では人骨の風化がひどく、形質的な調査は望めないのではないかとされた。ところが、その後、幸いなことに、庸原および毛原の二カ所において人骨調査を行うことができた。人骨の年代など不明な点も多いが、八重山では数少ない貴重な資料であるので、その概要を報告する。調査の経緯については別頁(P.137)を参照されたい。

1. 庸原第一墓

庸原第一墓人骨は土地改良地区内の岩陰で発見された風葬墓人骨で、四肢骨は比較的保存の良いものも見られたが、頭蓋骨はほとんど残っていなかった。調査は現地で行い、保存状態が比較的良く、情報量の多い大腿骨に焦点を絞って観察を行った。

表1は識別できた大腿骨の数を示しているが、表1から推定される被葬者の数は最少に見積もっても、男性が32名、女性が23名、計55名ということになる。しかし、保存状態が悪く識別できなかったものを含めると、実際にはもう少し多くなるはずである。墓の使用期間が分からないので墓の性格を推定することは難しいが、100年程度使われたとすれば、一世代当たり13～14人、200年使用されたとすれば、一世代当たり6～7人となり、いずれにしても数家族、あるいはいわゆる一族程度の規模で使われた墓ではないかと思われる。特記事項としては子供の骨がほとんど見られなかったことを記録しておきたい。

表1 庸原第一墓出土人骨

	男性	女性	計
右大腿骨	27	23	50
左大腿骨	32	21	53
推定個体数	32	23	55

II. 毛原第一墓

毛原第一墓は波照間港の西、ミシユク村跡近くに作られた仮の納骨施設で、周辺の砂丘から採砂の際に発見された人骨がビニール袋に入れて納められていた。人骨の保存状態も良好で詳しい分析に耐え得る願ってもない資料である。さらに、これらの人骨は地元のご理解によって琉球大学に借用し調査することが出来たので、今後の詳しい分析も可能である。

1) 資料

聞き取り調査によれば、採砂の際に出土した人骨はそのまま袋に入れたという。しかし、中には周辺の風葬墓から発見されたものが一部混入しているということだったので、明らかに風葬の人骨と思われるものを除外し、袋12個分を資料として借用した。これらの人骨は、いずれも保存状態が良好で、砂丘の埋葬人骨に特有の明るい色調のしっかりとした骨質を示した。さらに、骨の清掃作業の際に、いわゆる「星砂」が骨の中から検出されたことから推定すると、ほとんどの人骨は砂丘に埋葬されていたものと考えても良いように思われる。しかしながら、残念なことに、人骨の時代を特定できるような遺物はほとんど含まれておらず、わずかに外耳土器の小片が数点検出されただけである。これらの遺物の詳細については別頁 (P. 137) を参照されたい。

一般に沖縄では、砂丘から発見された人骨は異常な死に方をした人であるか、あるいは漂着者や外国人のものだといわれることが多い。毛原人骨についても地元では外国人ではないかと言われていたようであるが、これらの情報を確認するためにも、人骨調査の意義は大きいと思われる。

2) 人骨の構成

まず、便宜的に、袋ごとに人骨を整理し観察したところ、同一の袋に納められている人骨はほとんどが対をなしており、かなりの確率で同一個体のものが含まれている可能性が示唆された。しかし、明らかに対をなしている骨が別々の袋から検出されるという例もあったため、基本的には個体識別は出来ないものとして、骨の部位ごとに整理することにした。表2～3と図1～6は人骨の主要部位を袋ごとに整理した結果である。このほか、椎骨、肋骨、前腕骨、手足の骨など、ほぼ全身骨が含まれていたが、個体識別が困難であるため、今回は主要部位の報告のみに留めた。

図1～6・表2～3から明らかなように、毛原第一墓に納められていた人骨には、男女・子供が含まれている。これらの情報をまとめると表4のようになり、情報量の多かった四肢骨の数から推定される最小個体数は、男性13体、女性10体、不明6体(若年1体、乳幼小児5体)、計29体となった。

埋葬人骨の構成から推定すると、毛原第一墓に納められていた人骨は、少なくとも難破船からの漂着者ではない。各年齢層が含まれており、むしろ一般的な埋葬遺跡から出土す

る人骨群の構成に近いのではないだろうか。土器片が人骨に伴うものであったかどうかは確かでないが、八重山のグスク時代前後の人骨が砂丘から発見されている例などを考慮すると、毛原第一墓の人骨もグスク時代前後のものである可能性を否定できないように思われる。

表2 出土人骨の構成 (頭蓋骨より)

①	男性	女性	不明
右側頭骨	1		
左側頭骨	1		
右上顎骨	1		
左上顎骨	1	1	
下顎骨	1		

②	男性	女性	不明
右側頭骨	1	2	
左側頭骨	1	2	
右上顎骨	1	1	
左上顎骨	1	1	
下顎骨	1	1	1

③	男性	女性	不明
右側頭骨			1
左側頭骨			
右上顎骨			
左上顎骨			
下顎骨			

④	男性	女性	不明
右側頭骨			
左側頭骨	1		
右上顎骨	1		
左上顎骨	1		
下顎骨		1	

⑤	男性	女性	不明
右側頭骨			
左側頭骨		1	
右上顎骨		1	1
左上顎骨		2	1
下顎骨		2	1

⑥	男性	女性	不明
右側頭骨			
左側頭骨		1	
右上顎骨		1	
左上顎骨		1	
下顎骨		1	1

⑦	男性	女性	不明
右側頭骨			
左側頭骨			
右上顎骨			
左上顎骨			
下顎骨			

⑧	男性	女性	不明
右側頭骨			
左側頭骨	1		
右上顎骨			
左上顎骨			
下顎骨			

⑨	男性	女性	不明
右側頭骨			1
左側頭骨			2
右上顎骨			
左上顎骨			
下顎骨	1		2

⑩	男性	女性	不明
右側頭骨			
左側頭骨			
右上顎骨			
左上顎骨			
下顎骨			

⑪	男性	女性	不明
右側頭骨	1	1	
左側頭骨	1	1	
右上顎骨	1	1	
左上顎骨	1	1	
下顎骨	1	1	1

⑫	男性	女性	不明
右側頭骨	1		2
左側頭骨	2	1	2
右上顎骨			1
左上顎骨			
下顎骨	1		3

表3 出土人骨の構成 (体部骨より)

①	男性	女性	不明
右上腕骨	1		
左上腕骨	2		
右寛骨	1		
左寛骨	1		
右大腿骨	1		
左大腿骨	1		
右脛骨			
左脛骨			

②	男性	女性	不明
右上腕骨		2	
左上腕骨		2	
右寛骨		3	
左寛骨	1	2	
右大腿骨	1		
左大腿骨	1		
右脛骨	2	1	1
左脛骨	2	2	

③	男性	女性	不明
右上腕骨			
左上腕骨			
右寛骨			
左寛骨			1
右大腿骨			1
左大腿骨			
右脛骨			
左脛骨			

④	男性	女性	不明
右上腕骨		1	
左上腕骨		1	
右寛骨		1	
左寛骨		1	1
右大腿骨		1	1
左大腿骨		1	
右脛骨		1	
左脛骨		1	

⑤	男性	女性	不明
右上腕骨	2	1	
左上腕骨	1	1	
右寛骨		1	
左寛骨		1	
右大腿骨	2	1	
左大腿骨	2	1	
右脛骨	2	1	
左脛骨	2	1	

⑥	男性	女性	不明
右上腕骨		1	
左上腕骨		1	
右寛骨			
左寛骨		1	
右大腿骨		1	
左大腿骨	1	1	
右脛骨	1	1	
左脛骨		1	

⑦	男性	女性	不明
右上腕骨			
左上腕骨			
右寛骨			
左寛骨			
右大腿骨			
左大腿骨			
右脛骨			
左脛骨			

⑧	男性	女性	不明
右上腕骨	1		
左上腕骨	1		
右寛骨	1		
左寛骨	1		
右大腿骨	1		
左大腿骨	2		
右脛骨	2		
左脛骨	2		1

⑨	男性	女性	不明
右上腕骨		3	1
左上腕骨		2	
右寛骨	1	2	1
左寛骨		3	
右大腿骨	1	2	1
左大腿骨	2	2	2
右脛骨	1		
左脛骨	1		1

⑩	男性	女性	不明
右上腕骨			
左上腕骨	1		
右寛骨	1	1	
左寛骨	1		
右大腿骨			
左大腿骨	1		
右脛骨			
左脛骨			

⑪	男性	女性	不明
右上腕骨	1	1	1
左上腕骨	1		1
右寛骨		1	
左寛骨		1	
右大腿骨	2	1	1
左大腿骨	1	1	1
右脛骨		1	1
左脛骨	1	1	

⑫	男性	女性	不明
右上腕骨	2	1	2
左上腕骨	2	1	2
右寛骨	1		
左寛骨	1		
右大腿骨	2	2	2
左大腿骨	2	2	2
右脛骨		1	2
左脛骨	1	1	2

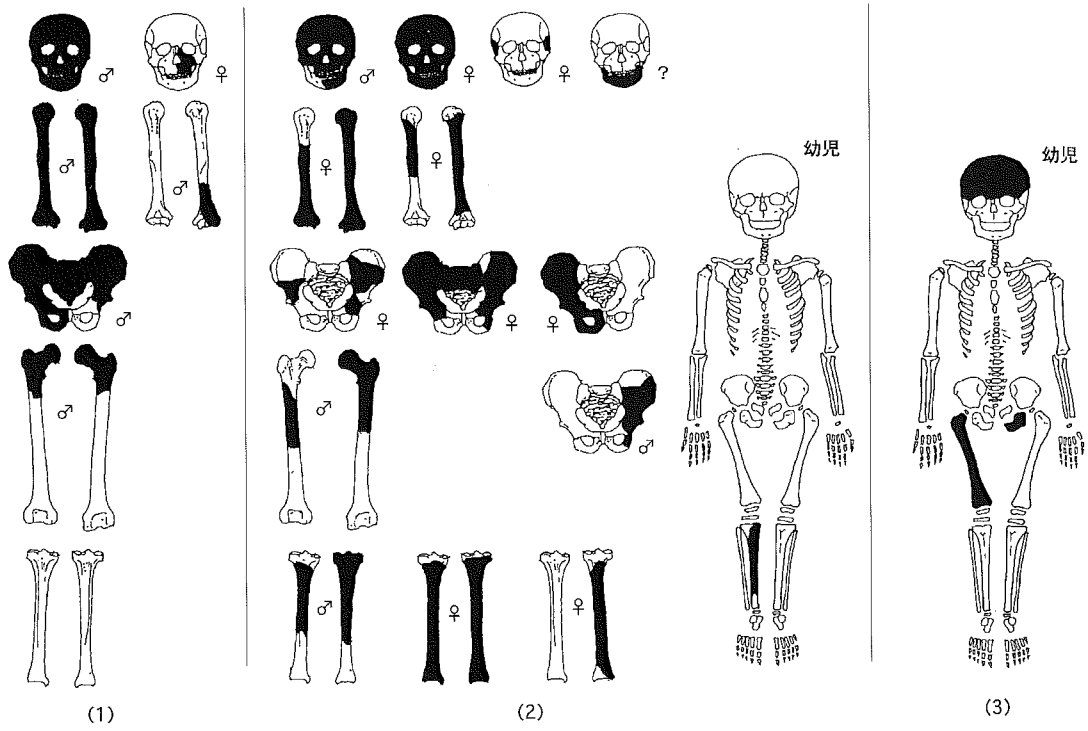


図1 人骨の出土部位

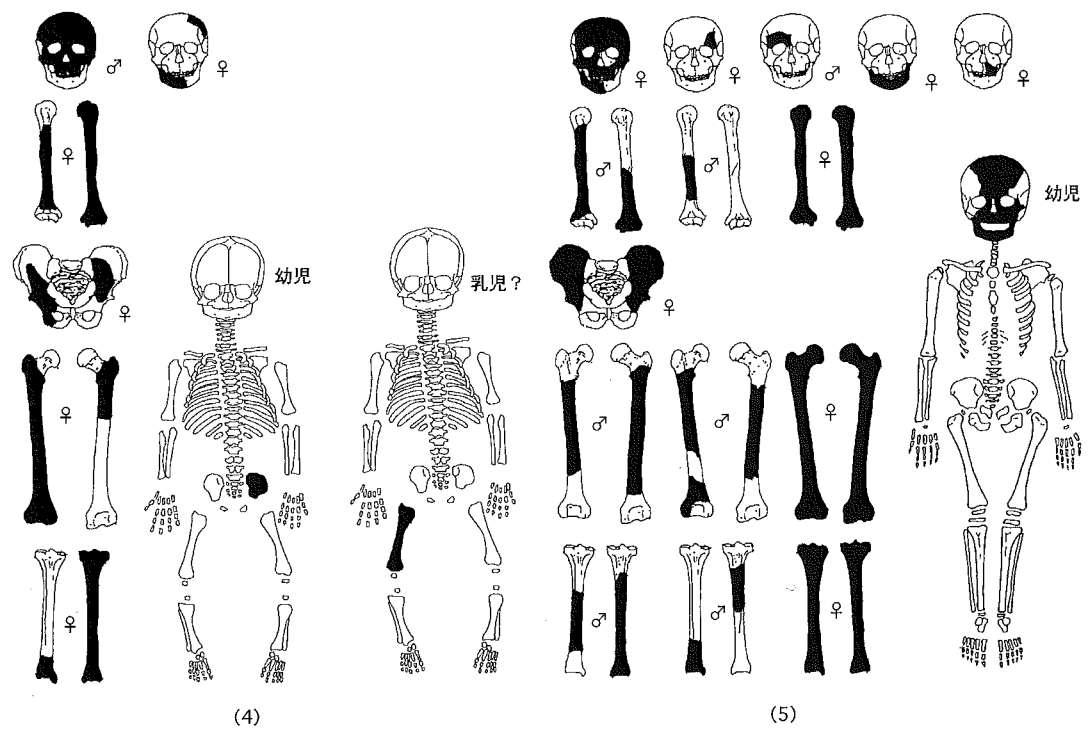


図2 人骨の出土部位

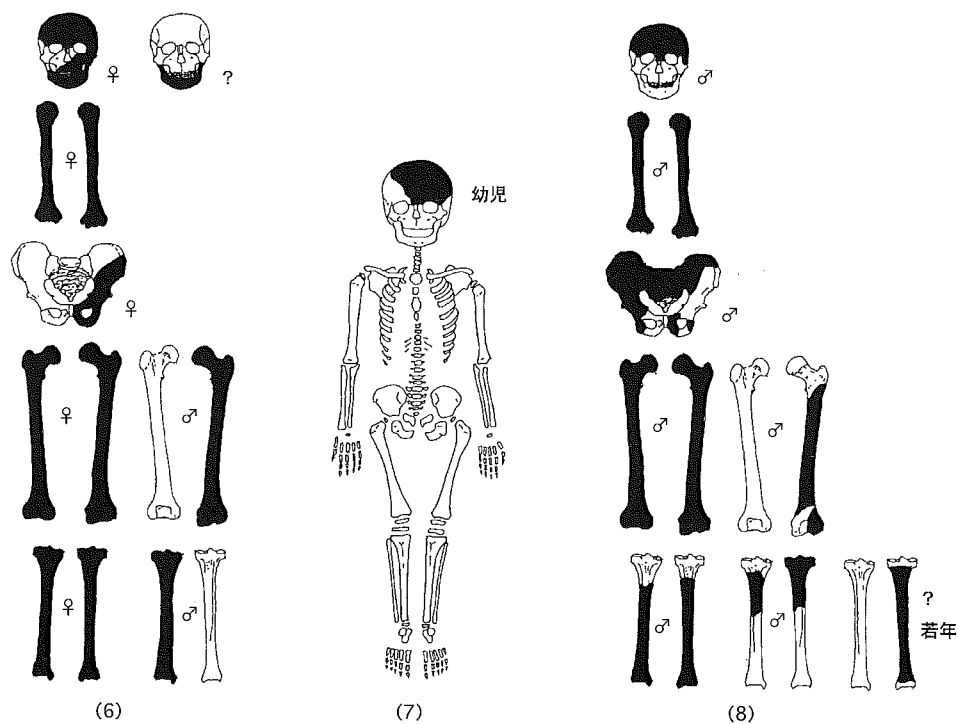


図3 人骨の出土部位

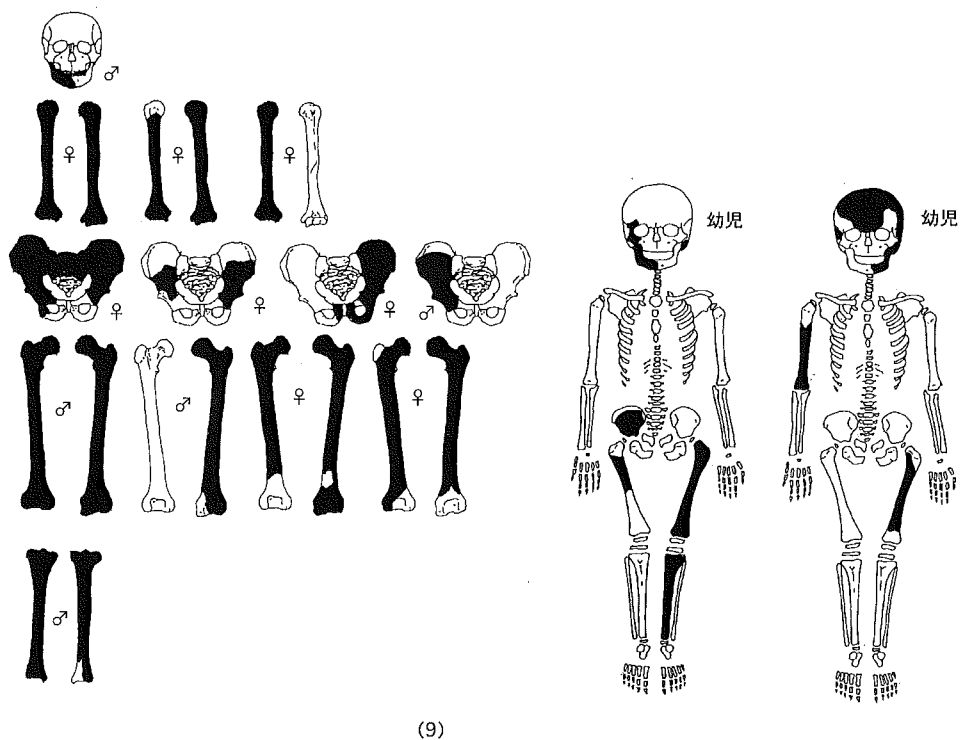


図4 人骨の出土部位

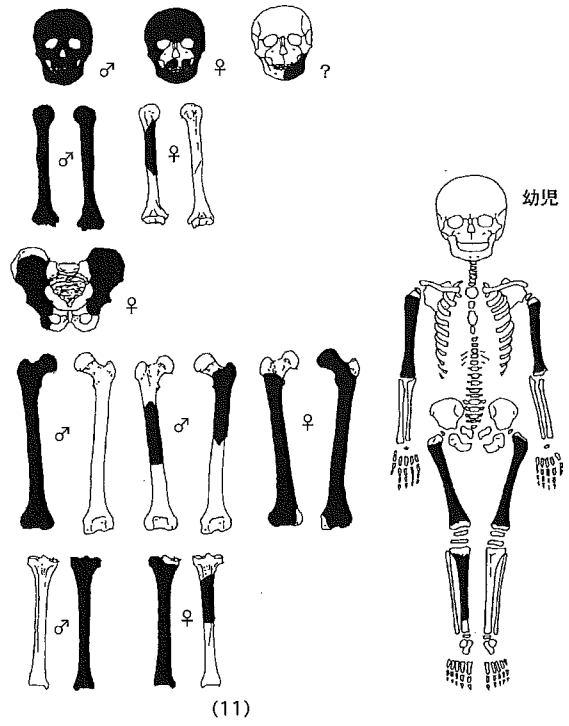
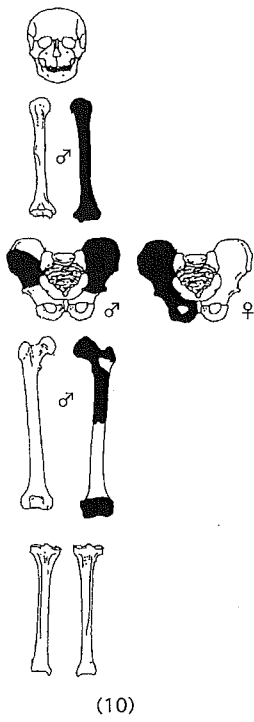


図5 人骨の出土部位

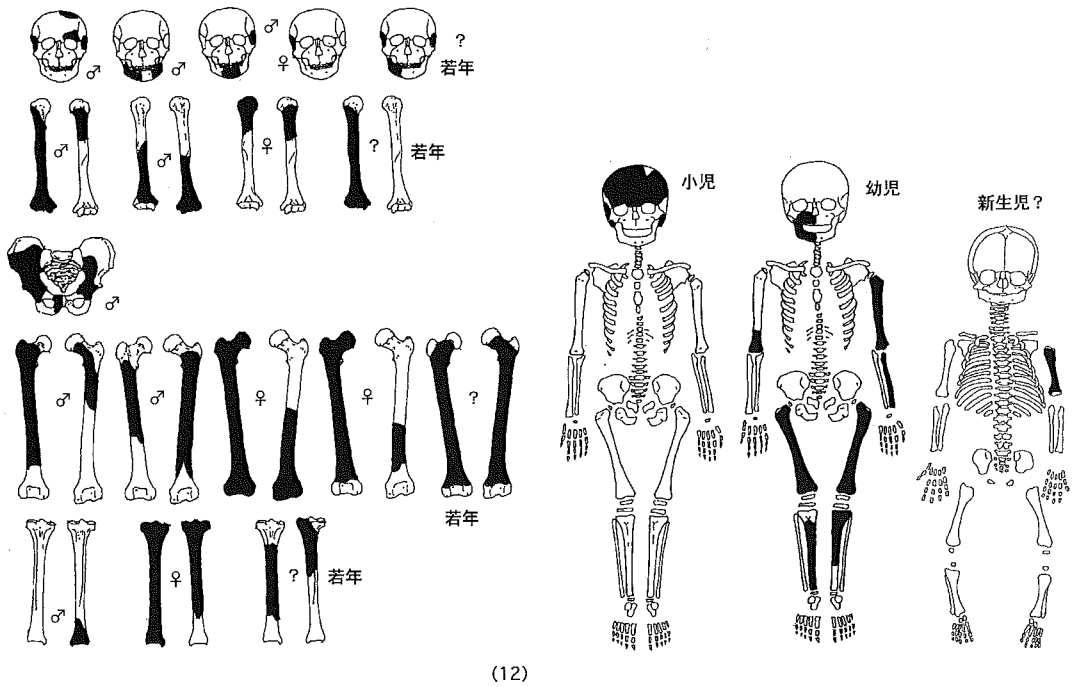


図6 人骨の出土部位

表4 出土人骨のまとめ

	男性	女性	不明成人	若年	乳幼小児
右側頭骨	4	3		1	3
左側頭骨	7	6		1	3
右上顎骨	4	4			2
左上顎骨	4	6			1
下顎骨	5	6	4	1	4
右上腕骨	7	10		1	3
左上腕骨	8	8		1	2
右寛骨	5	9			1
左寛骨	5	9			2
右大腿骨	10	8		1	5
左大腿骨	13	8		1	4
右脛骨	8	6		1	3
左脛骨	9	7		1	3
推定個体数	13	10	4	1	5

表5 頭蓋骨主要計測値 (男性)

	①-1	②-1	④	⑧	⑪	N	M	S.D.
1 頭蓋最大長	174	176	174	172	172	5	173.6	1.67
8 頭骨最大幅	141	140	137	140	143	5	140.2	2.17
9 最小前頭幅	95	97	92	92	93	5	93.8	2.17
17 バジオン・プレグマ高				134	131	2	132.5	
45 頬骨弓幅	140	136	129		138	4	135.8	4.79
46 中顔幅	100	105	103		108	4	104.0	3.37
48 上顔高	71	64	66		71	4	68.0	3.56
51 眼窩幅	47	41	41		44	4	43.3	2.87
52 眼窩高	36	31	32		33	4	33.0	2.16
54 鼻幅	28	25	29		26	4	27.0	1.83
55 鼻高	52	48	50		51	4	50.3	1.71
8/1 頭蓋長幅示数	81.0	79.5	78.7	81.4	83.1	5	80.7	1.72
17/1 頭蓋長高示数				77.9	76.2	2	77.1	
17/8 頭蓋幅高示数				95.7	91.6	2	93.7	
48/45 上顔示数(K)	52.9	49.3	52.7		53.6	4	52.1	1.92
52/51 眼窩示数 (左)	76.6	75.6	78.0		75.0	4	76.3	1.31
54/55 鼻示数	53.8	52.1	58.0		51.0	4	53.7	3.07
顔面平坦度								
Frontal chord	101.0	96.3	98.1	95.7	98.6	5	97.9	2.09
subtense	19.0	11.7	11.1	11.7	14.9	5	13.7	3.33
index	18.8	12.1	11.3	12.2	15.1	5	13.9	3.10
Simotic chord	7.3	9.2	8.9		9.2	4	8.7	0.91
subtense	2.4	2.8	2.6		3.8	4	2.9	0.62
index	32.9	30.4	29.2		41.3	4	33.5	5.46
Zygomaxillary chord	100.8	101.0	100.6		107.4	4	102.5	3.30
subtense	19.5	15.6	20.5		20.7	4	19.1	2.38
index	19.3	15.4	20.4		19.3	4	18.6	2.20

(mm)

表6 頭蓋骨主要計測値 (女性)

	②-2	⑤	⑪-2	⑩	N	M	S.D.
1 頭蓋最大長	165	178	164	171	4	169.5	6.45
8 頭骨最大幅	141		140	139	3	140.0	1.00
9 最小前頭幅	84	88	95	96	4	90.8	5.74
17 バジオン・プレグマ高	134				1	134.0	
45 頬骨弓幅	128	122		132	3	127.3	5.03
46 中顔幅	99	101		97	3	99.0	2.00
48 上顔高	63	62		63	3	62.7	0.58
51 眼窩幅	37			41	2	39.0	
52 眼窩高	32			31	2	31.5	
54 鼻幅	25				1	25.0	
55 鼻高	47	47		49	3	47.7	1.15
8/1 頭蓋長幅示数	85.5		85.4	81.3	3	84.1	2.40
17/1 頭蓋長高示数	81.2				1	81.2	
17/8 頭蓋幅高示数	95				1	95.0	
48/45 上顔示数(K)	51.6	53.3		49.2	3	51.4	2.06
52/51 眼窩示数 (左)	86.5			75.6	2	81.1	
54/55 鼻示数	53.2				1	53.2	
顔面平坦度							
Frontal chord	88.2	92.3	92.7	93.2	4	91.6	2.30
subtense	11.4	15.1	11.5	13.1	4	12.8	1.73
index	12.9	16.4	12.4	14.1	4	14.0	1.78
Simotic chord	6			8.7	2	7.4	
subtense	1			4.2	2	2.6	
index	16.7			48.3	2	32.5	
Zygomaxillary chord	98.5				1	98.5	
subtense	19.4				1	19.4	
index	19.7				1	19.7	

(mm)

3) 人骨所見

【頭蓋骨】

男性5体、女性4体の比較的保存良好な頭蓋骨が得られた。主要計測値は表5・6に示す通りであるが、全体に頑丈な印象を受ける。脳頭蓋の主要示数は、男性で80.7（長幅示数）、77.1（長高示数）、93.7（幅高示数）、女性で84.1（長幅示数）、81.2（長高示数）、95.0（幅高示数）となり、いずれも短頭、高頭、中頭の傾向を示している。短頭傾向は沖繩の先史時代人に見られる特徴であるが、全体のサイズが大きい点では異なっている。顔面の特徴はかなり変異に富んでおり、特に男性の高径（上顔高、眼窩高など）、幅径（頬骨弓幅、最小前頭幅、鼻幅など）は個体差が大きいように思われる。女性は全体に低顔傾向が強いようである。また、顔面平坦度示数についても個体差が認められる。

【上肢骨】

上肢骨については、性判定が比較的容易であった上腕骨についてのみ計測を行った。主要計測値を表7～8に示す。全体にかなり頑丈で、筋付着部の発達も良好であるが、縄文人や沖縄先史時代人ほどの頑丈さではない。

表7 上腕骨主要計測値 (男性)

	①-1	⑤-2	⑤-3	⑧-1	⑪-3	⑫-1	⑫-2	N	M	S.D.
1 上腕骨最大幅	r 317			292	297			3	302.0	13.23
	l 315			288	294			3	299.0	14.18
2 上腕骨全長	r 312			287	295			3	298.0	12.77
	l 310			283	290			3	294.3	14.01
5 中央最大径	r 25		22	21	23		20	5	22.2	1.92
	l 24			20	23		21	4	22.0	1.83
6 中央最小径	r 16		14	16	14		16	5	15.2	1.10
	l 16			15	14		16	4	15.3	0.96
7 骨体最小周	r 64	69	60	59	60	72	60	7	63.4	5.16
	l 61		60	57	61		60	5	59.8	1.64
6/5 骨体断面示数	r 64.0		63.6	76.2	60.9		80.0	5	68.9	8.55
	l 66.7			75.0	60.9		76.2	4	69.7	7.23
7/1 長厚示数	r 20.2			20.2	20.2			3	20.2	0.00
	l 19.4			19.8	20.7			3	20.0	0.67

(mm)

表8 上腕骨主要計測値 (女性)

	②	②	④	⑤-1	⑥-2	⑥-3	⑨-1	⑨-2	⑪-2	N	M	S.D.
1 上腕骨最大幅	r			265	278		277	280		4	275.0	6.78
	l 275		260	263	281	284				5	272.6	10.69
2 上腕骨全長	r			262	272		273	276		4	270.8	6.08
	l 274		255	260	275	280				5	268.8	10.71
5 中央最大径	r 22	20	18	17	21	21	23	22	20	9	20.4	1.94
	l 22	21	19	17	21	20	23		19	8	20.3	1.91
6 中央最小径	r 16	12	14	13	17	14	15	15	14	9	14.4	1.51
	l 16	14	15	13	17	14	15		15	8	14.9	1.25
7 骨体最小周	r 60		50	47	58	56	61	61		7	56.1	5.58
	l 58	54	52	47	57	55	60		54	8	54.6	4.00
6/5 骨体断面示数	r 72.7	60.0	77.8	76.5	81.0	66.7	65.2	68.2	70.0	9	70.9	6.72
	l 72.7	66.7	78.9	76.5	81.0	70.0	65.2		78.9	8	73.7	5.99
7/1 長厚示数	r			17.7	20.9		22	21.8		4	20.6	1.99
	l 21.1		20	17.9	20.3	19.4				5	19.7	1.20

(mm)

表9 大腿骨主要計測値 (男性)

		①-1	②	⑤-2	⑤-3	⑥-1	⑧-1	⑧-2	⑨-2	⑨-4	⑩-1	⑫-1	⑫-3	⑫-4	N	M	S.D.
1 最大長	r					414			399						2	406.5	
	l					415	397		399	387					4	399.5	11.59
2 自然位全長	r					410			396						2	403.0	
	l					413	393		397	383					4	396.5	12.48
6 骨体中央矢状径	r				26	26	23		26		30	27		30	7	26.9	2.48
	l		25	27	26	26	23	25	25	25	28		25		10	25.5	1.35
7 骨体中央横径	r				24	27	22		26		27	29		26	7	25.9	2.27
	l		25	27	24	26	22	27	26	26	27		25		10	25.5	1.58
8 骨体中央周	r				80	83	73		81		90	92		88	7	83.9	6.62
	l		79	87	80	83	73	85	80	81	88		80		10	81.6	4.38
9 骨体上横径	r	32		32	27	30	28		30		31	36		29	9	30.6	2.65
	l		30	33	28	30	29		30	31	33	35	32		10	31.1	2.13
10 骨体上矢状径	r	22		23	22	24	20		24		25	26		24	9	23.3	1.80
	l		22	22	22	24	20		23	22	25	25	23		10	22.8	1.55
8/2 長厚示数	r					20.2			20.5						2	20.4	
	l					20.1	18.6		20.2	21.1					4	20.0	1.04
6/7 骨体中央断面示数	r				108.3	96.3	104.5		100.0		111.1	93.1		115.4	7	104.1	8.09
	l		100.0	100.0	108.3	100.0	104.5	92.6	96.2	96.2	103.7		100.0	82.8	10	100.2	4.55
10/9 上骨体断面示数	r	68.8		71.9	81.5	80.0	71.4		80.0		80.6	72.2			9	76.6	5.37
	l		73.3	66.7	78.6	80.0	69.0		76.7	71.0	75.8	71.4	71.9		10	73.4	4.26

(mm)

表10 大腿骨主要計測値 (女性)

		④	⑤-1	⑥-2	⑨-1	⑨-3	⑩-2	⑫-2	⑫-5	N	M	S.D.
1 最大長	r		370	395		393		387		4	386.3	11.35
	l		371	395	386		370			4	380.5	12.12
2 自然位全長	r		367	391				385		3	381.0	12.49
	l		369	391			367			3	375.7	13.32
6 骨体中央矢状径	r	22	18	23	23	25	20	25	21	8	22.1	2.42
	l		19	22	23	25	22	25		6	22.7	2.25
7 骨体中央横径	r	25	25	24	28	26	23	24	22	8	24.6	1.85
	l		24	24	26	26	22	25		6	24.5	1.52
8 骨体中央周	r	74	68	75	82	79	70	78	69	8	74.4	5.10
	l		69	75	76	80	68	79		6	74.5	5.01
9 骨体上横径	r	29	31	30	33	31	28	27	27	8	29.5	2.14
	l	31	29	31	30	30	27			6	29.7	1.51
10 骨体上矢状径	r	21	17	22	23	20	19	23	21	8	20.8	2.05
	l	21	17	20	23	21	19			6	20.2	2.04
8/2 長厚示数	r		18.5	19.2				20.3		3	19.3	0.91
	l		18.7	19.2			18.5			3	18.8	0.36
6/7 骨体中央断面示数	r	88.0	72.0	95.8	82.1	96.2	87.0	104.2	95.5	8	90.1	10.02
	l		79.2	91.7	88.5	96.2	100.0	100.0		6	92.6	8.00
10/9 上骨体断面示数	r	72.4	54.8	73.3	69.7	64.5	67.9	85.2	77.8	8	70.7	9.03
	l	67.7	58.6	64.5	76.7	70.0	70.4			6	68.0	6.10

(mm)

【下肢骨】

下肢骨の計測値を表9～12に示す。下肢骨も全体的に頑丈で、筋附着部の発達が良好である。大腿骨の柱状性、脛骨の扁平性などの傾向は顕著には認められない。

表11 脛骨主要計測値 (男性)

		②-1	②-2	⑤-2	⑤-3	⑥-1	⑧-1	⑧-2	⑨-2	N	M	S.D.
1 脛骨全長	r	318				343			332	3	331.0	12.53
	l	321				345				2	333.0	
1a 脛骨最大長	r	324				348			336	3	336.0	12.00
	l	326				348				2	337.0	
8a 栄養孔位最大径	r	29	30			31		34	31	5	31.0	1.87
	l		33		33	32	27	34	32	6	31.8	2.48
9a 栄養孔位横径	r	23	21			22		22	20	5	21.6	1.14
	l		21		19	21	22	22	20	6	20.8	1.17
10a 栄養孔位周	r	82	83		83	87		89	83	6	84.5	2.81
	l		85			84	79	89	84	5	84.2	3.56
10b 最小周	r	64		72		74	64		68	5	68.4	4.56
	l		71	72		72	64		69	5	69.6	3.36
9a/8a 栄養孔位断面示数	r	79.3	70			71		64.7	64.5	5	69.9	6.04
	l		63.6		57.6	65.6	81.5	64.7	62.5	6	65.9	8.13
10b/1 長厚示数	r	20.1				21.6			20.5	3	20.7	0.78
	l					20.9				1	20.9	

(mm)

表12 脛骨主要計測値 (女性)

		②	④	⑤-1	⑥-2	⑩-2	N	M	S.D.
1 脛骨全長	r			295			1	295.0	
	l		304	300	328		3	310.7	15.14
1a 脛骨最大長	r			300			1	300.0	
	l		306	304	334		3	314.7	16.77
8a 栄養孔位最大径	r			23	29	26	3	26.0	3.00
	l	28	27	22	29	24	5	26.0	2.92
9a 栄養孔位横径	r			17	21	20	3	19.3	2.08
	l	22	21	15	22	19	5	19.8	2.95
10a 栄養孔位周	r			65	81	71	3	72.3	8.08
	l	79	78	63	80	69	5	73.8	7.46
10b 最小周	r			53	63	61	3	59.0	5.29
	l	64	62	54	61		4	60.3	4.35
9a/8a 栄養孔位断面示数	r			73.9	72.4	76.9	3	74.4	2.29
	l	78.6	77.8	68.2	75.9	79.2	5	75.9	4.50
10b/1 長厚示数	r			18.0			1	18.0	
	l		20.4	18.0	18.6		3	19.0	1.25

(mm)

【身長 の 推定】

大腿骨の最大長からピアソンの式を用いて求めた推定身長を表6に示す。男性が156.4cm、女性が147.5cmで、全体的に身長は低かったようである。周辺の例では、石垣市蔵元跡のグスク時代と思われる男性人骨で160cm前後の身長が推定され、同じ波照間島の大泊浜遺跡人骨（12～13世紀）についても、160cm程度の身長であったことが報告されているので、これらに比べるとかなり低身長である。

4) 周辺集団との比較

砂丘で発見された毛原人骨が一般的に言われるように、外来者なのかどうかを骨の形態から推定することは大変困難なことであるが、とりあえず毛原人骨の特徴を知るために、男性の頭蓋計測値を他の集団と比較してみた（図7）。比較に使った集団は、津雲縄文人¹⁾、金隈弥生人²⁾、アイヌ³⁾、沖縄先史時代人⁴⁾、沖縄近現代人⁵⁾である。また、先島地方で形質の分かる最も古い資料として、波照間島大泊浜遺跡の2号人骨⁶⁾と石垣市蔵元跡遺跡の1号人骨⁷⁾についても、少数の計測項目についてはあるが比較を行った。

図7は畿内現代人⁸⁾の計測値を基準にして、基準値からどのくらい違っているかを標準偏差単位で示した偏差グラフである。沖縄先史時代人は頭蓋最大長が小さく、最大幅が大きい（短頭）ことと、高径が小さい点の特徴である。全体にマイナス側に偏れており、サイズが小さいことが分かる。近現代人は頭蓋最大長が大きくなって、頭形が少し長くなっている。また、顔面の高径が先史時代人に比べると高くなっている。また、全体に偏れが小さくなり、顔面の高径が低い点を除けば畿内の現代日本人に近くなっている。蔵元跡1号や大泊浜2号の計測値はプラス側に大きく偏れており、サイズが大きいことを示している。毛原人骨は短頭性や低顔・低眼窩傾向において沖縄先史時代人と共通した特徴を有すると言えるが、全体の偏れは小さくなっており、近現代人的でもある。地理的に近い波照間島大泊浜遺跡や石垣島蔵元跡遺跡の人骨がサイズや全体的な頑丈さにおいて特徴的であるのに比べるとやや異なる印象を受けるが、

表13 推定身長

大泊浜人骨も蔵元跡人骨も一例のみの結果であるために、現時点での評価は難しい。毛原人骨の計測値は日本人の変異の範囲に含まれていると考えて問題はなさそうであるし、特に外国人の特徴を示しているようにも思われないが、先島での比較資料が不十分な現状ではさらなる分析は困難である。毛原第一墓人骨の位置づけを行うためにも、今後の資料の追加を期待したい。

	男性	女性
	159.3	145.0
	155.9	149.7
	156.3	147.7
	154.1	147.9
		149.3
		144.8
		148.1
不明	156.4	147.5

(cm)

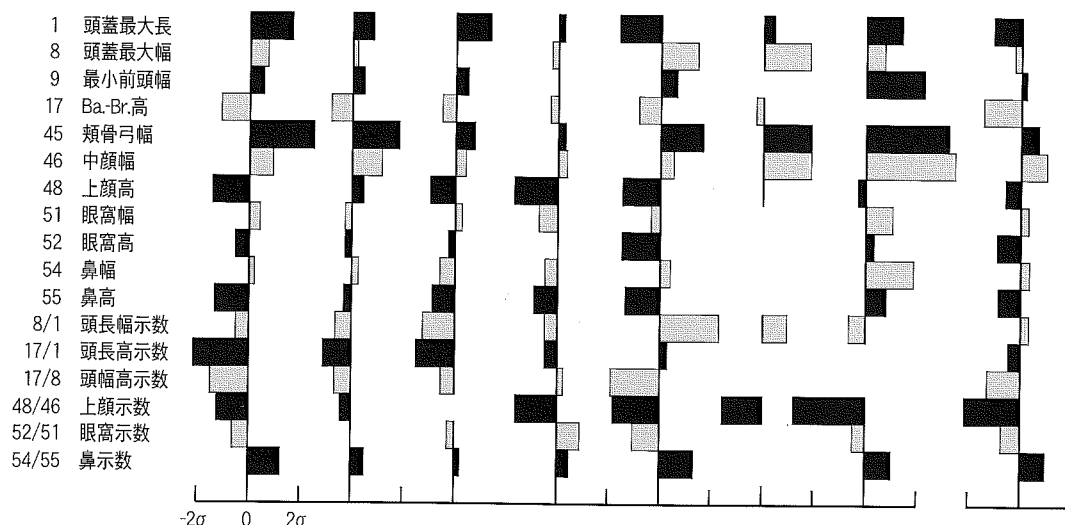


図7 男性頭蓋計測値（男性）の偏差による比較（幾内現代人基準）

4. おわりに

沖縄本島具志頭村で発見された港川人は縄文人の直接の祖先と位置づけられ、また、現在の沖縄のひとについても、「日本列島人の二重構造モデル」に代表されるように、大陸からの遺伝的影響をほとんど受けることがなかったため、北海道のアイヌとともに縄文人の形質を色濃く受け継いでいるという考えがほとんど一般的になろうとしている。しかし、沖縄の人骨研究の現状は、地域的にも時代的にも非常に限られた資料に基づくものであり、日本人の直接の祖先と考えられている港川人以降の形質の変化についてはほとんど分かっていない。さらに、最近の人骨研究では、沖縄のひとと北海道のアイヌは必ずしも近縁とはいえないのではないかという結果が報告されるなど、沖縄のひとの成り立ちについては、まだまだ残された課題が多いことが明らかになってきている。

筆者等は沖縄のひとの成り立ちを解明するため、各時代・各地域における人骨データの充実を図るべく調査を続けてきたが、その中で、沖縄の先史時代人とグスク時代以降の人びとの形質にかなりの違いがあることが分かってきた。これらの違いは日本における縄文と弥生以降の違いに匹敵するのではないかと思われるほどである。グスク時代は、文化的だけではなく形質的にも大きな画期となっているのかも知れない。

また、先島地方が沖縄諸島周辺と同じ文化圏に入るのは、グスク時代以降になってからといわれており、形質的にも地域差があったことが予想される。しかしながら、先島地方における人骨の出土例は極端に少なく、現在の先島地方の人たちがいつ頃、どのようにして形成されたかについては、現在のところまったく分かっていないといっても過言ではな

い。

波照間島総合調査はこのような人骨研究の現状を打開する第一歩となるものであり、特に、毛原人骨の重要性は今後ますます増大するものと思われる。

謝 辞

小稿を終えるに当たり、波照間島での人骨調査の機会を与えていただいた、沖縄県立博物館の皆さまに心から感謝いたします。

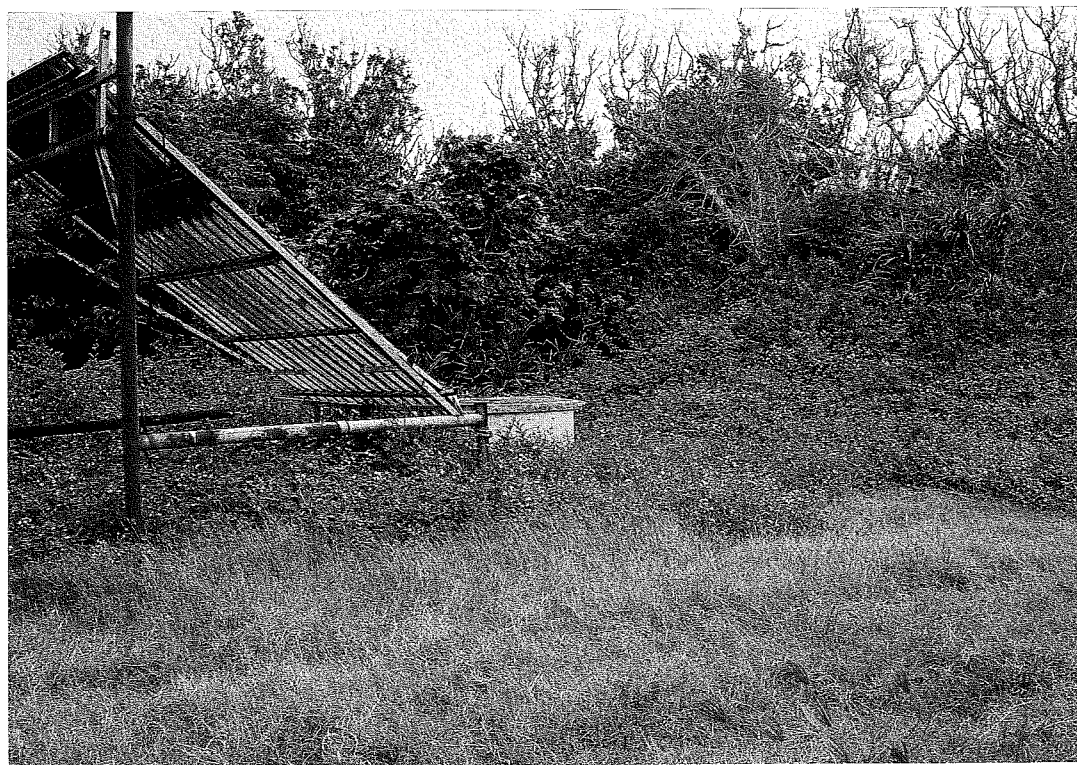
また、人骨調査に際しては、仲間土木、井上建設工業、大米建設の皆さま、そして波照間島の皆さまの温かいご協力とご理解があったことを記して、ここに心からの謝意を表します。

参考文献

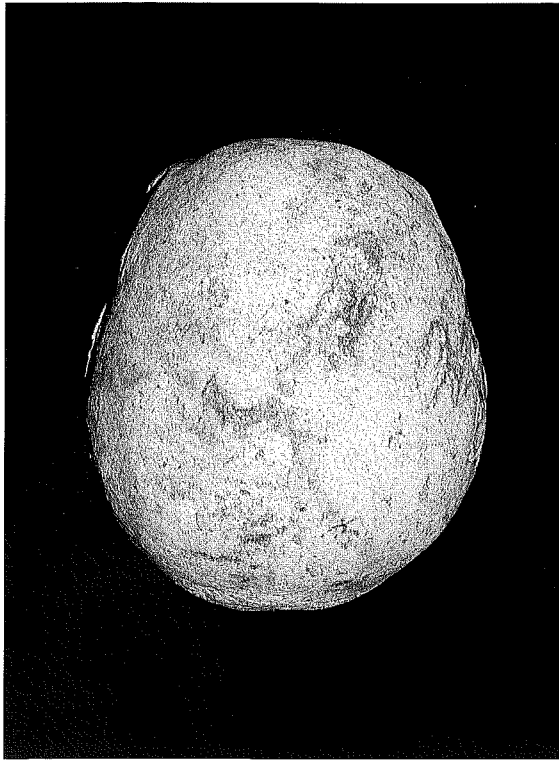
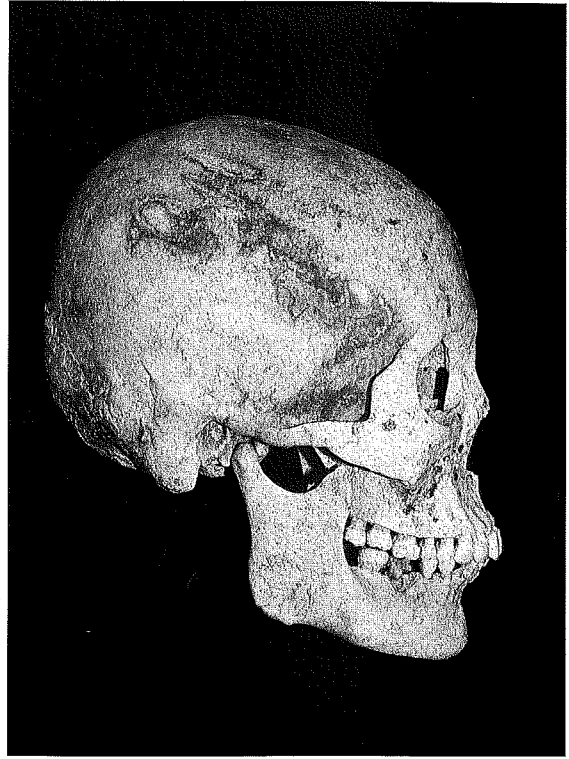
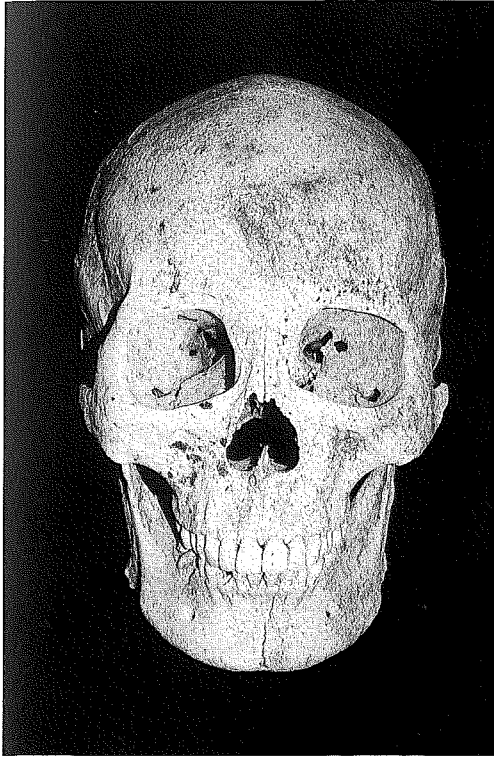
- 1) 清野謙次・宮本博人、1926：津雲貝塚人人骨の人類学的研究 第2部 頭蓋骨の研究、人類学雑誌、41 (3/4) .
- 2) 中橋孝博・土肥直美・永井昌文、1985：金隈遺跡出土の弥生時代人骨、福岡市埋蔵文化財調査報告書、第123集、史跡 金隈遺跡、福岡市教育委員会、pp.43-145.
- 3) Koganei, Y., 1893 : Beitrage zur physischen Anthropologie der Aino. 1. Untersuchungen am Skelet. Mitteil. med. Fak. Univ. Tokio, 2 : 1-249.
- 4) 土肥直美、未発表
- 5) 許 鴻梁、1948：琉球人頭骨の人類学的研究、国立台湾大学解剖学研究室論文集2：227-330.
- 6) 内藤芳篤、1986：人骨、沖縄県文化財調査報告書第74集「下田原貝塚・大泊浜貝塚」、pp.145.
- 7) 土肥直美・北條真子、1998：石垣島蔵元跡遺跡出土の人骨、石垣市教育委員会、(印刷中)
- 8) 宮本博人、1924：現代日本人骨の人類学的研究、第1部 頭蓋骨の研究、人類学雑誌 39 (10-12) .



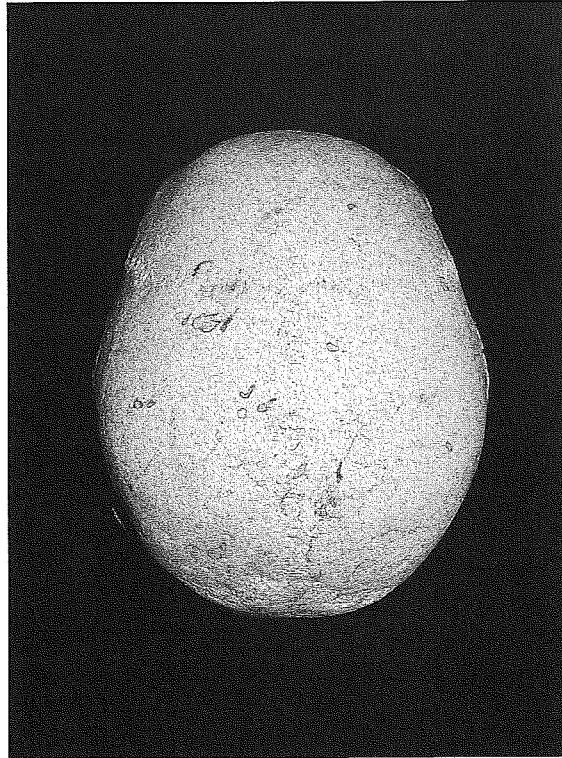
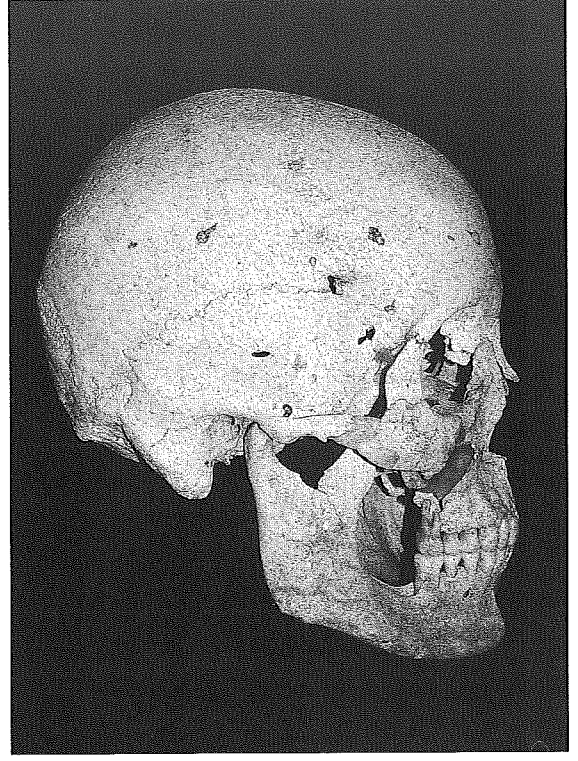
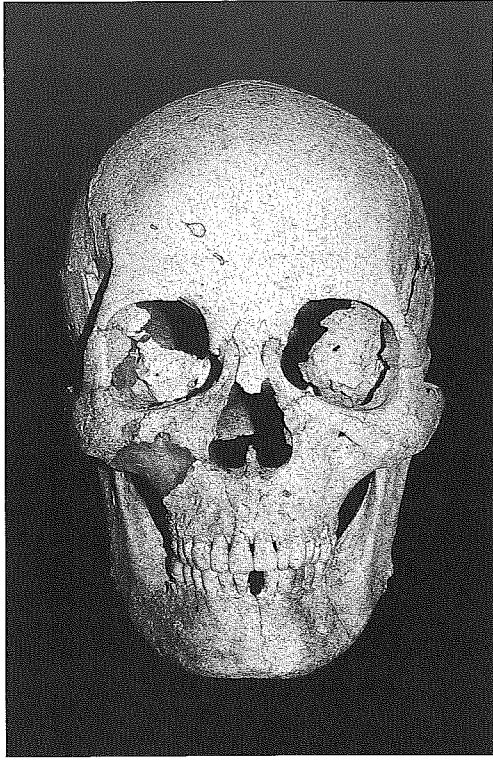
庸原第一墓



毛原第一墓



毛原第一墓 ⑩男性人骨



毛原第一墓 ①男性人骨

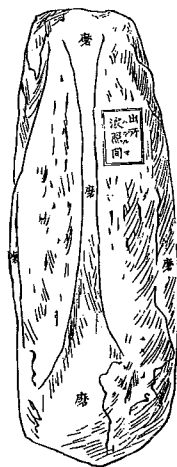
波照間島の考古学

當 眞 嗣 一

A. 戦前の調査

戦前、考古学的発掘調査のため波照間島に渡った考古学者はいなかった。しかし、波照間島で採集された考古学上の遺物については早くも1894年（明治27）に東京の人類学会雑誌に発表されている^①。それは、首里出身の西國男が採集した石斧を鳥居龍蔵が報告したものである。鳥居は、『東京人類学会雑誌』に「琉球ニ於ケル石器時代ノ遺跡」を載せ、その冒頭のなかで「日本ノ西端。琉球ニ石器時代ノ遺跡アラントハ吾人ノ深ク信ズル所ナリ」と述べている。鳥居は、西が持参した石器を実見することによって八重山の島々に石器時代人が存在していたことを確信したわけである。

上京の際、西が持参した石器は石斧4点であった。そのなかに波照間島で採集した石斧が1点含まれていたのである。鳥居の論文のなかに掲載されている石斧の特徴を見ると、局部磨製の片刃石斧で胴部断面が三角形を呈している石斧である（第1図）。採集された場所についての記述はない。鳥居との面談のなかで西は八重山の石垣島・西表島・黒島・新城島・小浜島・波照間島で石器が発見され、これらの諸島中最も石器を多く得たのは波照間島であったことを鳥居に伝えている。



第1図 鳥居龍蔵の「琉球ニ於ケル石器時代ノ遺跡」に掲載されている波照間島採集の局部磨製の片刃石斧（同論文より掲載）

B. 「南島文化の総合調査」の一環としての金関チームの調査

波照間島での本格的な考古学上の調査は、1954年（昭和29）に金関丈夫・国分直一・多和田真淳・永井昌文らが行った下田原貝塚の発掘調査が最初である。この調査は戦後県内で最も早い時期に行われた考古学上の調査で、南西諸島における考古学研究の出発点になった記念すべき調査となった。調査は柳田国男が主宰する「南島文化の総合調査」の一環として実施されたものであるが、この島が特に調査対象地として選ばれたのは、「波照間島が八重山諸島の最南域に属し、台湾本島の東北岸に近接している島でありながら、これまで何らの調査が行われていなかった^②」からであった。

金関を団長とする調査団一行は、1954年（昭和29）3月18日の夕刻島に上陸した後4月6日に島を離れるまで僅か3週間足らずの間に島内の考古学的踏査を勢力的に押し進め考古学上大きな成果を挙げる事ができた。金関はこの調査の成果を踏まえて「八重山群島の古代文化」という論文を発表している^③。この論文には「宮良当壮博士の批判に答う」という副題が付けられているが、それは波照間島調査の際、金関が『朝日新聞』の西部版に寄せた「琉球通信^④」のうち波照間島の名称や琉球語の起こりのことについての考え方を宮良当壮が批判したことに対する反論という形で発表されたものであった。両者の間にやがて言語学者の服部四郎が加わることになり、琉球人のルーツをめぐる「起源論争」として発展したことは有名である。本文に関係する部分についての金関の主張を抄録すると、「八重山先史時代には、縄文式、弥生式の文化は波及していない。そこにはこれら二文化とは別の漁労と組立式造船技術を伴う独自の農耕文化があった。その文化は現代の八重山文化の祖型と考えられる^⑤」というものである。

ところで、考古学上の発掘調査概要については、調査を行った1954年（昭和29）秋の人類学民族学大会で金関・国分によって報告^⑥されたが、正式な報告書についてはそれより10年遅れて1964年（昭和39）になって刊行された。いま、報告書の内容を要約すると次のとおりとなる^⑦。

- ①下田原貝塚の発掘調査に主力が注がれたのは、島内で下田原貝塚が最も古くて遺物包含層も保存良好であること、また、この地区の海浜には船着き場としての適地や台地縁に泉地が存在し、且つ西表島が手にとるように望見できる場所にあること、さらにこの地区には民俗上の聖地が多く歴史の上で重要な意味を暗示していると判断したからである。
- ②遺物包含層の状況については1層が黝黒色土層で耕土、2層は暗褐色土層で旧耕土、3層は混貝土層で下田原期の文化層、一番下は基盤の赤褐色粘土層である。
- ③下田原貝塚土器は八重山先史時代土器、高宮廣衛教授の所謂Lug-Pottery（外耳土器）初期のものである。
- ④土器が出土しない仲間第一貝塚とは罎器と見られる刃部に磨研を加えた局部磨研石器を主体とすることで共通する。
- ⑤下田原貝塚は西表島初期の有土器遺跡である仲間第二貝塚の時代に波照間島に営まれたコロニーである。
- ⑥波照間台地縁の下田原地区の印文硬陶系土器が台湾本島北部海辺地方のそれと酷似することは、波照間島と台湾本島、特にその北東海岸地方との間に何らかの交渉があったことを暗示する。
- ⑦横耳形の把手を口縁に有する土器は台湾南部東海岸地方の先史土器にみられ波照間島の土器と酷似するが、台湾南部沿岸地方の把手には紐を通す孔が開けられているのが

普通である。

- ⑧サルボウの殻頂部に穿孔した貝器は台湾西海岸南部の先史時代に例があり、現代も網の錘として利用していることは共通する。また、同じ貝製品でヤコウガイの蓋を利用した刃器は台湾先史時代の火焼島や恒春半島の先史時代にもみられる。

以上であるが、この調査によって波照間島先史時代の様相が初めて明らかにされた。

C. 多和田真淳の調査

金関チームの一員として下田原貝塚の発掘調査に参加した多和田真淳は、独自に先島地方を踏査した結果と下田原貝塚の調査を踏まえながら、八重山古代文化についての見解を発表した^⑧。そのなかで氏は「下田原貝塚系と石垣島の川平貝塚系の二つに大別することが出来前者は古く、後者は新しい」とし、そして「下田原貝塚は石器の形により農耕時代の貝塚」であるが、陶磁器の混在がないので川平貝塚系の遺跡よりは古いが琉球縄文系の貝塚よりは新しいという考え方を提示した。

現在の考古学上の成果では、下田原貝塚の実年代については今からおよそ3千数百年前を示し、川平貝塚系外耳土器が出土する遺跡はおおむね沖縄のグスク時代に相当することが判明している。多和田が提示した考えは、八重山古代文化における実年代の捉え方や無土器時代の設定がないことでは今日の成果に遠いものの、下田原貝塚系を先史時代に、川平貝塚系を原始時代に比定したことでは卓見というべきであろう。

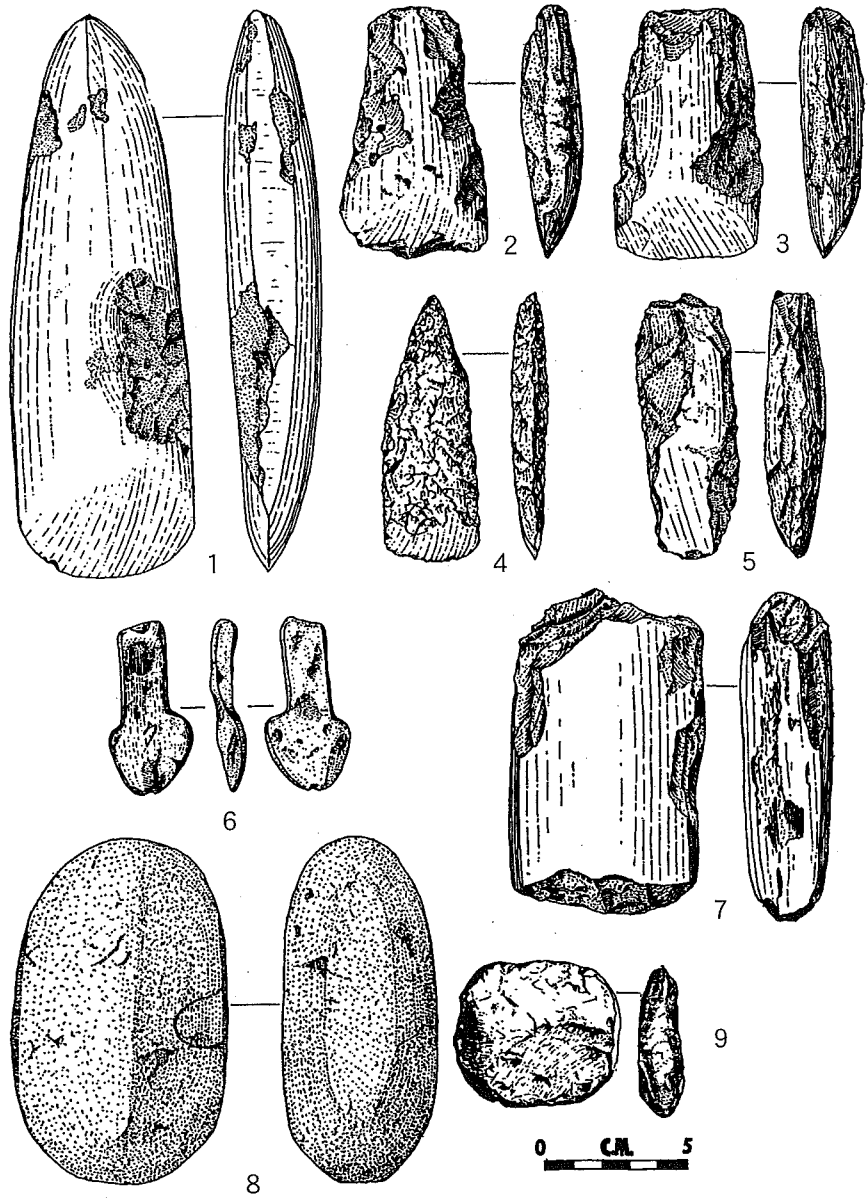
D. 早稲田大学の八重山調査団による波照間島調査

滝口宏を団長とする早稲田大学八重山調査団は、1959年（昭和34）に波照間島下田原貝塚の試掘調査を実施し、翌1960年報告書を刊行している^⑨。その調査成果を概観すると次のとおりとなる。

- ①発掘調査期間は1959年の8月14日～18日の5日間であった。
- ②発掘場所は金関チームが1954年に行った場所から北東へ約30m下った山田均氏所有の畑地である。この畑に東西10m、幅1.5mの主トレンチ（Eトレンチ）とその他の地点にもA～Dの小トレンチを設けて発掘した。
- ③トレンチの層序は、耕土10～15cm、暗褐色土に貝殻の混じる遺物包含層が20～50cmである。その下位は暗褐色土層が30～40cmと続きやがて岩盤となった。
- ④自然遺物は貝類、魚類、爬虫類、哺乳類等である。哺乳類にはジュゴン、イノシシがあり、特にイノシシの遺存骨は多量に出土した。岩石のなかでは、砂岩質の偏平な石が焼けて赤味をおびたものが多量に発見された。おそらく石蒸し料理用のポイルストーンであろう。

⑤人工遺物は石器、貝製品、土器等である。

石器は発掘によって8点得られ、うち6点が石斧である。半磨製と磨製にわけられるが、半磨製が多い。報告書に掲載された実測図（第2図）と観察表を記すと次のとおりである。

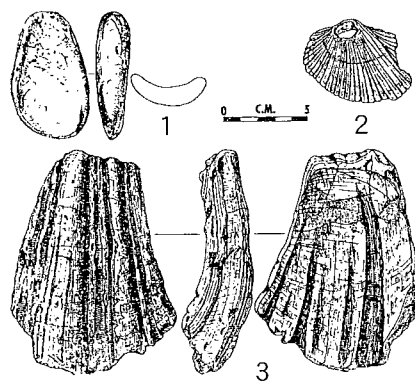


第2図 早稲田大学八重山調査団による波照間島下田原貝塚出土の石器
 (滝口宏編『沖縄八重山』校倉書房、1960年より)

挿図	製作	刃部形態	最大長	最大幅	最大厚	石質	出土地点	備考
第2 図1	定角型 磨製	両刃状	194cm	61cm	33cm	角閃 片岩	三区 混貝土層	完形品
同図 2	半磨製	片刃状	87cm	50cm	21cm	不明	四区 混貝土層	完形品
同図 3	半磨製	片刃状	88cm	51cm	20cm	ラン閃 石片岩	五区 混貝土層	完形品
同図 4	半磨製	両刃状	92cm	33cm	13cm	輝緑凝 灰岩	五区 混貝土層	再生品 ?
同図 5	半磨製	両刃状	—	33cm	21cm	ラン閃 石片岩	五区 混貝土層	破損品
同図 6	篋状石器		—	—	—	砂岩質	一区 貝層	完形品
同図 7	半磨製	両刃状 刃部形態	—	67cm	32cm	輝緑凝 灰岩	四区 混貝土層	破損品
同図 8	敲石	楕円形 刃部形態	120cm	74cm	53cm	砂岩質	三区 貝層	完形品
同図 9	錘?	偏平で四 角形	57cm	51cm	16cm	—	表土	完形品

貝製品

第3図が出土した貝製品である。シャゴウおよびリュウキュウサルボウの殻頂に孔をあけたものが三個出土している。そのうち1点が同図2である。同図1は小形の匙状の貝器で表土から出土し全体がよく磨滅している。用途は不明。同図3は、シャコ貝で作った匙状の貝製品で五区の貝層中より出土。最大長136cm、最大幅100cm、全体に磨滅の跡が見られる。用途について報告書では鋏であろうかと記述している。

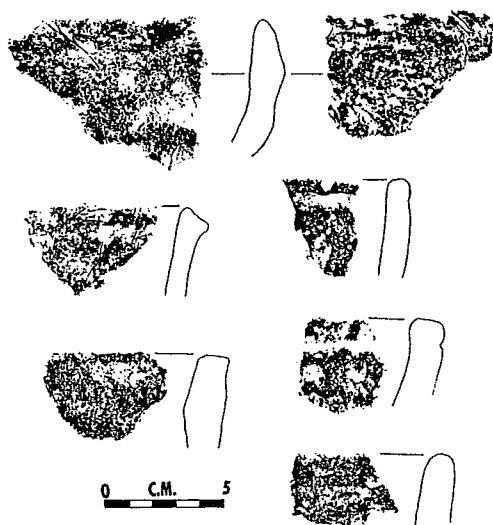


第3図 早稲田大学八重山調査団による波照間島下田原貝塚出土の貝製品
(滝口宏編『沖縄八重山』校倉書房、1960年より)

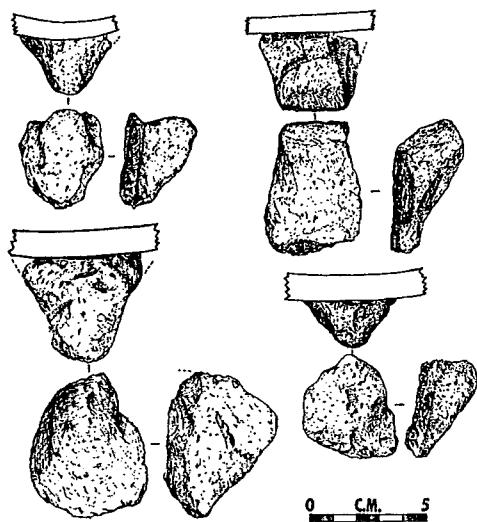
土器

土器の破片は、口縁部10個、胴部92個、底部2個で合計104個出土した。復原して器形のがえるものはなかった(第4図)。その他、口縁部に付けられたと思われる把手が4個出土している(第5図)。

土器の胎土には、砂、石英、サンゴ礁の微細な粒子が多く混入し、焼成は不良で脆く、吸水性が強い。焼色は暗褐色、茶褐色、黒褐色。土器の厚さは胴部で9~20cmに亘るが、平均の器厚が15cmで、いったいに口縁部を薄くし、胴腹部において厚くしている。文様のあるものは見あたらなかった。



第4図 早稲田大学八重山調査団による波照間島下田原貝塚出土の土器
(滝口宏編『沖縄八重山』校倉書房、1960年より)



第5図 早稲田大学八重山調査団による波照間島下田原貝塚出土の土器把手
(滝口宏編『沖縄八重山』校倉書房、1960年より)

E. ジョージH・ケアの波照間島調査

1960年（昭和35）～1962年（昭和37）の3ケ年にわたりジョージH・ケアを中心にして琉球列島遺跡調査が実施された。この時に沖縄各地の遺跡で収集された陶磁器類は「ジョージH・ケアコレクション」として沖縄県立博物館に現在保管されている。

1980年の9月、沖縄県立博物館では過去の琉球列島遺跡調査の再確認調査という目的でジョージH・ケア氏を招聘した。そして、氏の来島をきっかけにこれまで収蔵庫に眠ったままになっていた陶磁器資料の整理と実測図作成を行い、その成果を『沖縄出土の中国陶磁（上）－先島編－』（1982年3月発行^⑧）、『沖縄出土の中国陶磁（下）－沖縄本島編－』（1983年3月発行^⑨）上下二冊にまとめ刊行している。

ジョージH・ケアが実際遺跡を踏査して遺物を採集した場所を列挙すると次のとおりとなる（括弧内の遺跡名は現在の遺跡分布地図に登録された遺跡名である）。

Atanshi（美底御嶽周辺遺跡）、Atanshi Outlyers（美底御嶽周辺遺跡）、Hokaburaku（保多盛御嶽周辺遺跡）、Kaanchi（伝ミシユク村跡遺跡）、Maeburaku（大底御嶽周辺遺跡）、Minamiburaku（新本御嶽周辺遺跡）、Mishuku（伝ミシユク村跡遺跡）、Yagumura（伝ヤグ村跡遺跡）、Nanatabaru（下田原貝塚）、Pemisku（伝ペミシユク村跡遺跡）、Sumda Castle（下田原城跡）、Unidentifiedsite（場所不明）、Utsomura（伝ウツォ村跡遺跡）。

F. 沖縄県教育庁文化課による遺跡詳細分布調査

沖縄県教育庁文化課では1979年（昭和54）5月1日～1980年（昭和55）3月20日までの日程で竹富町・与那国町所在の遺跡詳細分布調査を実施した。この時の調査では波照間島の調査も行われ、島内で16箇所遺跡が報告された。調査の成果として、遺跡の概要と遺跡の範囲が1980年3月発行の「竹富町・与那国町の遺跡」に報告されている^⑩。波照間島の遺跡については阿利直治が担当してまとめてある。

G. 沖縄県教育庁文化課による下田原貝塚・大泊浜貝塚の発掘調査

団体営圃場整備事業の実施に伴い下田原貝塚と大泊浜貝塚の範囲確認調査が沖縄県教育庁文化課によって実施された。調査は1983（昭和58）年度から1985年（昭和60）年度まで3次にわたって行われた。第1次の発掘調査は1983年9月5日～11月5日まで大泊浜貝塚の発掘調査、第2次発掘調査は1984年5月28日～8月7日、第3次発掘調査が1985年7月15日～8月25日の期間であった。第2次と第3次の調査では主として下田原貝塚の発掘調査が行われた。発掘調査の成果は、調査を担当した金武正紀・金城亀信によってまとめられ、沖縄県文化財調査報告書第74集『下田原貝塚・大泊浜貝塚－第1・2・3次発掘

調査報告一』として1986年3月沖縄県教育委員会から刊行されている⁹⁾。

主な調査成果については次のとおりである。

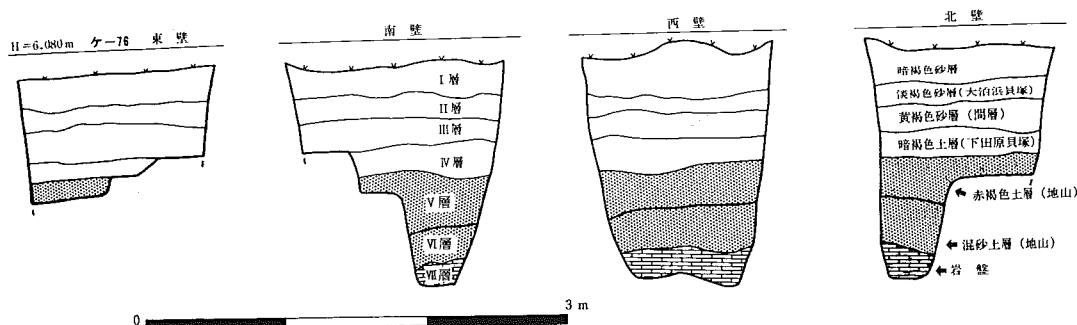
下田原貝塚の主な調査成果

①有土器が無土器に先行することを層位的に確認することができた。

有土器が無土器に先行することは、1978年石垣市名蔵大田原遺跡の発掘調査でも金武正紀らによって確認されていたが⁹⁾、今回の調査でもそのことが再確認されることになった。

有土器の下田原貝塚の層が無土器の大泊浜貝塚の層の下位にもぐり込んでいる状況はとくに下田原貝塚と大泊浜貝塚が接するケ-76の発掘区の層序で顕著に見られ、しかも、下田原貝塚層と大泊浜貝塚層の間には間層として無遺物の砂層が挟まれおり、両者の間には時間差があることも確認された。このような状況は他のG-35の試掘グリット等でもおさえられている。

では、ケ-76の層序断面図を報告書から掲載し詳しく見ることにしよう（第6図）。



第6図 下田原貝塚（IV層）と大泊浜貝塚（II層）が接するケ-76の発掘区の層序
（金武正紀ほか『下田原貝塚・大泊浜貝塚-第1・2・3次発掘調査報告一』沖縄県教育委員会、1986年より）

第I層 暗褐色砂層で、層厚が20～30cm。耕作で攪乱を受けている。

第II層 淡褐色砂層で、層厚が10～15cm。貝殻や獣魚骨が混入しているが、土器は出土しない。大泊浜貝塚の西端部と考えられる。

第III層 黄褐色で、層厚が15～20cm。遺物を包含しない無遺物層の間層である。

第IV層 暗褐色土層で、層厚が15～25cm。砂の堆積が始まる前の層。この層には下田原式土器や貝殻・獣魚骨・礫などが包含しており下田原貝塚の層である。

第V層 赤褐色の地山で層厚が25～40cm。

第VI層 赤黄褐色混砂土層で層厚30～40cm。遺物を含まない層である。

第VII層 淡黄色の砂質石灰岩で岩盤。

②遺構について

- 柱穴が検出されたが、明瞭なプランはつかめてないが平地住居跡の可能性が高い。
- 炉跡が6つ検出されている。そのうち第5号炉跡は長径約170cm、短径約90cmの楕円形、鍋底状に約10cm掘りくぼめられていた。6つの炉跡とも屋内炉か屋外炉かはつきりしなかった。
- 溝状の遺構が全長36m確認。排水的機能を有していたと考えられるが、今後の資料をまちたいと調査者は記述している。

③出土遺物について

- 土器：全て下田原式土器（口縁部64個、把手13個、底部11個、胴部858個）が出土した。下田原式土器の主な器形—底部角が丸味をもつ平底で、胴部が膨らみ、胴部から口縁部へと内彎し、最大径が胴部にある内彎形の浅鉢。
把手は牛角状把手が主体であるが僅かに横長把手もある。
有文土器は細沈線文1点だけの検出。

- 石器：石斧・石製利器・磨石・凹石・石皿・砥石・敲石・円盤状製品等総数207点出土。

- 骨・牙製品：総数で72点出土している。

- 貝製品：実用品・装飾品のほか二枚貝有孔貝製品等総数200点出土。

- 食料残滓：出土数が多い貝殻はチョウセンサザエ・シラナミガイ・マガキガイ・シレナシジミ・ヒメジャコ・サラサバティ・ヤコウガイ等。

脊椎動物の遺存体は魚骨・獣骨が多く、なかでもイノシシは多かった。イノシシの最小固体数283、これから1m²あたりの分布密度は0.992である。鳥類にはアホウドリ・カラス等のほかミズナギドリ目、チドリ目などと思われる海鳥の骨があった。

哺乳類にはオオコウモリ・クジラ類・ネズミ類・ジュゴン等がある。

- 木炭やシャコガイを使った放射性炭素による年代測定結果

シー-58 第Ⅲ層（貝殻） 3660+70yB・P・（3550+65y B・P）

シー-58 第Ⅲ層（木炭） 3740+85yB・P・（3630+80y B・P）

大泊浜貝塚の主な調査成果

- ①波照間北海岸の西端部、標高8mの砂丘で北側20mには珊瑚礁の発達した遠浅の海が広がる。下田原貝塚に隣接し、一部重複する。
- ②発掘によって1点の土器も発見されないことから無土器の貝塚である。
- ③第3層から3体の埋葬人骨が検出された。いづれも副葬品はなかった。検出された層

位は第3層の中位から第4層の上位まで掘り込んだ穴に埋められており比較的新しい人骨（12世紀以後）と思われると発掘担当者は記述している。

長崎大学医学部内藤芳篤教授の所見では成人男性2体、女性1体の合計3体。推定身長は男性160～161.5cmで比較的高い。

④第4層の無土器の層から白磁玉縁碗、白磁端反り碗、須恵器壺、滑石製石鍋、褐釉陶器壺、鉄鑿が出土。陶磁器の年代観が12世紀に編年される。

⑤礫床住居跡、炉跡遺構が検出された。礫床住居跡は3基検出された。第1号礫床住居跡は東側の一辺が約2.2m（一部の検出）。第2号礫床住居は約2.5m×3.0m、第3号礫床住居跡は、約2.5m×2mの方形である。

礫敷きの炉跡が2基と砂面上の炉跡が1基検出された。

⑥石器は石斧6点、敲石1点で石器が少ないのがこの貝塚の特徴である。

⑦鉄鑿が1点出土した。長さ17cm、基部は正方形で最大厚が約1.5cm、刃部は片刃に近い両刃状を呈していて最大幅が約2.5cmを測る。

⑧食糧残滓：貝類遺存体は60種。河川貝であるシレナシジミも出土している。

脊椎動物遺存体は391個の破片が出土。ヘビ目の脊椎骨79点。鳥類48点。哺乳類はコウモリが最小個体数11個、ネズミ2個体。イノシシの骨の破片総個体数9651個。食糧残滓のなかで最も多い出土量（全体の87.6%）である。

⑨木炭による放射性炭素の年代は次のとおりである。

D-22第6層 1350+75y B・P (1370+75y B・P)

D-22第10層 1770+70y B・P (1720+65y B・P)

G-22第11層 1560+70y B・P (1510+70y B・P)

H. 県教育庁文化課による八重山諸島地域におけるグスク跡（スク跡）分布調査

沖縄県教育庁文化課では1990（平成2）年度から1993（平成5）年度までの4年間国庫補助を得て八重山諸島地域におけるグスク分布調査を実施した。調査成果は1994年（平成6）3月『グスク分布調査報告書Ⅲ－八重山諸島－』として沖縄県教育委員会から刊行されている^⑩。

波照間島の調査は下田原城跡・伝マシユク村跡遺跡・伝ペミシユク村跡遺跡の三箇所行われている。報告書には豊見山禎の分担執筆で石垣遺構の略図と遺跡の概要が記されているが、石垣の墨線だけが描かれているため地形との関係がつかめず縄張図としては不備が多い。せっかく予算を使って雑木の伐採や試掘調査を行っているにもかかわらずあまりいい成果が得られてないのは惜まれる。

1. 国立歴史民俗博物館による村落調査

国立歴史民俗博物館は、1993（平成5）年度より「特定研究 奄美・沖縄の文化とその展開」の一部として3年間にわたり八重山における村落遺跡調査・測量を実施してきた。その中の波照間島調査に限っていえば、1993（平成5）年度にマシユク村跡遺跡の測量調査を実施し、さらに1995（平成7）年度ブンヤー遺跡の測量調査のほか二遺跡の測量調査を行っている。そして1997年（平成9）6月1日には、これらの調査をもとにして石垣市を会場に「再発見・八重山の村」というテーマで第25回歴博フォーラムが開催された。フォーラムでは国立歴史民俗博物館の小野正敏が波照間島のマシユク村や竹富島のハナスク村・クマラ村・シンザト村等の測量調査をもとに、これらの村のありようと発展段階について次のようにまとめている^⑥。

- ①道路がないこと、また、石垣の屋敷割りは方形ではなく、不整形で不均質の屋敷が細胞群のように連結し、石垣を狭く切った出入口によって屋敷から屋敷へと連続しているのが特徴である。
- ②これらの村の多くは、海岸に面した隆起珊瑚礁の崖上や島の中を走る亀裂の崖上に立地するという共通の特徴をもっている。
- ③崖上に積まれた石垣の規模が大きいことは崖と村を囲う石垣の意味の重さを示唆し、外からの視線を強く意識していて海から見る者に、村全体を石垣で囲う防御された村のイメージを強くする。

④これらの遺跡から採集される陶磁器はいずれも14世紀後半から15世紀のものである。さらにまた、発見される陶磁器から村の発展段階については大きく4段階に分けられるという。すなわち、Ⅰ期が12世紀末～13世紀、Ⅱ期が14世紀後半～16世紀始め、このⅡ期に石垣の屋敷割りが出現するが、道路がない村である。また、村の立地として現集落に近い村と現集落から離れた崖上の村とがある。Ⅲ期は、17、18世紀の近世陶磁が拾える遺跡であるが、その構造については不明である。波照間では現集落の近くに少しずつ存在したらしい。Ⅳ期が現在の集落に連続する村で道路と石垣で区画された村である。

なお、マシユク村等の崖上の石垣で囲われた村は、15世紀後半から16世紀初めに移動廃絶しているとも述べ、特に14、15世紀に村が防御される理由は二つ予測されるとして、「倭寇と琉球王府の南進に伴う緊張」だとしている^⑦。

以上、国立歴史民俗博物館の調査についての報告書はまだ刊行されていないが、フォーラムという形でその成果の一部が公表されており、波照間の中世期の村を考えていくうえで私たちに多くの示唆を与えてくれている。

J. 波照間島における考古学上の遺跡の概要

1979年から1980年にかけて沖縄県教育庁文化課が実施した遺跡分布調査では、島内で16遺跡が報告されている。今回の調査で新たに数カ所の遺跡を追加することができた。以下これまで知られている遺跡の概要を記すことにする。

下田原貝塚

前述したように金関チームと早稲田大学の八重山調査団によって発掘され、その時に出土した遺物はすでに報告されている^⑧。1956年（昭和31）10月19日に県の史跡として指定された。現在は、荒地として放置されている。原名が示すとおりかつては水田があったところで、近くには湧水源も認められる。

大泊浜貝塚

下田原貝塚の東に隣接する砂丘遺跡である。海に面して発達する砂浜は大泊浜（島の人はブドゥマイパマと呼ぶ）といい、遺跡名はその浜に由来している。遺跡が立地する砂丘の大きさは標高6～8m、長さ約150m、幅50m程の小規模のものである。一部下田原貝塚と重なっているために両遺跡が別々のものだという認識だったが、1982年阿利直治の精査によってはじめて無土器文化に属する貝塚だということが確かめられた^⑨。なお、発掘調査による地形復元の結果では、貝塚形成の初期まで下田原貝塚の高い位置（標高約8,5m）との比高差が3～4mあったらうといわれている。遺跡の内容については前項を参照。

下田原城跡

下田原貝塚の南後方の石灰岩台地の縁辺に3～4mの断崖を利用して築かれている。標高25mを測る北西向きの急峻な崖を背にして築かれた石塁は、比高約3～4mも残るところがあり、最高所の「物見台」、窪んだ石室風の「兵器庫」と伝える遺構、各曲輪をつなぐ虎口、そして北側の崖下に井戸跡と思われる遺構が明瞭に残っている。遺跡内からは15～16世紀に属する貿易陶磁器が採集される。なお、「物見台」の石垣の上からはフィゴの羽口と鉄滓が得られた。かつてブリブチ公園として島の老人会によって整備されていたが、現在は荒れ放題になっている。「日本再南端の島々に位置し、戦災や後世の改変を受けずにきわめて良好に保存されてきた城跡であり、琉球が統一国家を形成するという歴史上重要な時期の様相を明らかにする上で貴重な遺跡である」として国の史跡に指定すべく文化財保護審議会から答申を受けたが、一部地主の同意が得られないまま現在まで指定作業が進んでいない。

伝マシユク村跡遺跡

タカッチと呼ばれる島の北海岸にある。通称マシユク山と呼ばれる海岸べりの切り立つ断崖の上に築かれた遺跡で海を意識して高い石塁をめぐらしている。石塁の石垣の高さは海に面したところで最も高く平地との比高差約2.5 m～3 mある。リーフの切れ目に向かった所に虎口があり、その左右には高い石垣を築き相横矢が掛かる仕掛けになっている。細胞群のように連結した石塁の中や石垣の上から貿易陶磁器や八重山式土器の破片が採集される。なお、国立歴史民俗博物館では250分の1の遺跡測量図を完成させている。

伝シムス村跡遺跡

伝マシユク村跡の東方に連続する遺跡である。伝承ではシムス村があったとされ、シムスケーと呼ばれる井戸が現在でも残存する。この井戸をほぼ中心にして琉球石灰岩の石塁遺構が見られる。貿易陶磁器と八重山式土器が採集される。

伝ウツォウ村跡遺跡

南部落の南側に連続する畑地一帯から貿易陶磁器や八重山式土器が採集される。伝承によれば付近一帯にウツォウ村があったと言われている。遺跡の名はそれに由来する。現在圃場整備事業が進行し、遺物はほとんど採集されない。

伝ヤグ村跡遺跡

保多盛御嶽周辺遺跡の西に隣接する。この付近にはかつてヤグ村があったといわれ、現在でも当時の井戸や屋敷囲いの石塁等が僅かに残存する。井戸を中心とした周辺の畑・山林などから貿易陶磁器や八重山式土器が採集される。現在、大掛かりな圃場整備事業の進行により付近の地形は一変し、表面踏査での遺物採集は困難となった。なお、「南波照間伝説」で有名な村はこの遺跡周辺に展開していたヤグ村だったといわれている。

伝ペミシユク村跡遺跡

外部落の東南約600mに位置し、ほぼ東西に走る琉球石灰岩の亀裂の崖上に立地する。崖上を上手く利用しながら琉球石灰岩の岩塊を積みあげた石塁遺構を内容とする遺跡で、この石塁遺構を中心とする一帯にはかつてペミシユク村があったと伝承されている。遺跡の名はその伝承に由来する。現在、圃場整備事業によって周辺の前野や畑が改変され、圃場整備された畑地の中に石塁遺構のみぼつんと残された状態である。圃場整備以前には周辺の畑地から貿易陶磁器や八重山式土器が採集された。

石塁は外からの視線を強く意識して築かれており、石垣の上には武者走り状になってい

るところも見られる。

伝ミシュク村跡遺跡

島の西北端の海岸砂丘上に形成されて遺跡で細胞群のように連結した石塁遺構を内容とする。近くの家はリーフの切れ目が入っており、一時期艇船等が停泊したという。伝承ではミシュク村があった場所とされ、遺跡名はその伝承に由来する。遺跡全体がハスノハギリの群落に覆われていて日中でも薄暗い。石塁内には数箇所の拝所とミシュクケーと呼ばれる井戸が見られる。遺跡を区切る南側には涸れ川となった窪地が内陸から海に向かって細くのび、石塁群を区画する障壁の役目をなしている。なお、この窪地の南に展開する海岸部は砂丘を形成しているが、この砂丘地の採砂の際人骨が出土した。その時に掘り出された人骨は幸いコンクリート製の仮墓（毛原第一墓と呼ぶことにする）を作って納骨されていたため保存状態が良好であった。現在これらの人骨については琉球大学に運ばれ土肥直美助教授によって整理が行われている。人骨等の調査概要については別項を参照。

美底御嶽周辺遺跡

北部落の美底御嶽を中心とした直径150m四方の範囲において貿易陶磁器や八重山式土器の散布が見られる。先のジョージH・ケアー氏の調査ではこの遺跡をアタンシおよびアタンシ近辺と呼称されていて、多量の貿易陶磁器が採集されている。『沖縄出土の中国陶磁器(上)』には、アタンシおよびアタンシ近辺の採集遺物の実測図が15頁にわたって掲載されている。現在、これらの貿易陶磁器はジョージH・ケアーコレクションとして沖縄県立博物館に収蔵保管されている。コレクションを整理した亀井明德氏は「元後半から明代前半期に位置づけられるものが大半を占め、これにつづく明中期のものを若干含んでいる^{*)}」と所見を述べている。

現在、この遺跡周辺は農地改良や東京オリンピックの際の採火記念碑の建立等によって土地が改変され、地上での遺物採集は困難になっている。

北部落内遺物散布地

北部落内の北西隅にあたる付近で中心部が現在の民家の屋敷地と重なっている。美底御嶽周辺遺跡に近接していることからそれに連続する同一遺跡の可能性もある。

新本御嶽周辺遺跡

新本御嶽の前庭部や御嶽に隣接する民家の屋敷囲いの石垣および道路上で貿易陶磁器や八重山式土器等の遺物が採集される。

大底御嶽周辺遺跡

前部落と南部落に挟まれた大底御嶽を中心にして御嶽の石塁内および周囲の畑地から貿易陶磁器や八重山式土器等の遺物が採集される。御嶽内の石塁は琉球石灰岩の岩塊を幅約1m、高さ約80～90cm程に積み上げたもので、石積み形態は全て野面積みになっている。この石塁の一角には、四枚の盤石を四角に組み合わせてつくった井戸枠を有する井戸が二箇所存在する。なお、道路を挟み南向かいのアカハチ生誕地と呼ばれる小高くなったところまで遺物の散布がみられるが、ここには特に「伝オヤケアカハチ生誕の地」という遺跡名を冠し、遺跡名が区別して呼称されている^⑧。

伝オヤケアカハチ生誕の地

前述したように大底御嶽周辺遺跡とは道路を挟んで南に隣接する。標高約40mを測り、島内でも高い位置にある。周辺との比高は約1～2m程でやや小高い丘の上に営まれている。現在、野菜畑になっているが、耕作の際に貿易陶磁器や八重山式土器等が露出することから遺物包含層は比較的上位にあるものと判断される。竹富町指定の史跡である。

名石御嶽周辺遺跡

遺跡は名石御嶽の境内から西側にかけて広がり、アサゴ山と呼ばれる微高地付近が境界となる。屋敷地の野菜畑や道路および屋敷囲いの石垣の中から貿易陶磁器や八重山式土器等が採集される。アサゴ山の微高地には琉球石灰岩の石塁遺構が確認されるが、全体がブッシュに覆われ調査困難で未調査になっている。一説にはカンツアズマナグという豪族が居を構えていた場所だともいわれている^⑧。

イナサイ遺跡

島の西方、通称イナサイと呼ばれる海岸を中心とする一帯に広がる遺跡である。集落から波照間島港に通ずる道路によって遺跡が分断され、工事の際その断面より貿易陶磁器や八重山式土器等が出土した。時代は不詳だがこの付近の海岸にフィリピンから来た人々が居住していたという伝承がある^⑧。

保多盛御嶽周辺遺跡

外部落の西端にある保多盛御嶽や保多盛家の屋敷地およびその周辺の畑地に形成された遺跡であり、貿易陶磁器や八重山式土器等が採集される。20数年前までは、畑の耕作等によって露出した貿易陶磁器が畑の畦や御嶽の石垣などに積みあげられていたが、圃場整備が進行した現在表面踏査では遺物の採集がほとんどできない状態である。

その他の遺跡

その他にも隆起珊瑚礁の崖上や断層活動によって生じた亀裂の崖上等に築かれた石塁遺構を内容とする遺跡が存在する。ペミシュク、庸原ブシャー、クツシアジマグ、ボッシュ、キャバルヤマ、ナッツアブヤーと呼ばれているのがそれである。いずれも英雄伝説と結びつき、遺跡内やその周辺から八重山式土器とともに14~15世紀頃の貿易陶磁器が採集される。

現在、遺跡自体深いブッシュに覆われているため中に踏み込んで石塁遺構の全体像をつかむのになかなか容易でない。したがって今回は、島内で伝承されている名称を付して地図上にプロットしておくにとどめた。

なお、これらの遺跡については農地開発によって破壊される危険があり、できるだけ早い時期に石塁遺構の測量調査を中心とする学術的な総合調査を行う必要がある。

おわりに

波照間島での考古学的調査は、八重山考古学のなかで一つのエポックとなる調査が多かった。金関丈夫チームの調査成果は沖縄の起源論争を生み、その後の早稲田大学調査団や沖縄県教育庁文化課による発掘調査は八重山考古学研究を進展させる上で大きな転機をつくった。考古学研究者にとって波照間島はまさに学問的魅力の多い島なのである。

おわりにあたって、波照間島における先史時代の素描を試みることにしよう。

これまでの考古学上の成果をふまえると、波照間島に最初に人間が住み着いたのは今からおよそ3千7、8百年前のことであった。この時代の人々は島の北海岸、比較的水が得やすく海に面した下田原というところにそのコロニーをつくっていた。彼らが残した生活の痕跡が下田原貝塚であり、貝塚形成の状況からは長期にわたって定住生活をして様子がよくわかる。また、発掘された柱穴の状況から彼らの住居が簡素な平地式住居だったことも確認されている。

生活に必要な容器は、底部のすみっこが丸みをおびる平底で、胴部がふくらみ、最大径が胴部にある内彎形の浅鉢である。そして、口の近くに牛角状把手のついたのが特徴的である。考古学研究者たちによって下田原式土器と名付けられたこの土器のルーツについては、沖縄や本土といった北の文化には見られない独特な特徴を有していることから南の方につながる土器だと考えられている。ところが、具体的にどこの土器かというところその祖型については全く謎に包まれている。つまり、波照間島に最初に定住した人々のルーツについては、ただ漠然と「南方系」だということだけで、その他のことについてはほとんどわかっていないというのが実情である。

下田原貝塚人たちは土器ばかりでなく、石、骨、貝で作った利器を数多く残し、かなり

進んだ石器・骨器・貝器文化を有していたことが裏付けられている。石器については25kmも離れた西表島に原料を求めており、舟を操り西表島との往来が頻繁だったことがわかっている。また、貝塚からは食料残渣としてのイノシシの遺存骨が大量に発掘されているのも興味を引く。現在の波照間島にはイノシシはいないが西表島には多く棲息している。石器の材料が西表島から求められたようにイノシシもまた西表島から持ち込まれたのであろう。下田原貝塚出土のイノシシの骨について研究した金子浩昌は、下田原貝塚出土のイノシシのうち1.5才以上が67.6%を占めていることから「若し、イノシシの飼育という問題があったとすれば、1.5才未満の個体が最も多くなるのではないかと思われる」と述べ²⁰、イノシシの飼育に否定的見解をとっている。イノシシが石器の材料と一緒に西表島から運び込まれた可能性は高い。

下田原貝塚人がいなくなった後も海岸から吹き上げられる砂は年々厚く堆積し、やがて付近一帯に砂丘が形成するようになる。この砂丘上に今から千五・六百年前人間が住み着くようになった。大泊浜貝塚人の登場である。彼らが生活したあとの痕跡は、下田原貝塚東隣りの大泊浜に貝塚として残されている。

大泊浜貝塚人たちはこの砂丘を中心にして比較的長期にわたって生活していたたようである。発掘調査では砂丘の形成と貝塚形成が何度もくりかえされていった様子が確かめられている。大泊浜貝塚人のG-22という発掘区では第1層から第21層までの層序が確認され、地表面から約3.4mの深さに達していることがわかった。その間の時代幅は、C₁₄年代の結果によるとおよそ4~12世紀に相当する。

大泊浜貝塚は無土器の貝塚であり、無土器文化の特徴を有する新石器無土器時代の人々が残した貝塚である。人類発展史の上でみると、無土器の時代から有土器の時代へというコースをたどるといのが一般的な見方である。そのことからすれば、この大泊浜貝塚の事例はきわめて特異な現象だといえることができる。なお、こういった先史文化の特徴は宮古・八重山先史文化全般に見られ、波照間島だけに限ったことではない。

ではここで新石器無土器時代の特徴点について少し触れることにしよう。

この時代に属すると考えられる遺跡は現在のところ30数遺跡が知られている。宮古・八重山地方に限定され沖縄本島以北にはおよんでない。現在、そのうちの9遺跡が調査済

高宮廣衛による八重山地方の考古編年

歴 (原) 史 時 代	川平貝塚文化	後期(バナリ焼)
		前期
		中森式土器
		ピロースク式土器
		新里村式土器
先 史 時 代		名蔵貝塚文化(貝弁)
		仲間貝塚文化(石弁)
	(仲間第二式土器)	
時 代	下田原式土器	
	下田原貝塚文化(有土器文化)	仲間貝塚文化(無土器文化)

高宮廣衛「八重山考古学研究略史」
陳奇祿院士七秩榮慶論文集、1992年より

みである^②。高宮廣衛はその調査成果をもとにして、無土器文化には石斧を主体とする石器文化（仲間貝塚文化）と貝斧を多く出土する貝斧文化（名蔵貝塚文化）の2種の異なる文化が含まれているとし、そして、後者が新しく前者は古いと考え、前表のような八重山考古学上における文化推移のモデルを考えた^③。大泊浜貝塚の場合にはこのモデルでみると石器文化（仲間貝塚文化）に相当することになる。

大泊浜貝塚は前述したように4～12世紀の文化を包含する貝塚であるが、その上層の第4層からは薄手の白磁玉縁碗、薄手の白磁端反り碗、カムイ焼、九州産滑石製石鍋、鉄鑿等が共伴して出土した。発掘担当者は陶磁器の年代観からほぼ12世紀頃に納まるものとの認識を示している。

以上の考古学的成果をふまえると、12世紀頃の波照間島は土器の無い時代であるが、鉄器や貿易陶磁器はすでに島内に入っていて、九州産の石鍋やカムイ焼等も流通していたことになる。石鍋は滑石という蠟に似た軟らかい石をくりぬいて製作した鍋で、保温性にすぐれている。カムイ焼は徳之島で焼かれた青灰色の焼物でトカラ列島から波照間島、与那国島まで広く琉球一円で発見され滑石製石鍋とはセットで発見されることが多い。石鍋は、九州での当時の相場で石鍋四個で牛1頭に相当する値で取引されており相当高価な品であった^④。おそらくカムイ焼なども当時としては高価な品であったのであろう。こういった石鍋やカムイ焼、あるいは鉄器、貿易陶磁器等は商品として流通したものである。これらの品々が遺物として大泊浜貝塚から出土するのである。では、こういった商品がどういう経路で誰によって波照間島まで運ばれてきたのだろうか。

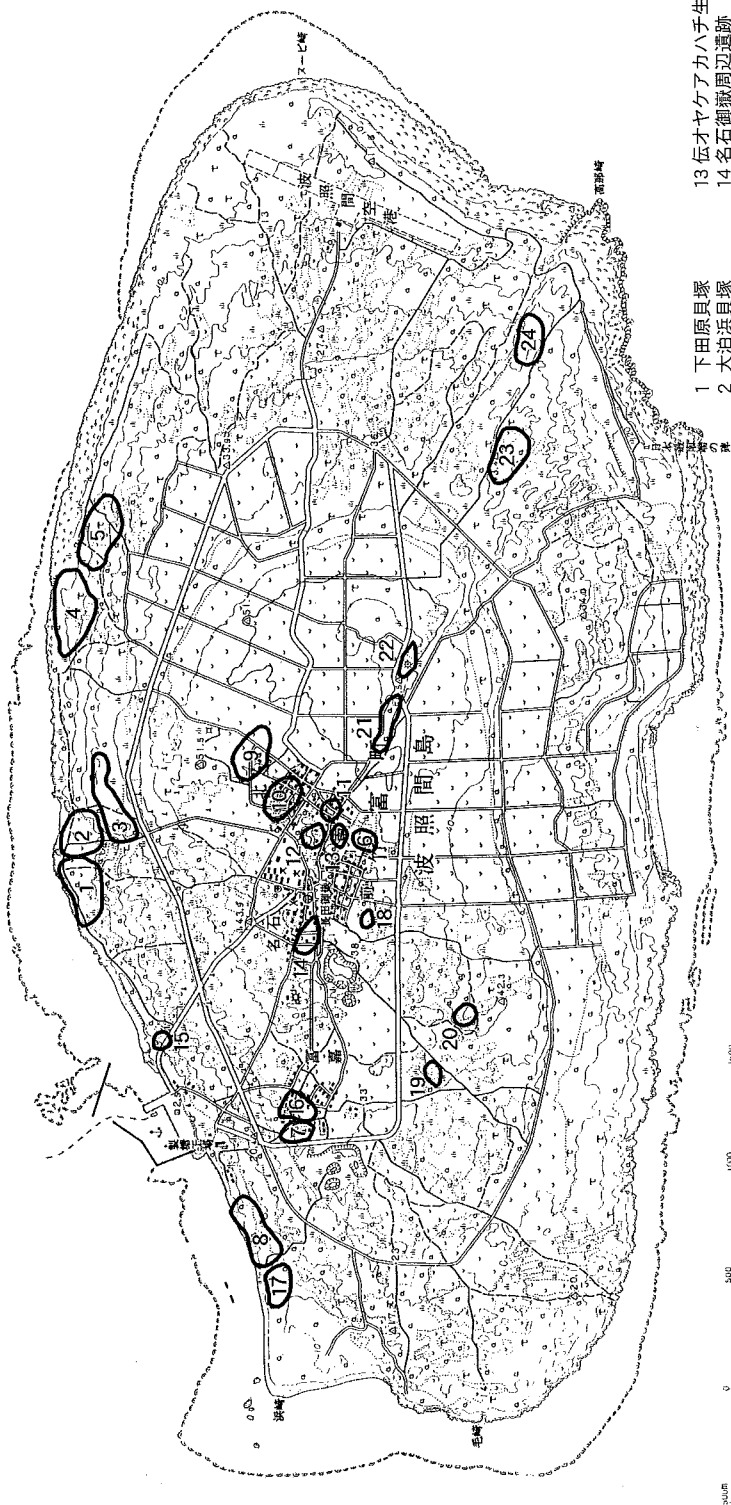
この頃の東アジア情勢は中国の海洋商人たちを中心とする自由な海外貿易の隆盛期を迎えており、その余波は南の小さな島々まで押し寄せていたと思われる。大泊浜貝塚から出土する鉄器、貿易陶磁器、カムイ焼、滑石製石鍋のほか、石垣市の崎枝赤崎貝塚や西表島の仲間第一貝塚などから発見された開元通寶等もこの東アジアの大きなうねりのなかでもたらされたものと考えられることができる。

註

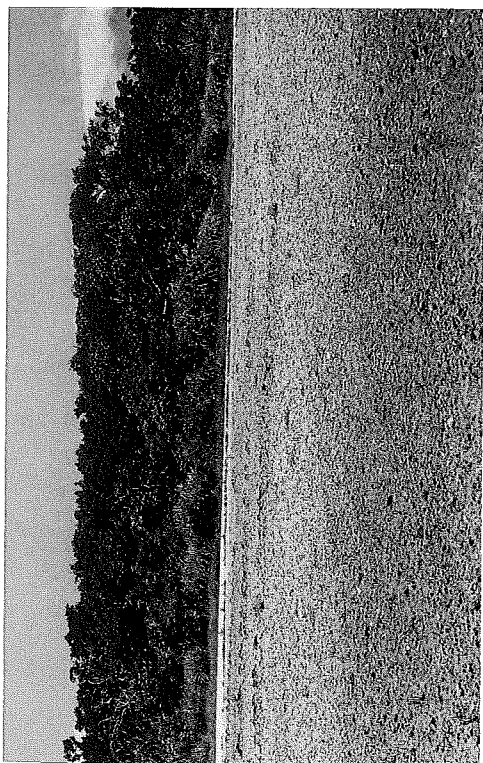
- ①鳥居龍蔵「琉球二於ケル石器時代ノ遺跡」『東京人類学会雑誌』94号、1894年
- ②金関丈夫・国分直一・多和田真淳・永井昌文「琉球波照間島下田原貝塚の発掘調査」『水産大学校研究報告人文科編』9号、1964年
- ③金関丈夫「八重山群島の古代文化—宮良博士の批判に答う—」『民族学研究』19巻2号、1955年
- ④金関丈夫「波照間—琉球通信4—」『朝日新聞』西部版 1954年4月14日号
- ⑤前掲書③

- ⑥金関丈夫・国分直一「琉球波照間島下田原貝塚調査報告」『東京人類学会・日本民族学協会聯合大會記事』9號、1955年
- ⑦前掲書②
- ⑧多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」『1956年度版文化財要覧』琉球政府文化財保護委員会、1956年
- ⑨滝口宏編『沖繩八重山』校倉書房、1960年
- ⑩ジョージH. ケア・亀井明德・知念勇『沖繩出土の沖繩陶磁（上）－ジョージH. ケア氏調査収集資料－先島編』沖繩県立博物館、1982年
- ⑪ジョージH. ケア・亀井明德・知念勇『沖繩出土の沖繩陶磁（下）－ジョージH. ケア氏調査収集資料－沖繩本島編』沖繩県立博物館、1983年
- ⑫岸本義彦ほか『竹富町・与那国町の遺跡』沖繩県文化財調査報告書第29集 沖繩県教育委員会、1980年
- ⑬金武正紀ほか『下田原貝塚・大泊浜貝塚－第1・2・3次発掘調査報告－』沖繩県文化財調査報告書第74集』沖繩県教育委員会、1986年
- ⑭金武正紀ほか「大田原遺跡」『石垣島県道改良工事に伴う発掘調査報告』沖繩県教育委員会、1980年
- ⑮大城慧ほか『グスク分布調査報告書（Ⅲ）－八重山諸島－』沖繩県文化財調査報告書第113号 沖繩県教育委員会、1994年
- ⑯『第25回歴博フォーラム 再発見・八重山の村』国立歴史民俗博物館、1976年
- ⑰前掲書⑫
- ⑱前掲書⑨
- ⑲前掲書⑬
- ⑳亀井明德「先島諸島採集の輸入陶磁器」『沖繩出土の沖繩陶磁（上）－ジョージH. ケア氏調査収集資料－先島編』沖繩県立博物館、1982年
- ㉑前掲書⑫
- ㉒加屋本正一『波照間島』1978年
- ㉓宮良高弘『波照間島民俗』叢書わが沖繩、1972年
- ㉔高宮廣衛「八重山地方新石器無土器期石斧の推移（予察）」『南島考古』No.14 沖繩考古学会、1994年
- ㉕高宮廣衛「八重山考古学研究略史」陳奇祿院士七秩榮慶論文集、1992年
- ㉖森田勉「滑石製容器－特に石鍋を中心として－」佛教藝術148号、1983年

波照間島の遺跡分布図



- 1 下田原貝塚
- 2 大泊浜貝塚
- 3 下田原城跡
- 4 伝マシユク村跡遺跡
- 5 伝シムス村跡遺跡
- 6 伝ウツオウ村跡遺跡
- 7 伝ヤグ村跡遺跡
- 8 伝ミシユク村跡遺跡
- 9 美底御嶽周辺遺跡
- 10 北部案内遺物散布地
- 11 新本御嶽周辺遺跡
- 12 大底御嶽周辺遺跡
- 13 伝オヤケアカハチ生誕の地
- 14 名石御嶽周辺遺跡
- 15 イナサイ遺跡
- 16 保多盛御嶽周辺遺跡
- 17 毛原第一墓
- 18 庸原第一墓
- 19 ベクミンシユク
- 20 庸原フシマク
- 21 クッシユク
- 22 ポツシユク
- 23 キヤバルヤマ
- 24 ナナツアアヤ



図版1 クッシアジマグ (雑木林の中に石罫遺構がある)



図版2 クッシアジマグの石罫遺構



図版3 キャバルヤマ (このブッシュの中に石罫遺構がある)



図版4 キャバルヤマの石罫遺構



図版5 ギャバルヤマの石塁遺構



図版6 土地改良区の中に残されたペミシユク
(中央の雑木林の中に石塁遺構がある)



図版7 ペミシユクの石塁遺構



図版8 ナツァアブヤー（この雑木林の中に石塁遺構がある）

毛原第一墓・庸原第一墓の調査

仲間留美

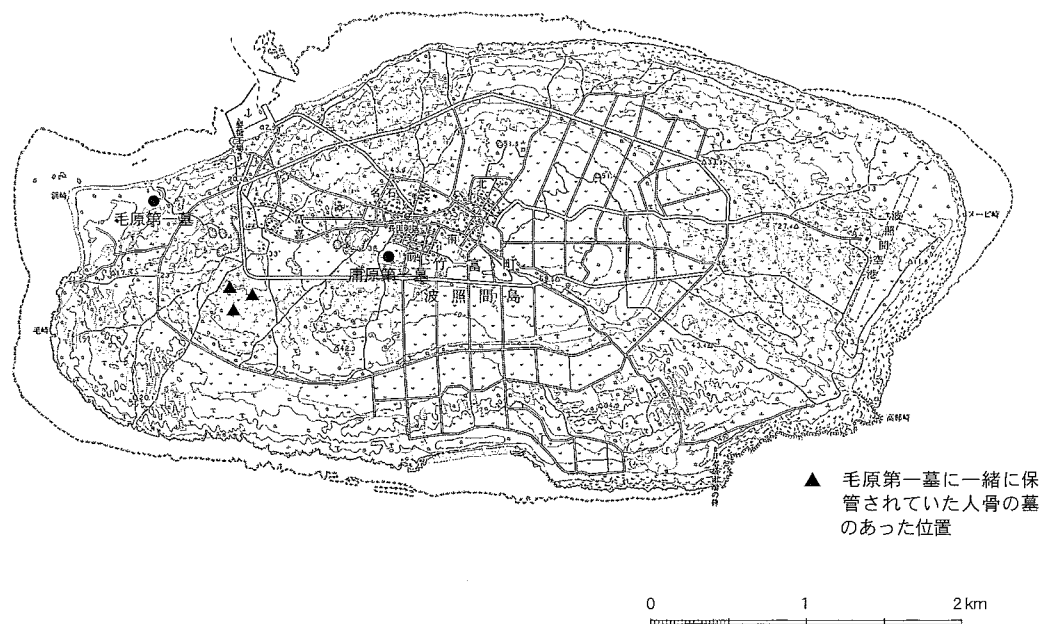
1. 毛原第一墓

1. 位置と環境

島の北西部、ミシユク村跡の西側、涸れ川を挟んだ砂丘上に立地する（第1図）。周辺は採砂工事によりくぼ地となっており、人骨等の保管場所として工事関係者によって設置されたものである。この一帯は「毛原」と呼ばれている事から、毛原第一墓と命名した。

2. 調査経過

砂丘での採砂工事の際に人骨及び獣骨等が露出したため、工事関係者により採砂現場に保管施設が設置された。その後、島内の土地整備工事等により、所有者不明の古墓から検出された人骨も一緒に保管されていた（図版1）。この施設は、約1.5m四方の立方体で、自然災害にも十分絶えられるようコンクリート製になっており、上からコンクリート製のフタを被せるものであった。人力では開封できないため、地元業者にユニックでフタを持ち上げてもらい、設置した関係者立ち合いのもと現地で人骨の分類作業を行なった。人骨の保存状態は良好で、砂丘からの人骨と古墓の人骨は区別して保管されていたため分類作



第1図 毛原第一墓・庸原第一墓の位置



遠景



近景



保管状況



保管されていた人骨



分類作業の様子

図版 1 毛原第一墓の周辺・調査の状況

業もスムーズに進んだ。現在得られた資料は、人骨は琉球大学、その他共伴遺物は県立博物館で保管している。人骨は、調査員の土肥直美琉球大学助教授により分析作業が進められ、共伴遺物に関しては、県立博物館で整理作業を行なった。

3. 資料紹介

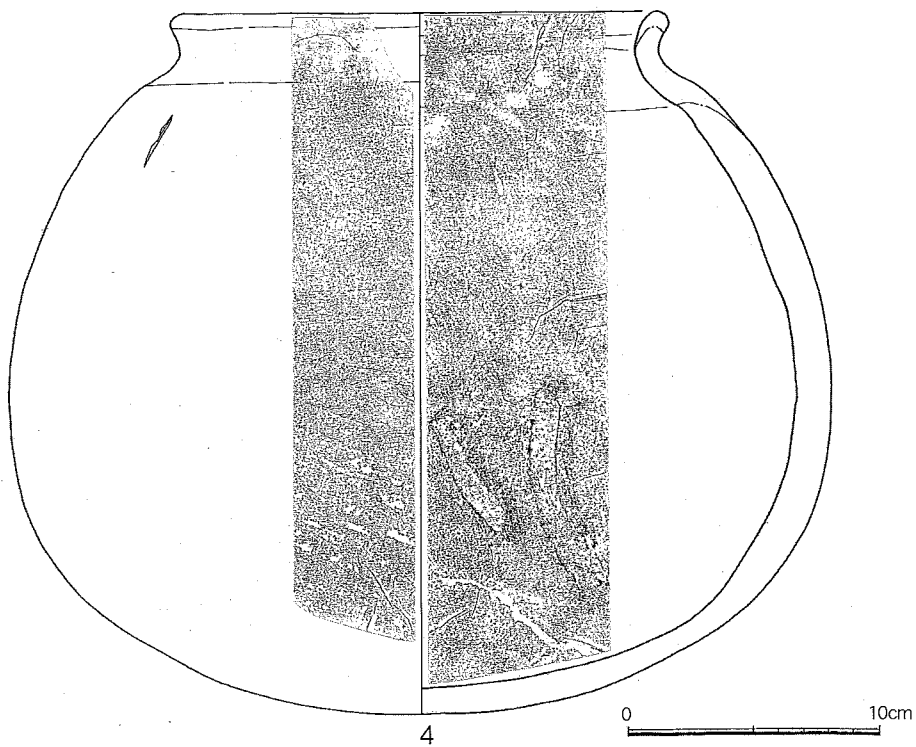
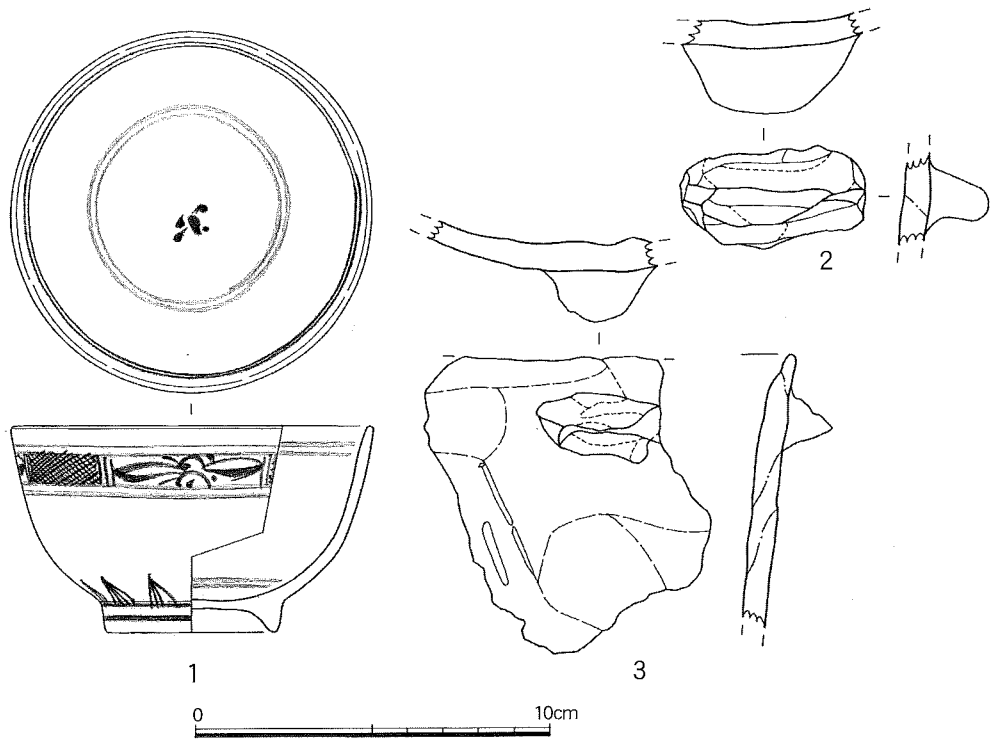
人骨、獣骨及び人工遺物6点が得られた。人骨に関しては、土肥氏により報告されるため(P. 96～)、ここでは、人工遺物についてのみ記載する。人工遺物の内訳は、土器5点、染付1点で、小片の無文胴部片2点をのぞく、4点を図示した(第2図、図版2)。

第2図1は、染付の直口口縁の碗で、型造りによる成形である。呉須はやや鮮明で、釉は艶のある白色。外側面の口縁には二条一組の界線の間が八つに区画され、1区画に斜格子と花?の文様が交互に描かれている。また、高台外面には二条の界線、高台際の間隔を空けた蓮弁文が描かれている。内側面の口縁部及び見込みにも二条一組の界線がみられ、また見込みには解釈不明の小さな文様が描かれている。釉は高台内面及び畳付けまで施し、口唇には茶褐色の釉薬が施されている。口径10.6cm、底径4.8cm、器高6.0cm。

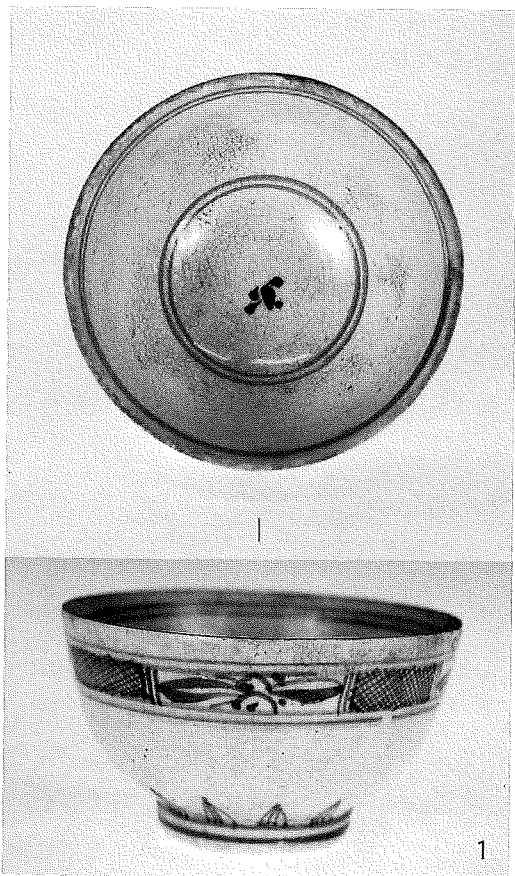
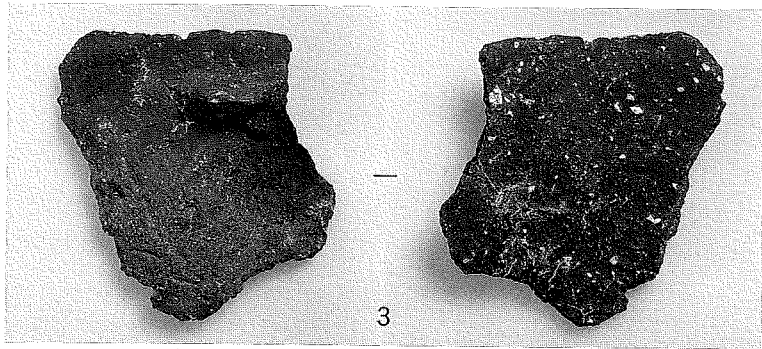
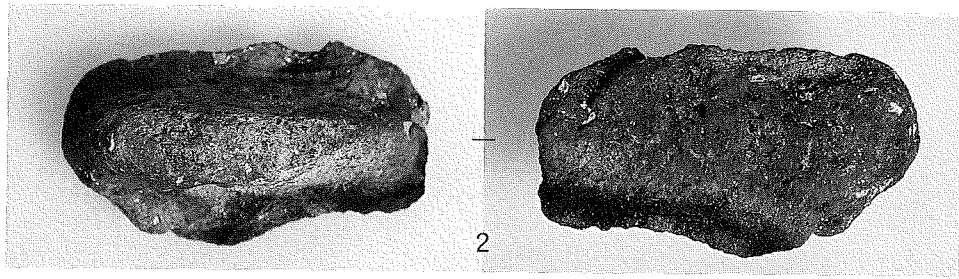
第2図2は、把手破片である。把手の大きさは、幅1.0cm、残存部の長さ5.2cm、厚さ1.6cmであった。把手の造りは、ナデや指圧で丁寧に調整され、内面の器面調整も比較的丁寧である。器色は、外面が明茶褐色、内面が茶褐色。焼成は良い。胎土は細かく少量の貝殻の細片、石灰質の砂粒を含む。器厚は0.7cmを測る。⑫の人骨に共伴。

第2図3は、雑な外耳(横耳)を貼り付けた口縁部片である。耳の位置は、口唇から9mm下である。耳の大きさは、幅1.8cm、残存部の長さ3.5cm、厚さ1.5cmであった。口縁は僅かに外反し、口唇の形態は尖り気味である。外面は雑なナデ調整で、内面は外面よりも丁寧なナデ調整を施す。器色は、外面が淡褐色、内面が明茶色。焼成は良好で硬い。胎土は粗く、少量の貝殻の細片、石灰質の砂粒、石英等を僅かに含む。器厚は0.7cmを測る。⑧の人骨に共伴。

第2図4は、パナリ焼の資料で約半分が欠損している。ややナデ肩の丸底の壺で、口唇は外反し、全体的に欠いている。胴部上面には、長さ2.3cm、幅0.2cmのヘラによる刻み文が見られる。器面調整は丁寧で、外面の口縁から胴部にかけてはナデ調整、底部は丁寧な篋削りが施されている。内面の器面調整は全体にナデ調整が施されているが、底部付近は全体的に調整時の指圧痕が残る。器色は、外面が暗褐色、内面は口縁が暗褐色で底部は茶褐色。焼成は良く硬い。胎土は細かく、少量の石灰質の細砂粒を含む。器厚は1.0～1.6cmを測る。推算によるサイズは口径19.4cm、最大胴径32.2cm、器高27.3cmである。



第2図 毛原第一墓の遺物 (1. 染付 2・3. 土器 4. パナリ焼)



図版2 毛原第一墓の遺物 (1. 染付 2・3. 土器 4. パナリ焼)

II. 庸原第一墓

1. 位置と環境

前集落の南西方向、幅約10mの岩盤の南西方向岩陰に立地する（第1図）。洞口は西南西の方角、奥行き3.0m、幅5.7mである（第3図）。周辺は以前田んぼとして使用されていたが、近年荒れ地となっていた。この一帯は「庸原」と呼ばれていることから、庸原第一墓と命名した。

2. 調査経過

庸原地区圃場整備工事により土地整備が行われているため、緊急に調査に入った。7月の調査時点で土地整備が進み、岩陰墓を残すのみであった（図版3）。人骨は十数袋の土のう袋に入った状態で、岩陰墓内に保管されていた。また、検出された人骨に関しては地元の新聞に無縁仏の広告が出されていて移動ができなかったため、現地で分類及び計測を行った。共伴した人工遺物に関しては、県立博物館で整理作業を進めた。人骨は、8月の期限以降は毛原第一墓に保管されている（1998年3月現在）。

3. 資料紹介

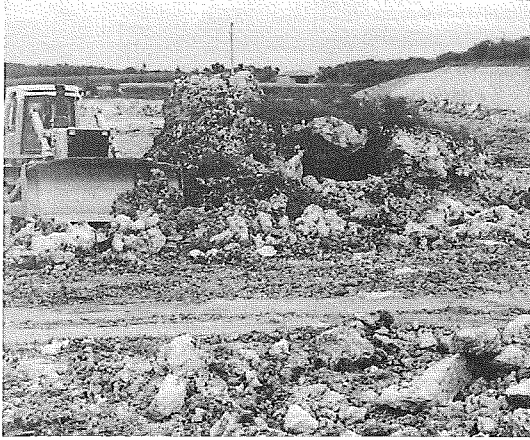
人工遺物の内訳は、染付4点、キセル1点、貝製品1点の計6点である。その内4点を図示した（第4図、図版4）。人骨に関しては土肥氏により報告されている（P. 96～）。

第4図2は、タカラガイの背面部を打ち欠いていたもので、研磨調整は施さず、ヒモズレ痕も見られない。法量は、殻長3.2cm、殻幅2.3cm、孔の長径2.1cm、孔の短径1.3cm、重量6.4gであった。

第4図1は、金属製のキセルの雁首である。パイプ型で、羅字接続部が破損しているもののほぼ完形である。首部の湾曲は弱い。法量は長さ5.9cm、火皿径0.8cm、羅字接続部径1.0cm、重量11.8gであった。

第4図3は、肥前系の染付で直口口縁の小杯である。呉須はやや鮮明で、釉は淡い青白色。外側面は、簡略化された折枝松、烏らしきもの等の文様が描かれている。また、口縁部及び高台外面にそれぞれ一条の界線をめぐらす。内側面は、見込みに「元」の文字、口縁部及び見込みに一条の界線がみられる。釉は高台外面の途中で釉削ぎされ、畳付け及び高台内面は露胎。畳付けは外内面より削り出して成形している。口径4.5cm、底径2.0cm、器高2.9cm。

第4図4は、雲南系の染付で、逆「八」字状に開く浅い碗である。外面には轆轤痕が顕著に見られる。呉須は不鮮明で、釉は灰色がかった白色。施釉の範囲は、外面は畳付けまで施し、外面下部には指痕らしきものがみられ、高台内面は露胎。また内面は見込みまで

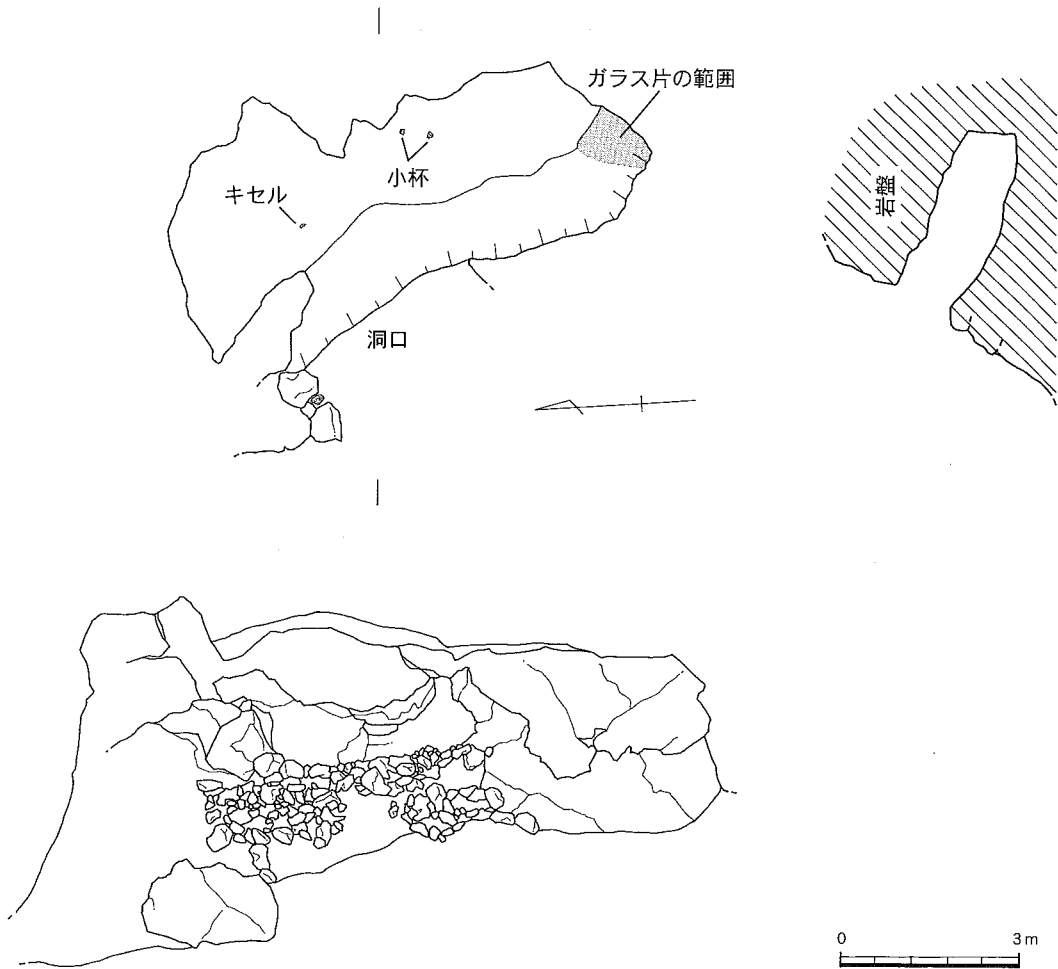


近景

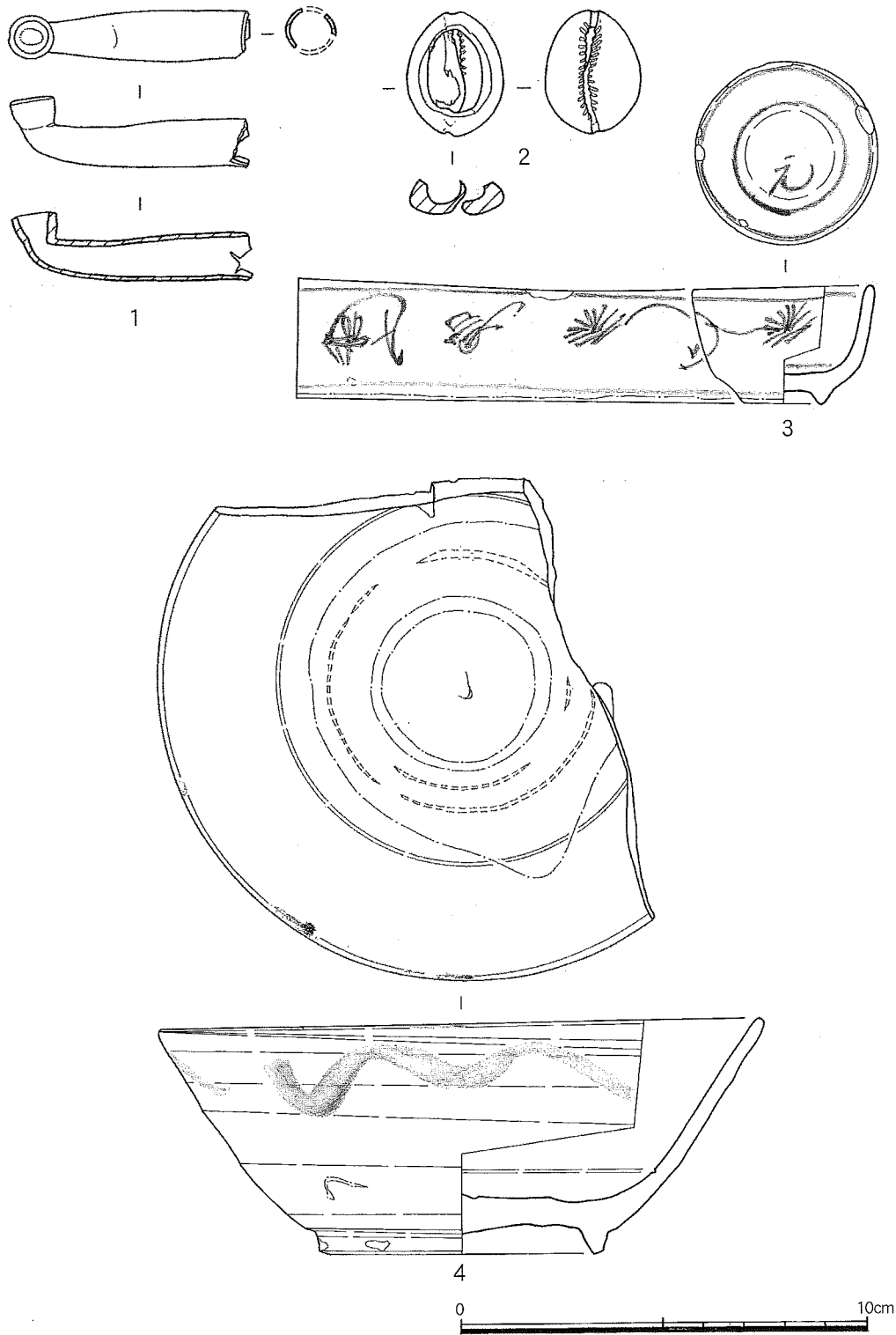


調査の状況

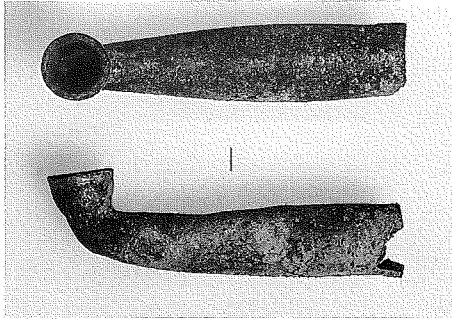
図版3 庸原第一墓の周辺・調査の状況



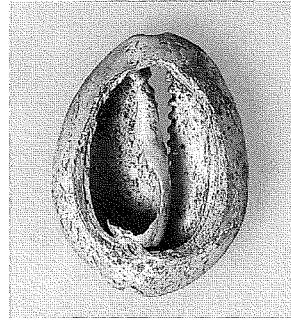
第3図 庸原第一墓（正面図・平面図・断面図）



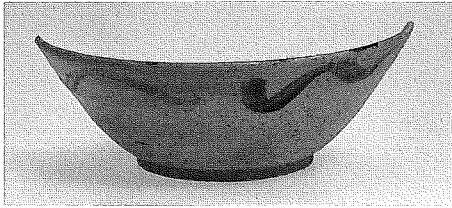
第4図 庸原第一墓の遺物 (1. キセル 2. 貝製品 3・4. 染付)



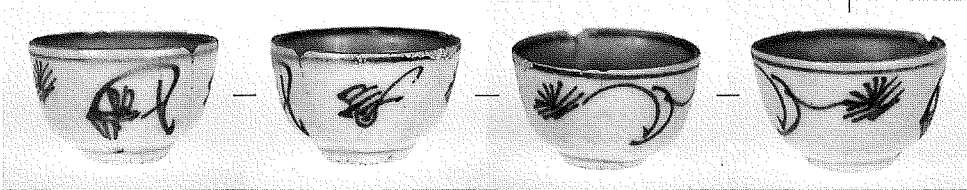
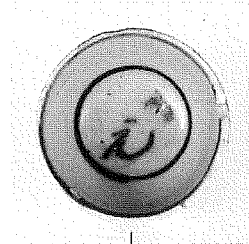
1



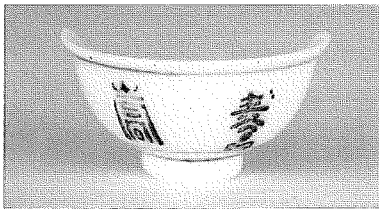
2



4



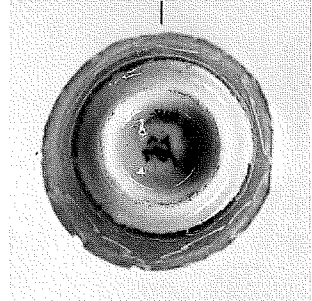
3



5



6



図版4 庸原第一墓の遺物 (1. キセル 2. 貝製品 3~6. 染付)

は及ばない。外側面の口縁には、途切れた波状の文様が描かれている。内側面の見込みには、彫りによるものと白色の界線がそれぞれ一条ずつ施され、アルミナも見られる。高台は蛇の目状に成形。口径14.9cm、底径7.0cm、器高5.8cm。

近世またはそれ以降と思われる染付2点は図示していないが、図版4で写真紹介した。

図版4の5は、口縁の反りが強い小杯である。呉須はやや明瞭で、釉は艶のある白色。スタンプ印判で2つの文字らしきものが交互に施される。口縁、高台付近及び高台境目に各一条ずつ界線をめぐらす。型造りによる成形である。口径5.6cm、底径2.0cm、器高3.0cm。

図版4の6は、口縁が僅かに反る腰折れ杯で、口縁は数ヶ所破損しているがほぼ完形である。畳付けを除く全面に釉が施されている。呉須はやや明瞭で、釉は艶のある青白色。外面全面には、銅版転写により雲の中を泳ぐ龍の文様が施されている。また、外底面に「玉」の字が施されている。口径5.8cm、底径2.7cm、器高3.8cm。

III. 調査の成果

ここでは、毛原第一墓及び庸原第一墓の調査成果をまとめる。

どちらも工事後の調査であったため、人骨並びに共伴遺物の検出状況が押さえられなかった。しかしながら、毛原第一墓の砂丘から検出された人骨は、その目安となる共伴遺物の検出状況等が不明であるためあくまでも参考資料にとどまるが、外耳土器と同時代のものと考えられる。また、庸原第一墓の人骨については、共伴した資料などを見ると古くは遡らないと考えられる。

今後も土地整備等で古墓が整備される可能性がある。現在、島内に散在する古墓の分布調査については、瑞慶山・津波古両氏が今回報告しており (P. 255)、その詳細な調査が今後必要である。

最後に、篆書については現時点での解読は難しいとのご教示を大城民子氏よりいただきました。

参考文献

1. 『竹富町・与那国町の遺跡』 沖縄県文化財調査報告書 第29集 沖縄県教育委員会 1980年3月
2. 大橋康二『古伊万里の文様 初期肥前磁器を中心に』 理工学社 1994年5月
3. 『カイジ浜貝塚』 沖縄県文化財調査報告書 第115集 沖縄県教育委員会 1994年3月
4. 『慶来慶田城遺跡』 沖縄県文化財調査報告書 第131集 沖縄県教育委員会 1997年3月
5. 『古我地原内古墓』 沖縄県文化財調査報告書 第85集 沖縄県教育委員会 1987年12月

八重山群雄割拠時代の波照間島における村落と英雄

通事 孝作

はじめに

日本列島の有人島で最南端に位置する波照間島は、八重山で最古の下田原貝塚、それに大泊浜貝塚など数多くの史跡が残っている。下田原城跡、伝マシユク村跡遺跡、伝ヤグ村跡遺跡、伝ミシユク村跡遺跡、伝ペーミシユク村跡遺跡、伝シムス村跡遺跡などである。これらの遺跡には村の有力者が居住していたと伝わるが、遺跡は古文書にはまったく登場せず、ただ伝説だけが残っているのみである。先の遺跡から多量の外来陶磁器が出土していることから考古学研究者は、これらの遺跡を八重山先史時代の編年として第三期に位置づける。つまり、13世紀から15世紀の史跡だということである。

稲村賢敷氏は昭和30年代に波照間島の史跡を調査したが、この時、外来陶磁器に着目した同氏は伝ヤグ村跡遺跡をヤグ村旧跡、下田原城跡をシモタ原城跡、伝シムス村跡遺跡をシムシ部落旧跡と名づけ、倭寇にかかわる史跡として持論を展開している^⑩。これらの遺跡は果たして、「倭寇遺跡」と規定していいのか。これについては過去に深く追究した事例はほとんど見当たらない。文献史学の見地からは、これらの史跡に対応する時期は、八重山において一般的に「英雄時代」といわれる。

八重山の「英雄時代」とは、どういう時代で、どのような特色があるのだろうか。「英雄時代」に相当する遺跡から、外来陶磁器が出土していることから、海外貿易が隆盛を極め、農耕文化が定着していた時代であろうことは推測できる。農耕文化が一段と高揚した背景には鉄器の移入と普及は見逃せない。鉄器は生産活動を活発にし、階級社会を生み出す誘因ともなり、地域社会を大きく進展させた。

古文書と伝説から15世紀中期から16世紀初期にかけての八重山においては、各島じまに群雄が割拠し、覇権を競っていたことが分かる。西表島の慶来慶田城用緒、石垣島の平久保加那按司（平久保）、仲間満慶山英極（川平）、オヤケ・アカハチ（大浜）、長田大主（石垣）、波照間島の明宇底獅子嘉殿、与那国島のサンアイ・イソバなどである。

これら7人の中でも琉球王府に反旗を翻し、死亡したオヤケ・アカハチ、琉球王府の忠臣としてアカハチと対立した長田大主、獅子嘉殿を含めた3人は、15世紀末の八重山を駆け抜けた中心人物として、いずれも波照間島出身である。「英雄時代」の八重山を動かした主要人物がどうして、石垣島や西表島から離れた孤島の波照間島で生れたのだろうか。島には3人が活躍する時期の前後に、ゲートウ・ホーラ、ウヤマシ・アガダナも輩出してお

り、彼らは民衆の尊奉を集めていたといわれる。

本稿では先史時代の波照間島を概略的にみた後、「中山入貢」後に古文書に登場する八重山、波照間島、それに群雄割拠時代の八重山、波照間島の時代的特色、波照間島の英雄たち、倭寇と英雄たちとの関係などにスポットをあてて、考古学資料や古文書、島に残る伝説をひも解きながら考えていきたい。

1、先史時代の波照間島

八重山で最古といわれる史跡が波照間島にある。今から約3700年前の遺跡である下田原貝塚がそれで、貝塚は島の北部に位置する。貝塚の周辺付近には生活に欠かすことのできない飲料水を確保できる泉水があり、泉水は日照り続きの時でも枯れることはない。貝塚は過去三回ほど発掘調査が行われたが、調査の結果、その全貌がほぼ明らかになった。貝塚からは、沖縄本島や九州などの北の文化には見られない特異な下田原式土器、骨製品、貝製品、石器などが検出されている。下田原式土器は器壁が厚く、把手付きで内彎する浅鉢で、北の土器の流れではなく、南の土器の流れといわれている¹⁸⁾。

食料残滓は数種類ほど出土しているが、注目されるのはイノシシの骨が大量に見つかったこと。イノシシは波照間島には棲息していないが、25キロ北に離れた西表島には棲息している。また石器の材料や土器の素地は西表島産と考えられていることから、イノシシは、それらと一緒に西表島から波照間島に運び込まれたのではないかと考えられている¹⁹⁾。

考古学、民族学、人類学を専門とする金関丈夫氏は、過去に波照間島の下田原貝塚を調査した。調査結果によると、「下田原貝塚を遺した住民の文化は、日本縄文式、弥生式、あるいは古墳時代の文化とは全然無関係である」「いま一つの特徴的石器は、少数の完全に磨成あるいは琢成された、いわゆる乳棒状の石斧である。硬質の閃緑岩あるいは片麻岩を用い、中央より上端にかけての横断面は楕円形、刃端に近い部分のそれは一面が平坦になり、やや半月形に近い」「魚骨や沈石、土錘、貝錘の存在から、この貝塚人が一面において漁撈者であったことは明らかであり、また西表島との交通の存在は歴然としているから、この住民が船を造る必要のあったものであることは明らかである」「獣骨の破片は多く、大多数は小形の猪である。猪もこの島には棲まない。西表島には小形猪がいる。石材と猪とは、西表島から搬入したものと考えられる」とする²⁰⁾。

金関氏は、以上の様相から「この貝塚の住民は耨耕と漁撈とを生産手段とし、船を造ることを知っていた。農耕作物は不明である。おそらく西表島の住民の支派であって、その文化は現代の波照間島の文化に続いている」「波照間島には、この貝塚の他に同系の土器、石器とともに、明代の中国陶器片を伴う遺跡が多く、これが部落内に最も多く分布している。波照間の先史文化は明らかに現代文化に続いているのである」と強調する。



下田原貝塚

さらに「下田原貝塚の成立した時代は、明代よりほど遠からぬ前のことと思われる。居住の継続は比較的短かったと考えられる」「またこの遺跡以外に、地下水の露頭と船着き場の適地を伴う、この種の先史住民の適住地を島内に求めることができないことから、この貝塚人がこの島の最初の居住者であったことが察せられる」「波照間島下田原の過去の住民は現在の島民の祖であり、西表島住民の支派であった」「その文化は耨耕漁撈を生産手段とする新石器時代の様相を呈していた」と結論づけている^{註⑨}。

金関氏は以上のようにまとめたが、果たして波照間の先史文化は現代文化とつながりがあるのか、下田原貝塚の成立した時代は明代より遠くない前のことなのか、下田原の過去の住民は現在の島民の祖であるのか、疑問は拭いされない。今後、研究の余地があろう。

下田原貝塚は前記した通り、今から約3700年前の遺跡であることは明らかである。要するに紀元前1800年の遺跡である訳だが、そうなると1368年に太祖洪武帝によって建国された明国が、1616年まで続いた事実とは相当な歴史的な開きがあり、明代より遠くない前の貝塚ではなく、随分前に人々が住み、そして遺した史跡だということになる。さらに現時点で明らかになっている下田原貝塚に続く遺跡は、4世紀頃から始まり12世紀後期までに至る無土器の遺跡である大泊浜貝塚しかないこと。波照間島の考古学的な調査が進展すれば、大泊浜貝塚より古い遺跡が発見される可能性はあるが、現在の段階で見つかっていない。

このように考えると、下田原貝塚から大泊浜貝塚に至る2200年間の波照間島は、どのような状況下にあったのか、まったく不明である。下田原貝塚を遺した人々は、その後、ど

のような運命をたどったのか、同貝塚とつながる遺跡が見つかっていないことから、明らかにすることができない。考古学上の今後の課題は、下田原貝塚から大泊浜貝塚までに流れる時間的な空白を学問的にどのようにして埋めるかにあろう。両貝塚間の歴史は、明らかになってはいないものの、連綿とした人々の日常的な営みはあったはずだからである。あるいは、そうではなく下田原貝塚から大泊浜貝塚に至る期間の島は人の住まない無人島だったのだろうか。

下田原貝塚の時代が終末を迎え、その後、限りない時間が流れて大泊浜貝塚の時代に入るが、この貝塚を遺した人々はどのような暮らしを営んでいたであろうか。沖縄県教育委員会は1983年（昭和58）に発掘調査を実施し、その後、報告書にまとめた。報告書によると、大泊浜貝塚の特徴は土器が一片も検出されないことから、無土器貝塚であること。貝塚からは須恵器壺、滑石製石鍋、褐釉陶器壺、白磁玉縁碗などが出土した。また約2・5メートル×2・0メートルの方形の礫床住居跡が検出された。礫床内に6本の柱穴が廻り、隅には楕円形状の炉跡をもつことが分かった^{註⑥}。

大泊浜貝塚を遺した人々は、土器を使用せず暮らしていたことが、検出された遺物から明らかになったが、その人たちはいつ頃まで生活していたのだろうか。貝塚に後続する遺跡は現在のところ発見されていない。

波照間島の先史時代については下田原貝塚、大泊浜貝塚しか発見されていないうえに、さらに両貝塚は関係を保持して連綿とは続いておらず、空白期があるため明確な実像を浮かび上がらせることはできない。しかし、先史時代の島は決して無人島ではなく、人々は住んでいたであろう。八重山は14世紀末に初めて古文書に登場するが、波照間島は15世紀後期になって初めて記録に現れ、記録を読むことで当時の人々の暮らしをうかがい知ることができる。

2、古文書にみる八重山と波照間

『日本書紀』等の記録を除けば、八重山が初めて記録に姿をあらわすのは14世紀末である。つまり、1390年（洪武23）宮古、八重山の先島が沖縄本島の中山王に入貢したとする記録がそれであるが、『八重山島年来記』に「察度王御世代宮古八重山島始めて進貢」とある。また『球陽』『中山世譜』に「宮古八重山始来朝入貢」「中山前使遣使入京其使臣被風飄至彼嶋時乃二島之人見琉球行事大之禮各率い管屬之島稱臣納貢由是中山始強」、『中山世鑑』には「南夷、宮古嶋、八重山嶋、重譯、始来貢ス」「其起リヲ委ク尋レバ、大明洪武ノ始ヨリ、球國、大明へ、五年・三年ニ一度、往来有。依テ球人、難風ニ逢テ、彼二山へ至ル事、度々也。其ヨリシテゾ、彼二山モ、琉球ノ王國タル事ヲバ、知テケリ。依テ、慕義向風、始テ来貢ス。其後ヨリシテ、毎年ノ朝貢ニハ定リヌ」記されている。要するに先島

の中山入貢は船の漂着という偶然によって、礼節を知ることによって「南夷」の各首長が臣従して朝貢したとするのである。

八重山が中山に入貢したとする時期、各島はどのような状況下であり、どのような首長が勢力を誇示していたであろうか。これを把握できる同時代の記録はほとんどない。文献によっては「八重山群島の各島は、1389年（洪武22）までは自主独立の島であって頭目などによって治められていた平和な島であった。1390年（洪武23）中山王・察度の時に隣の宮古島の与那覇勢頭豊見親の勧めで、宮古島と一緒に服属朝貢したといわれている」という記述がある^{註⑦}。しかし、文献は具体的に頭目の名は記していない。

『球陽』等に記されている、中山入貢の捉え方については「中山の船が宮古・八重山に途中寄港ないし難風を避けて一時的に立ち寄り、あるいはまた漂着等によって、それが機縁となり、中山に入貢したとすれば、それは臣従もしくは服属関係を意味するのではなく、従って義務づけられた付庸関係に立つものでもないであろう。しばしばいわれるように、先島が朝貢したことをもって『中山始メテ強シ』とあるのは、その後ほどなくして沖縄全島を統一した中山王の威勢を示す多分に誇張的な表現とみられるのであって、むしろ、食糧薪水、交易品目等の有無相通ずるなかで、中山王の富強を知り、儀礼的経済的交易関係を維持していったものと解されるのである^{註⑧}」とする解釈が相当であろう。

『球陽』『中山世鑑』『中山世譜』は、八重山全域を総体的に記述しているが、島じまの様子を具体的に記しているのは「中山入貢」から80年余後に書かれた『李朝実録』の「成宗大王実録」巻105中の「济州島民漂流記録」である。同記録には1477年（成化13）朝鮮の济州島民が海上で遭難し、与那国島の人たちに救助され、島で約6カ月滞在した後、西表、波照間、新城、黒島、多良間、伊良部、宮古というふうには島づたいに送られ、沖縄本島での滞在を経て九州へ、そして朝鮮という順序で送り返された時の様子が記されている。この記録は、すぐれて15世紀末の島じまの姿を知ることのできる唯一の史料であるが、石垣島が出てこない。

波照間島について「济州島民漂流記録」は次のように記す。島名を「捕月老麻伊是麼」としたうえで、「其の地は平衍にして山はなく、みな沙石の地なり。周囲は所乃島（西表島：筆者注）に比して稚小きなり。其の言語・飲食・衣服・居室・土風・は大概、閩伊島（与那国島：筆者注）と同しく、俺らを供饋することも亦同じきなり」と書く。そして、(1) 黍・粟・牟麦あり。水田なく稲米は所乃島に貿易す (2) 牟麦を種するは、まさに秋月なり。牛糞を用うるが、手でもって掬し田に置く。犁を用いて土を起こして之を覆う。二、三月頃のとき方に熟し刈り畢る。後、田を治して之に種す。凡そ粟を種うるも亦十月の間においてなり。種を播きて二、三月のときに収穫し訖る。復び之に種して七、八月のときにはまた収穫するなり (3) 飛禽には、鳩・黄雀・鷗あり (4) 家には、鼠あり。牛・鶏・猫を畜う。

牛を屠して食すも鶏肉を食せず (5)菜には茄子・蹲鴟・蒜・瓠あり (6)男女は耳を穿ちて小さき青珠を貫き、また珠を串きて項に掛く (7)材木はなく、家を構えるには、みな所乃島より取りて之を為す。また果木なし (8)蛇・蠅・蝸あり。その俗、蝸を煮て之を食う。余は閩伊島と同じきなり。俺ら一朔を留りて南風を俟ち、島の人五名、俺らを將れて、一小船に等しくのり、行くこと一昼夜にして一つの島に至る。島の名は捕刺伊是麼 (新城島：筆者注) なり、護送の人は翌日本島に還るなり、とある。

同記録には、波照間島以外のことについても記述がある。記述の内容をみると15世紀末期における島社会共同体は、与那国島を別にして各島とも西表島と深くをかかわっていることが分かる。

3、14世紀後期から15世紀後期の村落と英雄の誕生

八重山は1390年 (洪武23) に「中山入貢」して中山王に服属する形式をとったが、それ以降の島じまの共同体社会はどのような状況下にあったのだろうか。村落の変遷を研究する考古学の見地からは、14世紀後半から16世紀初めにかけて村落に石垣を積み上げた屋敷割りが出現すると捉える。遺跡の発掘調査から村落には道路はなく、屋敷間は通用門でむすばれているとみる。

石積みを巡らした石垣が屋敷囲いだとし、囲いの中に家屋が建ち、そこが寝食をともにする家族の生活の拠点だと考えると、日常的な民衆の営みは不明だが、住民の暮らしは確実にあった。村落では15世紀以降になって豊富な鉄文化が流入し、農耕を中心とした生産基盤が固められて生産力が飛躍的に増大し、その中から有力者が登場して村を統括したであろう。

八重山の14世紀から15世紀にかけて村落については現在の時点で、記録はほとんどなく、集落跡をうかがわせる遺跡が残っているだけだが、波照間島にはグスクあるいはスクを含めて7カ所の村跡が往時の面影をとどめている。

下田原城跡は15世紀頃の遺跡で島の北側にあり、断崖の上に形成されている。遺構は、崖線に沿って複数の郭を連結させ、北東方向に細長く伸びる連郭式の形状をとっている。遺跡内は石積みによって仕切られ、それぞれの郭は通用口によって結ばれている。城跡からは外来陶磁器や鍛冶工房の存在を示すフィゴの羽口片、鉄滓などが表面採集によって検出されている。

伝マシク村跡遺跡は、下田原城跡から東方の島に北海岸にあり、ごつごつとした岩肌の岩盤の上には高さ2メートルほどのタカフクと呼ばれる石積みがある。形状から推察して海上から侵入してくる外敵を防備する砦のようである。村跡内は、石塁遺構が縦横に曲がりくねって伸び、随所に郭が形づくられている。郭の間は通用門で結ばれているものも

あれば完全に遮断しているものもある。遺跡からは青磁、白磁、褐釉陶器などの外来陶磁器及び壺、浅鉢などの土器も検出されている。築構された年代は、下田原城跡とほぼ同時代に相当するようである。

伝ペーミシユク村跡遺跡は、富嘉部落の南約300メートルに位置する標高30メートルの丘陵上に形成されている。遺構は楕円形に近い長方形状になっている。遺跡の規模は小さく通用口は南側に開口している。遺跡内からは白磁片及び褐釉陶器、土器片などが採集されている。伝ミシユク村跡遺跡は、富嘉部落の西方の海岸近くに形成され、石塁遺構が残っている。遺跡内には御嶽がある。この他、伝シムス村跡遺跡、伝ヤグ村遺跡、それに15世紀後半の八重山を揺り動かしたオヤケアカハチが生れたといわれる伝オヤケアカハチ生誕の地が南部落にある。

波照間島には上記のような遺跡が残っているが、遺跡にまつわる記録はなく、ただ伝説のみが古くから語り継がれているだけである。下田原城跡、伝マシユク村跡遺跡、伝ミシユク村跡遺跡、伝シムス村跡遺跡には文献史料も伝説も残っていないが、伝ペーミシユク村跡遺跡については、ペーミシユクブリヤとアラブツブリヤの闘いに関する物語りが残っている。

ブリヤとは村の有力者を指すが、島にはブリヤ同士の争いや恋物語りにかかわる伝承がいくつもある。ペーミシユクブリヤとアラブツブリヤの争いの話のほかに、ユナチブリヤとカンチ・アザマナグの対立、クスシ・アズマグの恋愛、ピタブハメーとヤマダブハメーの霊力ある女性同士のライバル関係などである。

波照間島の歴史、文化研究に関して学者の中にはブリヤを「小さな集団にまとまった家々の多くをそれぞれ支配していた地域有力者」と位置づけた上で、島の14世紀から15世紀の社会をブリヤが勢力を誇示する「ブリヤの時代」と定義づけ、その時代のことは記憶の伝説、また一部は神歌として残ったと捉える研究者もいる^{注9)}。

波照間島は、地域の有力者がお互いに勢力を競っていた「ブリヤの時代」だが、八重山全域を視野に入れると、当時の村落共同体社会について「14世紀後半という時期は、石器時代終末期であって、同時代、本島地方では三山分立、積極的な対明通交がみられ、八重山では未だ階級分化とよべるような充分な発達がなされていたとは思われず、恐らくそうした過渡期にあったものと解される。このことは、しかしながら、なんらかの意味で共同体社会に首長が存在していたことを否定するものではない。それがそれぞれの集落において漁撈や農耕を指導し、鉄製利器を入手し、猪垣や水利の施設をなし得た“大親”“本主”等であって、この時期そうした階層は次第に、しかも着実に勢力を扶植していき、15世紀末ごろにはそれぞれの地域にあらわれるいわば“英雄”の前身をなすものであったとみるべきであろう」との見解がある^{注10)}。

15世紀後期の波照間島については琉球王府が成立する中で、王府と同盟を結んだ少数の有力者がブリヤの残された権力を取り上げ、「ブリヤの時代」が終わったとされる。有力者の中には同盟関係を結ばず、遺跡から出土する外来陶磁器から判断して、海外との交易で経済力を貯え次第に勢力を伸張させた有力者もいたはずである。

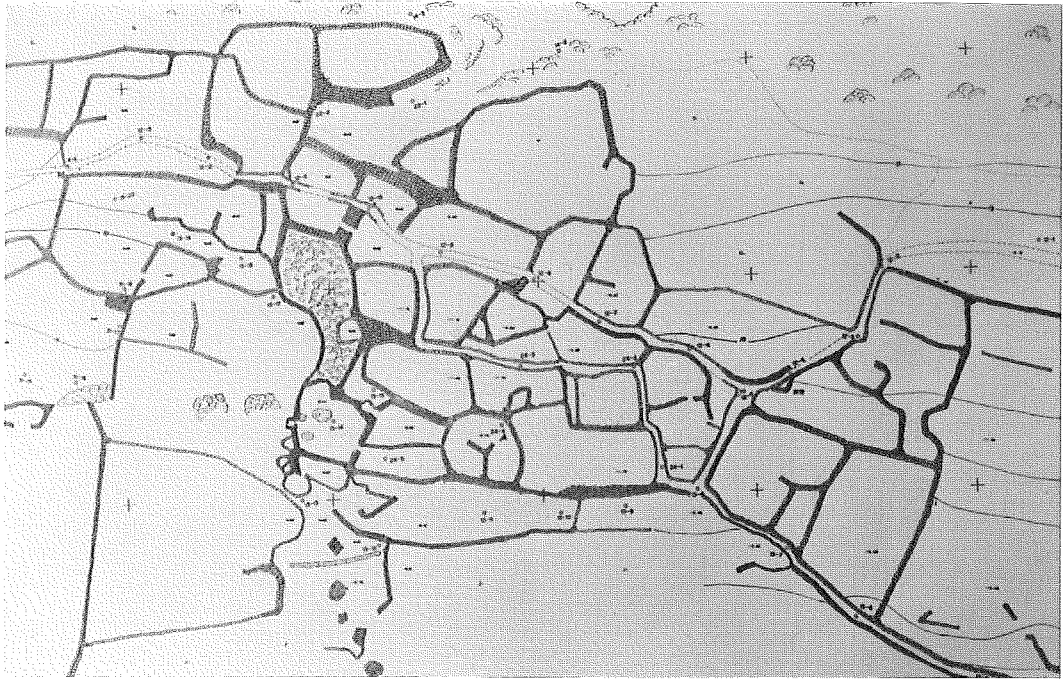
島の狭い地域に勢力を誇るブリヤたちが淘汰されて、頭角を現わしてきたのが波照間島で誕生したといわれるオヤケアカハチ、明宇底獅子嘉殿、長田大主などであったのだろう。明宇底獅子嘉殿は波照間島にとどまったが、残る二人は石垣島に活躍の拠点に移した。波照間島以外では石垣島の北部を支配下に入れた平久保加那按司、西部の川平を拠点にした仲間満慶英極、西表島西部で勢力を誇る慶来慶田城用緒、与那国島のサンアイ・イソバがおり、それぞれ民衆を従えて勢力を扶植していた。

琉球王府は第二尚氏王統の第三代・尚真王の時代になると、統一政治の基盤が固められた。尚真は1477年（成化13）に即位した後、位階制度及び職制の大転換を断行するとともに、神女組織の確立を図った。さらに海外交易も推進して様々な文化を受容し、国家財政を潤した。琉球王国は階級国家として段階的に成長していき、強大な武力を背景に中央集権体制を構築した。

琉球王府を核とする強力な国家体制が築かれる中で、王府の権力は八重山にも波及した。国家権力の伸張によって、八重山の社会は王府の一区域に組み込まれることとなるが、当時の八重山は沖縄諸島の中でも最も後進地域であったらしく、「八重山の神代は第15世紀の終わり、（中略）神々の東雲であった^{註⑩}」とする見方もある。民衆の生活は『済州島民漂流記録』に記された波照間島から得られる報告によると、王府の繁栄からは想像できないほど粗野であったことが分かる。社会システム論の観点からは『済州島民漂流記録』の時代は「総じてこの時期の八重山社会は、島々のそれぞれの立地条件の制約のなかで、低い生産活動を行いつつも、鉄器の普及にともない、それを積極的に原始的共同体社会の政治的、経済的な統轄の上に利用させながら強力は共同体首長を出現させていく時期であったとみられている^{註⑪}」と説く研究者もいる。

八重山の15世紀中期から始まる社会は「群雄割拠の時代」で別名「英雄の時代」とも称される。「中国の技術と器具、ことに鉄器が入って、今まで住めなかったところに住みつくことができた。その舶来の鉄を利用して、征服しあるいは撫民したものが初代の英雄であったので、石器時代の終末期から約一世紀の生産昂揚期があって、やがて英雄時代につづいたのが、八重山の歴史であつただろう。その背後には、こうした地理上、文化交渉上の特殊事情があつたわけで、大和では4、5世紀ころに起こつたと思われているようなことが、ここでは約10世紀もおくれて起こっているのである^{註⑫}」との推測を交えた見解がある。

八重山の「英雄時代」は1500年（弘治13）の「オヤケアカハチの乱」、1522年（嘉靖1）



伝マシュク村跡遺跡縄張図



下田原城跡縄張図



海岸近くに積まれた伝マシク村跡遺跡の石垣



下田原城跡の石積み

の仲宗根豊見親玄雅による与那国島の鬼虎征伐でもって幕を閉じる。かくしてアカハチの乱後、琉球王府の八重山統治に対する厳しい監視が続き、1542年（嘉靖21）には八重山蔵元が竹富島に創設され、島じまは琉球王府の厳然たる支配下に置かれた。

4、歴史を動かした島の英雄たち

八重山「英雄時代」は、別名「群雄割拠の時代」とも称されることは、前述したとおり各村でそれぞれ勢力を誇示し、お互いに競っていたとされるが、そこで「英雄」あるいは「群雄」をどのように把握すればよいのだろうか。「群雄」は原始共同体社会の族長というべきもので、共同体間の支配権をめぐる抗争を行いながら自らの勢力を扶植しつつあったであろうことが想定される。幸か不幸か、未だ外部から深刻な影響を受けることなく、八重山の島々の間においてのみ、換言すれば、孤立せる小宇宙（島社会）のなかで、ようやく歴史的なステップを一步ずつ歩みつけていたということである。それが宮古・沖縄という“外部”の力によって激しく揺り動かされていったのであった^{註④}とされる。

英雄を上記のように捉えるならば、波照間島には島で生れ、島を拠点に勢力を貯えていたゲートウ・ホーラ、明宇底獅子嘉殿、ウヤマシ・アガダナ、それに波照間島を出自とし成長した後、島を離れ石垣島に渡って実力つけ、琉球王府や宮古島の英雄とも絡み合っただ立したオヤケアカハチ、長田大主は程度の差こそあれ、英雄と呼んでもいいだろう。

(1) ゲートウ・ホーラ

古琉球期の古文書史料には、まったく記録はないが、島には彼にまつわる伝説が残る。彼は並はずれた身体と超人的な力を持つ英雄と記憶されている。彼の信じがたい力には多くの物語がある。彼はいくつもの大岩を動かし、20俵の米俵を抱えて運び大きな帆船の帆柱を動かし、太い竹を帯のように腰に巻き、太い家柱を引き抜いたので、賢い敵対する者も彼にはかなわなかったという。

彼の出生については、次のような伝説がある。これは彼の並はずれ力がどのようにしてできたかを物語るものでもある。ある日、オランダの船が上地島と下地島の西端のリーフに乗り上げた。船の乗組員は助けられ、しばらく両島で暮らした。たまたま島を訪れていたゲートウの娘が一人の船員と恋仲になり、男の子を出産した。この時、生まれたのがゲートウ・ホーラであった。彼の出生については、父親がヨーロッパ人であるという、外の世界からの異国的要素が影響を及ぼし、彼に巨大な身体と力を与えたことになっている。彼が参加した力試しは、多くの場合ヤマトンチューや中国人が接触する設定の場で行われたという。

彼は八重山の「英雄時代」が始まる1450年（景泰1）頃に生まれたといわれる。しかし、死亡年は明白ではない。彼の子孫は加屋本家の人々で、加屋本家は屋号をゲ



ゲートウ・ホーラの墓

ートウという。彼の石積み墓は、北部落と南部落の東方約200メートルのサトウキビ畑の中にある。通常の墓と異なるのは、墓の向きが北西ではなく、東であること。これには彼のような英雄が二度とゲートウ家に生まれてこないことを願って、彼に敵対した人たちが意図的に正しい向きではない、東向きにして造ったという伝説が残っている。

(2) 長田大主（ナータ・フーズ）

宮古島全域を支配した仲宗根豊見親玄雅が部下を率いて、与那国島の軍事的遠征に乗り出した時に訪れた波照間島で、島の娘に産ませた落とし種といわれる。『八重山島年来記』に「景泰七丙子 長栄氏元祖長多大父童名まよかま生年」との記述があることから、1456年に産まれたことが分かる。伝承によると、母親は前野（メーニ）家の娘ナビャー。幼少の頃はメーニ・マツァーと呼ばれて少年期を過ごした。幼い頃には後になって対立するオヤケアカハチは遊び友だちだった。彼は成長して石垣島に渡り、石垣地区を支配下に置き、群雄割拠時代の八重山で重要な役割を果たすようになった。

波照間島には前部落の一角に彼の靈魂を祀った長田御嶽があるが、そこは大主が幼少の頃仲宗根豊見親玄雅の家臣に伴われて島を旅立った日、母親のナビャーがわが子の大成を念じて祈願した場所といわれる。島の港の近くにあるマドゥマリ（真泊）の浜は大主と母親の訣別の地と伝わる。母親はマドゥマリの神に航海安全を祈った後8



長田御嶽のイビ

歳になった大主に「おまえは身分の高い士族の子だ。今日限りでこの母を忘れ、父親の許で修業し、一日も早く偉い人になるように。そして二度とこの島に戻ってはいけない。この母もこの世で二度と会うことはないでしょう」と別れの言葉を送ったという。

大主の妹に真乙姥（メーツバ）と古乙姥（クイツバ）の二人がいるが、この二人も仲宗根豊見親玄雅の私生児として、前部落の前津（メーツィ）家と越地（クイチィ）家で産まれたといわれる。二人は私生児ながらも後になって、一定の政治的役割を演じる運命を背負わされていた。オヤケアカハチの乱が二人の運命を決定づけた。

石垣島に渡った大主は、オヤケアカハチが琉球王府に反抗的な姿勢を表すなかで、王府よりの態度を示す大主は、身の危険を感じアカハチが逃れるため西表島東部の古見に身を潜めた。その後、琉球王府がアカハチ討伐に乗り出すと、大主は古見から出て王府軍に協力した。そして乱後は、古見首里大屋子に任じられ、八重山の頭職第一号となった。

長田大主に関しては、いくつかの疑問点が指摘されているが、集約すると父親とされる仲宗根豊見親玄雅の与那国島の制圧と、大主の出生との間に不整合があること。大主が1456年に出生したことが正しいとするならば、1475年（成化11）に仲宗根豊見親玄雅が波照間島に立ち寄り、その時、島の娘との間に産まれたのが大主であるとする見解、1522年（嘉靖1）に仲宗根豊見親玄雅が与那国島の鬼虎を征伐し、その前

後に波照間島に立ち寄り、そして大主が産まれたとする見解に疑問が生じる。さらに仲宗根豊見親玄雅が1457年（天順1）に産まれたとする見解もあるが、そうになると豊見親は大主より1歳年下という矛盾がある。

『八重山島年来記』によると、大主は1517年に死亡している。同記に「正徳十二丁丑 長多大父石垣親雲上死去六十二」とある。

(3) オヤケアカハチ

長田大主と同世代の人物といわれるが、出生は明らかではない。ただ「野生ノ豪侠児不遇ノ『オヤケ、アカハチ』生ル。容貌魁偉、頭髮赤赭、長ク垂レ、齒ハ己ニ成人ノ如ク生イ眼光人ヲ射殺。産婦其ノ怪惡ノ形状ニ驚キ哺乳養育スルに忍ビズ、他聞ヲ憚リ裙袴（湯巻）ニ包ミ、夜初更窃カニ海中岩礁ニ捨テ去ル。生児ハ濤ノ堂々轟々壯烈ナル波ノ響、波シブキヲ真額ニ浴ビツ、熟睡セリ、天明ケ漁舟岩礁ニ生児ヲ認め收拾シテ育テリ^{註⑧}」との記録があるが、伝説の域を越えていない。ゲートウ・ホーラの出生や風貌から推察すると、ヨーロッパ人の血が流れているようである。

島の伝承によると、アカハチは髪が赤く、鬼子の特徴が備わっていたので、島の東部にある断崖が続く岩場に捨てられていたという。しかし、その後、今の南部落に住む人に助けられて育てられたといわれる。その場所は現在、「オヤケアカハチ生誕の地」として町指定の史跡文化財になっている。

島の古老の話をまとめると、アカハチは長田大主よりも体が大きく力も強かったこと。二人が相撲をとった場所が島の南側の海浜であったこと。彼は17年間から18年間ほど島で生活した後、石垣島の南東部にある大浜に移り住んだことなどが分かる。

アカハチは石垣島に移住すると、八重山の英雄たちと戦い、民衆を従えて勢力を伸張、琉球王府に対抗するようになった。1500年（弘治13）には琉球王府軍と仲宗根豊見親軍に討伐されて死亡した。アカハチが琉球王府に討伐された要因について、従来、「島民が信仰していた火食の神・イリキヤアマリを禁止という宗教上の理由」「王府の課した重税に対する反抗」などが挙げられていたが、近年、「八重山における貿易権を奪取するとともに、王府が南方諸国との貿易を行っていたなかであって、それらの国々との接点をなす八重山を手中に収めることにより、その貿易権の集中、独占化に終止符を打った^{註⑨}」との財政的理由を示す見解があり、有力視されている。

アカハチに関する史料は、王府側の古文書が数点ほど残っている。『球陽』『琉球国由来記』『琉球国旧記』『中山世鑑』『中山世譜』『八重山島年来記』などだが、王府の“善玉論”、アカハチの“悪玉論”で塗り固められている。『琉球国由来記』巻21には「當嶋、洪武年間、為御本國轄地。毎年貢物献上、渡海イタシケルニ、其後、大濱村ニ、ヲヤケ赤蜂・ホンカワラトテ二人居ケルガ、極驕、有叛逆之心、貢物到中絶ケル」な



オヤケアカハチ誕生の地といわれる場所

どとあり『中山世譜』巻6には「先是。宮古島・八重山。自洪武年間以來。毎歳入貢往来不絶。奈八重山酋長。有掘川原赤峰者。心変謀叛。両三年間。絶貢不朝。時宮古島酋長。有仲宗根豊見屋者。與赤峰不睦。赤峰將攻宮古。二島騒動」などと記す。別の古文書もほぼ同じ内容になっている。

八重山では古い時代からオヤケアカハチ研究が盛んだが、研究史をひも解くと注目されるのが「アカハチ二人説」と「アカハチ一人説」の対立があること。これは古文書に「ヲヤケ赤峰・ホンカワラトテ二人居ケル…」と載っていることが、大きな要因だが、オヤケアカハチ・ホンカワラの語句を解明するなかから「アカハチ一人説」が大勢を占めている。

オヤケアカハチは古代の英雄として、伊波南哲が長編叙事詩「オヤケアカハチ」にまとめている。波照間島では「アカブザ」と卑下して呼ばれていた時もあった。大浜では村の英雄として慰霊祭が行われている。大浜地区の集落の西方に国指定史跡・フルスト原遺跡がある。遺跡は下田原城跡と同じように石塁遺構が残っているが、規模は下田原城跡より大きい。オヤケアカハチの居城だったであろうとの見方ある。

(4) 明宇底獅子嘉殿（ミウスクシシカドン）

琉球王府の記した古文書によると獅子嘉殿は、オヤケアカハチの乱に際して王府に忠誠を誓い、アカハチの要請に従わなかったこともあり、アカハチの手下に殺害された。彼の誕生年及び死亡年は明らかではないが、出生から死亡に至る過程は王府側の

公的史料に記録されている。『球陽』『琉球国旧記』『琉球国由来記』に、その記録がある。

彼の足跡を記した『球陽』の口語訳には「八重山波照間島に一夫婦有り、夫は明宇底於と日ひ、婦名は也那志と日ふ。一男を産下し、名づけて明宇底獅子嘉殿と日ふ。此の人、性質篤実にして心操忠義なり。敢へて妄りには行はず。此の時、赤蜂等、中山に謀叛し、急ぎ檄文を各処に発し、衆民を聚会して日く、中山の大兵、来りて我が境を侵さんとす。汝等、能く鋭気を奮ひ速に出でて迎戦せよ。若し人、令に違ひて怠惰すれば、法に依りて立ちどころに斬り、敢へて寛饒せずと。独り獅子嘉殿のみ克く忠誠を守りて赤蜂等に從はず。而して其の難を逃去して波照間山に隠居す。赤蜂、平得村の嵩茶・大浜村の黒勢等を遣はし、急ぎ獅子嘉殿を招かしむ。嵩茶、起程する時に当り、赤蜂再三之れに囑して日く、獅子嘉は屢次之れを招けども未だ肯へて聴従せず。想ふに必ずや其の故有らん。汝、親しく波照間へ去き、宜しく以て慰諭すべしと。嵩茶等、令を奉じ、往きて他の島に至る。時に、獅子嘉、適々海辺に在りて、竿を垂れ魚を釣りて逃匿する能はず。嵩茶、計を設け言を極め、従容として招撫するも、獅子嘉、志に忠貞を矢ひ曾て聴服せず。嵩茶、遂に獅子嘉を擒へ、往きて小浜に抵り剣を抜きて刺殺し、以て海中に投ず。嵩茶の船、將に石垣に至らんとす。時に、偶々中山の官軍赤蜂等を征討して其の党族悉く皆投誠するに値ふ。島中の人民、將に獅子嘉の節を守りて死する事を以て、僉、呈文を具し、之れを中山奏す。中山、深く、憐恤を加へ、哀みて祭奠を賜ふ。(以下後略)」と記す。王府側の史料をみると、獅子嘉殿は悲劇の英雄として奉られており、赤蜂の記述とは雲泥の差がある。

獅子嘉殿は波照間島を活動拠点とした英雄であることが分かるが、果たして彼の居住地は島のどこにあったのだろうか。北部落の北側に美底御嶽があるが、「ミシユクワー（美底御嶽）の片隅にある場所及び、そのすぐ西の敷地には古い石垣の名残りがあるが、これはかつてミユシクシシカドンという地元支配者の住居で、今は宗教的にタバルトントとして拝まれる場所を囲んでいたものといわれている^{註⑩}」とする“美底御嶽居住説”と、現在の富嘉部落の西方にある伝ヤグ村跡遺跡に注目し「ヤグ村旧跡はミシユク浜から南に当り約四、五町許急坂を上った海岸丘陵地上にあって七、八個所の屋敷跡があり、その中央部にヤク井と称する泉があつて、周囲は石垣で囲ふてある。このヤク井の後方（北に当る）にある屋敷跡は最も大きく中央には小さな拝所があつてミシユク獅子嘉殿の屋敷址であると言ひ伝えている^{註⑪}」とする“伝ヤグ村跡遺跡居住説”の二つ見方がある。

獅子嘉殿の死亡後、琉球王府は彼の三男、三女の息子と娘を王府に招致し、忠節を褒賞した。そして長男・赤真屋を屋安古与人、次男・古真屋を新本与人、三男・遠戸



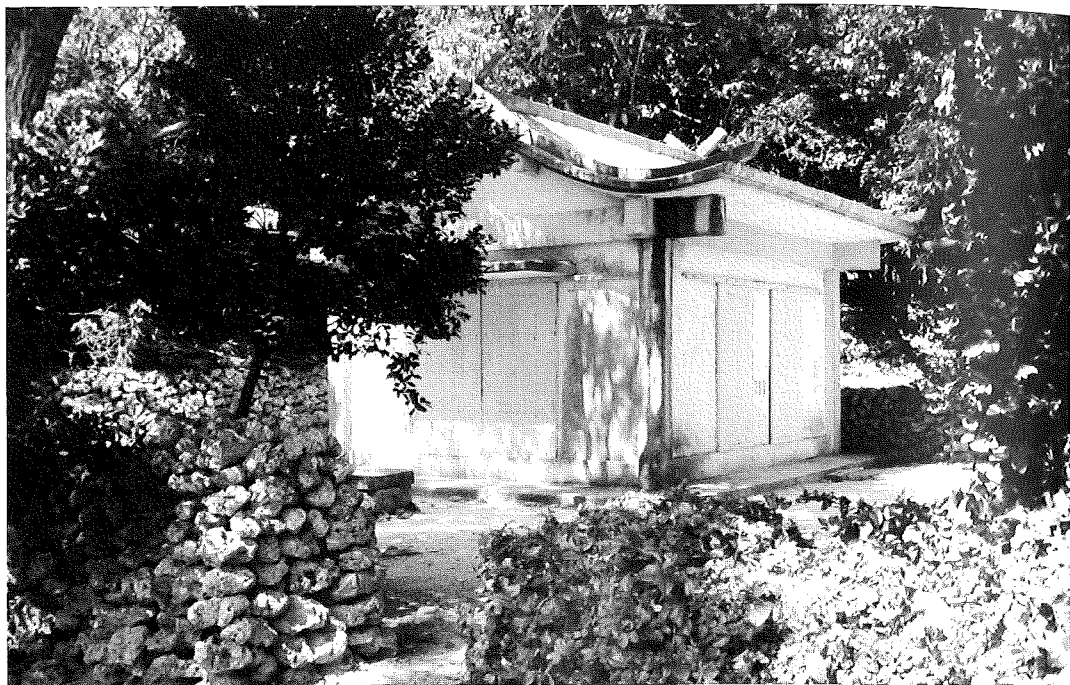
美底御嶽のイビ

を還宝（カイシムル）与人、三人の娘の嘉真太、保古屋、古也を女頭（ブナジイ）に任じた。島のピテヌワー（野原の御嶽）で知られる真徳利御嶽（マートゥルワー）、白郎原御嶽（シィサルワー）、阿幸俣御嶽（アバティワー）は、三人の息子たちが創建し崇拝を始めた場所といわれる。

(5) ウヤマシ・アガダナ

宮古島の仲宗根豊見親玄雅は、与那国島を討伐する時、波照間島を自軍の食糧調達と補充兵徴集のための中継基地にしたといわれる。アガダナは、かつて現在の波照間中学校付近及び中学校から北方に広がる一帯に形成されていた、ナーシヌムラの首長だったといわれるが、豊見親から与那国討伐への参加を求められ、その説得に応じ与那国島に渡った。アガダナの加わった遠征軍は、与那国島で島民を虐殺するなど悪逆無道を繰り返して悪行の限りを尽くし、島に帰還して来た。

島に残る伝承によると、彼が島に戻ってしばらくたったある夜のこと。海辺で魚釣りをしていると、突然、何百という悪霊の魂（マザムヌ）が青白く海上に浮かんでいるのを見た。それは与那国島で殺された人たちの怨霊であり、西の海から島に近づいて来た。彼は恐怖にかられて家に走り帰り、その様子を人々に知らせ、自分はユナビヤ（夜業する場所）の網の下に隠れて息を殺しじっと耐えていた。怨霊は島に上陸したが、網の中にいるアガダナには近づくことができなかった。そこで怨霊は、村の人々に怒りを向け、そこで村人は悉く目玉を繰り抜かれるという残酷なやり方で殺さ



大底御嶽

れた。アガダナは、後になって命が救われた、ユナビヤの地に大底御嶽（ブスクワー）を建立した。

大底御嶽は、南部落と前部落の間に建っている。御嶽はピテヌワーのひとつである阿幸侯御嶽の遥拝御嶽として神行事が行われている。阿幸侯御嶽に仕える祭事には、先に阿幸侯に行き、そして神を大底御嶽に招請して神行事が行われる。

別の伝説によれば豊見親は、アガダナの家で宿泊したが、豊見親が島に来たのは与那国討伐の以前というより、討伐が成功した後に来たのであった。豊見親は島で休息をとった後、石垣島や宮古島に向かう前に船を修理させたともいわれる。

アガダナの居住地について、研究者の中にはアガダナはナーシヌムラに来る前は下田原城跡に住んでいた、と唱える人もいる。さらにナーシヌムラに移り住んだ後でも、南中国や南洋方面に遠征したともいわれる。アガダナの子孫は前部落の親盛（ウヤマシ）家で、同家には南方方面の島々と関係したとみられる木製の鼓筒がある。

5、倭寇と島の英雄たち

古琉球期の琉球王府や明王朝の残した古文書から、14世紀から16世紀の琉球は大交易時代といわれ、中国や日本本土、東南アジアの諸国と海外貿易を繰り広げていたといわれる。交易活動は王府の認定した官営貿易に限らず、民間商人による密貿易も行われており、明朝はこれらを取り締まるため、冊封体制を敷き海禁政策を導入した。民間による密貿易あ

るいは私貿易は、厳禁されていたにもかかわらず、王府の目を盗んで行われており、この密貿易の主演を演じたのが倭寇の集団だったといわれる。

八重山の英雄時代以前及び英雄時代と符号する14世紀から15世紀の遺跡から外来陶磁器等が多量に出土している。これは一体何を物語るのだろうか。「沖縄本島だけでなく、宮古・八重山地域の多くの遺跡から、おびただしい数の中国陶磁器片が出土している。かかる考古学的事実は、その基礎に琉球諸島の各地で『私貿易』が広く展開していたという状況を想定しなければ到底説明がつかない²⁸」と説かれる。

琉球王府や明朝の認めない密貿易あるいは私貿易の中心的役割を担っていたという倭寇集団は、単純に海域を荒し回る海上暴力集団というだけでなく、一面、海の貿易商人（海商）としての要素も持っていたようだ。倭寇について「みんな倭寇を海のギャングみたいに考えていますけれども、決してそんな単純なものではなくて、彼らは和戦両様の構えて、平和と戦争を使い分けていたグループですからね。そういった人間が南西諸島の一角にとりついたらと考えてもおかしくない」「琉球とヤマトの貿易ルート、海運は基本的には倭寇の手中にあったのじゃないかと思うんです。琉球王国としては、倭寇と事を構え敵対するのじゃなく、むしろ協調的に彼らのルートを使ったのじゃないでしょうか」「倭寇は私貿易船ですから、うまくいかないと暴力沙汰になりますけれども、本来は商人的存在なんですね²⁹」と見方もある。

大交易時代の実相を明らかにするには「公貿易」だけの視点ではなく、「密貿易」をも包括した観点が必要であり、そうすることで古琉球期に展開された海外貿易の歴史像を浮き彫りにすることができよう。近年、国境という制度的な枠組みや既成概念を越えた次元から「倭寇的世界」という概念を導入して歴史事象を明らかにしようという研究がある。倭寇は前期（14世紀～15世紀）倭寇と、後期（16世紀）倭寇に時代区分できるが、それぞれ担い手や活動等に特色の違いがみられる。中国人が主体の後期倭寇が芽を出す、15世紀中期には明朝が安定期に入るため、倭寇集団は中国沿岸には行き場がなくて、東シナ海を跳梁していたといわれる。当然にそうなると、南西諸島方面にも出没した可能性は拭いきれず、八重山近海にも姿をみせたであろうことは想像できる。

倭寇は地域の文化形成に大きなインパクトを与えたといわれるが、八重山の英雄時代に包含される遺跡から中国製陶磁器等が出土しているということは、遺跡は海外交易の痕跡をどどめおり、だれかの居住地だったことが分かる。しかし、遺跡から出土した外来陶磁器等で、居住していた人物を特定することは難しい。何しろ住んでいた人物を裏づける“モノ”が発見されていないため、明確にすることはできない。遺跡から検出されている陶磁器類は、「公貿易」の交易品ではなく、「私貿易」で取引された品物であろう。

八重山の「英雄時代」の周辺海域には、明国から海禁を犯して遠路はるばる一獲千金を

夢見て島じまに密貿易にやってきた中国商人が船を並べていたと考えられる。そして海商らは、ほとんど後期倭寇の一団であったのであろう。島じまの海外交易で問題となるのは、中国商人は陶磁器類を貿易品として持ち込んだが、八重山の島民は中国商人に対して何を取り引き品として扱ったのだろうか。史料がないため明示することはできない。

稲村賢敷氏は島じまに残る史跡に焦点を当てて倭寇研究の業績を残しているが、波照間島に関して「波照間島を中心とする航路は中山王朝から支那の福州に至る朝貢、貿易船の航路に対して裏道航路に当り、明琉両政府の管視からはずれているために当時の密貿易船及海寇船は多く此の航路を通ったものと思はれる。こうした関係で波照間島には早くから大和人の居住地が出来て文化も他の諸島より早く開け八重山の歴史は波照間島から先に開けたようである」とみる。

稲村氏は、倭寇史跡については伝ヤグ村跡遺跡、下田原城跡、伝シムス村遺跡の三方所を挙げている。これらの三史跡に共通しているのは、いずれも外来陶磁器の青磁、褐釉陶器類が遺跡から出土していること。そして史跡とかかわりの深い英雄は、伝ヤグ村跡が明宇底獅子嘉殿、下田原城跡がウヤマシ・アガダナとし、伝シムス村跡は桃盛（トニ）家が中心的な役割を果たしていたとみている。しかし、倭寇史跡は上記の三史跡だけにとどまらず、伝シムス村跡の西方に広がる伝マシユク村跡、島の西側にある伝ミシユク村跡も加えてもよいだろう。これらの遺跡からは倭寇との関係を裏づける外来陶磁器が出土している。

倭寇との関連を視野に入れた時、遺跡の構造で注目されるのは下田原城跡と伝マシユク村跡遺跡の二つ。下田原城跡は、南側は平坦だが、北側は約10メートルほどの断崖が東西に延びる。そして東側と西側は緩やかな勾配をなしている。城跡は島の北側にあり、北方を向くと海が広がり、遠くに西表島や石垣島の山並を眺望できる。城跡は立地条件や形状からして、海上から侵入して来る外敵に備えて構築されているようにみえる。伝マシユク村遺跡は海岸線近くの岩場に高さ約2メートル、延長約100メートルの石垣を東西に積み上げてある。石垣をみると砦のようであり、下田原城跡と同様、外敵を防備するために築き上げられたようである。

史跡構造からみて、この外敵とは何者であるのか。推測の域を越えないが、見方によっては倭寇であったことも考えられる。出土している外来陶磁器から推して、倭寇の集団は史跡を訪問し、村落の首長と取り引きをしたであろうか。そこで次に考えられるのは、両史跡に居住していた人物は、それなりに勢力を誇っていたと思われるが、何者であるのかということ。人物の特定化は、出土した陶磁器からは判断することは難しい。八重山の英雄時代の史跡が、島には数カ所残っており、これらの史跡は倭寇と何らの関係を保持していたと考えられる。

おわりに

八重山諸島の南端にあって「波照間島節」には「下八重山」と謡われる波照間島だが、八重山の先史時代から群雄割拠時代においては、西表島と同様、極めて“重要な島”であり続けた。下田原貝塚は、島じまの先史時代を解明する史跡として最も古く、そこから出土した下田原式土器は祖型が台湾東海岸の巨石文化との文化伝播によるものとする見解のほか、マリアナ諸島のマリアナ赤色土器との類縁性を説く見方がある。いずれにせよ、独特な型式をしているが、八重山では最古の土器であることは間違いない。

八重山の群雄割拠時代は、琉球王府の権力基盤が固まりするある時期で、王府の支配力はそれなりに八重山に影響を及ぼしていたものの、ある種の独自性も保っていた。そのような時代に島じまには英雄がいて民衆を統括していたが、そのなかで時代の中心的役割を果たし、歴史を推進していた人物の大半は波照間島出身なのである。

石垣島や西表島に比べ周囲が14キロメートル余しかない小さな島から、なぜ、八重山の歴史を動かすような人物が輩出したのであろうか。波照間島は西表島、石垣島、宮古、沖縄本島、日本本土という地理的に北上する「北向きの視線」では南端に位置するが、台湾、東南アジア、いわゆる南洋諸島を視野に入れた「南向きの視線」では日本の最先端にあり様々な南方文化が入り込む玄関口にある。島の周囲を黒潮という“海の大河”が北上しており、黒潮の流れによって南方から多種多様な文物や文化が入り込んできた。

外部から入ってきた文物や文化のなかには倭寇のような海賊的な要素をもちながらも、海商として活動した人的集団、あるいは島人と交流のあったヨーロッパ人等も含んで考えると、小さな島は何らかの文化的衝撃を受けざるをえなかった。このようなインパクトはマイナス要素よりも、プラス要素の方が強く、島の文化向上に少なからず影響を与えたであろう。周囲を荒波が洗う島への文化の流入が長年に渡り続くことで、英雄を生み出す素地が形成され、時代を重ねることによって次第に強固になっていったものと考えられる。そして、これが英雄を輩出することに結びついたのであろう。

注

- ① 稲村賢敷『琉球諸島における倭寇史跡の研究』（1957年）
- ② 沖縄県教育委員会『下田原貝塚・大泊浜貝塚』（1986年）
- ③ 沖縄県教育委員会『前掲書』
- ④ 金関丈夫「八重山諸島の古代文化」（『民族学研究』第19巻2号 1955年）
- ⑤ 金関丈夫「前掲論文」
- ⑥ 沖縄県教育委員会『前掲書』
- ⑦ 八重山歴史編集委員会『八重山歴史』（1954年）

- ⑧ 宮良高弘編『八重山の社会と文化』(1973年)
- ⑨ C・OUWEHAND『HATERUMA』(1985年)
- ⑩ 宮良高弘編『前掲書』
- ⑪ 柳田国男『海南小記』(1925年)
- ⑫ 宮良高弘編『前掲書』
- ⑬ 金関丈夫「前掲論文」
- ⑭ 宮良高弘編『前掲書』
- ⑮ 岩崎卓爾「ひるぎの一葉」(『岩崎卓爾一卷全集』1974年)
- ⑯ 黒島為一「貿易権の独占化と八重山征伐」(『琉球新報』落ち穂 1984年 1月11日)
- ⑰ C・OUWEHAND『前掲書』
- ⑱ 稲村賢敷『前掲書』
- ⑲ 真栄平房昭「琉球の形成と東アジア」(新版『古代の日本③』九州・沖縄 1991年)
- ⑳ 谷川建一編『沖縄・奄美と日本』(1986年)
- ㉑ 稲村賢敷『前掲書』

波照間と皇民化

前田真之

1. はじめに

波照間の歴史について語るとき、去る大戦の時に起きたマラリヤ問題を抜きにしては語るができない。このことについては、「沖縄懸史10 沖縄戦記録2」や「石垣市史 資料編 近代3 マラリヤ資料集成」、「竹富町史 第11巻資料編 新聞集成 I・II」があり、さらにこれらの資料などをもとに分析を試みた石原昌家監修「もうひとつの沖縄戦」が世に出ている。

これらの書物をひもとくと、西表への疎開にいたる経過や波照間の青年学校に配置されていた残置謀者山下寅夫の活動の様子などが記されている。

ここでは、現在残っている「波照間小学校沿革誌」などを手がかりにしながら、大戦に至るまでの波照間国民学校等における皇民化の動きを、本土や沖縄本島あるいは石垣島などと比較しながら考察をすすめていくことにする。

2. 皇民化と沖縄

琉球藩を廃し、それに変わって沖縄県が設置されたのは1879（明治12）年の年である。この年から7年後の1896（明治29）年に高良隣徳氏が『大日本教育会雑誌』に掲載した論文の中で次のようなことを述べている。

「・・・沖縄県に於いては人民一般に日本帝国臣民たるの思想に乏しく、したがって忠君愛国の精神に欠くる所あり・・・今日既に教育を受けたる、小学生徒は元より例外なれども、彼等の父兄に至りては、天皇陛下、日本帝国なる語さへ弁知せざるものあり。」（傍点筆者による）

高良氏は、東京高等師範学校を卒業した年にこの論文を書いているが、やがて沖縄県立第二中学の校長も歴任しており、当時の沖縄の知識人層の考え方を示していると思われる。さらにそれから14年たった1910（明治43）年に、琉球新報は国策を支援する立場から6月4日に「徴兵忌避と辺境の民」という社説を掲載している。

「・・・我が沖縄に就いて見よ、一般人心の期する所、素より君国の為めに身を致力を尽くさんと欲せざるなきは吾人の今更論明する迄もなきところなれども中に偶々柔弱軟骨の漢子あり、頑迷にして臣民大儀の存する所を弁知せず国民の義務たり、將た其のめいよたる徴兵を忌避して以て、苟も存せんとするもの、年々発見せらるるに於いては、県民は深く以て各自の恥辱となし矯正の道を講ずるところなかるべからざるなり」（傍点筆者による）

ここには廃藩置県後、1898（明治31）年に施行された徴兵令の実施が思うようにいかず、徴兵忌避者を多く続出せしめたことへの焦燥感が滲み出ている。

この二つの事例から言えることは、児童に比べて急激に変えていくことの難しい大人の存在がクローズアップされていることである。しかしこのことは裏返して言えば、児童を皇民として形成していくことの方が、これからはもっと重要になるということを示唆している。島尻郡長兼首里区長の斎藤用之助が1898（明治31年）に高等小学校の4年生に行った最も尊敬すべき者のアンケート調査では、天皇をあげている子供が多くなっている。そこでこの皇民化が、どのような形で進んでいったのか見ていくことにする。

3. 御真影と沖縄本島および八重山における対応

天皇を中心とする国家体制の確立を目指して、明治政府は1889（明治22）年に大日本帝国憲法を公布し、神聖にして犯すべからざる万世一系の天皇が大日本帝国を統治することを明らかにした。

この翌年の1890（明治23）年に教育勅語が公布されたが、学校教育のあらゆる場を活用して普及を図るため1891（明治24）年に「小学校祝日大祭日儀式規定」を公布し、学校儀式の中で御真影への拝礼、勅語の奉読が行える体制を整えたのであった。

さて体制の整備が進む中、沖縄ではそれに対してどのような形で皇民化教育が進められていったのか見ていくことにする。

沖縄県における御真影の下賜：沖縄県に於いては、御真影の下賜が教育勅語よりも先に行われている。日の丸と御真影が1873（明治6）年に琉球藩に下賜されたが、学校に対しては1887（明治20）年に沖縄県師範学校に、1889（明治22）年に首里中学校に、同年12月に那覇・首里の各校に下賜されている。多木浩二氏が「天皇の肖像」に於いて初等教育機関への御真影の下賜は1889年に始まったと述べていることからすると、沖縄県に於いても他府県と同じ年に下賜されていることが分かる。

一方八重山に於いては、石垣市の発行した「ひびけ平和の鐘」によると、御真影は1891（明治24）年1月5日に八重山島高等小学校に下賜されたとある。沖縄本島より2年遅れているが、教育勅語は公布された1890年の12月には下賜されている。

御真影の下賜は、各学校の自発的な申し立てにより行われるが、要件に合致して選ばれた模範となる優等な学校にのみ知事をとおして下賜された。したがって登野城小学校のように奉安殿があり御真影が安置されている学校の榮譽は、学校そのものの評価につながるものとして理解されていた。岩本努氏が、「『御真影』に殉じた教師たち」で「御真影の下付申請には奉安施設の設置が事実上の前提となっていた」と述べているが、この下付申請が仲々難しいものであったことは、1913（大正2）年の琉球新報にも紹介されている。そ

れによると1913（大正2）年10月31日の天長節は、今上陛下即位後第一回目にあたることから、全学校をあげて祝うため文部省をとおして宮内省に下賜方の出願を行うが、良い返事をもらえなかったとある。当時御真影を下賜されていない学校では下付申請の為に躍起となっていたことが分かり、このような学校間競争を通して天皇への忠誠が下から形成されていったことが分かる。しかしいったん御真影が下賜されると、その取扱いについては学校は大きな責任を負わされることになり、それについては1891（明治24）年の文部省訓令第四号で御影並勅語の謄本奉置方が定められた。1910（明治43）年に火災が発生し、御真影、教育勅語、戊申詔書の謄本を焼失した佐敷尋常小学校では、校長と准訓導が懲戒免職処分にあっている。また1937（昭和12）年に創立された県立八重山農学校には、島村修氏所蔵の写真によると、「大麻奉戴殿」があったことが分かる。ここには御真影ではなく、神宮大麻が祀られていたとのことであり、御真影が下賜されることが大変なことであったことが分かる。当時の教育について証言している本盛茂氏によると、「大麻に関する文書」が県庁から八重山支庁にあると、支庁から市町村長や学校長に需要の確認があり、市庁から学校、学校から各戸あて配布されたと述べている。またこの大麻の配布に伴い、青年会を動員して各家庭にある香炉などを撤去したことが島袋全利氏の証言で明らかになっている。

4. 御真影への波照間の対応

御真影の下賜は簡単なものではなかったが、波照間ではどのような状況であったろうか。波照間の状況について述べる前に先ず沿革について触れておく。

波照間では、1894（明治27）年に大川尋常小学校波照間分校が設置されるが、その後1901（明治34）年に波照間分教場と改称、さらに1906（明治39）年に波照間尋常小学校、1941（昭和16）年には「国民学校令」に基づき波照間国民学校へと改称されていく。

波照間小学校学校沿革史によると、波照間国民学校時代の1944（昭和19）年2月29日に「仲白保幸助氏第一戦ヨリ御真影奉案庫建設費ニト金拾円也寄贈ヲ受ク」とある。岩本氏が「奉安施設の設置が御真影下付申請の事実上の前提」と述べていることからすると、終戦の一年前になっても波照間には御真影の下賜がなかったということになる。1941（昭和16）年から1943（昭和18）年にかけて訓導として教鞭を取った与那覇政二先生にお話を聞いたところ、やはり御真影の下賜が波照間にはなかったことが明らかになった。したがって波照間では、御真影がないなりの形で皇民化教育を進めていったことになるので、どのような形で進めていったのかという視点から見ていく必要がある。

波照間尋常小学校では、1935（昭和10）年4月20日から「感恩報謝ノ念ヲ強調シ忠君愛國ノ精神ヲ助長スバク本日ヨリ毎朝禮前ニ一齊ニ皇居遙拝ヲ行ウ」と記録が残っている。このことから宮城遙拝が教育勅語の奉読に続き、やがて1940（昭和15）年から1941（昭

和16)年にかけて職員室や各教室に備え付けられた神棚の神宮大麻が学校の中では大きな役割を持つようになった。

5. 教育勅語への対応

沖縄県における教育勅語謄本の下賜は、1890(明治23)年に沖縄全域で行われている。これを受けて同年勅語の奉読が盛んに行われたことが記録にあり、地域に関わりなく広く行われたもようである。波照間小学校沿革誌は、資料の破損もあると思われるのだが現存する資料は明治28年から始まっている。この現存する資料の範囲内で見た限りでは、教育勅語の奉読式が記録上に出てくるのは1914(大正3)年の10月である。分校が設置されたのが1894年であることからすると、奉読式が20年後に初めて行われたとは考えにくく、恐らく破損資料の中に奉読が行われたころの記録があったと見た方が良いのではなかろうか。ともかく波照間には御真影の下賜がなかったので、皇民化教育においては教育勅語の教えや宮城遙拝、神宮大麻への拝礼などを行事の中に取り入れて行っていったことになる。

6. 学校沿革誌から見た皇民化教育

皇民化教育がどのような形で行われていったのかについては、学校沿革誌をもとに、1年を1つのサイクルとみなして考察を進めていった方が理解しやすい。戸田金一氏の「国民学校 皇国の道」によれば、1945年10月22日に連合軍総司令部から出た指令すなわち「日本教育制度に対する管理政策に関する件」は、学校から超国家主義的・軍国主義的なものを排除する内容を含んでいた。そのためそのような内容を含む学校関係の資料等が焼却され、物的証拠を湮滅する動きが全国的に行われたと述べている。このような状況を前提にしたとき学校沿革誌は、その当時の学校の状況を知るための手がかりとしては、大きな意義をもつものといえよう。教育が4月をスタートとし、その翌年の3月までをもとにしているので、1年の中でどのような行事を計画し、実施されていったのかを見ると、学校におけるおおよその活動状況が見えてくるとと思われる。

ここでは1941(昭和16)年に焦点をあてて見ていくことにする。日本は同年真珠湾を攻撃し太平洋戦争に突入しているが、同じく学校に関しては「国民学校令」が出されそれ以前とは時代を画しており、波照間尋常高等小学校も竹富村波照間国民学校として発足している。さらに沖縄県当局は、国の戦時動員体制に呼応して教育綱領を発表しているが、この内容については沿革誌の中にも見ることができる。

「昭和16(1941)年4月16日：本学年度初メノ職員會ヲ開催シ本學年度學校經營
等二関スル事項ヲ指示又ハ協議ス

1. 本校教育ノ方針

国民學校令第1條

皇國ノ道ニ則リ初等普通教育ヲ施シ國民ノ基礎的鍊成ヲ成ス

2. 本学年度力点

(1) 沖縄県教育綱領ヲ体シソノ具体化ニ努カス

- ・ 国体觀念の明徴
- ・ 国語教育ノ向上
- ・ 国民体位の向上
- ・ 科学教育の振興
- ・ 実践力ノ強化

(2) 校訓ニ新シク「和協」ノ項目ヲ加ヘ、校訓ノ具体化ニ努力

- ・ 気魄 げんきよく
- ・ 規律 きまりよく
- ・ 禮節 禮儀正しく
- ・ 和協 心を合はせ力をあはせ

(3) 儀式・民族行事ヲ重視シ教授、訓育トノ連絡ヲ圖リ家庭化ヲハカル

3. 鍊成施設

一日ノ鍊成行事

登校、自習、朝礼、授業、掃除、食事、書礼、授業、課外運動ヲ稼業時間表ニ依リ規律正シク行ウ

週中鍊成行事

月 週訓発表

土 反省報告 国体訓練および作業

月中鍊成行事

1日 國旗掲揚

2日 級長常會

5日 後援会費徴収

7日 特局講演日 慰問文 報國貯金

14日・30日 部落内掃除日 (兒童公益作業)

16日 少年團常會

更に月毎ニ機會毎ニ鍊成計劃ヲ樹立シ月中行事中ニ織リ込ミ鍊成ヲナス

4. 教科研究部 5. 校務分掌決定 6. 其の他直チニ具体化スベキ事項ヲ協議決定ス

(1) 教室經營ニ関スル件

- (2) 報國農場経営ニ関スル件
- (3) 動物飼育ニ関スル件
- (4) 校庭ノ美化、庭園ノ手入れニ関スル件
- (5) 校舎内外ノ保清訓練ニ関スル件
- (6) 青少年團ノ強化訓練ノ件

この1941年4月の本校教育方針を見ていくと、国民学校令に言う“皇國の道に則り”ながら、沖縄県の教育綱領を具体化し、さらに校訓に「和協」が新たに加わっている。おそらくこの和協という考えは、国民学校令による学校の改組が戦争拡大にむけてのものであるということを考慮に入れてのものではなかったろうか。それから儀式・民族行事を重視しながらも、それらが学校のみならず家庭においても浸透していくことが期待されており、部落会→隣組→家庭という末端組織への浸透が視野に入っている。「沖縄県史10沖縄戦記録2」によると、八重山大浜村字宮良の部落会長成底真加良氏が所持していた「定例常会書類」の資料から隣組班長を集めた常会の様子が分かる。常会は宮城遙拝、祈願黙祷、常会の誓いの朗読のあと、伝達報告事項と申し合わせ事項で構成されている。この伝達事項の中には、興亜奉公日の実践事項の励行や大詔奉戴日の設定、紀元節国民祝実施などが含まれており、地域で取り組む行事の様子が分かる。この大浜村で行われた常会の活動のようすは、全国的にほぼ同じ内容で行われていたことが予想され、波照間においても同じような活動が行われていたと思われる。

この年に行われた行事等で、沿革誌に記載されたものを月別に挙げて見ることにする。

- 4月 天長節遙拝式挙行 (29日)
- 5月 興亜奉公日 (1日) ・波上宮例祭の遙拝式 (17日) ・青少年学徒ニ賜リタル勅語御下賜記念日 (22日) ・海軍記念日 (22日)
- 6月 興亜奉公日 (1日) ・各教室に神棚奉齊 (5日) ・漢那憲和氏による講話 (10日)
- 7月 支那事変記念日 (7日)
- 9月 母姉講習会 (25日) *これ以降毎日午後1時より3時間実施
- 11月 明治節遙拝式挙行 (9日) ・青年団記念日の勤労働員 (22日)
- 12月 米英開戦決定 毎月8日を大詔奉戴日と定め、米英撃滅必勝の信念を強化する。
- 1月 大詔奉戴日 (8日)
- 2月 大詔奉戴日 (8日) ・紀元節遙拝挙行 (11日)
- 3月 大詔奉戴日 (8日) ・陸軍記念日 (10日)

ここに掲げた行事などを見ると、全国的に日を設定して行われた紀元節・天長節・明治

節などの四大節や興亜奉公日・支那事変記念日・大詔奉戴日・陸軍記念日、それから天皇によってその時々に行われる勅語に関するものが、そのほとんどを占めている。興亜奉公日は、太平洋戦争突入以後は大詔奉戴日にとって替えられる。昭和17年4月以降をみると、このほかにも海軍記念日（昭和17年5月）、満州建国十周年記念奉祝行事（昭和17年9月）、軍人援護二関スル勅語御下賜記念日（昭和17年10月）、大東亜戦争一周年記念日（昭和17年12月）、新年遥拝式（昭和18年1月）、青少年学徒二賜りタル勅語奉読式（昭和18年5月）、大舩中隊長戦死一周年記念（昭和19年・20年1月）、大麻焼納祭（昭和19年3月）の行事が入ってきているが、1945（昭和20）年に入ると戦況が逼迫化し、行事どころではなくなっている。

これらの行事には学校で取り組まれた行事のみならず地域で取り組まれた行事も含まれており、学校沿革誌に記載されている行事がすべて学校の行事だというふうに理解すると誤解を生ずることにもなるので注意を要する。大詔奉戴日は、与那覇政二氏によると学校で取り組まれた行事ではなく、それぞれの部落で取り組まれた行事とのことである。波照間においては、部落の発展分離により加わった二御嶽を加えた五御嶽すなわちアサティワー（外部落）、ブースクワー（前部落）、ブイシワー（名石部落）、アラントウワー（南部落）ミシクワー（北部落）で行われたことになる。学校沿革誌を見ると、この行事は各部落の御嶽に集まって行うことが国防婦人会で協議されている。しかし御嶽での必勝祈願祭に於いては、宮城遥拝→皇大神宮遥拝→御嶽遥拝→祈願文朗読→愛国行進曲合唱→司会者挨拶→退散となっているが、天照大神を中心とする神々と御嶽に祭る神々とのほぎまで葛藤がなかったのかについては今後の検討課題としたい。石垣島では神宮大麻の配布に伴い各家庭の香炉の撤去が青年会を中心に行われたが、神の島波照間でも御嶽の神々と各家庭に配布された神宮大麻をとおしての神々との間で葛藤が起きたことが予想されうる。それから1940（昭和15）年には職員室に神棚が設置され、さらに1941（昭和19）年には各教室8か所に神棚が設置されている。御真影が長らく下賜されていなかった状況を考慮すると神棚の設置も遅きに失し、太平洋戦争突入という情勢をまっけて行われている。行事についても1941年を境にして増えてきており、沖縄的な特徴としては大舩中隊長戦死記念が1944年から設けられ、精神身体鍛錬の目標とされている。また奉安庫設置のための寄付が仲白保幸助氏により終戦1年前になって行われているが、これは逆に御真影がこの年になっても下賜されていなかったことを物語っている。

1944（昭和19）年3月になると、沖縄県教育課は決戦要項および決戦非常措置を設定し、決戦教育の徹底をはかっている。戸田金一氏によると秋田県の平鹿郡では、県の出先機関である地方事務所では校長常会を開催し、その中で決戦教育措置要項に関する件が指示事項として話し合われたとある。このことからすると決戦教育措置要項および決戦非常措置は

全国一斉に行われたことが分かってくる。「波照間小学校創立百周年記念誌 波の子」によると、決戦非常措置として御真影奉護について、流言飛語防圧と防諜の徹底などの指示が県から校長に出されている。これらの内容がどこまで徹底されたのかについては、今後関係者からの聞き取りが必要である。

1944年にまたがるこれらの状況を前提にして波照間における皇民化教育を概観して見たとき、次のような予測は成り立たないであろうか。

1. 皇民化教育が全国的統一的な行事をとおして行われる反面、御真影などの下賜がなかった波照間国民学校においては神棚設置も遅くから行われるなど、他の学校とは違った様相もあったのではなかろうか。
2. 大詔奉戴日の行事が、各部落毎に御嶽の前で行われているが、そこでの必勝祈願祭の内容に関連し、神々をめぐる葛藤が波照間の人々の間にはなかったのだろうか。
3. 決戦非常措置で指示された事項については、御真影がなかった波照間では指示通りに全てを実施する条件がないので、他の地域に比べて皇民化の形成が緩やかになる側面はなかったのだろうか。
4. 山下寅夫（本名：酒井喜代輔）の来島は1945年の1月から2月にかけてであり、時期的な遅れもあり彼の島民への影響力はその物理的な行使にも拘らず、精神的な面ではそれほど強くなかったのではなかろうか。
5. 山下寅夫が疎開解除に反対したにも拘らず、島民が満場一致で帰島を決めたこと背景には、西表島南風見等におけるマラリアの惨禍が一番大きく影響していると思われるが、十分に皇民化されなかった住民の存在ということはなかったのだろうか。

ここに挙げたものはあくまでも学校沿革誌など一部の資料をとおしての予測にしか過ぎないので、これからの課題は聞き取りなどをとおして、予測そのものの検討をも含めてその実相に迫って行きたい。

参考文献

- 波照間小学校 「波照間小学校沿革誌」（竹富町史編集室所蔵）
竹富町立波照間小学校 「創立百周年記念誌 波の子」（1995年）
竹富町史編集委員会 「竹富町史 第11巻 資料編 新聞集成 I」（1994年）
竹富町史編集委員会 「竹富町史 第11巻 資料編 新聞集成 II」（1995年）
石垣市史編集室 「石垣市史 資料編 近代3 マラリア集成」（1989年）
石垣市史編集室 「平和祈念がトブック ひびけ平和の鐘」（1996年）

- 琉球政府編 「沖縄県史10 沖縄戦記録 2」(1974年)
- 琉球政府編 「沖縄県史18 新聞集成 教育」(1966年)
- 琉球政府編 「沖縄県史19 新聞集成 社会文化」(1969年)
- 宮良高弘 「波照間島民俗誌」(木耳社、1972年)
- 岩本努 「『御真影』に殉じた教師たち」(大月書店、1989年)
- 高嶋信欣 「教育勅語と学校教育」(岩波ブックレット、1996年)
- 石原昌家監修 「もうひとつの沖縄戦」(ひるぎ社、1992年)
- 戸田金一 「国民学校 皇国の道」(吉川弘文館、1997年)
- 戸田金一 「昭和戦争期の国民学校」(吉川弘文館、1993年)
- 聞き取り調査 1997年11月8日(土) 島村修氏から話を聞く。
- 聞き取り調査 1997年11月18日(火) 与那覇政二氏から話を聞く。

波照間島の日撰曆クリヨンとその周辺

萩尾俊章

はじめに

沖縄県立博物館の波照間総合調査が事業として始まった後に、博物館に1点の写真が持ち込まれた。それは各種の符号が板に記されたものであった。所蔵は北部落の屋良部功氏である。那覇在住の兄弟屋良部久雄氏を通じて博物館へ問い合わせがあった。それが日撰のための曆の類であることがわかったのは現地へ赴いてからである。アウエハントが紹介したものはあるものの、その実態は不明であった。本稿を記すことになったのはこのような契機からであり、日撰曆の様態とその系譜を若干でも明らかにすることが目的である。

波照間島の村落は島のほぼ中央部に展開している。村落は富嘉、名石、前、南、北の5つあるが、竹富町の一つの区を構成している。戸数は、1998年度現在、北部落に41戸、南部落に32戸、前部落に50戸、名石部落に44戸、富嘉部落に37戸ある。日撰曆に関する調査は、各部落を悉皆調査する予定でいたが、調査日数の制約もあり、各部落の主だった家を調査するにとどまった。

1 波照間島の年中行事と曆

波照間島の年中行事には神行事があり、数も種類も多くきわめて複雑な構造を特徴としている。⁴⁾ 神行事の日程は干支にしたがって決められる。年中行事の日付はもちろん旧曆で表示され、慣例として行事日取りの干支が必ず付されている。

行事の日取りは年3回の「バンユレー」と称される会合で決定される。波照間の5つの御嶽のツカサ5人と、島の主だった役職にある区長、町議員、総務、幹事のオーサーピイトゥが参加する。祭事を執行するツカサと島の実際の社会生活にかかわる役員との合議で決められることになる。「第1回目は旧曆10月頃、丑（ウシ）の戌（ツチノエ）の日に行われるから、<ウシンバン>とよばれ、第2回目は旧曆12月頃の巳（ミ）の壬（ミズノエ）に行われるから<ニンバン>とよばれ、第3回目は旧曆3月頃の酉（トリ）の庚（カノエ）に行われるので<トウニンバン>と呼ばれている。第1回目と第3回目は、この島で最も古いとされている外部落阿底御嶽の宗家たる保多盛家において、第2回目は島で最も人口の多い前部落の大底御嶽の司の家において合議が開かれる」という。⁵⁾ 祭祀の方法も問題となり、神行事の祈願内容や穀物の収穫時期などの生産状況に見合った形で協議されていく。⁶⁾

こうして決められた行事の日取りは、例えば平成9年5月7日のトリヌバンユレで合議されたものは、「平成9年度（下期）神行事日程」などとして印刷されて、各家庭に配布される。公民館や共同売店にも掲示される。一覧表には、月日、曜日、十干十二支の日取り、行事名、備考として神行事参加者や供物を記してある。

島の年中行事のサイクルは、「節や節分に相当するsisinで始まり、次の農耕年の雨水を願うamijiwaで六月頃に終わる」という。⁴⁾ また、「波照間島の一周期の神行事について、まず判明するのは、これらの行事と密接な関係にある波照間の伝統的農耕期が節を以て正式に始まる点である。アミジワーの後も、穀物の収穫はしばらく続いたので、いわゆる農作時期の一周期は、約9カ月間だったと考えられる。残りの空いている3カ月内にできるだけ、法事、墓掃除、洗骨などの仏事をおこなうのが望ましい」とされている。⁵⁾

2 アウエハント記載の日撰曆

波照間島の公的な神行事は上述のような会合で決定される。ここでは、それとは別に私的な日選びに用いられる日撰曆が波照間で利用されている点を紹介しておきたい。

波照間島の日撰曆の初出紹介はアウエハントによる。「波照間のクリユン」として図解をまじえ解説している。⁶⁾ 古い波照間のクリユンkuriyun（日本語で“繰り読み”、すなわち日数を取る）は、12支の区画（ある場合には、5つの基本的な要素である木・火・土・金・水と結びついている）に基づく吉凶日を考慮するため視覚的な手助けをしてくれる。

ある伝承では、この曆はムッテー（大本）家の人が中国に長期滞在した後に、波照間に持ち込んだものという。また、別の伝承によれば、イナフク（稲福）家の役人が波照間の文盲の農民の利便を考えて、クリユンを導入したとされる。いずれの場合も、それは古い時代のことと認識され、かつしばしばそれは多くの古老によりまだ参照されているという。⁷⁾ アウエハントは“Hateruma”で日選曆の事例サンプルを一つ書写・紹介している。アウエハントが提示した曆は北部落の大泊家のそれではないかといわれるが、明らかではない。アウエハントはこの日選

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
Rat	子	○	○	○	○	○	⊕	○	○	♂	♂	♂	○
Ox	丑	♂	♂	○	○	○	○	⊕	○	○	○	○	♂
Tiger	寅	○	○	●	●	○	⊕	○	○	○	○	●	○
Hare	卯	●	○	♂	♂	♂	⊕	○	○	○	○	○	●
Dragon	辰	⊕	○	♂	○	○	♂	♂	♂	○	○	○	⊕
Serpent	巳	♂	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Horse	午	○	○	○	○	○	○	○	♂	♂	♂	♂	○
Sheep	未	♂	♂	○	○	○	○	○	○	○	○	○	♂
Monkey	申	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	⊕
Cock	酉	○	○	♂	♂	♂	○	○	○	♂	⊕	○	○
Dog	戌	○	○	○	○	○	♂	♂	♂	⊕	⊕	⊕	○
Boar	亥	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

アウエハント記載のクリユン

暦について、おおよその日取りの方法と符号の意味について注釈を加えていて、大いに参考になるので、長くなるが摘記しておきたい。⁽⁸⁾

旧暦のそれぞれの日は十二支の循環にしたがって数えられる。もし一月一日が「辰」の日であれば、それから、辰、巳、午、……亥と数え、そのあと「子」の日から始まる循環を繰り返す。クリユンはある特定のことがらをなそうとするとき都合の良い日を算定することに使用されるが、その前に、使用者は、彼の適当な「カドウ」を決めなければならない。世俗的な目的や、死者の崇敬に関連しない儀礼行事と関係するカドウには、三番目（ミーカドウ）、五番目（イツィカドウ）、九番目（ハクナカドウ）があり、この順番でますます縁起がよくなる。算定は次のようにおこなう。もし、使用者が「申」年生まれなら、彼の三番目のカドウは「戌」、五番目は「子」、九番目は「辰」となる。次に、この三つのカドウのいずれかは「戌」（勿論、「辰」が好まれる）が、クルユンに示される吉日に一致するかどうかで決定されなければならない。死者の拝みには、四番目または八番目のカドウが良いとされる。この場合、「申」から逆にさかのぼって数えて、「亥」ではなく「巳」をとることもできる。

○の印のある日は、ジンヌピン＝「天の日」で、この日は太陽（天）が最も大地に接近するので、極めて不吉な日である。例えば、この日に屋根を葺くことは誰も考えない。

○を標した日は、デーミツイ（＝デーニツイ：日本語の大日？）といい、幸先の良い日である。○⁺や●⁺の印は、マタンザといい、マタ・ン・ザ（「枝わかれした座」）またはマタ・ンザ（マタ・ンジャ：「多くの枝を生むこと」）といった意味が付け加わる。このように、マタンザの日は、結婚式には極めて良い日で、結婚から「枝わかれして」たくさんの子どもができるという意味の願いがかなう。同じ理由で、漁には良い日であるが、死者の拝みには良くない。

●の印のある日は、ヌスドゥルといい、家主のヒーヌスに災いがおきる日である。この日には、「主人を連れだし」、例えば、家の新改築やその家の畑でので共同作業で人集めをさせないようににする。もし、この日に畑から家に戻り、病気になると、確実に死であろう。

●の日は、フキス（日本語の不吉）といい、概して良くない日である。⊕と○⁺の日は、それぞれウツィウドゥルギャ、プカウドゥルギャという観念を表わす。ウツィウドゥルギャは、「内側の心配、腹立ち」を意味し、いずれ、鶏、牛、馬、豚、山羊などの動物が逃げていなくなりがちなので、こうした日にこれらの動物を取得することを避けなければならない。プカウドゥルギャは、この反対に「外側の心配」を意味し、従ってこの日はすべての家畜を閉じこめるのによい日である。⊙の日は、ジンクウ（日本語の地火）で、この「土と火」の火は、家・墓の建設、井戸掘り、結婚式やその他の祝事には良くないとみなされる。

クリユンに見られるように、いくつかの日で、二つの記号がお互いに重なったり、組み合わせられることがある。こうした組み合わせは、その日の吉凶が特別に強化されるか、逆に不吉な日が完全に災いをもたらす日になるかのどちらかである。いずれにしても、それを避けることができない。八月の「申」の日は、単にフキスの日であるだけでなく、フキスとウツィウドウルギヤの観念と結びつく。同じように、七月の「酉」の日と九月の「亥」の日は、フキスとヌスドゥルの観念とが結びつく（著者注—アウエハント提示のクリユンでは、フキス●とウツィウドウルギヤ⊕、ヌスドゥル●の各記号が重なるため、記号の判読ができにくいものとなっている）。

アウエハント日撰暦の基本要素は、以上のように、ジンヌピン、デーミツイ、マタンザ、ヌスドゥル、フキス、ウツィ・ウドウルギヤ、プカ・ウドウルギヤ、ジクワの8種が基本要素となっている。これらの要素が複数で組合わさることがある。

この日撰暦は、現地で“クリヨン”、“フリヨン”、“フリョーン”、“クヒョーン”、“フヒョーン”などと様々に呼称されるものである。本稿では、波照間で使用されているこの暦について、日撰暦もしくは「クリヨン」（話者による限定以外）という表記で統一しておきたい。

3 日撰暦クリヨンの様態

波照間島の日撰暦は、アウエハントが紹介した事例を含めると、9例を提示できる。ただ、アウエハントの日撰暦は現存するか否かの確認はできていない。内訳は下掲の表のとおりである。北部落4例、南部落2例、名石1例、富嘉1例である。

この他にも日撰暦を所蔵するか、かつて所蔵していた家があった。南部落の大嵩嘉一氏（大正7年生）の家にもあったが、子どもが石垣に持っていつているという。富嘉部落の米盛家にはクヒョンはかつて板に書いたものがあったが、あまり興味がなかったこともあり、わからなくなったという。同部落の旧家である保多盛家にも、戦前は板製の日撰暦があったが、戦時中に他の資料と一緒に箱に入れて持ち歩いてきたためになくなったという。

前部落の前野幸助氏によれば、日撰暦は“クヒョーン”と呼び、祝いの時に日取りをするのに用いた。日撰暦には独特の符号が記されていて、又（フ）のあるのはマタンザ、赤色に塗ったものはフーキピシといい、悪いことを表す。墓を造る時などはこの日撰暦を用い、日取りをした。板や紙に書いたりし、多くは男の人が使った。

同家にもかつては伝存していたようである。波照間では80歳以上の人であればわかるが、どこの家にもあるものではなかったという。別の前部落の話者も、お年寄りにはわかるが、これが残っているところは少ないという。

そのような話はあるものの、北部落や南部落、富嘉部落などで日撰暦を所蔵する家につ

いて数例の情報を得ており、今後、事例はまだまだ増えると思われる。とりあえず、現段階での収集事例を提示し、その様態を提示しておきたい。

表-1 波照間島の日撰曆一覧

(調査確認分のみ)

番号	所蔵家	部落	材質	法量	記載形式	要素種類
1	アウエハント氏調査資料		不詳	不詳	符号記載	8種類
2	美底家	北	センダン (2枚組)	①22.6×27.3 (1~6月分) ②22.5×27.3 (7~12月分)	符号記載	9種類
3	屋良部家	北	センダン (2枚組)	①13.2×38.8 (子~巳分) ②13.3×38.8 (午~亥分)	符号記載	9種類
4	黒島家	北	センダン (2枚組)	①25.5×19.5 (1~6月分) ②25.0×19.5 (7~12月分)	符号記載	8~9 種類
5	宮良家	北	ノート	23.5×24.3	文字記録	10種類
6	新本家	南	ボール紙	32.8×25.4	簡略符号と文字記録併用	10種類
7	勝連家	南	ノート	-----	文字記録	10種類
8	仲底家	名石	ボール紙	32.4×22.0	文字記録	11種類
9	仲白保家	富嘉	ボール紙	-----	符号記載	9種類

事例2は、北部落の美底家にはセンダン（梅檀）の木で造られたクリヨンが伝存している。現世帯主の美底清光氏の祖父は大工をしていた。仕事の関係上、日撰曆の使用の機会が多かったと考えられる。同家には、カラシャク（唐尺）も遺されている。

当家のクリヨンは2枚の板に墨書きと一部朱で彩色されたものである。2枚は1~6月分と7月~12月分で分けられている。7月~12月は上部に墨書きが薄く読みとれるが、1~6月分の方は判読できない。美底家のクリヨンは、アウエハント日撰曆と同様に、特有の符号と一部文字が付されていて、○印が朱で彩色されている符号もある。ただし、十二

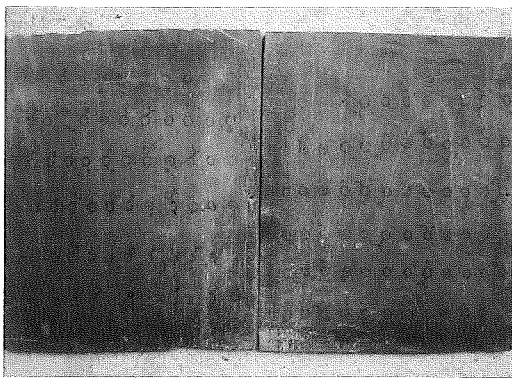
支の文字は付されていない。

この使用方法については美底清光氏が詳しいとの話であるが、調査期間中、ご本人がちょうど体調をくずされているとのことで、聞き取り調査ができなかったのは残念である。現資料の写真を掲載しておき、内容の補足調査については今後の課題としておくが、符号の内容はおおよそが読み取れる。●と○の記号については、側に各々「天」「地」の文字と一緒に付されており、ジンヌピン「天火」とジンクァ「地火」の意味である。また、♂、符号に「虫」の文字が付与されていることから「ムシ」と標示される日があることが判明する。他に、○デーミツイ、トマタンザ、○フカウドウルギヤ、◎ウチウドウルギヤと思われる記号がある。○と♂については、他の日撰曆の記号と照合すると、ヌスドウルとフキチなどに該当しそうでもある。基本要素は明確に判定できないものもあるが、9種類ありそうである。したがって、美底家の基本要素はアウエハント日撰曆よりも多く、その配列ないし組み合わせも明らかに異なる。

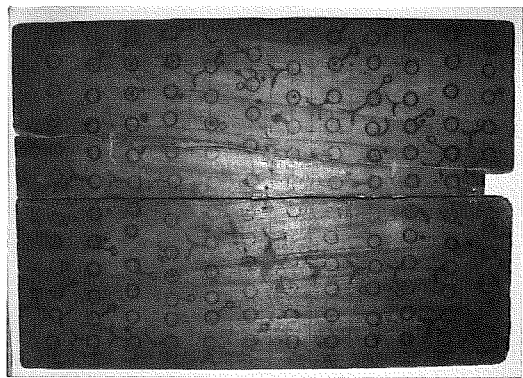
事例3は、既述の北部落の屋良部家の日撰曆である。同家のそれには「永代略歴毎月日観 昭和元年丙卯 新参月式拾日 旧式月拾七日 調屋良部宇喜那」と板の片面に記されている。素材はセンダンである。美底家の日撰曆と同じく、2枚に分かれ、クリヨン特有の符号が配列されている。表に先の表題が記され、裏面に1月から12月まで月暦が記され、子から巳まで分と午から亥までの分の2枚に分かれている。ただし、十二支の文字は美底家日撰曆と同様に記されていない。

屋良部功氏によると、屋良部宇喜那は功氏の母方のおじいさんにあたる。今大戦のときにマラリアで亡くなった。宇喜那氏は石細工が得意で、あちこちから石大工の仕事を頼まれたという。おそらくはそのような仕事柄から、この日撰曆を使用したと考えられる。父の文吉氏もこの日撰曆を使用したという。






日撰曆は特有の符合で記され、一部記号が朱で彩色されている。基本要素は○デーミツイ、●（朱で彩色）、◎ウチウドウルギヤ、○フカウドウルギヤ、♂マタンザ、♂ム



美底家の日撰曆



屋良部家の日撰曆

シ、フキチ、、の9種類と推定されるが、との2種類が同一なのか、あるいは指示する内容が異なるのかについては不詳である。配列ないし組み合わせは、アウエハント及び美底家日撰暦ともやはり異なる。

事例4は同部落の黒島家の日選暦である。黒島八重さん（大正11年生）の所蔵するクヒョーンは夫である故黒島孫英氏（明治38年生、85才没）が日取りに用いていたものである。センダンの板に符号で記載されている。この日撰暦も2枚1組の形式で、1月～6月と7月～12月に分割されている。結婚式や家の新築などに日取りを行った。1、3、5などの奇数の数にあてる。2、4、6などの偶数はよくない。自分の健康のための花生けをするときには、自分の生まれ年にあてて、日取りをする。自分が仕事をするとき、何かなそうとするときに必要である。結婚、家の祝い、家の新築・改築、墓の造成、仕事始めなどに使用する。クヒョーンの組み方は家によって異なると語る。

○の印は良い日である。赤い●はウツィウドウルギャで良くない日である。↑の印はマトンザで、これも良くない。○の符号はプカウドウルギャなどというが、夫が日取りを行っていたので、詳しいことはわからないという。○、●、◎、○、○、○、○、○、○の9種類が確認できる。頻出度合いの少ない○を加えると、10種類である。

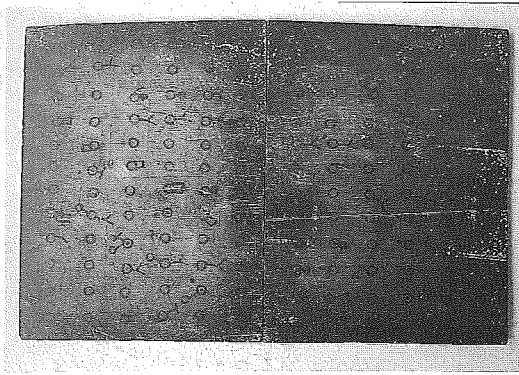
事例5は同部落の宮良家の日選暦で、“クヒョン”と呼んでいる。宮良フジさん（昭和9年生）の生家の父・定勝さんはカツオ漁の船の船長をしていた。漁には日選びは重要だったので、よく用いていたという。カツオ船ではウミバコに暦は入れてあった。本家の伯父・真勢が父の暦を書写していて、それを宮良フジさんが写し取ったものが現在のノート書きの暦である。本人が小学校5年頃の話である。父や伯父は昭和20年に亡くなった。父は防衛召集で石垣へ渡り、40才で西表島の南風見でマラリアのために亡くなった。本家にも残っていたはずであるが、畑小屋などに持っていたりしていたので、そのうちにわからなくなったようだ。

基本要素としては、○、天、マトンザ、ピンボン、ウチ、ヌシドリ、フカ、ヂンクワ、フキチ、ムシの10種類がある。ジンヌピンなどには屋根の葺き替え仕事などはしない。

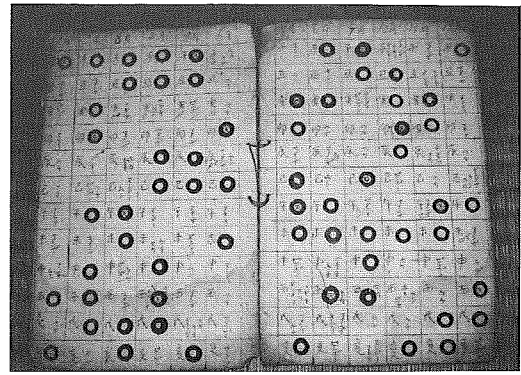
焼香では13年忌までは「壬（癸？）土」の日、33年忌は「庚・木」の日、結婚式や家の祝いは「金」を取る。法事や焼香は「土・水・木」を取る。「火」は家の行事には大凶であるが、漁船は「火」を取る。「火」は栄えものといって、大漁の祝いに通じる。漁をする人はこの日撰暦を用いた。神行事や葬式などの日撰に使用しないという。

事例6は新本長吉氏の家のフヒョーンである。家の新築、墓の行事、焼香などの時に用いたというが、現在ではあまり関心がなく利用されていない。基本要素は○、天、マトンザ、ピンボン、ヌシドリ、ウチ、フカ、フキチ、ヂンクワ、ムシの10種類である。

事例7は南部落の勝連家の日撰暦である。所有者の勝連文雄氏によれば、“フヒョン”



黒島家の日撰曆



新本家の日撰曆

“プヒョーン”は各家のものにより異なるという。屋良部家のものは以前から違っているという話もある。話者の妻の実家にもあるという。高島曆は「大和プヒョン」といい、それに対してこの日選び曆は「唐プヒョン」といわれる。これは曆を記号で写し取ったもので、「唐曆」ともいう。昔は唐、すなわち中国とも交易していたことから、中国からもたらされたことによる。勝連家の祖先は首里王府から免許をもらって、馬天から船でこちらに来たと口碑される。当家のものは「唐曆」とした備忘録（平成2年度以降）に書き留められている。

基本要素としては、○、天、ウチ、フカ、ジンクワ、マタンザ、ヌシ、ムシ、ピンボン、フキチの10種類がある。「マタンザ」は栄えものの意味があり、結婚式などによい。しかし、家造りには火に対して危ないとの意味があり、嫌われる。マタンザはいいようにもとれる記号である。この日は焼香はできない。「ピンボ」は悪い。「ヌシ」は主を取るといって悪い。「ウチ」はウツウドゥルギャーといって家内部での禍がある。「フカ」はフカウツリギャーといっている。「ジンクワ」は悪いことを表す。「フキチ」は不吉を意味する。「ムシ」は家づくりのときには虫が入る。

例えば、6月の申（さる）とヌシの日は、焼香については大凶で、33年忌は行っていけないとされる。ヌシ（主）をとるといふ言い伝えがあり、これを行ったために主人が亡くなったことも伝承されている。同じく、6月の酉（とり）とウチについては、これもウチウツリギャーといつてよくない日とされる。

勝連文雄氏が語った昔話として次のようなものがある。4月の大凶は酉と天・ジンクワ・マタンザであるが、ある人はこの日を良い日と解釈して、家を新築した。そうしたら、天から使いが来て、筆と墨を用意した。火を借りに来た。それを貸して、手を出したら「水」という字を書いた。煙にのって上がることもないし、この家は繁盛した。また、この日に焼香をしたから、あの家は途絶えたとか、あの家はこの日に家作りをしたから火事にあつて焼けたとかいう話が伝わっている。

焼香や家作り、健康祈願などひとそれぞれのカードにあてて、日取りをおこなった。

勝連ノートには下掲のようなそれぞれの事柄にみあう、五行と年カードゥを示した簡易表も記載されている。また、家族の生年なども付記されている。

家造り（最初）	土	木	金	年カード 9、11、5、3	ウマハキラウ
作付け（造願）	土	木			
クバナ願	金	木			
健康願	金	木			
法要焼香	土	水			
33年忌法要	木			年カード 9、11、5、3	
墓造り	土	水		年カード 9、11、5、3	
墓祝い	土	木	水		

昔の人は日取りは嚴重におこなった。特に男性が気にかけてたという。ただ、女性でも日取りをよく読める人がいた。この日取りは1人にはとらせないで、3人に日取りを診てもらって当たったら、その事柄をおこなってもよいといわれた。物事の判断は難しいことを知らされるという。

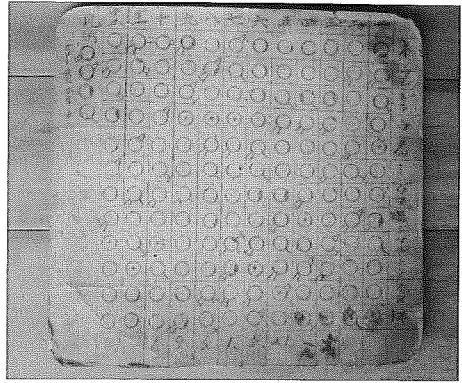
事例8は名石部落の仲底家の日撰曆で、博物館職員の仲底善章氏から提供された資料である。ボール紙に「12支、月別、日取りクリヨン」と表題が記されている。昭和63年10月3日の記載である。この日撰曆は祖父仲底善祥氏のメモ帳から父善吉氏が書写して作成したものである。日撰曆は符号ではなく、文字で表記され、裏面には家族の生年の12支と生年月日が記されている。

基本要素は天火、地火、外、内、虫、又、ピンポ、不吉、ノシ、コロビ、それに何も無い空白の日（デーミツィ）の11種である。9つの事例の中では、基本要素が一番多いという特徴がある。このうち、「コロビ」と表記される要素は仲底家日撰曆のみにみられるものである。同じ名石の前田盛菊江さんによると、コロビの日には家の祝い事はできないといひ、あまり縁起の良い日ではないとされる。

事例9は富嘉部落の仲白保家の日撰曆はボール紙に書かれものである。仲白保幸助氏（大正3年生）によれば、「トークヒョン」と呼んでいるという。トークヒョンは唐からきた曆なのでそう呼ぶという。トークヒョンはお祝いや結婚式などの日取りで用いている。

話者の父が語ったところによると、明治の時代に役所の取り締まりで、これらの曆類は全部没収され、処分された。しかし、密かに隠して没収を免れた曆があり、それを書写したのが今に伝えられているものという。管見の限りでは、明治期の新聞資料など曆の取り締まりに関する記事を拾うことができず、いつの頃なのかは不明で、確認はできない。この点については、継続して史料調査や聞き取り調査が必要である。仲白保家のトークヒョ

ンは1961年5月21日に作成されている。これは話者の妻の父西島本加那氏が板に書いてあったものを書写したものである。話者の家にも戦前はあったが、戦時中に疎開している間に紛失したという。トークヒョンには主ドリ、天火、不吉、虫の基本的な符号が凡例として記されている。他に、○、◎、⊙（朱で中に点）、♂、♂の符号がみられる。



仲白保家の日撰曆

以上8つの事例をあげてきたが、全体としては、日撰の符号の意味・内容と日撰曆の使用法は、かなり詳細がわからなくなっている。年配者がわかるというが、しだいにそれらの人々も少なくなりつつある。若年層は高島曆を参考にする人が増えているという。

伝存する日撰曆クリョンは、関係者から書写して遺されたものも多い。仕事上日取りが重要となる大工、漁業などの職種をもつ家に伝えられたケースが多い。また、ツカサなどの神役が祭祀上の日取り選定から、所持する事例もある。現存の日撰曆は板に記したもの（3例）と紙類に記したもの（5例）がある。以前は板に墨で書かれたものがよくみられたという。かつて紙が貴重であったことを考えると、本来は板に記した日撰曆が用いられたと考えられる。

日撰曆クリョンは、伝存・所蔵する家のものにより、月毎の日撰の組み合わせ内容は微妙にそれぞれ異なる。これが、書写元の系統によりなんらかの分類が可能なのかは、今のところ不明である。これは別稿を期して、検討してみたい。日撰曆は特有の符号で標示されるもの（5例）が伝統的な型式であると考えられるが、符号の読みを文字で書いた型式で書写したもの（4例）がみられる。これは、符号の内容及びその日撰組み合わせは変異が大きいのに比して、文字記載の日撰組み合わせは、若干の変異がある程度で類似する箇所も多い。

これらの日撰曆には、当該家族成員の十二支と生年月日が付記されていることがあり、家庭の個々人のカドゥにあてた日選びがなされていることを示している。

4 波照間島の日撰曆クリョンの系譜

前述のように、アウエハントの記述では、この曆は大本家の祖先が中国からもたらした伝承と、稲福家の役人が農民の利便を考えて導入した伝承がある。大本家、稲福家ともに、聞き取り調査をおこなったが、世代交代もあり、日撰曆の伝承に関する伝承を得ることはできなかった。

稲福家には先祖が沖縄から波照間島に来島したという伝承は残されている。稲福家は稲

福里之主に始まるといわれる。稲福の長男は琉球王府に仕え間切を治めていた。その兄弟の次男は石垣に来住し、三男は波照間に来住したという。その三男が稲福里之主である。また、本宅には古い位牌が伝存している。位牌の銘書きには、順治十九年（1662年）、雍正十年（1732年）、乾隆十三年（1748年）の年号が読み取れる。位牌は墨がかなり薄くなっており、判読しにくいところもあるが、当時からの伝世品であるかどうかは定かではない。没年の時代から判断して、当時位牌が備わっていたとは考えにくく、後世に創設された可能性が高い。稲福にも船の掛軸があったという。稲福家の祖先は沖縄本島の首里と伝承上のつながりをもっていることは、島民から認識されている。

稲福家や大本家が導入したか否かは定かではないが、波照間には島外との交流を示す伝承が数多くあり、この種の日撰曆がそのような交流の過程で島外から伝来したことは想像にかたくない。

日撰曆の特有の符号と意味内容は、琉球王府の曆とかかわる「時双紙」、宮古島の「砂川双紙」「砂川曆」とも、類似のものが含まれている。中鉢良護氏は、波照間のクルユンの日撰曆が、砂川双紙や砂川曆と同じく、時双紙の曆注と同じものがみられることをすでに指摘した。⁴⁹⁾ここでは、この点に関して、事例を踏まえながら検討しておきたい。

沖縄県立博物館に所蔵されている2葉の「時双紙」は、戦前中城村熱田の小橋川家に秘蔵されていたもので、それを鎌倉芳太郎が筆写した写本である。原本は戦災で失われたようであるが、写本として残されており貴重である。佐喜真興英氏はこの時双紙について内容の解釈を行った先駆者である。⁴⁰⁾時双紙A本の「月のぬし」、「内おとうか」、「外おとうか」、「天地のひ」、時双紙B本の「むしかち」は本稿の日撰曆クリヨンに共通して見出せる名称である。「月のぬし」は田舎の占書には月主、月主わるし、主倒杯とあり意味不明という。「内おとうか」と「外おとうか」はそれぞれフル積吉日、フル積凶日とある。「天地のひ」は、天火、地火と書き、家作等に忌日とされる。「むしかち」は虫頭で、但書きに虫付日とあり、この日に稲を植えると虫がつくことになると信じられているとした。

ここにみえる「月のぬし」は波照間の日撰曆クリヨンの「ヌスドゥル」「ヌシドリ」と称される日に、また「内おとうか」と「外おとうか」はそれぞれ「ウツウドゥルギャー」、「フカウドゥルギャー」に、さらに「天地のひ」はジンヌピン「天火」とジクク「地火」に、「むしかち」は「ムシ」に相当すると考えられる。

時双紙における各事項の日取りは以下のようなものである。「月のぬし」は十二支による日取りで、正月から12月まで順に、「卯辰巳午未申酉戌亥子丑寅」となっている。「内おとうか」は干支による日取りで、五行の火と「卯戌、巳、申辰、未亥、子戌、寅、卯戌、卯申、卯戌、卯戌、酉戌、申辰」の組み合わせ、「外おとうか」は干支ないし十二支による日取りで、「木・子巳、水金・丑卯、酉巳、火・申巳、火・午酉、木・子未、酉巳、木・辰酉、巳辰酉、

酉巳、辰巳、午丑」の組み合わせである。「天地のひ」は十二支による日取りで、天は「子卯午酉子卯午酉」、地は「巳午未申酉戌亥子丑寅卯辰」の日取りである。「むしかち」は十二支による日取りで、「申亥寅申卯丑巳寅丑辰巳」の日取りとなっている。

時双紙は事項により干支や十二支による日取りであるのに対して、日撰曆は十二支による日取りという点で簡略化されている。日取りは、時双紙の「月のぬし」は日撰曆の「ヌスドゥル」の日取り配列と一致する。また、「天地のひ」は日撰曆の「ジンヌピン」と「ジクワ」の日取りとも一致する。ただ、「内おとうか」と「ウツウドゥルギャー」については、各家毎の日撰曆と日取りが大方一致するか、一部が取り入れられた形跡があるものに分かれるようである。「外おとうか」と「フカウドゥルギャー」は各家毎の日撰曆により日取りは若干異なるが、部分的に一致する。「むしかち」と「ムシ」はこの符号がない日撰曆もあるが、これも部分的に一致している。収集した日撰曆は各家毎の事例により各々若干の変異があり、それらの分析と再度の事例収集は今後必要である。

以上のように、時双紙と波照間の日撰曆は抽出した要素については大方の対応関係を見いだせる。この関係は、稲村賢敷氏が先駆的な研究をおこなった宮古島の砂川双紙についてもいえる。⁽¹¹⁾ 砂川双紙にも「天火日」、「地火日」、「主倒日」などの日取りがある。「天火日」、「地火日」や「主倒日」の日取りは、各々時双紙と日撰曆クリョンの日撰と共通する。なお、稲村氏が指摘したように、砂川双紙の「地火日」と「くる（紅）日」の日取りは、古くは中世日本の陰陽道系書物『篋篋内伝』の「地火日」と大凶日でもある「十死一生日」と一致する。

中鉢氏は砂川曆成立の過程を大雑書をもとにした砂川双紙への影響、そして砂川双紙から砂川曆の成立という順序を提示した。⁽¹²⁾ 現在使用されている砂川曆には、双紙の要素として干支の記号、ならびに「不成就日」、「天火日」、「地火日」、「主倒れ日」、「願戻り日」、「紅日」などの大雑書・砂川双紙・時双紙まで遡る記号の曆注がみられ、様々な要素の混入がみられると考えた。砂川曆と波照間の日撰曆とは、要素は部分的に共通する。ただ、符号自体は主に○印を基本として各種のサインを付加している点では、波照間の日撰曆と一部類似しているが、符号の形状や種類は異なっている。

以上、波照間の日撰曆クリョンの系譜を考えると、時双紙や砂川双紙・砂川曆と共通の枠組でとらえることができうるし、その背景にある中世日本の陰陽道系の知識、あるいは近世の〈大雑書〉系の曆注書の影響を見出すことができる。八重山の竹原家には『大雑書廣集』、新本家には『日撰見合書』や『萬事日撰見合書』、また糸洲家などの家文書には『大雑書（日撰見合書）』があり、その形跡が窺える。竹原家文書の『大雑書廣集』は「大雑書」と「玉匣記」からの抜き書きがあり、同家には『玉匣記通書廣集』も遺されている。⁽¹³⁾ このように、八重山の石垣島地域においても、日撰書に各種の陰陽道系知識や曆注書の流

布と受容の側面が認められるのである。

おわりに

波照間の日撰曆クリヨンについて、調査の事例から要約できる点を適記して、まとめにかえたい。

- (1) 日撰曆は「唐曆」とも称されており、島外からの伝来を示す伝承が付随している。
このような呼称法は砂川曆における「唐曆」の呼称とも共通している。⁽¹⁴⁾
- (2) 日撰曆クリヨンは近代の時期に行政的な禁止処分がおこなわれたようであるが、ひそかに書写され現存したこと。
- (3) 伝存する日撰曆は、仕事上日取りが重要となる大工、漁業など職種をもつ家に伝えられたケースが多い。また、ツカサなどの神役が祭祀上の日取り選定の必要性から、所持する事例もあるようである。
- (4) 現存する日撰曆クリヨンは板に記したもの（3例）と紙類に記したものの（5例）がある。かつて紙の貴重さを考えると、本来は板に記した日撰曆が用いられたと推察される。
- (5) 日撰曆クリヨンは特有の符号で標示されるもの（5例）が伝統的な型式であると考えられるが、符号の読みを文字で書いた型式で書写したもの（4例）もみられる。
- (6) 日撰の符号の意味・内容と日撰曆の使用法については、詳細がかなりわからなくなっている。
- (7) 波照間の日撰曆クリヨンは、時双紙や砂川双紙と同様な類似の曆注がみられ、同様に、陰陽道系知識や「大雑書」の曆注の影響がみられる。
- (8) 日撰曆クリヨンは伝存・所蔵する家のものにより、日撰の符号内容とその組合せは微妙にそれぞれ異なる。これが書写元の系統によりなんらかの分類が可能なのかは、現段階では不明である。

日撰曆については、中鉢氏の論文に啓発されるところが大きい。また、三浦國雄氏が指摘したように、琉球・沖縄における中国の通書の系統を明らかにすること、また種々の曆法や曆注書を視野に入れた、調査研究が必要である。⁽¹⁵⁾ 波照間島においても、今後ともなるべく機会をみて調査をおこない、資料を収集を継続できるようにしておきたい。調査においては、下記の方々にお世話になりました。紙面を借りて、感謝申し上げます。

【調査協力者・話者一覧】（順不同、敬称略）

屋良部 功（北部落）	宮良 フジ（北部落）	美底 清光（北部落）
黒島 八重（北部落）	大嵩 嘉一（南部落）	勝連 文雄（南部落）
新本長吉・敏（南部落）	前野 幸助（前部落）	南風見武治（南部落）
稲福 清司（前部落）	山田 シゲ（前部落）	仲底 長幸（名石部落）
前田盛菊江（名石部落）	仲白保幸助（富嘉部落）	保多盛嘉一（富嘉部落）

【脚注】

- 1 上野和男「波照間島の祖先祭祀と農耕儀礼」『国立歴史民俗博物館研究報告』第66集 1996
- 2 宮良高弘「波照間島民俗誌」(5)『琉球新報』1968
- 3 同上
- 4 アウエハント「波照間島の社会宗教的構造をめぐって」『人文学報』No. 62 p139、1987
- 5 アウエハント「波照間島の神行事について」『沖縄文化論叢』No. 3 p37、1972
- 6 C.Ouwehand, Hateruma, Leiden, The Netherlands, 1985. pp.284-285
- 7 C.Ouwehand, p8
- 8 C.Ouwehand, pp.284-285
- 9 中鉢良護「王府の暦をめぐる諸問題」『沖縄文化』28-1、p70～76、1993
- 10 佐喜真興英「霊の島々」『女人政治考・霊の島々』新泉社 1982
- 11 稲村賢敷『琉球諸島における倭寇史跡の研究』吉川弘文館 1957
- 12 中鉢、前掲論文 p76
- 13 竹原家文書の分析については、小池淳一「明治期八重山の陰陽道系知識—『大雑書廣集』の分析—」『宗教研究』第69巻307号、p266～267（1996）を参照のこと。
- 14 岡田芳明「宮古島〈砂川暦〉の研究」『沖縄文化』15 1964
- 15 三浦國雄「リチャード・スミス著『通書の世界』解説」p154、凱風社 1998

波照間方言動詞の活用

加治工 真 市

1-0. 波照間方言の音素

波照間方言の音素は、これまでの調査結果によると、次のように認めることができる。
 母音音素 / i, ī, e, ě, a, o, u / (7 個)
 半音音素 / j, w / (2 個)
 子音音素 / p, b, m, f, t, d, n, r, c, s, z, k, g, h, ' / .. (15 個)
 拍 (モーラ) 音素 / N, Q, R / (3 個)

1. 1. 拍構造と拍体系

波照間方言の拍体系は、直音の体系 (/CV/構造)、開拗音の体系 (/CSV/構造, S = j)、合拗音 (/CSV/構造, S = w) からなる一般拍と、特殊拍の /N/ (撥音)、/Q/ (促音)、/R/ (引き音、長音) からなるものが認められる。

1. 2. 波照間方言の拍体系

/i/	/ī/	/e/	/ě/	/a/	/o/	/u/	/ja/	/jo/	/ju/	/wa/
[i]	[ī]	[e]	[ě]	[a]	[o]	[u]	[ja]	[jo]	[ju]	[wa]
/hi/	-	/he/	/hě/	/ha/	/ho/	/hu/	/hja/	-	-	/hwa/
[çi]	-	[he]	[hě]	[ha]	[ho]	[ɸu]	[ça]	-	-	[ɸa]
/gi/	/gī/	/ge/	/gě/	/ga/	/go/	/gu/	/gja/	/gjo/	/gju/	/gwa/
[gi]	[gī]	[ge]	[gě]	[ga]	[go]	[gu]	[gja]	[gjo]	[gju]	[gwa]
/ki/	/kī/	/ke/	/kě/	/ka/	/ko/	/ku/	/kja/	/kjo/	/kju/	/kwa/
[ki]	[kī]	[ke]	[kě]	[ka]	[ko]	[ku]	[kja]	[kjo]	[kju]	[kwa]
/zi/	/zī/	-	/zě/	/za/	/zo/	/zu/	/zja/	/zjo/	/zju/	/zwa/
[dzī _{3i}]	[dzī _{zi}]	-	[dzě _{zě}]	[dza _{za}]	[dzo _{zo}]	[dzu _{zu}]	[dja _{3a}]	[djo _{3o}]	[dju _{3u}]	[dwa _{zwa}]
/si/	/sī/	-	/sě/	/sa/	/so/	/su/	/sja/	/sjo/	/sju/	/swa/
[si]	[sī]	-	[sě]	[sa]	[so]	[su]	[sa]	[so]	[su]	[swa]
/ci/	/cī/	-	/cě/	/ca/	/co/	/cu/	/cja/	/cjo/	/cju/	/cwa/
[tʃi]	[tʃī]	-	[tʃě]	[tʃa]	[tʃo]	[tʃu]	[tʃa]	[tʃo]	[tʃu]	[tʃwa]
/ri/	/rī/	/re/	/rě/	/ra/	/ro/	/ru/	/rja/	/rjo/	/r- /	/rwa/

[ri] [rī] [re] [rē] [ra] [ro] [ru] [rja] [rjo] — [rwa]
 /ni/ — /ne/ /nē/ /na/ /no/ /nu/ /nja/ /njo/ /nju/ /nwa/
 [ni] — [ne] [nē] [na] [no] [nu] [nja] [njo] [nju] [nwa]
 /di/ — /de/ /dē/ /da/ /do/ /du/ — — — /dwa/
 [di] — [de] [dē] [da] [do] [du] — — — [dwa]
 /ti/ — /te/ /tē/ /ta/ /to/ /tu/ — — — /twa/
 [ti] — [te] [tē] [ta] [to] [tu] — — — [twa]
 /fi/ /fī/ /fe/ /fē/ /fa/ — /fu/ /fja/ /fjo/ — /fwa/
 [fi] [fī] [fe] [fē] [fa] — [fu] [fja] [fjo] — [fwa]
 /mi/ /mī/ /me/ /mē/ /ma/ /mo/ /mu/ /mja/ /mjo/ — /mwa/
 [mi] [mī] [me] [mē] [ma] [mo] [mu] [mja] [mjo] — [mwa]
 /bi/ /bī/ /be/ — /ba/ /bo/ /bu/ /bja/ /bjo/ — /bwa/
 [bi] [bī] [be] — [ba] [bo] [bu] [bja] [bjo] — [bwa]
 /pi/ /pī/ /pe/ /pē/ /pa/ /po/ /pu/ /pja/ /pjo/ — /pwa/
 [pi] [p^si_{pi}] [pe] [pē] [pa] [po] [pu] [pja] [pjo] — [pwa]
 /N/ [m, n, ŋ, ŋ], /Q/ [p, t, k, tʃ, ʃ, s, p]
 /R/ [ɪ] (a, i, ī, u, e, ē, oの長音)

2. 波照間方言動詞の活用

2. 1. 活用型による分類

これまでの調査によると、波照間方言の動詞には、次の1～6の活用型が認められる。勿論語幹尾子音によって更に下位分類される。

類	動詞	活用語尾	志向形	未然形	完了形	連用形1	終止形	連体形	連用形2	条件形	命令形
1	kakun (書ク)		-aa.	-a-	-jan:	-i-	-un:	-u-	-u-	-i-	-i-
2	kurusun (殺ス)		-aa.	-a-	-jan:	-i-	-un:	-u-	-u-	-e-	-e-
3	ba(a)run (笑フ)		-oo.	-ee- -a	-jan:	-ee-	-un:	-u-	-u-	-i-	-i-
4	kun (来ル)		-oo.	-u-	-jan:	-i-	-un:	-u-	-u-	-i-	-u-
5	hoon (食フ)		-aa.	-a-	-jan:	-e-	-oon:	-oo:	-u-	-e-	-e-
6	agin(上げる) agirun		-oo. -aa.	-u- -a-	-an:	-i-	-in: -un:	-i- -u-	-u-	-i- -i-	-i- -i-

2. 2. 波照間方言動詞の活用表

類	語	活用形		志向形	未然形	完了形	連用形 1	終止形	連体形	連用形 2	条件形	命令形	
		語幹末子音		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	
1	kakUN (書ク)	ha	k	aa.	a-nu	jan'	i-mirUN	un'	u'	u-tan	i-	i'	
	NgUN (行ク)	n	g	aa.	a-nu	jan'	i-bohan	un'	u'	u-tʃara	i-	i'	
	kuUN (漕グ)	ku	w	aa.	a-nu	jan'	i-bohan	un'	u'	u-tʃara	i-	i'	
			,										
	SUN (為ル)		s	aa.	a-nu	an'	i-bohan		un'	u'	u-tʃara	i-	ii'
			ʃ										
	tatsUN (立ツ)	ta	ts	aa.	a-nu	an'	i-bohan		un'	u'	u-tʃara	i-	i'
			tʃ										
	ʃinUN (死ヌ)	ʃi	n	aa.	a-nu	jan'	i-bohan	un'	u'	u-tʃara	i-	i'	
	QFUN (降ル)	Q	f		a-nu	jan'	i-jassahan	un'	u'	u-tʃara	i-	i'	
			f						uu'				
	mirUN (見ル)	mi	r	aa.	a-nu	jan'	i-bohan	un'	u'	u-tʃara	i-	i'	
	?enUN (言ウ)	?e	n	aa.	a-rerUN	jan'	i-jassahan	un'	u'	u-tʃara	i-	i'	
	tupun (飛ブ)	tu	p	aa.	a-nu	jan'	i-bohan	un'	u'	u-tʃara	i-	i'	
	jumun (読ム)	ju	m	aa.	a-nu	jan'	i-bohan	un'	u'	u-tʃara	i-	i'	
bUN (居ル)	bu	r	aa.	a-nu	jan'	i-bohan	un'	u'		i-	i'		
		,							u-tʃara				
?oorUN (いらっしやる)	oo	r	aa.	a-nu	jan'	i-bohan	un'	u'	u-tʃara	i-	i'		
QSUN (着ル)	Q	s	aa.	a-nu	jan'	i-bohan	un'	u'	u-tʃara	i-	i'		
pisUN (放ル)	pi	s	aa.	a-nu	jan'	i-bohan	un'	u'	u-tʃara	i-	i'		
2	kurahun (殺ス)	kura	h	aa.	a-nu	jan'		un'	u'	u-tʃara	e-	e-	
			s				i-bohan						
3	baarUN (笑ウ)	baa	r		ee-rUN		ee-bohan	un'					
			ba	r	oo.	a-nu	jan'	i-bohan	un'	u'	u-tʃara	i-	i'
4	kUN (来ル)		k	oo.	u-nu	jan'	i-bohan	un'	u'	u-tʃara	i-	u'	
5	hoon (食ウ)		h	aa.	a-nu	jan'	e-bohan	oon'	oo'	u-tʃara	e-	e-	
6	?agin (上ゲル)	?a	g	oo.	u-nu	an'	i-bohan	in'	i'	u-tʃara	i-	i'	
			?agi	r	aa.	a-nu			un'	u'		i-	i'
	主な接辞			①-φ. 志向, 勧誘	①-nu(ない) 打消 ②-nabag (なくとも) ③-nasukuti (ないで) ④-i(れる)	①-φ (「有り」融合) ②-durat(よ)	①-mirUN (〜てみる) ②-jassahan (「やすい」) ③-N (〜に、目的) ④-nisana (なから)	①-φ. 言い切り ②-wa, N (も)の結び ③-na(〜か) ④-kajar (かなあ)	①-pitu(A) ②-na(な) 禁止 ③-duの結び ④-mad (まで) ⑤-kasin (たび)	①-tan (〜た) ②-tʃara (〜たら)	①-ba(ば) ②-bara (ばそ) ③-tam (〜ても) ④-ki (〜で、から)	①-φ 命令の 言い切り。 ②-ba	

2. 3. 活用文例

ハ「クン [hə'kuŋ] (書く)

1. 志向形

(1) 「シガミ」 ハ「カ」 [ʃigami həkə] (手紙を書こう)

2. 未然形

(1) バ「ナー」 ハ「カナ」 [ba'nax həkənu] (私は書かない)

(2) シ「ガミャー」 ハ「カナ」バン ミ「シャーン

[ʃi'gəmjax həkəna'bam mi'ʃaxŋ] (手紙は書かなくてもよい)

○ イェー「ルム」ノー ハカ「ナ」バン ミ「シャ」ダル

[je:rumu'no:həkə'na'bam mi'ʃa'daru] (あんなのは書かなくてもよい)

○ ネー「キル シガミ」 ハ「カナ」チャー ナラ「ラン」バ

[ne:'kiru ʃigami həkəna'tʃa nara'ram'ba] (何故に手紙を書かなければならないか)

(3) 「シガミャー」 ハ「カン」スク「チ」 ユ「ミ

[ʃigəmjax həkəna'suku'tʃi ju'mi] (手紙は書かないで読みなさい)

「ジュ」アー ハ「カン」スク「チ」 ユミ「バ

[dʒi'ax həkəna'suku'tʃi jumi'ba] (字は書かないで読みなさい)

「マ」ー「ジウ」 ハ「カン」ナ [ma:'dʒi:həkəna'na] (一緒に書かないか)

(4) 「キック」 ッ「シャラー」 ハ「カイ」ソー

[kikku'ʃsara:həkəi'so:] (稽古したら書けるよ)

○ 「ウ」ン 「タマガ」 ハ「カ」ッシミ「バ

[ʔu'n t'amaga həkə'ʃsimi'ba] (あの子に書かせなさい)

○ ウヌ ウ「タマ」 タ「ル」ミ シ「ガ」ミ ハ「カ」ッシミ「リ

[ʔunu ʔu'tama ta'ru'mi ʃi'gami həkə'ʃsimi'ri]

(この子に頼んで手紙を書かせなさい)

3. 完了形

シ「ガミャー」 マー ハ「キャン」 [ʃi'gəmjax ma:həkəjan] (手紙はもう書いた)

4. 連用形 1

(1) 「マー」 ピウ「トゥ」ムシウー ハ「キ」ミルン

[ma:pju'tu'musi hək'i'miruŋ] (もう一度書いてみる)

○ シ「ガミ」 ジェン「ジェ」 ハ「キ」ワサヌ

[ʃi'gami ʒen'ʒe hək'i'wasanu] (手紙は全く書けない)

(2) 「イヤー」 シガミ」 ハ「キ」ッシャ「ンナー

[ʔija: ʃigami hək'i'ʃa'nna:]

(お父さんは、手紙を書ききれぬか<書くことができるか>)

- 「ウ」ヌ ピウトウワー 「シガミ」 ハ「キツシャ」ン
[ʔu]nu p^si:twax: [ʃiɡami] ha[kiʃsa]ŋ] (あの人は手紙を書くことができる)
- (3) 「シガミヤー」 ハ「キヤッサーン」 [[ʃiɡamjax:] ha[kijassax:]ŋ] (手紙は書きやすい)
- 「シガミヤー」 ハ「キ」グルサーダ「ル」サー
[[ʃiɡamjax: ha[ki]gurusax:daru[sa:] (手紙は書きにくい)
- (4) 「シガミ」 ハ「キン」 ングン [[ʃiɡami] ha[kiŋ] ʔŋɡuŋ] (手紙を書きに行く)
- (5) 「ジウ」ー ハ「キンツァナー」 ムヌ」ン 「へー」バ
[dʒi:] ha[kintsanax: munu]ŋ [he:]ba] (字を書きながら、御飯もたべなさい)
- 「シガミ」 ハ「キンツァナー」 ム 「ナー」 へー」バ
[[ʃiɡami] ha[kintsanax:] mu [na: he:]ba]
(手紙を書きながら、御飯は食べなさい)
- (6) 「イヤー」 シガミドゥ ハ「キ」ビ「リヤ」ル
[ʔijax:] ʃikamidu ha[ki]bi[rija]ru] (お父さんは手紙を書いている)
- 「イヤー」 シガミ ハ「キ」オ「ル」ン
[ʔijax:] ʃiɡami ha[ki]o[ruŋ] (お父さんは手紙を書いていらしゃる)
- シ「ガミガツ」シウ ハ「キ」ビ「リヤ」ル
[ʃi[ɡamigas]si ha[kibirja]ru] (手紙ばかり書いている)

5. 終止形

- (1) 「シガミ」 ハ「クン」 [[ʃiɡami] ha[kuŋ] (手紙を書く)
- 「ダ」ー ハ「クチャ」ー バヌン ハクン
[[da:] ha[kutʃax:] banuŋ ha[kuŋ] (君が書いたら私も書く)
- (2) 「シガミヤー」 バー ハ「クン」 [[ʃiɡamjax:] ba: ha[ku]ŋ] (手紙は私が書く)
- (3) 「シガミン」 バー ハクン [[ʃiɡamim] ba: ha[kuŋ] (手紙も私が書く)
- 「ダ」ン ハ「クチャラー」 バヌ」ン ハ「クン」
[[da]ŋ ha[kutʃarax: banu]ŋ ha[ku]ŋ] (君も書いたら、私も書く)
- (4) 「ダ」ー 「シガミ」 ハ「クン」ナー
[[da:] [ʃiɡami] ha[kun]na:] (君は手紙を書くか)
- (5) 「ウ」リヤー 「シガミ」 ハ「クン」カ「ヤ」ー
[ʔu]rijax: [ʃiɡami] ha[kuŋ]ka[ja:] (あれは手紙を書くかなあ)
- 「ウ」ン ピウトウワー 「シガミ」 ハ「クン」カヤー
[ʔu]m p^si:twax: [ʃiɡami] ha[kuŋ]kajax:] (あの人は手紙を書くかなあ)
- (6) ハ「クン」ティ ッ「シャ」ラー ハ「カイ」ヤシウドウ シウ「カ」ル ハ「カナー」ル

[hə'kun]ti s[ʃa]rax hə'kai]jasidu si'ka]ru hə'kanax]ru]
(書こうとしたら書かれるのに書かないでいる)

6. 連体形

- (1) 「シガミ」 ハ「ク」ピウトゥヌ 「ブラ」ヌ
[ʃigami] hə'ku]pɪ̌tunu] [bura]nu] (手紙を書く人がいない)
- 「シガミ」 ハ「ク」ムヌワッテ ヤッシウムヌーン「ドゥ」 ヤル
[ʃigami] hə'ku]munwa:tte: jassimunu:n[du] jaru]
(手紙を書くのは簡単なことである)
- (2) 「ナ」ブ「チャー」 「シガミヤ」 ハ「ク」ナ
[na]bu]tʃa: [ʃigamja:] hə'ku]na] (ここでは、手紙は書くな)
- (3) バン「ドゥ シガミ」 ハク [ban[du] ʃigami] həku] (私が手紙を書く)
- 「タ」ンドゥ 「シガミ」 ハ「キ」バ
[ta]ndu] [ʃigami] hə'ki]ba] (誰が手紙を書くのか)
- 「ウ」ヌ ピウトゥンドゥ 「シガミヤ」 ハ「ク」ドゥ「ラレ」ー
[ʔu]nu] pɪ̌tundu] [ʃigamja:] hə'ku]du]ra:le:] (あの人が手紙を書くはずだ)
- (4) 「シガミ」 ハクカ「チュ」ン ダ クトゥワー 「ムイ」ス
[ʃigami] həkuka]tʃi]n da] kɪ̌twa: [mui]su]
(手紙を書くたびに君のことを思う)
- (5) 「ダ」ー 「シガミ」 ハ「ク」マディ 「バナ」 マ「ツ」ン
[da:] [ʃigami] hə'ku]madi] [bana] ma]tʃu]ŋ]
(君が手紙を書くまで私は待つ)

7. 連用形 2

- (1) ムガ「サー シガミヤ」 ユー ハク「タン」
[muga]sa: [ʃigamja:] ju: həku]taŋ] (昔は、手紙はよく書いた)
- (2) 「ダ」ー ハ「ク」ッチャラ」 バヌン ハクン
[da:] hə'kuttʃara:] banuŋ] həkuŋ] (君が書いたら私も書く)

8. 条件形 -バ [ba] (～ば) の下接する形

- (1) ハ「キバル」 ゴー「トー」 ア「ラン」ナ
[hə'kibaruru] dzo:]to:] ʔa]ra]na] (書いた方がよいではないか)
- 「アツァバギシ」 ハキバ マニアウン
[ʔatsabagi]si] həkiba] maniaun] (明日までに書いたら間に合う)

9. 命令形

- (1) ゴー「トゥニ」 ハ「キ」ヨー [dzo:]tu]ni] hə'ki]jo:] (立派に《上等に》書けよ)

- (2) 「シガミヤー」 ヤ「ディ」ン ハ「キ」ヨー
 [ʃiɡamjaː | jaˈdiŋ haˈkiːjoː] (手紙は必ず書けよ)

ウ「グ」ン [ʔuˈguŋ] (動く)

1. 志向形

キョ「ワー」 ウ「ガー」 [kjoˈwaː | ʔuˈgaː] (今日は動こう)

2. 未然形

- (1) 「シヌ」 ウ「ガヌ」 [ʃinu | ʔuˈganu] (手が動かない)
 キョ「ワー」 ウ「ガヌ」ナー [kjoˈwaː | ʔuˈganuːnaː] (今日は動かないか)
- (2) ドウ「ヌ」 ウ「ガールヌ」 [duˈnu | ʔuˈgaːrunu] (体が動かさない)
- (3) ウ「ガン」スク「チ」 タ「チ」ビ「リヤ」ル
 [ʔuˈganˌsukuˈtʃi | taˈtʃi biˈrjaːru] (動かないで立っている)
- (4) 「ウリ」ヤチャラー ウ「ガイ」ス
 [ʔuriˌjatʃaraː | ʔuˈgaiˌsu] (あの人だったら動かれる)
- (5) ウ「ガスン」ティ シウーシウカ ウ「ガナー」ル
 [ʔuˈgasunˌti siːsiːka | ʔuˈganaːˌru] (動かそうとするが動かない)
- (6) 「シヤ」 ウ「ガン」シウカ ヤ「ジン」 ウガ「スン」ティ 「イエ」グ
 [ʃija | ʔuˈganˌsiːka jaˈdʒiŋ | ʔugaˈsunˌti ˈjeˌgu]
 (手は動かないのに、なんとかして動かそうとしている)
- (7) 「シー」 ウガ「スン」 [ʃiː | ʔugaˌsun] (手を動かす)
- 「シワ」 ウ「ガヘー」チ タ「チ」 ビ「リヤ」ル
 [ʃiwa | ʔuˈgaheːˌtʃi taˈtʃi biˈrjaːru] (手を動かして立っている)

3. 完了形

- (1) シヌー 「ウヌ」 シトウワー ウ「ギヤ」タン
 [ʃiːnuː | ʔunu | ʃitwaː | ʔuˈgjaˌtan] (昨日あの人は動いた)
- (2) ダー ウ「ギヤ」タン [daː | ʔuˈgjaˌtan] (君は動いた)

4. 連用形 1

- (1) 「ウギシ」ー 「ホ」ン「ワル」 ユ「ミヤ」ル
 [ʔugiˌʃiː | hoˌŋˈwaru | juˈmjaˌru] (動きながら本を読んだ)
- (2) 「ウギギ」シャン [ʔugigiˌʃaŋ] (動きそうだ)
 ウギグリサー「ダル」ー [ʔugigurisaˌˈdaruː] (動きにくいようだ)
 「ウギヤ」ッサーン [ʔugijaˌssaːŋ] (動きやすい)
 ウ「ギン」コハン [ʔuˈginˌkohaŋ] (動きにくい)

(3) 「ウギッシャツ」チャラー ウ「ギ

[[ʔugiʃatʃaɾaː ʔuʔgi] (動き得るなら<動けるなら>動け)

(4) 「ウギチ」パンサー シー ビ「リアル

[[ʔugitʃi] pansaː ʃiː biʔrjaɾu] (動いて話をしている)

(5) 「ウヌ」ピットウン ウ「ギ」スツ「テ

[[ʔunu] piʔtuŋ ʔuʔgiʃutʃte] (あの人も動くって<動きするって>)

○バ「ヌン ウギ」ス [baʔnuŋ ʔugiʃu] (私も動くよ<動きする>)

○キウツ「サ」ウ「ギダ」ロ [kiʃʃsa ʔuʔgidaɾo] (すでに動いた)

5. 終止形

(1) ドウ「ヌ」ウグン [duʔnu ʔugun] (体が動く)

○ウ「グン」ムナー ヤシウムヌ「ドウ」ヤル

[[ʔuʔgun]munaː jaʃimunuʔdu ʃaru] (動くのはたやすいことだ)

○「ウリ」ン ウ「グン」カ「ヤ」ー [[ʔuri]ŋ ʔuʔgun]kaʔjaː] (あの人も動くかなあ)

6. 連体形

(1) ウ「グ」クトウ「ー」ナラヌ [[ʔuʔgu kutwaː] naranu] (動くことはできない)

(2) 「ダ」ー ウ「グ」ナ [[daː ʔuʔgu]na] (君は動くな)

(3) ウ「グ」シトウ「ヌ」モ「ー」ヌ [[ʔuʔgu]ʃitunu moːʔnu] (動く人がいない)

(4) シ「ヌ」ウグカミ「キ」ツ「ク」シ

[[ʃiʔnu ʔugukami] kikʔkuʃi] (手が動くまで稽古しなさい)

○「シ」ヌ ウ「グ」マディ 「ナ」キビリヤル

[[ʃi]nu ʔuʔgu]madi ʔna]kibirjaru] (手が動くまで泣いていた)

7. 連用形 2

(1) 「ベ」ービ ヤバン ウ「グ」ッチヤ「ー」ダミ

[[beː]bi jabaŋ ʔuʔguttʃijaː]dami] (少しでも動いたらだめだよ)

○「ベ」ー ウ「グ」ッチヤ「ミ」シャ「ン」ムヌ

[[beː ʔuʔguttʃijaː miʃaːm]munu] (少しは動いたらよいのに)

(2) ウ「グ」チャラ「ー」ナ「ラン」ドー

[[ʔuʔgutʃaraː] naʔran]doː] (動いたらいけないよ)

8. 条件形 -バ [-ba] (～ば) の下接する形

○ウギバル～ [[ʔugibaru~] (動けばぞー)

9. 命令形 それのみで命令の意となる形

(1) 「ペ」ーシャ ウギ [[peː]ʃa ʔugi] (早く動け)

ンダ₁ン [[?ŋgu₁ŋ] (行く)

1. 志向形

(1) 「マー₁ジウ₁ ン₁ガ [[ma₁dzi ?ŋ₁ga] (一緒に行こう)

○ 「シャー₁ マー₁ジウ₁ ン₁ガ [[ša₁ ma₁dzi ?ŋ₁ga] (ああ、一緒に行こう)

2. 未然形

(1) バ₁ナ₁ ン₁ガ₁ン [ba₁na₁ ?ŋ₁gaŋ] (私は行かない)

○ 「ン₁ガ₁ヌ₁ティ₁ エ₁ ニ₁シ₁タ₁ マ₁タ₁ 「ン₁ガ₁ン

[[?ŋ₁ganuti ?e₁ni₁ʃita mata 「ŋ₁gaŋ] (行かないと言って、また行く)

○ バ₁ナ₁ ン₁ガ₁ン₁タン [ba₁na₁ ?ŋ₁gan₁tan] (私は行かなかった)

○ イ₁サー₁シウ₁「マ₁ツ₁チャー₁ ン₁ガ₁ン₁バン ミ₁シャー₁「ダ₁ル

[[isa₁si₁「matt₁ša₁ ?ŋ₁gan₁bam mi₁ša₁「daru] (石垣島へは行かなくてもよい)

(2) 「バン₁サ₁ギ₁ン 「ン₁ダ₁ム₁ヌ₁ ダ₁ー₁「タ₁ ン₁ダ₁ナ₁ ン₁ガ₁「ナ₁ール

[[ban₁sa₁giŋ 「ŋ₁gu₁munu da₁「ta₁ ndana ?ŋ₁ga₁na₁ru]

(私はさえ行くのに君はなぜ行かないか)

○ バ₁「ヌ₁サ₁ギ₁ル ン₁ダ₁ム₁ヌ₁ 「ン₁ダ₁ル₁ ダ₁ー₁ ン₁ガ₁「ナ₁ール

[ba₁nu₁sa₁gi₁ru ?ŋ₁gumunu 「nda₁ru da₁ ?ŋ₁ga₁na₁ru]

(私は行くのに、なぜ君は行かないか)

(3) イ₁サー₁シウ₁「マ₁ツ₁チャー₁ ン₁ガ₁ン₁スク₁「チ₁ー₁ ウ₁シウ₁「ナ₁ー₁チ₁ ン₁「ギ

[[isa₁si₁「matt₁ša₁ ?ŋ₁gansuku₁「tʃi₁ ?u₁ʃi₁na₁「tʃi ?ŋ₁gi]

(石垣島へは行かないで沖縄へ行け)

○ バ₁ン₁「ト₁ウ₁ マ₁ー₁ツ₁ン 「ン₁ガ₁ン₁ナ₁ー

[ban₁「tu ma₁「tsuŋ 「ŋ₁gan₁na₁] (私と一緒に行かないか)

(4) バ₁「ナ₁ー₁ ン₁「ガ₁ル₁ヌ

[ba₁na₁ ?ŋ₁gal₁runu] (私は行かれない<行くことができない>)

○ バ₁「ナ₁ー₁ ン₁「ガ₁イル₁ン

[ba₁na₁ ?ŋ₁gal₁irun] (私は行かれる<行くことができる>)

(5) 「ウ₁ヌ₁ ピ₁ウ₁「ト₁ウ₁ー₁ タ₁「ル₁ミ₁ ン₁「ガ₁へ

[[u₁nu pi₁「twax₁ ta₁「rumi₁ ?ŋ₁ga₁he] (あの人は頼んで行かせなさい)

○ バ₁ン₁「ガ₁ー₁シ₁ウル 「ン₁ガ₁シ₁ウ₁ナ₁ー

[ban₁ga₁「siru 「ŋ₁gas₁na₁] (私だけ<ばかり>行かせるのか)

3. 完了形

(1) シ₁「ヌ₁ー₁ ン₁ギ₁ヤ₁タン [[ʃi₁「nu₁ ?ŋ₁gi₁tan] (昨日行った)

4. 連用形 1

- (1) 「イ」サーシウ「マチ ン」ギ「クン」
[[ʔi]saxsi[matʃi ʔŋ]gi[kuŋ]] (石垣島へ行ってくる)
○ 「ン」ギシタ 「クン」 [[ʔŋ]giʃita [kuŋ]] (行って、仕事をしてくる)
- (2) 「ウ」ヌ ピウ「トゥウ」ー 「ン」ギッ「シャー」ン
[[ʔu]nu p^oʃi[ʔwa]x ʔŋgiʃ[ʃax]ŋ]] (あの人は行くことができる。行き得る)
- (3) イサーシウ「マツチャー」ー 「ン」ギヤッサーン
[[isa]sʃi[matʃax] ʔŋgijassa:ŋ]] (石垣島へは行やすい)
○ ウシウ「ナツチャーマー」ー 「ン」ギボ「ハン」
[[ʔusʃi[ŋattʃax]ma: ʔŋgibo[han]]] (沖縄へは行きたい)
○ ウシウ「ナツチャーマー ン」ギグリサーダ
[[ʔusʃi[ŋattʃax]ma: ʔŋ]gigurisa:daru]] (沖縄へは行きにくい)
- 「ン」ギ「ン」チャナー ニム「ツァー」ー トウ「トゥガ」ヒリ
[[ʔŋgi]ntsana: nimu[ʔsa:] tu[tuga]çiri]] (行きながら荷物を届けてくれ)

5. 終止形

- (1) バ「ナー」ー 「ン」グン [[ba[na:] ʔŋguŋ]] (私は行きます)
○ バ「ヌン」ー 「ン」グン [[ba[nuŋ] ʔŋguŋ]] (私も行きます)
- (2) 「バー」ー 「ン」グンドウラー [[ba:] ʔŋgundura:] (私は行きますよ)
○ 「ダー」ー 「ン」グ「ン」ナー [[da: ʔŋgu]n[na:]] (君は行くか)
○ 「ダー」ー 「ン」グ「ン」サー [[da:] ʔŋgun[sa:]] (君は行くねえ)

6. 連体形

- (1) 「ン」グ ピウトウワー 「ブラ」ヌ
[[ʔŋ]gu p^oʃi[ʔwa:] [bura]nu]] (行く人はいない)
○ 「ン」グ ク「トゥウ」ー ヤッシ「ム」ヌ
[[ʔŋgu ku[ʔwa:] jaʃʃi[ʃimu]]] (行くことは簡単だ)
○ バ「ヌン」ー 「ン」グフ「ター」ー ナルン
[[ba[nuŋ] ʔŋguɸu[ʔta:]naruŋ]] (私も行くことはできる)
○ 「キョワー」ー ダ「ー」ンドウ 「ン」グ ピウ「ン」
[[kjo:wa: da:]ndu [ʔŋgu p^oʃi]ŋ]] (今日は君が行く日だ)
- (2) 「ダ」ー 「ン」グ「ナ」 [[da:] [ʔŋgu]na]] (君は行くな)
- (3) 「ダ」ー 「ン」グ「カミヤー」ー バー マツン
[[da:] ʔŋgu[kamja:] ba: matsun]] (君が行くまで私は待つ)
- (4) 「ダ」ー 「ン」グカ「チュ」ン ム「ヌウ」ー アシキル「ン」

- [ʔdaɪ ʔŋgukaʔtsi̯m muʔnwaɪ ʔaʃi̯kiruʔŋ] (君が行くたびにものを預ける)
- (5) 「タ」ンドゥ ングツカ「ヤ」ー [ʔtaʔndu ʔŋgukkaʔjaɪ] (誰が行くかなあ)
- バン「ドゥ」ング [banʔdu ʔŋgu] (私が行きます)

7. 連用形 2

- (1) 「ン」グッチャラー ア「タ」ン「ギ」
[ʔŋ]guttʃaraɪ ʔaʔta ʔŋ]gi] (行くなら明日行け)

8. 条件形 -バ [-ba] (～ば) …… (NR)

9. 命令形

- (1) 「ン」グッチャラー ア「タ」ン「ギ」
[ʔŋ]guttʃaraɪ ʔaʔta ʔŋ]gi] (行くなら明日行け)
- (2) ピウ「ト」ワー タ「ル」ミ「ン」ガ「ヘ」
[pʷi̯ʔtoʔwaɪ taʔrumi ʔŋ]gaʔhe] (人を頼んで行かせ)

カ「ラ」スン [kaʔraʔsuŋ] (貸す)

1. 志向形

- (1) フタ「ナイ」 ムヌ「ワ」 カ「ラ」ハー
[futaʔnai̯ munuʔwa ʔkaʔraʔhaɪ] (二人でものを貸そう)

2. 未然形

- (1) バ「ナー」 カラ「ハ」ヌ [baʔnaɪ̯ karaʔhaʔnu] (私は貸さない)
- (2) 「ウ」ヌ ピウトウワー 「ヌ」ン カラ「ハン」タン
[ʔuʔnu ʔpʷtwaɪ ʔnuʔŋ] karaʔhanʔtaŋ] (あの人は何も貸さなかった)
- 「ウ」リカ「ー」 カラ「ハン」バン ミ「シャ」ン
[ʔurikaɪ̯ karaʔhamʔbam miʔʃaɪ̯ŋ] (あの人には貸さなくてもよい)
- バン「ガ」 カラハ「ナ」バン ピウ「トウ」ガー カ「ラ」ヘー
[banʔga ʔkaraʔhaʔnaʔbam ʔpʷtuʔgaɪ̯ ʔkaʔraʔheɪ̯]
(私に貸さなくても他人には貸しなさい)
- (3) 「ヌ」ン カラハンスク「チ」ー パ「リー」 ネ「ナー」ツタン
[ʔnuʔŋ] ʔkaraʔhansukuʔtʃi̯ɪ̯ ʔpaʔri̯ɪ̯ neʔnaɪ̯tʃtaŋ]
(何も貸さないで行ってしまった)
- 「ヌ」ン カラ「ハン」タシウカー シ「マー」 ハ「タン」
[ʔnuʔŋ] ʔkʰaraʔhanʔtasikaɪ̯ ʃi̯maɪ̯ haʔtaŋ]
(何も貸さなかったが手間賃はくれた)

3. 完了形

(1) ナ「バツ」テ 「エ」グシウカ ヤ「ジン」 カ「ラ」ヘ カ「ラ」ヘタル 「エ」ヌチ
シ「カ」タ ナラ「ヌ」 カ「ラ」ヒヤ「ル」
[na'bat'te 'ʔe]gusi'ka ja'dziŋ] k'a'ra]he k'a'ra]hetaru 'ʔe]nutʃi
ʃi'ka]ta nara'nu] k'a'ra]çaru]

(いやだと言うのだがどうしても貸せ貸せと言うので、仕方なく貸したのだ)

- 「ペウ」ー カラヒヤン [[pè]x k'araçan] (鋏を貸した)
- 「ガツキヤ」 カラヒヤン [[gakkja] k'araçan] (鎌を貸した)
- シ「ヌ」ー 「ウリ」ガ 「ジン」 カラヒヤン
[ʃi'nu]x 'ʔuri]ga 'dziŋ] k'araçan] (昨日、あれに金を貸した)
- マ「ナー」バギ「ナー」 ン「ゴ」ビ カラヒヤン
[ma'nax]bagi'nax] ?ŋ]go]bi k'araçan] (今までにたくさん貸した)

4. 連用形 1

- (1) ピウ「トゥムスワー」 カラヘー ミラ
[pĩ'tumuswa:] k'arahe:]mira] (一度は貸してみよう)
- (2) ネー「キル」 カラヘー ビ「リヤ」バ
[ne:]kuru k'arahe:] bi'rja]ba] (どうして貸しているのか)
- (3) 「ダガ」ヤチャー カ「ラ」ヘー 「ミシヤーン」
[daga]jatʃax k'a'ra]he:] 'mi]ʃa:]ŋ] (君にだったら貸してもよい)
- バン「ガ」 カラ「ヘー」 「タボラルン」ナー
[baŋ]ga k'ara]he:] 'taborarun]na:] (私に貸して下さいませんか)
- ピウ「トゥ」ガ ム「ナー」 カレーチ 「モーガ」ビ「レ」ル
[pĩ'tu]gax mu'nax] k'are:]tʃi 'mo:]ga]bi're]ru] (人にものを貸して儲けている)

5. 終止形

- (1) 「ウ」ヌ ピウ「トゥ」ガ ム「ヌ」ワー カ「ラ」スン
[[ʔu]nu pĩtuga:] mu'nwa:] k'a'ra]suŋ] (あの人ものを貸す)
- (2) 「ダガ」 ヤチャー カ「ラ」スン
[[daga] jatʃax k'a'ra]suŋ] (君にだったら貸すよ)
- 「ウリヤ」ー ジン「ヌ」 アル「ヨ」ガラ カ「ラ」スン ドウ「ラ」レー
[[ʔurja]x dziŋ]nu ?aru]jogara k'a'ra]sundu'ra]re:]
(あの人は金があるから貸すだろうなあ)
- 「バー」 カラスンヌ ピウ「トゥ」ガラバ「キン」 カ「リス」ナー
[[ba:] k'arasunnu pĩ'tugaraba]kiŋ] k'a'risu]na:]

(私が貸すのに他人からまでも借りるのか)

6. 連体形

(1) ドー「ゴー」 カ「ラ」スヨガラ 「シウ」グトゥワー チャン「トゥ」 シー

[doː'goː] ka'ra'sujogara 'si'gutwaː tʃan'tu' siː

(道具は貸すから仕事はちゃんとしなさい)

(2) 「ウ」ヌ ピウ「トゥ」ガー カ「ラ」スナ

[?'u'nu pi'ʉ'tu'gaː k'a'ra'suna] (この人には貸すな)

○カ「ラス」タン シウ「ム」ヌナ [k'a'rasu't'an si'mu'nuna] (貸しさえもしないか)

○「ジン」 カ「ラ」スシュ「ク」 ネー「ン」

[dʒiŋ] k'a'ra'suʃu'ku' neː'ŋ] (金は貸すほどない)

(3)カ「ラス」 ピウトウ ブ「ラ」ヌ [k'a'rasu' pi'tu bu'ra'nu] (貸す人がいない)

(4)「ター」ンドウ カラスカ「ヤー」 [[taː'ndu k'a'rasuka'jaː] (誰が貸すかなあ)

7. 連用形2 -タン [-taŋ] (～た)

-チャラ [-tʃara] (～たら) の下接する形 (NR)

8. 条件形

(1)カ「リ」バン ミ「シャ」リ カシミ「バン」 ミ「シャ」リ

[k'a'ri'bam mi'ʃari kaʃimi'bam mi'ʃari] (借りてもよいし、貸してもよい)

9. 命令形

(1)バン「ガ」 カラハ「ナ」バン ピウ「トゥ」ガー カ「ラ」ヘー

[baŋ'ga] k'a'raha'na'bam pi'ʉ'tu'gaː ka'ra'heː]

(私には貸さなくても他の人には貸しなさい)

マツン [matsuŋ] (待つ)

1. 志向形

(1)「マ」ーズン マ「ツァ」 [[maː'dzum ma'tsa] (一緒に待とう)

2. 未然形

(1)バ「ナ」 マツァ「ヌ」 [ba'na] matsa'nu] (私は待たない)

○シ「ヌ」ワー マツァ「ナ」タン [[ʃi'ŋwaː] matsa'na'taŋ] (昨日は待たなかった)

○ア「トゥ」 ゲー「ビ」 マツァ「ン」ナー

[ʔa'tu geː'bi matsa'n'na] (もう少し待たないか)

○「ベ」ビ マツァスン [[be'bi matsasuŋ] (少し、待たせる)

○イチ「ジ」カンニャー マツァサル「ヌ」

[ʔitʃi'dʒil kaŋɲaː matsasaru'nu] (一時間は待たされない)

○ 「ゴフン」ヤチャラー マチャイルン

[gofun]jat[sarax mat]sai[ruŋ] (5分だったら待たれる)

○ 「ベー」ビ マツァ「ヘ」 [be:|bi matsa|he] (少し待たせなさい)

3. 完了形

(1) 「マ」ナ 「ハー」ナ マツ「チャン」

[ma|na |haxna mat|t]saŋ] (今あそこで待っていた)

4. 連用形 1

(1) 「ニ」ジカンバラー マ「チ」ミラ

[ni|dzikam barax ma|t]simira] (二時間ばかり待ってみよう)

(2) 「ナ」ブ「チ」ヤチャラー マチャツサ「ハン」

[na| bu|t]si|jat[sarax mat]sijassa|hax] (ここでもら待ちやすい)

○ 「ウ」ヌ ピウ「トゥ」ワー マチギ「シャン」

[ʔu|nu pi|t]wa: mat]sigi|]saŋ] (あの人は待ちそうだ)

○ 「ナ」ブチ マ「チ」ボハン [[na|but]si ma|t]si|bohaŋ] (ここで待ちたい)

○ 「ナ」ー マ「チ」ブリ「ボハ」イヌ

[na|: ma|t]siburi| boha|inu] (ここには待っておりたくない)

○ 「イヤ」ヌ ナー「マ」チ「ブ」リ「ャ」ル

[ʔijanu na:| ma|t]si|bu|rja|ru] (お父さんがここで待っておられる)

5. 終止形

(1) 「バー」 マツン [[ba:| matsun] (私が待つ)。

○ バ「ヌ」ン マツン [ba|num matsun] (私も待つ)

○ バ「ヌ」アー ナ「マ」ツン [ba|nua: na| matsun] (私は、ここで待つ)

○ 「ダ」ー マ「ツ」ン「ナー」 [[da|: ma|tsun]na] (君は待つか)

○ キュ「ワー」 バー「マ」ツン [kju|wa: ba:| matsun] (今日は私が待つ)

6. 連体形

(1) 「ナ」 ブ「チ」ヤチャ マツク「トゥ」ワー ナ「ル」ン

[na| bu|t]si|jat]sa matsukutwa: na|ruŋ] (ここでは待つことができる)

○ マ「ツ」 ピウ「トゥ」ヌ 「ブラ」ヌ

[ma|tsu| pi|t]unu |bura|nu] (待つ人がいない)

○ 「バー」 マ「ツ」ヨガラ 「ダ」ー 「ミ」シャーン

[ba:| ma|tsu|jogara |da|: |mi]sa:ŋ] (私が待つから君はいいよ)

○ 「キュ」ワー「バン」ドゥ「マ」ツ

[kjuwa:| ban|du| matsu] (今日は私が待つ)

- 「ウヌ」 ピウ「トゥ」ンドウ マ「ツ」ドゥ「ラ」レー
 [ʔunu] pi̯[ʔu]ndu ma[ʔsu]du[ra]re: (あの人が待つはずだ。待つだろうよ)

7. 連用形 2

- (1) ッシ「ヌ」ー 「ハナ」 マ「チャ」タン
 [ʃi̯[ʔnu]: [hana] ma[ʔʃa]tan] (昨日あそこに待っていた)
- 「ニ」ジカンジュン マ「チャ」タン [[ni]dʒikanju:m ma[ʔʃa]tan] (二時間も待った)
- (2) 「ダー」ン マツ「ッシャ」ラー バ「ヌ」ン マツン
 [[da:]m matsu[ʃʃa]ra: ba[ʔnu]n matsun] (君が待つなら 私も待つ)

8. 条件形 -バ [-ba] (～ば) の下接する形 (NR)

9. 命令形

- (1) マ「チ」 [ma[ʔʃi] (待て)

シ「ヌ」ン [ʃi[ʔnu]n] (死ぬ)

1. 志向形

「マー」ジウ シナー [[ma:]dzi ʃi̯na] (一緒に死のう)

2. 未然形

- (1) 「ウヌ」 ピウ「トゥ」ワー シ「ナ」ンシウカ
 [ʔunu] pi̯[ʔtu]wa: ʃi̯[ʔna]nʃi̯ka] (あの人は死なないよ)
- 「マダ」 シナンシウ「カ」 シ「ニヤ」ンタ 「エ」ヌン
 [[mada] ʃi̯nans̩i̯ka] ʃi̯[ʔna]nta [ʔe]nun] (まで死なないのに死んだと言うよ)
- ウン バ「シャ」 マダ シナ「ナ」タン
 [ʔum ba[ʃa] mada] ʃi̯na[ʔna]tan] (あの時は、まだ死ななかつた)
- 「マナー」 シ「ナンバ」ル 「ヤ」ルシカ
 [[mana:] ʃi̯[ʔnamba]ru [ja]ruʃi̯ka] (今は死なない方がよいのだが)
- 「シナン」スク「チ」 イギダ「ル」 [[ʃi̯nan]suku[ʔʃi] ʔigida]ru] (死なないで行った)
- シ「ナ」バン タ「マツ」アー ノガ「リ」ス
 [ʃi[ʔna]ban ta[ʔmattsa:] noga[ʔri]su] (死んでも魂は残るよ。)

3. 完了形

- (1) 「ウ」ヌ ピウ「トゥ」ワー ビョーキ「ヌ」 シ「ナ」ヌ タミシ 「マナ」マチ
 ア「ワリン」 サンスクチ シ「ニヤ」タン
 [[ʔu]nu pi̯[ʔtu]wa: bjo:ki[ʔnu] ʃi̯[ʔna]nu tamiʃi [mana]matʃi
 ʔa[ʔwarin] sansukutʃi ʃi[ʔnja]tan] (あの人は病気の品のために急に苦しみもしないで死んでしまった)

○マ「ラリヤ」シー シ「ゴービ」ピトゥワー シ「ニヤーッ」タン

[ma'rarijaɽ] si: ?ŋ'go:biɽ pi'twa: si'njaɽ'taŋ]

(マラリヤでたくさんの人が死んだ)

○「スグ マナ シニヤ」ン [[sugu mana si'nja]ŋ] (今しがた 死んだ)

○「キューン」シニ シ「ヌ」ン シ「ニヤ」ン

[[kju:ŋ] si'ni si'nu]ŋ si'nja]ŋ] (今日も死に、昨日も死んだ)

○ピウ「トゥ」ドゥ シ「ニヤ」ル [pi'ʔtu]du si'nja]ru] (人が死んだ)

4. 連用形 1

(1)シニボ「ハン」 [[si'ni]bo'haŋ] (死にたい)

○シニン「クウ」ハン [[si'ni]ŋ'kwahaŋ] (死ににくい)

○「シニ」ギシャー」ン [[si'ni]gi'sa:ŋ] (死にそうだ)

(2)ウタ「マ」ヤバン シ「ニガ」ラ プ「トゥギン」ドゥ ナル「」ヨガラ

「ダシ」ウタ シウカルヌ

[ʔuta'ma]jabaŋ si'ni'garaɽ p'u'tugindu naru:]jogara

「da:si]ta si'karunu] (子供でも死んだら仏になるからほっておけない)

(3)「ダ」ー 「マ」ー シニ「ス」ナー [[da:] [ma:] si'ni'su]na:ɽ] (君は今死ぬのか)

○「ウ」ヌ ピウ「トゥ」ウー 「シニ」ス ドゥ「ラ」レ

[[ʔu]nu pi'twa:] [si'ni]su du'ra]re] (あの人は死ぬはずだ)

○「ウ」ヌ ピウ「トゥ」ウー 「シニ」スヨガラ 「ダ」ー シニ「ガ」ラー「」ナラ「ヌ

[[ʔu]nu pi'twa: [si'ni]sujogara [da:] si'ni'gara:] naranu]

(あの人は死ぬようだから君は死んではならない)

○「シニ」ン シー イ「ギン」 スー

[[si'ni]ŋ] si: ?i'gin] su:] (死にもし、生きもする)

5. 終止形

(1)ピウ「トゥ」ヌ シ「ヌ」ン [pi'ʔtu]nu si'nu]ŋ] (人が死ぬ)

6. 連体形

(1)シヌ ク「トゥ」 ナルン [[si]nu ku'tu] naruŋ] (死ぬことができる)

(2)ダー「マ」ナー シヌ「ジキヤ」ー ア「ラン」ユガラ 「ガン」バリ「ヨ

[da:] [ma]na si]nu'dzika:] ?a'raŋ]jugara [gam]bari]jo]

(君は今死ぬ時期でないから頑張れよ)

○「ウ」ヌ ピウ「トゥ」ウー シヌ「カミン」 ユー「」パ「タ」ラキャタン

[[ʔu]nu pi'twa: si]nu'kamɨn ju:] pa'ta]rakjataŋ]

(その人は死ぬまでよく働いた)

○シ「ヌナ ヨー [ʃiːnuna joː] (死ぬなよ)

○「タ」ンドウ シヌカ「ヤ」ー [ˈtaːndu ʃinukaˈjaː] (誰が死ぬかなあ)

7. 連用形 2

(1)「ダ」ーヌ シヌ「チャ」ー デー「ジウ」ドゥラー

[ˈdaːnu ʃinuˈtʃaː deːˈdziːduraː] (君が死んだら大変だよ)

8. 条件形

(1)ピウ「トゥウ」ー シニバ 「ダ」ー 「バリ」スナ

[pjuˈtuːwː ʃiniba ˈdaː ˈbariːsuna] (人は死ぬのに君は笑うのか)

9. 命令形

(1)「シニ [ˈʃiːni] (死ね)

「バー」ルン [ˈbaːrun] (笑う)

1. 志向形

(1)「マー」ジウ 「バ」ロー [ˈmaːdzi ˈbaːroː] (一緒に笑おう)

2. 未然形

(1)バ「ナー」 バラ「ヌ」 [baˈnaː baraːnu] (私は笑わない)

「タ」ン 「バラ」ヌ [ˈtaːm ˈbaraːnu] (誰も笑わない)

○「ウ」ヌ ピウ「トゥウ」ー バ「ラン」タン

[ˈʔuːnu pjuˈtuːwː baˈranˌtan] (あの人は笑わなかった)

○「マー」ジウ 「バラ」ンナ [ˈmaːdzi ˈbaraːnna] (一緒に笑わないか)

(2)ピウ「トゥ」ンナ 「バー」レールン [pjuˈtuːnna ˈbaːreːrun] (人に笑われる)

(3)ピウ「トゥ」ガ 「バラ」シミルン [pjuˈtuːga ˈbaraːʃimirun] (人に笑わせる)

(4)バ「ナー」 バラ「バン」 「ダ」ー 「バル」ナ

[baˈnaː baraːban ˈdaː ˈbaːruna] (私が笑っても君は笑うな)

3. 完了形

(1)「マ」ナ バリ「ヤ」ン [ˈmana barjaːn] (今笑った)

4. 連用形 1

(1)「ウ」ヌ ピウ「トゥウ」ー バン「ワ」 バ「リビ」リ「ヤ」ル

[ˈʔuːnu pjuˈtuːwː banˈwa baːribiˈrjaːru] (あの人は私を笑っている)

(2)「バ」リンクウ「ハン」 [ˈbaːriŋkwaˈhan] (笑いにくい)

○「バ」リヤッサ「ハン」 [ˈbaːrijassaˈhan] (笑いやすい)

○「バー」リ「チ」 パ「ナシ」 シー ビ「リ」ヤル

[ˈbaːriˈtʃiː paˈnaʃiː ʃiː biˈrjaːru] (笑って話をしている)

(3) 「バリリガールシル シー ビリャル

[ʔbaɾiɾgaɾɪʃiru ʃiː biɾjaɾu] (笑いだけしている)

○ 「バーレン グン [[baɾɪren ɣŋɡun] (笑いに行く)

○ 「ウヌ ピットウワー 「バリリ ギシャハン

[ʔunuɪ piɾtwaː ʔbaɾiɾgiʃaɪhaŋ] (あの人は笑いそうだ)

5. 終止形

(1) 「ボーサシ 「パールン [[boːsaʃi ʔbaɾɪruŋ] (大きく笑う)

○ 「バー ナー パールン [baɾnaː ʔbaɾɪruŋ] (私は、笑います)

(2) 「ダイン 「バルンナ [[daɪm ʔbaɾɪrunna] (君も笑うか)

○ 「ムー ウチャー バルンドウ「ラレ

[muː ʔuɾtʃaː baɾɪnduɾaɾe] (ここでは笑うだろう)

6. 連体形

(1) 「バル ク「トゥワー ナルン [[baɾu kuɾtwaːɪnaɾuŋ] (笑うことはできる)

○ 「ダー 「バルムヌワー 「アラヌ

[daː ʔbaɾuɪmunwaː ʔaɾanu] (君は笑うものではない)

(2) 「バル ピットウワー 「タン ブラヌ

[baɾu piɾtwaː ʔtam buɾaɪnu] (笑う人は誰もいない)

(3) 「ウヌ ピットウヌ 「バルカミン 「モラ ウリワ 「バラシミルン

[ʔuɪnu piɾtunu ʔbaɾɪkamin ʔmora ʔuriɪwa ʔbaɾaʃimiruŋ]

(あの人が笑うまで、こちらからあれを笑わせる)

7. 連用形 2

(1) 「ダー 「バルチャー パ「ヌン バルン

[daː ʔbaɾɪtʃaː baɾnumɪ buɾuŋ] (君が笑ったら私も笑う)

○ 「ナブチ 「バルチャー デー「ジウ ドウラー

[naɪbutʃi ʔbaɾɪtʃaː deɪdʒiɪ duɾaː] (ここで笑ったら大変だよ)

(2) シウ「ヌン バ「リャタン [sʰiɪnuɪm baɾɪjaɪtaŋ] (昨日も笑った)

8. 条件形

(1) 「バー バリバン 「ダー バルナ

[baː baɾiban ʔdaː baɾuɪna] (私が笑っても君は笑うな)

9. 命令形

(1) 「バリボハ「チャラ バリバ

[baɾiɪbohaɾtʃara baɾiɪba] (笑いたければ笑いなさい)

ッフン [ffuŋ] (降る)

1. 志向形 -ア [-a] (~よう) の下接する形 (NR)

2. 未然形

(1) ア「ミ」 ッ「ファヌ」 [ʔa「mi」 f「fanu」] (雨は降らない)

○ 「アミアータ」 ッ「ファ」ンムンヌ カ「ツァー」 ム「シアラグ」ナ
[ʔʔamjaɪta] f「fa」mmunnu ka「tsaɪ」 mu「ʃi ʔaragu」na
(雨は降らないのに傘を持ってあるくのか)

○ 「シウヌワー」 ッ「ファン」タン [sɪ「nwaɪ」 f「fan」tan] (昨日は降らなかった)

○ 「キョワー」 ッ「ファン」カ「ヤー」
[「kjowaɪ」 f「fan」ka「jaɪ」] (今日は降らないかなあ)

(2) 「アミ」ン ッ「ファス」ン [ʔʔmi]ŋ f「fasu」ŋ] (雨も降らせる)

○ ア「ミヤー」 ベー」ビタン ッ「ファヌ」
[ʔʔa「mjaɪ」 「beɪ」bitan f「fanu」] (雨は少しも降らない)

○ ユ「ス シクタン」 ッ「ファヌ」 [ju「su ʃi」kutan] f「fanu」] (夜露ほどさえも降らない)

(3) 「アミヌ」 ッ「ファバン」 ンギ」ス
[ʔʔaminu] f「faban」 ʔŋgi]su] (雨が降っても行く)

3. 完了形

(1) 「マナ アミ」ワ ッ「フィヤ」ン [「mana ʔami」wa f「fja」ŋ] (今、雨が降った)

○ アミガー「シウ」ル ッ「フィヤ」ル [ʔʔamigaɪ「si」ru f「fja」ru] (雨だけが降った)

○ 「アミガー」シウ ッ「フィヤ」ルヨガラ ピ「テ」ヌ ウ「ルサ」ヌヨガラ
「アマ」シウナン 「イビ」ラルヌ
[ʔʔamigaɪ]si f「fja」rujogara pi「te」nu ʔu「rusa」nujogara
ʔʔama]sɪnan ʔʔibi]rarunu]

(雨だけ降ったので、畑が潤い過ぎているので、砂糖キビは植付けられない)

4. 連用形 1

(1) ク「トゥラー」 アミガーシウ」ドウ ッ「フィビリヤ」ル

[kʔu「turaɪ」 ʔʔamigaɪsi]du f「fibiɾja」ru] (近頃は雨だけが降っている)

(2) ク「トゥラー」 アミヤー フイヤッサハン

[kʔu「turaɪ」 ʔʔamjaɪ fuijassahan] (近頃は雨は降りやすい)

(3) 「キョワー」 アミアー ッ「フィギシャ」ン

[「kjowaɪ」 ʔʔamjaɪ f「figi」ʃaɪŋ] (今日は雨は降りそうだ)

○ 「アツツァー」 ア「ミヤー」 ッ「フィギシャダ」ルー

[ʔʔattsaxɪ ʔʔa「mjaɪ」 f「figi」ʃadaruɪ] (明日雨が降りそうだ)

○シウ「ヌワー」 ア「ミアー」 ッ「フィダッ」タル

[s'i]nwa: ?a'mja: f'fidat'taru] (昨日は雨は降った)

○「マナ アミアー」 ッ「フィダ」ル

[mana: ?amja: f'fida]ru] (今雨が降っている)

○「アミン」 ッフィ カ「チ」ン フ「クン

[?amin] ffi ka'tʃin fu'kun] (雨も降り、風も吹く)

○ッ「フィアー」 スー シウカ 「キョワー」 ッ「ファ」ヌ

[ffia: su:sika 'kjowa: f'fa]nu] (降りはするが今日は降らない)

5. 終止形

(1)「アミ」 ッフン 「?ami」 ffun] (雨が降る)

○ア「ミアー」 ッフン 「?a'mja:」 ffun] (雨は降る)

○キョ「ワー」 ッ「フン」ドゥ「ラ」レー

[kjo'wa: f'fun] du'ra]re:] (今日は降るだろうよ)

(2)キョ「ワー」 アミヤー ッ「フン」カ「ヤー

[kjo'wa: ?amja: f'fun]ka'ja:] (今日は雨は降るかなあ)

○「ダ」ー 「アミ」 ッ「フン」タ ウ「ム」ナ

[da: ?ami] f'fun]ta u'mu]na] (君は、雨が降ると思うな)

○「マナ ア」ミヤー ッ「フン」 「mana ?a'mja:」 f'fun] (今すぐ雨は降る)

○「キョワー アミヤー」 ッ「フン」ドゥラー

[kjo'wa: ?amja: f'fun]du]ra:] (今日は雨は降るよ)

○「アミン」 ッフィ カ「チ」ン フ「クン

[?amin] ffi ka'tʃin fu'kun] (雨も降り、風も吹く)

6. 連体形

(1)「アミノ」 ッ「フ」ピウンドゥ 「ブサール

[?aminu] f'fu]pindu 'busa:ru] (雨の降る日が多い)

(2)「キョワ アミ」 ッ「フ」ヨガラ 「スグ」トゥワー 「マ」 ナラ「ヌ アシウ」ピル
「シレ」ル

[kjo'wa ?ami] f'fu]jogara 'sugu]twa: 'ma] nara]nu ?asi]piru
[sire]ru]

(今日は雨が降るから仕事はもうできない。遊びぞされる)

(3)「アミヤー」 ッ「フン」ナ 「?amja:」 f'funna] (雨は降るか)

(4)「アミノ」 ッフ「カミ」ン 「アミゲール」 スー

[?aminu] ffu]kami]n 'amige:ru] su:]

(雨が降るまで 雨願いく雨乞ををする)

7. 連用形 2

(1) 「シウヌ」ン ッ「フタン」 [s'i[nu]ŋ f'futaŋ] (今日も<雨が>降った)

(2) 「アミノ」 ッ「チャー」 サナ カ「ピ」

[ʔaminu] ffu[tʃara] s'ana k'a[pi]

(雨が降ったら傘を被りなさい。傘をさしなさい)

○ 「アミノ」 ッ「チャー」 サ「ラー」ン ム「チアー」キ

[ʔaminu] ffu[tʃa] s'a[rax]m mu[tʃiʔax]ki

(雨が降ったら傘を持って行きなさい)

8. 条件形 -バ [-ba] (～ば) の下接する形 (NR)

9. 命令形 そのままで命令の意を表す形 (NR)

* (補) 係助詞 ドウ [du] の結び

(1) ア「ミン」ドウ ッフ [ʔa[mi]n]du ffu] (雨ぞ降る、雨が降る)

ミ「ル」ン [mi[ru]ŋ] (見る)

1. 志向形

(1) 「マー」ジウン ミ「ラ」 [[ma]rdzim mi[ra]] (一緒に見よう)

2. 未然形

(1) バ「ナー」 ミラ「ン」 [ba[na] mira[ŋ]] (私は見ない)

○ バ「ナー」 ミ「ラン」タン [ba[na] mi[ran]taŋ] (私は見なかった)

○ ネ「ル」 ム「ヌ」ワー ミ「ラン」バン ミ「シャー」ダル

[ne[ru] mu[nwa] mi[ram]bam mi[ʃa]daru] (あんなものは見なくてもよい)

○ バー ピウ「トゥ」リル「ル」 ミル ビツ「ヌ」 ピウトウ「ウ」ー ミラ「ヌ」

[ba: pi[tu]riru] miru bitsu[nu] pitwa: mira[nu]

(私一人が見る、別の人は見ない)

○ バン「ニ」ャン ミレ「ル」ン

[ban[ɲam] mire[ru]ŋ] (私にも見られる、見ることができる)

3. 完了形

(1) バ「ナー」 ミランシウ「カ」 ミ「リ」ャン ミ「リ」ャンタ 「エ」ヌン

[ba[na] mirans̄i[ka] mi[rjam] mi[rja]nta [ʔe]nuŋ]

(私は見ないのに、見た見たと言う)

(2) 「マナ」 ミ「リ」ャンドウラ [[mana] mi[rjan]dura] (今見たよ)

4. 連用形 1

(1) ミリボハ「チャラ」 ミッシミ「リ

[miribohaʔtʃaraʔ miʃʃimiʔri] (見たかったら見せなさい)

○ 「ウヌ」 ピウ「トゥウ」ー ギナム「ヌウ」ー ミリ ビ「リヤ」ル

[ʔunuʔ piʔtwaʔ: ginamuʔnwaʔ: miʔriʔ biʔrjaʔru] (あの人は芝居を見ている)

(2) 「モ」ブ「チャー」 ミ「リ」ンク「ウ」ーダル

[moʔbuʔtʃaʔ: miʔriʔŋkwaʔ:daru] (ここでは見にくいよ)

(3) 「シウム」チウン」 ミリ「チ」ル ウ「タ」シ ビ「リヤ」ル

[simutsimʔ miriʔtʃiʔru ʔuʔtaʔʃiʔ biʔrjaʔru] (書物も読んで歌っている)

○ シウムツウー ミ「リ」チ ウ「タ」ンシ ビ「リヤ」ル

[ʃimutswaʔ miʔriʔtʃiʔ ʔuʔtaʔŋʃiʔ biʔrjaʔru] (本を読んで、歌も歌っている)

○ ミリ「タン」 サヌ [miriʔtanʔ sanu] (見さえしない)

○ ミ「リガ」ーシウル シー ビ「リヤ」ル

[miʔrigaʔ:ʃiru ʃiʔ: biʔrjaʔru] (見だけしている)

(4) ク「リヤ」ー 「ミリヤ」ッサハン [kʔuʔrjaʔ: ʔmirijassahaŋ] (これは見やすい)

○ 「ウヌ」 ピウトウ ヤ「チャ」ラー ミリギ「シャ」ハン

[ʔuʔnuʔ piʔtuʔ jaʔtʃaʔraʔ: mirigiʔʃahaŋ] (あの人が見たら見そうだ)

(5) バ「ナー」 ギ「ナ」ムヌ」 ミリ「ン」グン

[baʔnaʔ: giʔnaʔmunuʔ miriʔŋʔgun] (私は芝居を見に行く)

5. 終止形

(1) バ「ナー」 ギ「ナム」ヌ」 ミ「ル」ン

[baʔnaʔ: giʔnamuʔnuʔ miʔruŋ] (私は芝居を見る)

(2) バ「ヌン」 ミ「ルン」ドゥラー [baʔnumʔ miʔrunʔduraʔ:] (私も見るよ)

○ 「ダー」ン ミ「ルン」ナー [[daʔ:m miʔrunʔnaʔ:] (君も見るか)

(3) ウヌ ピウトウン ミ「ルン」カ「ヤ」ー

[ʔunuʔ piʔtum miʔruŋkaʔjaʔ:] (その人も見るかなあ)

6. 連体形

(1) ミ「ル」 ピウトウヌ イ「シャガ」ヌ [miʔruʔ piʔtunu ʔiʔʃaganu] (見る人が少ない)

(2) 「ダ」ー ミル「カミヤ」ー ミシ「ルン」ドゥラ

[daʔ: miruʔkamjaʔ: miʃiʔrunʔ duraʔ:] (君が見るまで見せるよ)

(3) ミル ム「ヌウ」ーテ ヤッサー「ダル」

[miru muʔnwaʔ:te jassaʔ:daru] (見るのは簡単である)

○ 「ダ」ー ミル「ナ」 [[daʔ: miruʔna] (君は見るな)

「ミ」ン「ナ」 [[mi]n[na] (見るな)

7. 連用形 2

(1) シウ「ヌ」ン ミ「タン」 [s'ũ[nu]m mi[taŋ] (昨日も見たよ)

(2) 「ダ」ー「ン」 ミ「チャ」ラー「バ」 「ヌ」ン ミ「ル」ン「ド」ウラー

[[da]m mi[tʃa:ɾa:] ba[num] mi[run]du:ɾa:] (君も見たら私も見ろよ)

(3) バン「ニ」ャ「ミ」レ「タン」 [ban[ɲa] mire[taŋ] (私には見られた、見ることができた)

8. 条件形、-バ [-ba] (～ば) の下接する形 (NR)

9. 命令形

(1) 「ペ」ー「シャ」 ミ「リ」 [[pe]ʃa miri] (早く見ろ)

「エ」ン [[?e]nuŋ] (言う)

1. 志向形

(1) 「マ」ー「ジ」ウ 「エ」ナ [[ma:]dzi [?e]na] (一緒に言おう)

2. 未然形

(1) バ「ナ」ー「ヌ」ー「ン」 「エ」ナ「ン」 [ba[na:] nu:]ŋ [?e]naŋ] (私は何も言わない)

○ 「ヌ」ー「ン」 「エ」ナ「ン」シウ「カ」 ヨウ「ラ」タン

[[nu:]ŋ [?e]nansũka jowa[ra]taŋ] (何も言わないのに叱られた)

○ 「ヌ」ー「ン」 「エ」ナ「ヌ」 [[nu:]ŋ [?e]nanu] (何も言わない)

○ 「ヌ」ッ「ター」 エナ「ン」スク「チ」ー「バ」 「リ」ネー「ヌ」

[[nu]t'ta: ?enansuku[tʃi:] p'a[ri]ne:nu] (何も言わずに行ってしまった)

(2) ウ「ヌ」シ「ク」ー「ヤ」 「チ」ャー「エ」ー「ナイ」ルン

[[?unu]ʃi[ku:] ja]tʃa: [?e:]nairuŋ] (それぐらいだったら言うことができる)

「エ」ナ「リ」ルン [[?e]nariruŋ] (言われる、言える)

(3) 「ウ」リ「ガ」ー「エ」ナ「ッ」シ「ミ」ルン [[?uri]ga: [?ena]ʃʃimiruŋ] (あれに言わせる)

(4) 「エ」ヌ ク「ト」ウ「ウ」ー「エ」ナ「ン」

[[?e]nu ku]t'wa: ?ena]ŋ] (あんなことは言わない)

(5) ク「リ」ャ「ー」 「エ」ナ「バン」 ミ「シ」ャー「ン」

[k'ũ[r]ja: [?ena]bam mi]ʃa:ŋ] (これは言わなくてもよい)

○ ク「リ」ャ「ー」 「エ」ナ「バル」 「ヤ」ル

[k'ũ[r]ja: [?ena]baru [ja]ru] (これは言わなければならない)

3. 完了形

(1) マ「ナ」ン エ「ニ」ャ「ン」 [ma[naŋ] ?e]njaŋ] (今も言った)

○ パー 「エ」ニ「ャ」ク「ト」ウ「ウ」ー「バ」 「シ」ナ 「ヨ」ー

[ba: ʔeɫnʒa kuʔtwa: baʃʃina ʔjo:] (私が言ったことは忘れるなよ)

4. 連用形 1

(1) ク「リヤー エ」ニヤッサハーン [k'ʊʔrja: ʔeɫnijassaha:ŋ] (これは言いやすい)

○ク「リヤー エ」ニゴハートル [k'ʊʔrja: ʔeɫnigoha:ɪtaru] (これは言いにくい)

(2) ドウ「ヌー ム」ヤル クトウワー 「エ」ニ ク「ナー」チャ ナラヌ

[duʔnu: muɫjaru kuʔtwa: ʔeɫni kuʔna:ɪtʃa naranu]

(自分の思ったことは言いに来なければいけない)

○ウリ 「エ」ニン 「ン」グン [ʔuri ʔeɫniŋ ʔŋ]gun] (これを言いに行く)

○「エ」ニ「ガー」シウ シー ビ「リヤ」ル

[ʔeɫniʔga:ɪsɪ ʃi: biʔrjaɫru] (言ってばかりしている)

(3) ク「リヤー」 「エ」ニギシャハン [k'ʊʔrja: ʔeɫnigisa:han] (これは、言いそうだ)

(4) 「ダー」ン 「エ」ニスナ [da:ɪn ʔeɫnisuna] (君も言うか)

アイ 「エ」ニス [ʔai ʔeɫnisu] (勿論、言うさ)

(5) 「マ」ナ ム「ヌー」 エ」ニ ビ「リヤ」ル

[maɫna muʔnwa: ʔeɫni biʔrjaɫru] (今、ものを言っている)

5. 終止形

(1) ム「ヌ」 エ」ヌン [muʔnu ʔeɫnuŋ] (ものを言う)

○ク「リヤー」 「バー」 エ」ヌン [k'ʊʔrja: ʔba: ʔeɫnuŋ] (これは私が言う)

6. 連体形

(1) 「エ」ンクトウワー 「エ」ンナ [[ʔeɫŋkutwa: ʔeɫnna] (そんなことは言うな)

(2) ダー 「エ」ヌ「カミヤー」 マ「ツ」ン

[da: ʔeɫnuʔkamja:ɪ maʔtsuɫŋ] (君が言うまで待つ)

(3) 「バー」 ムヌ 「エ」ヌカ「ツ」ン 「ユワイ」ル スル

[ʔba:ɪ munu ʔeɫnukaʔtsuɫŋ ʔjuwaiɫru suru]

(私はものを言うたびに叱られる)

○「エ」ンクトウワー ヤシムン「ドウ」 ヤル

[ʔeɫŋkuʔtwa jaʃimunʔduɫ jaru] (言うことは簡単だ)

○タンドウ 「エ」ヌカ「ヤー」 [tandu ʔeɫnukaʔja: (誰が言うかなあ)

○「バー」 エヌ「ヨガラ」 ダー 「エ」ンナ

[ʔba: ʔenuɫjogara da: ʔeɫnna] (私が言うから君は言うな)

○ク「リユ」ー 「エ」ヌ ピウトウワー 「ター」ン ブラヌ

[k'ʊʔrju: ʔeɫnu piʔtwa: ʔta:ɪm buranu] (これを言う人は誰もいない)

○「ウ」ヌ ピウトウ「ドゥ」 「エ」ル パツ

[ʔuɫnu p̄itundu ʔeɫru p̄atsu] (その人が言うはずだ)

7. 連用形 2

(1) 「ウリャー」 「ウɫヌ パ「ナスワー エɫタン

[ʔurjaɫ ʔuɫnu p̄aʔnaswaɫ ʔenɫtaŋ] (あれは、あの話は言った)

(2) ダー 「エɫン」 チャラ バ「ヌン エɫヌン

[dax ʔenɫtʃara baʔnun ʔenɫnuŋ] (君が言ったら<言うなら>私も言う)

8. 条件形、-バ [-ba] (～ば) の下接する形 (NR)

9. 命令形

(1) 「ヌー」 ヤバ ピットウ「クトゥバ」 ヤバン 「エɫニバ

[ʔnuɫjaba p̄ituʔkʊtubaɫ jabaŋ ʔeɫniba] (何でも、一言でも言いなさいよ)

トゥ「ブン [tʊʔpuŋ] (飛ぶ)、アシウ「ブン [ʔasiɫpuŋ] (遊ぶ)

1. 志向形

(1) 「マー」 ジウ アシウ「バ [[maɫdʒi ʔasiɫpa] (一緒に遊ぼう)

2. 未然形

(1) ウヌ ッ「タマー」 ヤッサ「シー」 アシウ「バヌ

[ʔunu tʔamaɫ jassaʔsiɫ ʔasiɫpanu] (この子はなかなか遊ばない)

〇ムガ「サー」 ヤッサ「シー」 アシウ「バ」 ナ「タン

[mugaʔsaɫ jassaʔsiɫ ʔasiɫpanaɫtaŋ] (昔はなかなか遊ばなかった)

〇バ「ナ」 アシウ「バン」 タシウ「カ」 アシウ「ピヤン」 タ 「エɫヌン

[baʔna ʔasiɫpanaɫtaʃiɫka ʔasiɫpjanɫta ʔeɫnuŋ]

(私は遊ばなかったのに、遊んだと言っている)

〇ピウ「トゥムシウタン」 アシウ「バンシウク「チー」 パ「リー」 ネー「ヌ

[p̄iʔtumusitan ʔasiɫpansikuʔtʃiɫ paʔriɫneɫnu]

(一度も遊ばずに行ってしまった)

〇「キョワー」 アシウ「パンナ」 [[kjowaɫ ʔasiɫpanna] (今日は遊ばないか)

3. 完了形

(1) バ「ナ」 アシウ「バン」 タシウ「カー」 アシウ「ピヤン」 タ 「エɫヌン

[baʔna ʔasiɫpanaɫtaʃiɫka ʔasiɫpjanɫta ʔeɫnuŋ]

(私は遊ばなかったのに、遊んだと言っている)

(2) 「キョワー」 ジー「ブ」 アシウ「ピヤン

[kjowaɫ dʒiɫbu ʔasiɫpjan] (今日はずいぶん遊んだ)

4. 連用形 1

- (1) 「モアー」 アシウピヤッサハン [[moaː] ʔasipijassahan] (ここは遊びやすい)
○ 「キョワー」 アシウピ「ボハダ」ル [[kjowaː] ʔasipiʔbohadaru] (今日は遊びたい)
○ 「モアー」 アシウ「ピン」コ「ハン」 [[moaː ʔasipipiʔŋ]ʔkolhan] (ここは遊びにくい)
○ ウヌ ッ「タマー」 アシウ「ピギ」シャーン
[[ʔunu tʔʔamaː ʔasipigisaːŋ] (あの子は遊びそうだ)
(2) 「アシウ」ピン「チャ」ナー 「ホン」 ユミヤル
[[ʔasipinʔtʃaːnaː ʔhon] jumjaru] (遊びながら本を読んでいる)
(3) 「アシウ」ピンガ 「ング」ン [[ʔasipinga ʔnguːŋ] (遊びに行く)
○ バ「ヌン」 アシウ「ピスム」ヌ 「ダバ」ギ 「アッ」シウピ「ス」ナ
[baʔnuŋ ʔasipisumunu ʔdabaːgi ʔasisaːpiʔsuːna]
(私も遊ぶのに君まで遊ぶのか)

5. 終止形

- (1) バ「ナー」 キョー アシウ「プ」ン [baʔnaː kjoː ʔasipun] (私は、今日は遊ぶ)
○ 「ダ」ン 「アシウ」プ「ン」ナ [[daːŋ ʔasipunna] (君も遊ぶか)

6. 連体形

- (1) 「アシウ」プ「ピ」ウトウヌ 「イシヤガ」ハル
[[ʔasipuː piʔtunu ʔisigaharu] (遊ぶ人が少ない)
(2) 「モ」 ブ「チャ」ー 「アシウ」プ「ナ」
[[moː buʔtʃaː ʔasipuna] (ここでは遊ぶな)
(3) ウ「タマ」ヌ アシウ「プ」カミー マチャ「ン」
[[uʔtamanu ʔasipuʔkamiː matʃaːŋ] (子供が遊ぶまで待った)
○ 「アシウ」プ カ「ツ」ー「ン」 ヤンダ「ラビ」リヤ「ル」
[[ʔasipukaʔtsuːŋ] ʔjandaraːbiʔrjaːru] (遊ぶたびに喧嘩する)
(4) 「タ」ン「ド」ウ 「アシウ」プ「カヤ」ー
[[taːnadu ʔasipuʔkajaː] (誰が遊ぶかなあ)
○ 「ウ」ヌ ッ「タマ」ンドウ アシウ「プ」
[[ʔuːnu tʔʔamandu ʔasipu] (あの子が遊ぶさ)
(5) 「キョワー」 バー 「アシウ」プ「ヨガ」ラ 「ダ」ー パ「タ」ラギ
[[kjowaː] baː ʔasipujogara ʔdaː paʔtaːragi]
(今日は私が遊ぶから君は働きなさい)

7. 連用形 2

(1) シウ「ヌ」ン アシウピヤ「タン」 [s'ĩ'nu]ŋ ʔas'ĩpja'taŋ] (昨日も遊んだよ)

○ 「ダー」ン 「アシウ」プ「チャー」 バ「ヌ」ン アシウ」プン

[da:ŋ] ʔas'ĩ'pu'tʃa:ŋ ba'nuŋ ʔas'ĩ'puŋ] (君が遊んだら僕も遊ぶよ)

8. 条件形 -バ [-ba] (～ば) の下接する形 (NR)

○ トゥピバル [tupibaru] (飛べばぞ)

9. 命令形、そのみで命令の意となる。

○ トゥ「ピ」 [tu'pi] (飛べ)、「アシウ」ピ [ʔas'ipi]

ッスン [ssuŋ] (着る)

1. 志向形

(1) 「マー」ジウ シウ「ヌ」 ッサー [[ma:ŋ]dzi s'ĩ'nu] ssa] (一緒に着物を着よう)

2. 未然形

(1) バ「ナー」 ッサヌ [ba'na:ŋ] ssanu] (私は着ない)

(2) ムガ「サー」 ケン」 ムヌワー ッサ「ナ」タン

[muga'sa: kem] munwa: ssa'na'taŋ] (昔はあんなものは着なかった)

(3) シウ「ヌ」ワー」 ッサンスク「シ」 アバ」ダリ 「シ」 ビヤーン」ナー

[s'ĩ'nuwa:ŋ] ssansuku'si ʔaba'dari 'si bija:n'na:]

(着物は着ないで裸になっているのか)

○ シウ「ヌ」 ッサ「ナ」チャラ 「ウ」シ ナ「ル」ン

[s'ĩ'nu] ssa'na'tʃara ʔu'si na'ruŋ] (着物を着ないと牛になる)

○ 「ペー」シャナ」 シウ「ヌ」 ッ「サ」ンナ

[pe:ʃana] s'ĩ'nu] s'sa'nna] (早く着物を着けないか)

3. 完了形

(1) シウ「ヌ」ワー」 マー」 ッ「シャ」ン

[s'ĩ'nuwa: ma:] ʃ'ʃa]ŋ] (着物は、もうすでに着た)

4. 連用形 1

(1) ピウ「トゥム」サー」 ッシミ「ラ」 [pi'tumus:] ʃʃimi'ra] (一度は着てみよう)

(2) シウ「ヌ」 ッシボ「ハン」 [s'ĩ'nu ʃʃibohaŋ] (着物を着きたい)

○ クヌ シウ「ヌ」ワー」 ッシ」ンクワ「ハン」

[k'ũnu s'ĩ'nuwa: ʃʃi'ŋkwa'haŋ] (この着物は着にくい)

「ッ」シ」ヤッサ「ハン」 [[ʃʃi]jassa'haŋ] (着けやすい)

○ 「マ」ナー」 シウ「ヌ」ワー」 ッシ」ビ「リヤ」ル

[ʔamanaxʔ s'ij̥[ŋwaɪʔ ʃʃibi[rja]ru] (今着物を着けている)

○ウヌ 「ツタマー」 シウ「ヌワー」 ッシギシャー「ン

[ʔunu ʔʔamaxʔ s'ij̥[ŋwaɪʔ ʃʃigiʃaxʔŋ] (あの子は着物を着けそうだ)

(3)シウ「ヌ」 ッシンツァナ ウタ シー ビ「リャ」ル

s'ij̥[ŋu] ʃʃintsana ʔuta ʃix bi[rja]ru] (着物を着けながら歌を歌っている)

5. 終止形

(1)シウ「ヌワー」 ッスン [s'ij̥[ŋwaɪʔ ssuŋ] (着物は着るよ)

ッ「ス」ンナ [sʃsu]nna] (着るか)

○ウン 「ツタマー」 シウ「ヌ」ッスンカ「ヤー」

[ʔun ʔʔamaxʔ s'ij̥[ŋu] ssuŋka[ʃa]ɪ] (この子は着物を着けるかねえ)

(2)バ「ナー」 シウ「ヌワー」 ッスン

[baʔnaɪʔ s'ij̥[ŋwaɪʔ ssuŋ] (私は着物は着る)

6. 連体形

(1)シウ「ヌ」 ッスピウトウワー ブラヌ

[s'ij̥[ŋu] ssupitwaɪ buranu] (着物を着る人は居ない)

(2)シウ「ヌワー」 ッスナ [s'ij̥[ŋwaɪʔ ssuŋa] (着物は着るな)

○アツァ「ハヌ」 シウ「ヌ」 ッスナ

[ʔatsaʔhanu] s'ij̥[ŋu] ssuna] (暑いから着物を着るな)

(3)「バー」 シウ「ヌ」 ッス「カミ」 マ「ツン

[baɪʔ s'ij̥[ŋuɪ] ssu[kami] ma[tsuŋ] (私は着物を着るまで待つ)

○「ダー」 ッス「カミ」 マ「ツン」 [[da]ɪ ssu[kami] matsuŋ] (君が着るまで待つ)

7. 連用形2

(1)「ダ」ン シウ「ヌ」 ッス「チャー」 バヌン」 シウ「ヌ」 ッスン

[[da]n s'ij̥[ŋu] ssu[tʃax banun] s'ij̥[ŋu] ssuŋ]

(君が着物を着たら私も着物を着る)

○シウ「ヌワー」 シ「ノー」 ッ「シェ」タン

[s'ij̥[ŋwaɪʔ ʃi[no]ɪ ʃʃʃel]taŋ] (着物は昨日着た)

8. 条件形 -バ [-ba] (～ば) の下接する形 (NR)

9. 命令形

(1)シウ「ヌ」 ッシ [s'ij̥[ŋu] ʃʃi] (着物を着なさい)

波照間島の芸能

—ムシャーマを中心に—

當 間 一 郎

(1)南波照間伝説をもつ島

わが国の最南端の島である波照間島は、パイハティローマ伝説を生んだ、メルヘン的な島である。琉球王国時代にできあがった伝説の一つと思われるが、島の外にすばらしい理想郷を想定し、心踊らせたのであろう。これまで波照間島に何度か渡ったが、絶海の孤島にたたずむと、その伝説の生まれたゆえんが容易に理解できる。島に住む人たちが、外にすばらしい楽天地を想像したのは、正常な心理といえるようだ。

『沖縄大百科辞典』（沖縄タイムス社）に、「パイハティローマ」について、次のように記されている。

南波照間 パイハティローマ 1648年（尚質1）八重山波照間島の島民が逃亡したと伝えられる地。『八重山島年来記』にもその記録がある。島では<その逃亡は人頭税の重圧に耐えられなかったため、行く先はパイハティローマとよぶ南方の楽園である>と語り伝えている。（後略）（牧野 清）

このような状況は、与那国鬚川（ヒナイ、比川）にも「南与那国」伝説があると牧野氏は記しておられる。このような話は、この二カ所のみではなく、似通う立地の島には少なからずあったとみるのが穏当であろう。島の外に楽園を求めるのは、いつの世にもあることで、苦しければ苦しいほど、人間の求めてやまない心理状態であろう。

この伝説をもつ波照間島は、きびしい自然と相対してきているので、幾代もの人たちが、シマチャビ（島痛み。孤島苦、離島苦）を味わってきたのである。たび重なる自然の驚異を島の人たちは心をついにしてはねのけてきたのである。その原動力は、多くの年中行事に見ることができる。

旧暦2月、6月、9月の年三回の「シマフサラー」（疫病払いと健康祈願）、旧暦5月、8月、12月の年3回の「ヌブリ」（天候と航海安全祈願）、旧暦9月、10月、11月の年3回の「ツクリニゲー」（農作物の豊穡祈願）、旧暦4月、6月、9月の年3回の「アミニゲー」（雨乞い祈願）、旧暦2月、6月の年2回の「トマニゲー」（泊願い、天候・航海安全祈願）、旧暦6月に4日間（以前は6日間）行われる「プーリン、アミジワー」（豊年祭）、旧暦8月に4日間行われる「シツシン」（節祭）、旧暦9月から11月頃に行われる「タナードリ」（種子取祭）等、実に多くの行事をくりかえして、自然を慰撫しながら五穀豊穡と健康祈願を、島あげてつづけてきたのである。このように離島には、沖縄本島の各村落に見られぬ

神事が古くからあり、島の人たちの心の支えとして行われてきているのである。波照間島の豊かさと繁栄は、数多くの年中行事で約束されてきているといっても過言ではない。

波照間島には、早くから多くの研究者が渡り、パイハティローマの伝説をもつ島の歴史と文化の有様をくわしく書き残されている。くわしくは文献一覧等でごらんいただき、たしかめてもらいたい。他の島から波照間島へたどりつくのに波照間玄海を通らなければならなかったという。今日では、快速船の就航で一時間たらずで着くが、昔は、そう簡単にはいかなかったようだ。昭和14年10月発行の河村只雄著『南方文化の探究』第3篇「八重山文化の探究」6「波照間玄海の荒波」は、当時の航路のきびしさを書いている。5月24日だったというから、台風期でもなかったろうが外海のものすごさに出あったのだろう。このようなきびしい中も、明治・大正・昭和初期までに、多くの研究者が競うようにして渡島している。それほど学問的に魅力あふれる島であり、心ひかれるところなのである。

(2)歌謡にみる島人の生活

波照間島には、古くから多くの歌謡がうたいつがれてきた。しかし、今日、そのほとんどがうたわれなくなり、文字記録で伝承されているのが現状である。加屋本正一著『波照間島』第7章「波照間島の歌」の古謡の項をみると、喜舎場永珣著『八重山古謡』（昭和45年、沖縄タイムス社）から、島に関する古謡のアユ、ジラバ、ユンタ、ユングドゥ21首の題名を記して、「これらの古謡は、残念なことに波照間島でほとんどが忘れさられ知っているものはない」と縮めている。また、『波照間島のムシャーマー南国の豊年祭と祖先供養の祭典』（昭和57年、波照間民俗芸能保存会）には、「また昔は『波照間の人とはユンタ、ジラバなどの歌のカケ（競争）はするな』と言われるほど古謡が盛んであったと言われ、また年間をとおしてみごとにしくまれた祭政一致の年中行事の豊かさは当時の高い文化のレベルを物語るものであろう。」とあり、「夏期の共同作業（夏ボー）の時期に壮年男子が鰹漁に出るために『夏ボー』でさかんに歌われたユンタ、ジラバなどの古謡の練習、伝承が困難になり、それほど豊富にあった古謡が衰退の一途をたどるようになったことは残念である。」と記されている。

外間守善、宮良安彦編『南島歌謡大成、八重山篇』（昭和54年10月 角川書店）には、前述の喜舎場永珣著『八重山古謡』から収録した古謡の他に、宮良高弘著『波照間島民俗誌』（昭和47年、木耳社）所収の「願い口」が17、「フミシシヤギ」が2収録されている。これらの中から、アユとジラバ、ユンタを一首ずつ紹介する。

ぶばなあゆ

- | | |
|------------|----------|
| 1. イヤヨーヨーホ | イヤヨーヨーホ |
| 今日ぬ日ぬ黄金日ば | 今日の日黄金日を |

- | | |
|------------|---------------|
| ホーイ | ホーイ |
| いらびわるよ | 選びなさる |
| 2. いなぬばな | 稲花 |
| すりばな | すりの花 |
| いでやおり | 出なさり |
| 3. 八合びんば | 八合のびんを |
| かじやら | 供え |
| わるよ | なさるよ |
| 4. 九合ぬばな | 九合のはな米を |
| かじやら | 供え |
| わるよ | なさるよ |
| 5. 五ちぬ盆ば | 五つのお膳を |
| かじやら | 供え |
| わるよ | なさるよ |
| 6. 七ぬ盆ば | 七つのお膳を |
| かじやら | 供え |
| わるよ | なさるよ |
| 7. かこなぬ盆ば | カコナ (菓名) のお膳を |
| かじやら | 供え |
| わるよ | なさるよ |
| 8. ぶばまきやら | 叔母たち皆を |
| ちいかいし | お招き |
| わるよ | なさるよ |
| 9. ぶなりきやら | 姉妹たちみなを |
| ちいかいし | お招きし |
| わるよ | なさるよ |
| 10. 願いまり | 祈願して |
| 手じりや | 手摺りし |
| わるよ | なさるよ |
| 11. ぶばまきやら | 叔母たち皆の |
| あとうん | あと |
| にやんよ | にはね |
| 12. ぶなりきやら | 姉妹たち皆の |

あとうん	後
にやんよ	にはね
13. 親びちゆぬ	ご先祖の
あとうん	後
にやんよ	にはね
14. 村中きやら	むら中皆
ばがきやら	私達皆が
願いわるよ	お祈りなさる

このアユには、吉日を選ぶこと、神前へのお供えものに最善を尽し、叔母姉妹たちが祈願し、そして最後に村落共同体の構成員でお祈りし、感謝の意を表するという光景がうかがえる。五穀豊穡への願いと感謝は、村落共同体のもっとも重要な行動であった。

なしいな村うにぬやじらば

1. なしいな村 うにぬや
 ばがかぬしい ふなしどう
 (ナシナ村の宇根 (船) の親)
 (私のいとしい船船頭)
2. うにぬやとう ばぬどうや
 ふなしどうとう くりとうや
 (宇根の親と私とは)
 (船船頭とこれ (私) とは)
3. やるびから みゆとうぬ
 くゆさから うちぐぬ
 (こどもの時からの夫婦で)
 (小さい頃から一緒に)
4. ならふどうぬ いぐだら
 たきふどうぬ むいだら
 (自分の身長がのびると)
 (背丈が大きくなると)
5. なぐばんみしや ゆむみしや
 ちいとうばんみしや ゆむみしや
 (投げてもよいマアよい)
 (捨ててもよいマアよい)

6. うやぬ家でん ありどうしい
ぶにぬ家でん ありどうしい
（ 親の家もあるのだ ）
（ 母親の家もあるのだ ）
7. うやぬ家ぬ ちいむざにん
ぶにぬ家ぬ しいざむとうに
（ 親の家の下座元に ）
（ 母親の家の下座元に ）
8. ちいくいとうり ぴりいどうしい
しるぶむと かつみどうしい
（ 麻^{おけ}筒を取って座るのだ ）
（ 白苧麻糸を紡ぐのだ ）
9. ちいくいとうりぬ 思いぬ
かいぶとうかちやみぬ 思いぬ
（ 麻筒をとつての思いは ）
（ きれいな苧麻を紡いでの思いは ）
10. ばが夏ぬ なりよたら
南夏ぬ たちゆだら
（ 若夏になると ）
（ 南風の夏が立つと ）
11. うにぬやぬ くとうばうむい
ふなしいどうぬ なかば思い
（ 船の親のことを思い ）
（ 船船頭との仲を思い ）
12. あむる酒 まらしようり
米神酒 しくみようり
（ 泡盛酒を造りなさり ）
（ 米神酒を仕込みなさり ）
13. みしやぎばな むちやいいき
ふなむとうに ぱりやいき
（ 美崎浜へ持っていき ）
（ 船元へ走っていき ）
14. とうまやどうりい しいたなが

浜やどうりい 内なが

(苦宿りの下に)
(浜宿りの内に)

15. うにぬやーや くまおるんに

ふなしどうや なまおるんに

(宇根の親はここに居られるか)
(船船頭は今おられるか)

16. ばがぶりば なゆすでい

くりぶりば いかすでい

(わたしはいるが何をするか)
(これはいるが如何するか)

17. うにぬやぬ ふなむかい

ふなしどうぬ みちいむかい

(宇根の親の船迎え)
(船船頭の路迎えのため)

18. あむるざぎん むちるける

まいみしやぐん しいだしどうける

(泡盛酒も持ってきた)
(米神酒も造ってきた)

19. ぬみてみちぬ 泡盛酒

ぬみてみちぬ 米みしやぐ

(飲んでごらんよ泡盛酒)
(のんでごらんよ米の神酒)

20. あむるざぎぬ かていむぬ

たくぬびち かていむぬ

(泡盛酒の肴は)
(乾しタコのけずりもの)

21. まいみしやぐぬ かていむぬ

あいなずぬ かていむぬ

(米神酒の肴は)
(みそのあえ物が肴である)

22. かみていみらぬ たくぬびてい

はいていみらぬ あいなず

(たべてごらんよ乾しタコの削り物)
(たべてごらんよみそのあえもの)

波照間島には、昭和初期頃まで、このような村落共同体の様子を把握するに格好なジラバが数多くうたわれていたと思われる。このジラバは、島の海上交通を司る船頭をうたいこんだもので、典型的な相聞歌になっている。ナシナ村の宇根の親（船頭）を大きくうたいおこし、こどもの時分からの夫婦で幼ない頃から一緒とつづけていく形式は、古謡によくみかける手法で、のびのびとしたうたい方である。麻^{おけ}笥がうたいこまれ、白苧麻糸を紡ぐ行為が見られるのも、島の女たちの日頃の仕事の様子がかがえておもしろい。「若夏」「南風の夏」と、季節感があふれる表現でうたい進められている。泡盛酒を、米神酒を美崎浜、船元へ運んでの宴も、いかにも健康的で、共食、共飲の風習を強調している。全体は、古代社会の集団生活をうたい込んで、かぎりない豊かさを見せてくれている。このような類のうたは、波照間島はもちろんのこと、他の島でもさかんであり、うたい踊る全身で喜びを表現していたにちがいない。

まにむるぬいしきまゆんた

1. まにむるぬ いしきやま
やながぶる きいむねぬ
(マニムル家のイシキヤマ (女名) は)
(家にいる気持ちがない)
2. しいとうむでいに うきちより
あさばなに すりちより
(朝早くに起きて)
(朝まだきに元気づいて)
3. 前ぬぞうに いでいるば
あがりよかい みやぎりぬ
(前の門に出ると)
(東の方を見上げると)
4. たるでそんどう みらりる
じりでそぬどう くよまり
(誰が見られる)
(どんな者が拝まれる)
5. たるでんや あらぬそ

じりでんや あらぬそ

(誰でもないよ
どんな者でもないよ)

6. かなびらとう うがまり

ましびらとう くよまり

(加那兄が見られる
真勢兄が拝まれる)

7. かぬびらとう そんだんばし

ましびらとう だんがんばし

(加那兄と相談をして
真勢兄と談合をして)

8. まつこんぬいんかい そだんばし

ばしよちいぬいんかい だんがいばし

(ヤシガニの洞穴に行く相談をし
バショウチの洞穴に行く談合をして)

9. むぎぬんぼんば なりむら

あこんぬんぼんぬ なりむら

(麦のごはんを盛り持ち
芋のごはんを盛り持ち)

10. むぎぬんぼんぬ かしむぬ

びるかしいどう かしむぬ

(麦のごはんのおかずは
蒜漬けがおかず)

11. あこんぬんぼんぬ かしむぬ

みしゆますどう かしむぬ

(イモのごはんのおかずは
みそと塩がおかず)

12. ぶたでいるんに いりやむち

ならでいるに ふないむら

(蓋付き箆に入れて持ち
自分の箆に備え持ち)

13. かたちいんねぬ 道から

いしゃらねぬ 道から

(形もない道から
石ころのない道から)

14. ぶたでろや ぴじいぬき

あがべらや ばしいほうし

(蓋付き箆は脇にぬき
自分の麻笥は脇にはさみ)

15. まこんぬいぬぬ ばいやご

ばしよちいぬいぬぬ にしいぬやご

(ヤシガニの洞穴の南隅の隠れ場
バショウチの洞穴の北隅の隠れ場)

16. たるですんどう びざやわらどう

じりですんどう びりやわる

(何という者がすわっているか
どれという者がすわっている)

17. いらぬびーかい みやぎりば

ゆーびーかい ながみりば

(西の岩礁を見上げたら
ユー岩礁を眺めると)

18. ましびらや いらぶちいちひちんし

かにびらや にばらじんちいんし

(真勢兄はイラブチ魚を釣り
加那兄はニバル魚を釣り)

19. いらぶちい魚 なましし

にばる魚 ぬにばし

(イラブチ魚は脛にして
ニバル魚は潮煮にして)

(アユ、ジラバ、ユンタとも『八重山古謡』より引用する。)

ユンタは、前途のアユやジラバよりもくだけた内容と雰囲気を持ち、より日常的な感を強くもっているように思われる。「マニムル家」のイシキヤマという娘が主人公になり、二人の男性加那兄と真勢兄を登場させて、一日の生活の様子を明るく、動的に展開させていく。イシキヤマが健康で行動力に富む娘として大きく写し出され、奔放なる性格の持ち主としてうたいあげられている。ユンタは、集団作業の場の栄養促進剂的な歌謡で、多彩な

内容がうたわれ、明朗性に富むものが多い。麦飯、イモ飯、蒜のつけもの、みそと塩のおかずなど、村落共同体内の生活がよく描かれ、ピー（岩礁、干瀬）、イラブチャー、ニバルなど、生活の場や海の幸が登場するなど、ユンタのもつ庶民性をじゅうぶんに表現しているといえよう。波照間の人たちの日常生活もこれら多くの歌謡から見るかぎり、海の幸、山の幸にめぐまれていたにちがいない。

節歌は、今日でも三線にのせてうたわれ、保存・継承がはかられている。昭和50年11月26日付で「波照間伝統芸能」として、竹富町指定の無形民俗文化財となり、民謡・舞踊の部として「波照間島節」「夜雨節」「祖平花節」。「波照間島節」「夜雨節」「祖平花節」「太鼓（テーク）」があがった。そして平成3年9月11日付で追加指定され、「波照間口説」「世界報節」が加わった。また、「波照間島のムシャーマ」が、昭和56年2月24日付で、沖縄県の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」として選択され、昭和55年度、56年度の二カ年にわたり、調査が行われて『波照間島のムシャーマー南国の豊年祈願と祖先供養の祭典ー』（昭和57年3月。波照間民俗芸能保存会）という報告書をまとめている。なお、平成5年11月26日には、国選択の「記録作成等の無形民俗文化財」になり、ムシャーマを中心とする伝統芸能が高く評価されている。

(3)ムシャーマにみる芸能

沖縄本島や宮古、八重山で、奉納芸能が数多く組まれて演じられるのは、豊年祭や結願祭であろう。八重山でいえば、四箇の豊年祭では綱引きがあり、各オン（お嶽）を中心に、一年の豊穡と無事息災に感謝しての奉納芸能が、はなやかに演じられる。鳩間島、黒島の豊年祭でも、多くの芸能、舟こぎ、綱引きがある。そして竹富島のタントウイ祭、小浜島、川平等の結願祭、西表組納や星立等のシツ（節祭）でも、多くの踊りや舟こぎ等があつて、むらをあげての感謝祭になっている。しかし、ここ波照間島では、旧暦6月の庚寅から4日間（以前は6日間だったという）、プーリン、アミジワ（豊年祭）があるが、他の地域に見られる芸能番組は、現在はない。報告書『波照間島のムシャーマ』によると、「年間の最後で最大の神行事でユージュビ（世の首尾）ともいわれ、当年の豊作感謝（プーリン）と来年の豊作の予祝祈願（アミジワ）の二つが行われる。シヌザラ（角皿）、ナガザラ（中皿）カンシン（神客）の雨乞いのパンなどの歌と祈願、巻踊りと神踊りなどの芸能で、島全体をあげた最大の行事である。」と説明されている。

この内容からすれば、奉納芸能の数々とか、豊年祭のハイライトとしての綱引きは、この期間で以前には行われていたものを、ある時期に何かの事情で別に移されるか。とりやめを余儀なくされたのであろう。ムシャーマの報告書には、そのところを次のように解説されている。

- (1) この行事は、かつてはその年の豊年を感謝する4日間の「プーリン」（1日目はミワクチェー、2日目はカンパナ、3日目がプーリン、4日目はプーリンのアサヨイとスケバラ）とその20日後に行なわれる来年の豊作を祈願する2日間の「アミジワ」（1日目はアミジワ、2日目がエンヌユニゲー）に分けられて行われていたが、戦後の混乱期に生活改善の名目で「プーリン」と「アミジワー」が合併されて6日間連続して行われるようになり、更に1969年（昭和44年）に両行事あわせて4日間（1日目はミワクチェーとカンパナ、2日目がプーリン、3日目がアサヨイとアミジワー、4日目が最後のアサヨイとスケバラ）に短縮され、現在に至っている。
- (2) 波照間でもその昔はプーリンの「エンヌユニゲー」（来年の豊作祈願）の日（アミジワーの2日目）に仮装行列と綱引きが行われていたと言われる。島のほぼ中央の前部落の前野家の西、親盛家の東を南北に通る道路を境に東西にそれぞれ東組、西組に島を二分して綱引きが行われていたと伝えられている。その場所は不明であるが、オーセー（公民館）のサンシキ（案内客席）の位置から考えると、現在のオーセーの前の東西に通るタカタミチだと考えられる。綱引きでは、島の元村になる西組が勝てばその年は豊作になり、負けたら凶作になると言われていた。その勝敗をめぐって東西両組の村立抗争は絶えることなく、特に前部落は同じ部落民が東西に分断されるので、部落内での喧嘩沙汰が多く、プーリンの厳粛な日に血の雨を降らす事件が絶えなかった。
- (3) そこで、神聖なる神行事の日に喧嘩沙汰は不祥事として島の役人（首里大屋久か目差役か不明だが権限の高い首里大屋久の役割が大きかったと思われる）の命により大改革が断行されたとのことである。即ちプーリンはもっぱら御嶽での祈願と雨乞い、巻踊りなどが中心とした神行事になり、喧嘩沙汰の原因となった綱引きは全廃され、またプーリンの仮装行列は旧暦7月のソーリ」（盆祭）の中の日の「ムシャーマ」に合併されて行われるようになったとのことである。（14、15ページ）

この記述から、今日、旧7月ソーリ（盆祭）で実施されているムシャーマの仮装行列と、今はない綱引きが、以前にはプーリンで実施されて、本来の姿を保ちながら、五穀豊穡と共同体構成員の健康への感謝の喜びを表現していたことがわかる。それが特に綱引きで、毎年のように喧嘩沙汰で、島の役人の命で全廃になったということがわかる。それにほぼ同時代に旗頭問題で大論戦、大乱闘にもなったという。

綱引きで東西により喧嘩がおこるのは、沖縄本島各地でも以前はたびたび見られたというが、その大小、軽重がこの波照間島のような結果を招いたのかも知れぬ。その事件がいつごろであったのか、また、奉納芸能がいつごろから旧暦6月から7月へ移されたのかは、定かでない。旗頭問題（カシラームンドー）は、報告書の出た1982年の時点で「130年か

ら150年前」とあるので、今日からすると十数年を加えて、1853年頃から1833年頃になる計算だ。島の役人が相当な権力をふるっていたことはたしかであろう。7月13日から盆入りで、各家で亡くなられた親兄弟やご先祖を、お墓から家にお迎えした翌日1日の行事になっている仮装行列と奉納舞踊は、まさに盆と正月が一緒になった忙しさの中での行事になっている。

旧暦6月のプーリンでは、お嶽での祈願と雨乞い、巻踊り、神踊りだけだという。沖縄本島でも旧暦7月の盆あけに奉納芸能（村踊り）を行なうところがある。名護市字久志や知念村字知名のヌーバレー等が、その代表的な行事といえよう。波照間島では、最近のいい方としての「仮装行列」ということばを使い、各組の道ズネーイ（揃い）を呼んでいるのである。

筆者は、以前から「ムシャーマ」という名称に、たいへん興味と関心をもって、その語源は何だろうと考えたりした。時期になると、必ず新聞での紹介があるし、もりたくさんのプログラムにも、興味しんしんたる思いを持ちつづけていた。しかし、旧盆の中の日にあたることから、なかなか出かけることができなかつたのが本音である。それは長男ということもあり、この3日間は家にいることをモットーにしていた。それは母が「旧盆には「フリムン（気の狂れた者）ヌンチョウン（できえも）ムドゥティチューンドゥ（戻ってくるんだ。）」と口ぐせのようにいっていたので、出かけることができずに、やっと総合調査で思いきって見学することができた次第である。

「ムシャーマ」の語義について、報告書には不明としながら、①ムッサーハー（面白いこと）からムシャーマという。②中国または南方で「ムシャー」（武者、猛者、亡者か不明）なる者がいて、それに関する祭り。だと伝わっていることを紹介している。玉城功一氏はこの他に、昔、ムシャーという人がおり、東西両部落がプーリンの祭、旗頭問題や綱引き争いことが絶えなかつたので、ムシャーが中にはいり、大改革を断行したので、その人の名前が行事者になったのではないかといわれている旨を語っておられた。面白い説と人名説は、両方とも決定的なものとはなりえない感じがする。今後の解明に期待したい。

(4)ムシャーマの行列、庭・舞台の芸能

この番組は、平成8年8月27日（旧暦7月14日）のものである。午前9時頃から、島の中央公民館のタカタミチの広場で、各お嶽の司や諸役員、島の人たちの見守る中で、にぎやかに行われた。30分前の8時半頃から東組（南部落、北部落）前組（前部落）、西組（富嘉部落、名石部落）に動きがあり、徐々に行列をはじめの場に集まってきた。行列は午前9時頃からはじまり、午前10時頃に終了した。各組の行列の構成は次の通り。

1. 東組の行列 ①大旗（「東」の文字と「太陽」の図柄あり）。②ミルクの実（竹に実も

のをいっばいつけている)。③ミルク (弥勒)、椅子持ち、女兒両手にあわ、稲を入れたかごをもち出る)。④老人 (9人が本式、7人でも可)。⑤童子2人 (あわ、きびを持つ)。⑥若衆5人。⑦マミドーマ (16人、大人の男子2人がハヤシを入れながら先導する)。⑧狂言 (1人出る)。⑨六調 (4人出る)。⑩稲すり節 (ひき白を意味する白い布持ち3人、稲1人、箕【ミージョーキー】持ち2人、キネ2人、俵マス持ち1人)。⑪かつお釣り、⑫馬舞者4人 (馬の型どりをつける)。⑬ブーブザー (ししぶともいう)。⑭狂言衆。⑮久高ぶし (3人、權をもって踊る)。⑯棒 (ティンペー、なぎなた、鎌、なぎなた、なぎなた、なぎなた、六尺棒、なぎなた、六尺棒、ドラ、タイコ、ボラ、笛)。⑰獅子 (獅子囃子も出る)。9時20分頃に終り、公民館に入る。

2. 前組の行列、①大旗 (「五風十雨」の文字ある)。②小旗 (のぼり旗、4つの旗あり、「人心一致」「万世豊祿祈祝」「寿民富祿」「天下泰平」と書かれている)。③ミルクの実 (竹に穀物のナーリ (実) をけたもの)。④ミルク (弥勒)、椅子持ち5人、⑤老人 (10人、三線2人「老女」)。⑥マミドーマ (児童5人)。⑦稲摺 (婦人モンペ姿、ひき白を示す布持ち二人、箕持ち2人、俵持ち1人 [男]、稲穂持ち1人 [女]、キネ持ち2人)。⑧ヤシガニ。⑨若衆4人。⑩六調4人、三線1人。⑪与那国のマヤ小 (10人、芭蕉衣をきた女性)。⑫かつおつり (漁とり)。⑬馬舞者3人。⑭四つ竹 (6人)。⑮ししぶど。⑯狂言。⑰棒 (なぎなた、なぎなた、かま、なぎなた、大刀、なぎなた、六尺棒、なぎなた、六尺棒、六尺棒、ドラ、ボラ貝、タイコ8人、笛3人)。⑱獅子 (獅子囃子出る)。すべて終了したのは、午前9時35分すぎであった。9時45分頃から西組が始まる。

3. 西組の行列 ①大旗 (「祝豊年」の文字ある)。②ミルクの実③ミルク (ここの弥勒は女性だという。静かな動きをする)。椅子持ち (児童)、こどもたち10人余つく。④老人9人。⑤若衆4人。かりゆし節で踊る。⑥マミドーマ10人 (カマ3人、クワ3人、ヘラ4人)。⑦稲すり (ひき白を意味するひも持ち2人、稲1人、箕持ち2人、俵1人、キネ2人)。⑧天川8人 (二才踊りの着付4人、着流しの着物4人。) ⑨馬舞者5人。⑩クバ笠を持つ踊り11人。⑪与那国のマヤ小10人 (芭蕉衣をきる)。⑫土人踊り。⑬フサマラー3人。⑭狂言 (かつおつり)、⑮棒 (テンペー、なぎなた、大刀、なぎなた、かま、六尺棒、六尺棒、なぎなた、六尺棒、ドラ2人、タイコ8人、ボラ、笛5人)。⑯獅子舞 (獅子ハヤシも出る)

午前9時頃からはじまった東組、前組、西組の行列は、午前10時頃に終了し、中央公民館の中庭で、棒や太鼓の演技が午前10時5分頃から、東組、前組、西組の順に披露された。まず東組の棒は、①テンペーとなぎなた、②かまとなぎなた、③なぎなたとなぎなた、④六尺棒となぎなた、⑤六尺棒と六尺棒であった。最後は、全員による演技があり、東の棒をしめた。次に太鼓の演技が力強く行われた。太鼓は四組構成で、先頭の4人は笠を持つ2人が立つ。そのあとに4人ずつの2組 (8人) の太鼓があり、その後に笛2人がつづく。

太鼓の打ち方は、1人が持ち、他の1人が打つ2人1組で、大役を果たす。

前組の棒は、①なぎなたとなぎなた。②かまとなぎなた。③大刀となぎなた。④六尺棒となぎなた。⑤六尺棒と六尺棒であった。最後に全員による演技があつて終る。そして太鼓が披露された。笠4人、太鼓8人（2人1組で打つ）、笛4人で、若さの太鼓芸を見せた。

午前の部の最後は、「ニンブチャー」（念仏踊り）を各組の棒シンカ、各村役員、公民館役員で二重の円をつくり、内側に棒の着付をした二才たちや役員14人、その外側にも棒シンカと役員たち28人ほどすわり、「親ぬ御恩」（無蔵念仏）の歌がはじまると、円陣の棒シンカ等は右まわりにウサギ跳びし、歌のあいだに立ちあがり、左まわりしながら「ハーリカ ヨイサー シッサーサーサー スリサーサー」とはやしてもちあげる。この「ニンブチャー」のねらいは、成仏できない無縁仏を、村人たちが共同でなぐさめ、故人をしのびつつ感謝することであるという。その日は、音取りにあたる人はなく、テープにふきこまれたものを全員でうたうという方法で進められた。当日、配られた歌詞は、次の通りである。

なむあみだぶつは みだはぶとき
うやぬよーうーぐや フワふかきむぬ
ちちぐぬうぐぬや やまたかさ
ばばぐぬうぐや フワうみふかさ
やまぬよーたかさや さばはがりる
うみぬよーふかさ ハヤさばがるぬ
ひるやよーちちぐぬ ぴさがうい
あおきいぬかーじま ハでんあううがさり
すゆぎぬかじまでん すゆうがさり
ゆるやよばばぐ フヌふちぐるに
むむやはたやら んぞがうち
ぬりたるかたどう フヤうやがかた
かわちよるかたどや ふあーがかた
むるどうよーぬりば ハヤんにがうい
くりふどうちちぐに うむわりてい
ありふどうばばぐ フニすだていらり
わんがよーとしゆみば とうばたちなり
とうばたちなるま ハでいんうぐんしらぬ
むぬぬよーあさまし くとうどうやる
なむあみだぶつは めだはぶとうぎ

しゅんじゅないむとう むとういや
うーやぬ ああとうどうやる
ヘーサヨイ ヨ サイイ
ハーリカヨイ サーサー スリサーサー
南無阿弥陀仏は 弥陀仏
親ぬ御恩や 深きむぬ
父御ぬ御恩や 山高さ
母御ぬ御恩や 海深さ
山ぬ高さや 察知りん
海ぬ深さや 察知りぬ
昼やよ父御ぬ 膝が上
扇ぎぬ風ん あうがさり
涼ぎぬ風にん 涼がさり
夜はよ母御ぬ 懐に
十重ら二十重 衣装が内
濡りたる片身や 親が方
乾ちよる片身や 子が方
全身濡りば 胸が上
くり程父御に 思わりてい
あり程母御に 育てらり
我んがよ一年数みば 二十歳なり
二十歳なるまでいん 御恩知らぬ
物のあさまし 事どやる
南無阿弥陀仏は 弥陀仏
仲順ないや元いや (尊重なる徳目や)
親ぬ後どやる

この「ニンプチャー」(念仏踊り)は、死者をなぐさめるもので、旧盆の中の日の大きな行事であるはずだが、円陣をつくる14人と28人の人たちのみの行事になっている。『波照間島のムシャーマ』によれば、「昔はムシャーマに参加した人々全員で、このニンプチャーに参加して解散するのが掟であったが、しだいにソーリン(精霊祭)ムシャーマの中心となるこのニンプチャーが衰退してきて、今日では村の役人と棒シンカーだけであるようになって」と古老たちは指摘される。その原因は午前中の仮装行列の中庭の演目のテーク、

棒の後に最後の演目として組まれるようになったから部落民はニンブチャーに関心がなくなり、早々と昼食へと帰宅してしまうからだ。故仲本信幸氏は指摘されその改善案を略図で図示され、提起される。」とまとめて、ニンブチャーの歌詞紹介の後に、仲本信幸氏の「精霊祭の慰霊の祭典と念仏舞踊（改革への提言）」として、次の文が紹介されている。

(1)この行事は往時ムシャーマ（盆踊）の始めから挙行された。精霊祭の祭典でこの催しがムシャーマの第一点であるのは祖霊を慰める所謂祖先崇拜の精神（信仰）から象徴されているのである。

(2)それでユーニゲー（豊年）の午前中の行事（仮装行列）が終ると直ちにこの念仏舞踊の祭典に参観者も含めて全員が参加し（15分間）ムシャーマの初興しをして全員解散して帰宅し、仏前に昼食を供え、昼食を済ましてから午後のムシャーマの行事の舞台舞踊、コームツサーと棒踊、太鼓・獅子舞をするのがその趣旨にかなう順序である。しかし棒踊と太鼓を先にして、念仏舞踊を最後にするから念仏を軽んずるようになって参観者は帰宅してしまうので念仏舞踊を先にする必要がある。日程の関係を配慮して行列の直後に参観者も全員で念仏舞踊をやり、続いて棒踊、太鼓をやって午前中の行事を終り、昼食を済まして午後の日程に入るように改革することが精霊祭の中心となる念仏祭典を重視する趣旨にかなうものである。（99ページ）

行列を終えてからの行事の順序は、今のままでも不自然さはないが、仲本氏が強調しているように、「ニンブチャー」の頃になると、村人や見る人がごくわずかになり、「ニンブチャー」に参加する人もほとんどいない。中庭にいるにしても、全員が参加していないようだった。前述したように、二重の円陣の内側に14人、外側に28人がいて、この人たちが小さく口ずさんでいるという状況である。一つの敬虔なる行事としては、さびしさを感じた。やはり仲本氏がいわれるように、村人みんながこの行事に参加すべきであろう。その場に居あわせた者として、この行事は形骸化しているように見えた。行列や棒、太鼓のように、にぎやかさ・はなめかさのない行事であるが、旧盆の中の日の大事な行事であるならば、村人全員と参観者が加わって、もっと厳粛かつ真剣にやるべきであろう。この行事は、波照間島以外ではほとんど見られないし、祖霊や物故者、無縁仏等、島の歴史と文化にかかわり、見つめてきた亡き人の供養は、ムシャーマの大きな行事の一つとして、もっと本格的な行事にしてもらいたい。仲本氏が提言しているように、行列、ニンブチャー、棒、太鼓という午前中の行事が、村人一人一人の行事として自覚され、意識化されることを期待したい。

平成8年8月27日付、波照間公民館が配布した「ムシャーマ行事日程表」を見ると、次の通りである。

午前の部

- 1、司と公民館役員によるムシャーマ行事開始のあいさつ
- 2、行事開始のドラ打ち鳴らし（三ながし）
- 3、ミチサネー（仮装行列）開始……午前9時
行列順……①東組 ②前組 ③西組
ミルク…… 東組………阿利盛八
前組………越地信一
西組………安里 正
- 4、公民館中庭でのポー（棒）、テーク（太鼓）
東組……前組……西組の順
- 5、ニンブチャー（念仏踊り）
各組棒シンカ、各村役員、公民館役員並び一般の皆さん

午後の部………開始1時30分

- 1、舞台で余興（舞踊とコンギ）
①東組 ②前組 ③西組の順 プログラムは別紙 コウムッサー（東組）
- 2、獅子の棒（西組） 獅子舞（三組）
- 3、ミチサネー（帰りの仮装行列）
①東組 ②前組 ③西組の順
- 4、シャースケー（棧敷）でのユニガイ
ミルク節、ヤラヨー節（来賓、公民館役員）

今日では、公民館活動の一環行事として定着した、島の一大行事であることが、この日程で知ることができる。午前午後の演目のわけ方はスムーズであり、見ていてもよかった。最近では、どの地域でもそうだが、祭りや行事への村人、地域住民の参加が弱くなりつつあるように思われる。この波照間島でも、その感があるように言われている。

午後の部は、バンク（仮設舞台）芸能が演じられた。東組の踊りは、次の通りである。

①かぎやで風（大泊敦子、阿利美枝子）、②一番コンギ（狂言）（大泊正一、貝敷祐助、後仲筋清忠、野原仙也、加屋本伸光）③上り口説（大本睦子、野原増子）、④五月雨節（大泊伸枝、後仲筋初枝、新本直子、貝敷実千代）、⑤かりゆし（小山直子、大本エリ子、屋良部ゆき子）、⑥鳩間節（内間美恵子、屋良部美枝）。歌三線（三盛富造、田盛敏一）、笛（小山雅広）、太鼓（大嵩考成）

これらの演目は、毎年少しずつ出入りがあるようだ。『波照間島のムシャーマ』によると、

「仲里節」「前の浜節」「揚古見ぬ浦」「こてい節」があって、八演目になっている。平成8年の際には「かりゆし」「鳩間節」と前の4曲が入れかわっている。定まった演目は「かぎやで風」「一番コンギ」「五月雨節」の3曲である。なお、昭和34年に見学した本田安次氏の『南島探訪記』（昭和37年、明善堂）を見ると、東部落の踊りとして、次の演目が記されている。

かぎやで風（2人）、下り口説（2人）、千鳥節（3人）、むんじゅる（2人）、赤馬節（2人）、仲里節（2人）、長刀（2人）、鳩間節（2人）、谷茶前（2人）、花風、川平節（2人）、松竹梅（3人）。

この頃の踊りからすると、ほとんどが入れかわっているようだ。

前組の番組は、①波照間島節（大泊君子、野原和子、煙草谷佳恵）、②前の浜節（西里恵美、金武百美子）、③鳩間節（西川良枝、稲福千鶴子）、④川平鶴亀節（越地敏子、山田メリ）。歌三線（前野恒子、仲間栄三、親盛啓介）、太鼓（大泊君子）。

ここでも以前の演目と異なり、出入りがある。以前には「かぎやで風節」ではじめられたことが、平成8年には「波照間島節」ではじまっている。「仲里節」も報告書の中には見られるが、平成8年は別の演目がいっている。前述の『南島探訪記』には、前組の演目として次の踊りが記録されている。

御前風（2人）、上り口説、千鳥節、鷺の鳥節（2人）、小浜節（4人）、鼓踊り（4人）、かなよ天川、蝶千鳥、（3人）、かしかき（七尺節）（2人）。

この頃は、独特な演目があり、バンク（仮設舞台）もはなやいでいたようだ。

西組の番組は、①一番コンギ（仲底善副、大仲重一、大嶺光広、登野盛恒、岩崎 順、美里保優）、②波照間口説（崎枝珠美、仲白保美代子）、③鶴亀節（波照間良美、西波照間みどり）、④かたみ節（大嶺真奈美、西白保綾乃、西白保舞子）、⑤湊くり節（波照間いつ子、後富底多枝美）、⑥シヨンカネ小（富底由利子、祖平奈美）、⑦ゆがふ節（保田盛トヨ、西白保いずみ、本田幸子、大嶺末子）。歌三線（西島本米彦、後富底周二、崎枝秀二）、太鼓（大八木秀明）。

この組の番組の出入りも大きい。『波照間島のムシャーマ』で9演目あるが、それと共通するのは「一番コンギ」と「波照間口説」の二番で、他はすべてかわっている。こんなに入れかわっているのは、もう躍ることができなくなったのかと心配する。とくに「玉踊り」は、ひよっとするとご当地のみで見ることのできる独特な演目ではなかったかと思われる。本田安次著『南島探訪記』には「四丁節（玉踊り）」とあり、「二人。打掛、右肌ぬぎ、貫ねた玉を持つ。踊り様色々あり、最後に玉を捨ててそのまま振り向きもせず、歌のうちに入る。美しい踊であった。『貫花』したもの。」と説明している。ついでに西組の演目を記すと、次の通りである。

かぎやで風（少女2人）、上り口説（2人）、んじゅぬき（2人）、歌劇大漁口説（7人）、波照間島節（4人）、鷺の鳥節（2人）、名護の大兼久節（4人）、歌劇波みん節（3人）、浜千鳥（3人）、十番口説（2人）、四丁節（2人）。

これらの演目は、他の組と同様。バラエティに富み、興味深いプログラムであった。なお、本田氏の上演順番は、西組、東組、前組と報告されている。

三組のバンク（仮設舞台）舞踊のしめに躍られるのが、東組の「コームッサー」である。出演は、貝敷祐助、加屋本伸光、勝連松一、野原仙也。音楽は唄が大泊正一、新城清喜、後仲筋清忠。笛が慶田本長幸、新城永佑、内原 勲、小山雅広であった。その後、西組の「獅子の棒」（大嶺高輝、金嶺 至、富底義光、大仲 孝）、獅子舞（3組）が演じられた。

3組のムシャーマ行事が終ると、帰りのミチサネー（道揃い）が、東組、前組、西組の順であり、そのあとに当日の来賓、公民館役員による栈敷（シャースケー）でのユークイ（世乞い）があり、ミルク節とヤラヨー節がうたわれた。午後4時20分頃から退場し、一日の行事は終わった。

東組、前組、西組にそれぞれにミルクが登場し、ミルクのナーリ（実）が共通してあるのは、五穀豊饒を乞い願う村人たちの強い気持が肥大化したもので、他の村落では見られぬ特異な行列といえよう。また、3組ともブーブザー（ミルクの夫といわれている）を入れてあるのも、この島の特徴といえよう。ブーブザーについて、『波照間島のムシャーマ』には、次のように説明されている。

弥勒は女性で、ブーブザーはその夫君だといわれ、弥勒に離縁されてその姿で行列の前後をかけ廻っているといわれるが、ブーブザーは行列の進行の調整役をするものである。

（中略）ブーブザーはミルクより前になってはいけないといわれている。（72ページ）

ミルクを女性で妻、ブーブザーを夫というとならえ方は、後の考え方であろう。ミルクは豊穡をもたらして下さる尊い神としての象徴であろうから、性別はないのが本来の姿であろう。やはりミルクを先頭に、大きな行列を編成するので、ブーブザーの役を設定して、滑稽さを加味させていったのであろう。村落の統率者の役をもっているように思われてならない。ミルクに対比するための一つの演出であろう。

波照間島の芸能は、農耕や漁撈と深くかかわる演目があり、以前にはアユ、ジラバ、ユンタが実に豊富にあり、節歌も数多く伝承されているので、これらが村人のものになるためには、さかんにうたわれ、演じられることをつづけてほしい。島を活性化するには、芸能をはじめとする年中行事のさかんなる実施とアピールが何よりだと考えている。竹富町指定の無形民俗文化財にいち早くなっているのも、その中心母体である芸能保存会が、町教育委員会に働きかけて、発表する機会を、島や石垣島、あるいは沖縄本島でもつことが大切で、それが今後の保存・継承につながるにちがいない。年一回のムシャーマだけでは、

島の人だけのものだという認識もそんなに深まらないように思われる。ぜひたびたび発表する場をつくり、島の出身者も含めて、共有の財産であるようにしてもらいたい。

波照間島の神行事について

～プーリン(豊年祭)を中心に～

仲 底 善 章

1 はじめに

今はサトウキビを中心とする畑作中心の農業の島である波照間島。このような農業の形態は1961年～1963年に架けて中型の製糖工場の立地により続けられた農業形態である。それ以前の波照間島では麦や粟・稲作を中心とする半農半魚の自給自足に近い農業形態であった。山の存在しないこの島において、水の確保は命賭けそのものであった。

かといって頼れる水は地下水のみで、それを農地に引き込むことはほとんど不可能なことである。後はひたすら雨が降ってくれることを祈るのみである。

このようなことで、島の神行事は、アミニゲー(雨ごい)を中心にして行われ、プーリン(豊年祭)をもって終了することになる。

この一連の行事は、島の神司(女性司祭者)たちにとっては大切な儀式であり、そのことは島の役員であるオーシャピトリ(公民館役員)にとっても大切な島(村落)行事である。

本稿では多い神行事の中から、プーリンを中心とした行事の内容を神司(カンツカサ)のパン(神歌)結びつけ、その様子や聞き取ったことを報告します。

2 主な島の神行事について

以下、波照間島における神行事の一覧を先に述べ、その後、テーマについて述べます。

波照間島の神行事(一覧表)

- | | |
|-----------------|------------------|
| 1 シンの入り | 2 シンヌ舟漕ぎ |
| 3 カンヌ ムヌ ソージ | 4 トウシヌ パツメヌ ヌブリ |
| 5 ジュンガツ ミョウクチー | 6 ジュンガツ カンパナ |
| 7 アラタビヌ ツクリニゲー | 8 ジュンガツ シマフサラー |
| 9 アミニゲーヌ アサニゲー | 10 アミネゲーヌ スニゲー |
| 11 ウシヌバンヌ バンユレー | 12 ナータビーヌ ツクリニゲー |
| 13 アミニゲーヌ アサニゲー | 14 アミネゲーヌ スニゲー |
| 15 三日クムリ | 16 ミニン バンユレー |
| 17 プータビヌ ツクリニゲー | 18 トウシヌ ヌブリ |
| 19 カンヌ ムヌソージー | 20 ヌブリ |

- | | |
|--------------|----------------|
| 21 アラブリ | 22 五日クムリ |
| 23 二月ミョウクチエー | 24 2月 カンパナ |
| 25 2月 シマフサラ | 26 2月 トウマニゲー |
| 27 ブサチマチー | 28 アミネゲー アサニゲー |
| 29 トリヌ バンユレー | 30 トピムヌ ニゲー |
| 31 ヌブリ | 32 ナーブリー |
| 33 カナムヌ ソージ | 34 スクマン マッシ |
| 35 7日 クムリ | 36 シピランカン |
| 37 ヌブリ | 38 プリブチ |
| 39 シマフサラ | 40 5月 ミョウクチエー |
| 41 5月 カンパナ | 42 プーリン |
| 43 アサヨイ | 44 アミジュワー |
| 45 ユーニゲー | 46 5月 トマニゲー |

(42) プーリン 庚寅 (かのえ とら) プーリンの3日目の当日

この行事は粟、稲の初穂で神餅を作り、神に豊作を感謝し、1年間の神行事の最後の行事で、島人たちは歌い踊ったりして、島最大の祝日としている。以前、この行事は旧7月15日のムシャーマの行事と併せて行われていたが、旗頭に起因する東西の対立があって、当時の役人により、プーリンに行われていたム棒踊り、太鼓、獅子舞、舞踊などは旧盆にユーニガイ＝世願いとして、ムシャーマの行事として改められ、頭、綱引きは廃止された。

それ以来、この行事は初めの4日間の（1日目のミョウクツエ、2日目のカンパナ、3日目のプーリン、4日目のプーリンヌアサヨイ・スーニゲ）と20日後のアミジュワーの2日間（1日目のアミジュワーと2日目のユーニゲー）として行われてきたが、その後の簡素化で両方の行事を連続6日間で行い、さらには4日間で行う現在の形になった。

第3日目はプーリンの当日である。午前十時頃、司とバナヌファたちがトニムトゥの神前で拝み祝った後、それぞれピィテヌワーへ神様をお迎えに行く。

プウリンのパン＝神歌（大石御嶽）

トウチイ トウチイ
クツンヌ スクルブル イシキン ドンチンヌ アタリオルタラ
スクルユウ ウチクルユウ ウゴンヌ アガリオリチ ブシパカ トウパカ
パカカチ マシイカチ パカクチェーシヨオリ マシイクチェーシヨオリ
イビグサ サチグサ シヨオータラ シル（白）ミジ 雨ミジヤ

五日マリ 10日マリ 夜ヤシネン ピイスヤシネン スイスイニ タボララオリ
 シタニンウラオリ ケーニンウラオリ ムトズサン ニイズサン タボララオリ
 ブウムトゥヌナガガラ ナガムトヌナガガラ モトウヤン サカウヤン
 タボララオリ ウリジン ユガフナリオルタラ イバヤダギ スシキヤダギ
 アラシマタボリ
 イルケシャーヤ パアケシャー フキケシャーン アラシマタボリ
 ノーリユウ メエリユウーヤ 島メン フウヌメン タボララオリ
 トリィウクリン シヨオリ
 カリウクリン シヨオリ ブダシン マダシン タボララオリ
 今日ヌ 神ピイル 上ピイルヌ アタリオルタラ ウバナヌ 神ヨオイ 上ヨオイ
 ウパチヌ ウゴンアゴルタラ ムトヌファ パナヌファー ナリオルソウ 神ヌ所
 ナミナミ オルウヤン カンシケン シヨオリ ウイシケン シヨオリ
 ヤマニンジュー スウニンジュー ナリオルソウ ウシトウ ジュナリオルソ
 カンヌブナ ウイヌブナ オリチ 神ヌコウムチ ウイヌコウムチ 神シナシン
 シヨオリ ウイシナシン シヨオリチ 神ヌコウムチ ウイヌコウムチヤ
 カングシン ウイグシン タチウセ 九合花ヌ 神バナ 上バナ 神ミシャグ
 上ミシャグ 九ナムリヌ 神クパン 上クパン 神コウシ 上コウシ
 九ナムリヌ スネブン 七ナムリヌ スネブン 五ムルヌ スネブン シミジラ
 ウナマシ 1番 2番 3番ヌ カンシナムヌ ウイシナムヌ ニゲーヌウセ
 トリィカワシノウセ コウービヌ 神ヌコウムチ 上ヌコウムチ 神シナシン
 シヨオリチ 神ヨウイ ウイヨオイ ウパチヌ ウゴンアガオラバ イイウゴン
 アギシマタボリ
 トウチイ

線	九ナムリヌクパン	ニゲーウセ	トリカワセのウセ
	九ナムリヌクパン	ニゲーウセ	トリカワセのウセ
香	九ナムリヌクパン	ニゲーウセ	トリカワセのウセ
	ミキ (イチン=2つ)	1番 2番 3番	吸物
三	ミキ (イチン=2つ)	1番 2番 3番	吸物
ハ	ミキ (イチン=2つ)	1番 2番 3番	吸物
コ	九合花米	シイ ミザラ	ウ ナマシイ
ナ	九合花米	シイ ミザラ	ウ ナマシイ
モ	九合花米	シイ ミザラ	ウ ナマシイ

ト	立ちグシン 立ちウセ	五ムルヌ スネブン
	立ちグシン 立ちウセ	七ムルヌ スネブン
	立ちグシン 立ちウセ	九ムルヌ スネブン
九		カンコウシ (15)
十		カンコウシ (15)
九		カンコウシ (15)
ペ		
ア		

ペア（一度で33回と数える）とは両手を地面に着けたり、離したりする祈願の仕方。

富嘉ムラの阿底御嶽のパナヌファたちが、島
のトニム トゥ（宗家）といわれている保田盛
家に集まり、ピナカン（火の神）、ブザスケー
（床の間）の順に祈願をした後、各自は手に神
酒〈ミシ〉の入った大盃を持ち、シヌザラとナ
ガザラの歌を奏でる。



保田盛家での祈願

次に泡盛の入った杯を取り上げて、ニガイヌ
ウタを歌ってトニムトゥ（宗家）での儀式は終
わる。このニガイヌウタは「御前風」と同じ歌を歌う。

保田盛家での儀式を終えると、カンシン（神女司の）一行は2手に分かれ、その一つは
富嘉村のトニムトゥ（宗家）の家2軒（島本家→本比田家）を回り、同じように儀式を行
い、その後、真徳利御嶽へ赴き、神様をお迎えして阿底御嶽へ戻る。もう一方はカンシン
（神女司）は、トニムトゥ（宗家）の保田盛家を出ると直接ミシユクへ赴き、神様をお迎え
して阿底御嶽へ戻る。一方、トニムトゥ（宗家）の保多盛家の主人は、米と粟でおにぎり
を作り、塩と粟もそれぞれひとつまみづづ9個と3個、ピッル（ニンニク）3玉をピリカ
ナパー（クワズイモ）の葉で包み、少々のミシ（神酒）とコー（線香）を持参し、潮が引
けば徒歩で、潮が合わなければ船を浮かべてバシヌミゾリ＝バルシヌフツイ？（西の
海への溝）に行き、祈願する。

その後この場所から網で魚を獲り、プーリンの供え物として捧げる。

ピィテヌワーやミシユクへ神様を迎えにいったパナヌファーたちが阿底御嶽へ戻ると、
その中から選ばれたカンシン（神女司）9名が、クバの扇を片手に持ち、阿底御嶽を出
て、島本家の脇をブニヤマを通り、バスケのケ（井戸）でパンを歌いながら9回まわる。

その後、大石御嶽、大底御嶽を回り、ケーシムリの脇を通り、勝連家と田福家の間を通り、ユネンケー（井戸）を9回まわり、田福本家の前を通り、阿利家を通り新本家の脇を抜けるようにして、新本御嶽に入る。その後、新本御嶽を出て、松本家の脇を通り、美底御嶽に入り、豊年を祝う。各御嶽では阿底御嶽のカンシン（神女司）9名が訪れると各御嶽の司とパナヌファが次のようなあいさつを行って迎える。



大石御嶽での祈願

※ 司とパナヌファのあいさつ（名石村の大石御嶽の場合）

シサレ

クツンヌ スクブル イシキン殿地ヌ アタリオルタラ
 スクルユウ ウチクルユウ ウゴン アガオリチ
 ブシパカ トウパカ パカヌカチ マシイヌカチ
 パカクチェシン シヨオリ マシクチェシン シヨオリ
 イビグサ サチグサ シヨオタラ シタ（下）ニンウラオリ ケーニンウラオリ
 アミガフ ユガフヤ 五日マリ 10日マリ ユルヤシネン ピシュヤシネン
 スイスイニタボララオリ ウリジン ユガフナリ オルタラ ブウムトヌ ナガガラ
 ナガムトヌ ナガガラ イバヤダギ ユシキヤダギ モトウヤン
 サカヤン タボララオリ
 イルウケシャー パアケシャー フキケシヤンタボララ オリド ノーリユウン
 メーリユン タボララオリ フダシン マダシン タボララオリ
 シジヤ スクルユウヤ トリィウクリ カリーウクリン シヨオリ
 今日ヌ 神ピイル 上ピイル 神ヨオイ 上イヨオイ ウバナヌ ウペチヌ
 ウゴンヌ アタリオリド フカヌ モトガラ 九ナヌフナン セヌフナン
 五シヌフナン トリオリ 神タチン、上タチン シヨオリ ブイシ ナイシ
 パナスクバラ ムトゥヌザア ニヌザァ 神シケシン タボリ ウイシケシン
 タボリチ ザア ユラヘンシイ タボリ ピサユラヘン シイタボリチ 神ヨイ
 上ヨオイ ウバナヌ ウゴンヤ イイウゴン アガオリタボラロ
 ナミナミ シサレー

平成9年度は阿底御嶽のパナヌファが4名しかおらず、9・7・5の奇数のカンシン（神女司）が揃わず、御嶽巡りの儀式は行うことが出来なくなった。このようなことは終戦直後にあつて以来、2度目であるとのこと。

美底御嶽でのパン（阿底御嶽のパナヌファーによる）

イリミョウダキ オール ウヤンヤ ウトウヌス ヤリオール
ナリミョウダギニ オール ウヤンヤ バガヌス ヤリオール
クムヤパナ オール ウヤンヤ ミジヌスヌ ヤリオール
ガリヤパナ オール ウヤンヤ アミヌヌス ヤリオール
イエーンズユ ドウ クナッイヌ ススミジ アマミズヌ
ウガンヌ アタリオータラ アラスク グカラ
ハクナヌ クナ ナナヌ クナ イシヌ クナン トリオール
カンドツィマ ウイタツィン ショーリ
イシヤマ ニヤマ ススミジ アミミジ ウガン アガオリ
ムトヌ ザーガ カンシケーシララ タボララオリチー
イー ウゴン アギスマ タボララオリ

カンシンの歌

イリミョウダギ ウトヌス ヨ ナリミョウダギ バガヌス ヨ
クムヤパナ アミヌス ヨ ガリヤパナ ミジヌス ヨ

美底御嶽までの祈願が終わると、クバの葉の扇を上下に動かしながら、下記の場所の親神様に感謝の神歌を捧げ、それぞれの神々を阿底御嶽に招きよせつつ阿底御嶽に戻る。

（図4. P254を参照）

- ① 美底御嶽を後にして「ヤーニレユードウ、ニガヨルヨ アマミジドウ ニガユルヨ」を歌いながカンシンの行列が動き出す。
- ② カンタバラ（ル？）ヤマの南西で「タバル ダン タナアジヌ ウヤダミヨ」と歌う。
- ③ カンタバラメーパナジの場所で、東に向かって「アリピンガシ オール ウヤンスマダミ スーダミ ショール ウヤン アミユ タボラシ、アリピンガシ ヌビギリマ ヨ、スマダミン ショールン ヨ、フンダミヌ タミ ショールン ヨ」を歌う。カンシンはサカンケのため、メーパナジで待つ。ミシクの神女とバスヌスカに向かって「シジルベ ヌ タミン ショールン ヨ、カザルベヌ タミ ショールン ヨ アミユ タボラシ」とあいさつを行う。

これに神女に対して、カンシンの頭が次のように答える。

「イツヤマ ミーヤマ ススミジ アマミジ ウゴン アガオリ、カン シケーシンムトヌザーガ カエリオール、サカンカエヌ サカスケー ター ムチオールグシンヤ カミン ユ スサーレ」

- ④ 南に向かって歩き。ブハッテ（東田）の後方の田に向かって、「ナーマ マス

- タミ ショールン ヨ、ナーマス マス クヤクルン ヨ アミユ タボラレ」
と歌う。
- ⑤ 北の集落内をアラントウ御嶽に向かいつつ「ニヤントウ (ヤーニドウ) ヨ ニガ
ユルン ヨ、シルミジドウ ニガヨルン ヨ、アマミジドウ ニガヨルン ヨ イ
スカマーリ アミユ タボラリー」と歌う。
- ⑥ マスムティ (松本) の南の3角地点で東の高那ザシに向かって「アリピンガシ
ビギリマーヨ、スマダミヌ タミ ショールン アミユ タボラレ」と歌う。
- ⑦ アラントウ御嶽の東の道で御嶽のマソミに向かって「アーラントウヌ ウヤダミ
ヨ一、アミヨ タボラシ」と歌う。
- ⑧ メムゲー (前迎家) の後ろの交差点で東の高那崎に向かって「タカナザス オー
ル ウヤン、スマダミ スーダミ ショール ウヤーン イユーンヌス タカナザ
ス ウヤダミヨ スマダミヌ タミ ショールン ヨ、フンダミヌ タミン ショ
ールン ヨ、アミユ タボラシ」と歌う。
- ⑨ タカタミチ向けて大底御嶽へと進行中、新本御嶽の神女に近づきながら「シシル
ベーヌ タミ ショールン ウヤダミヨ アミユ タボラシ、カザルベーヌ タミ
ショールン ウヤダミヨ アミユ タボラシ」と語りかけながら歌う。
- ⑩ 「オヤケアカハチの生誕地近くの場所で「？」を歌う。
- ⑪ 大底御嶽の手前の道で「クナリユー ドウ ニガヨルンヨ、シルミジン ドウ
ニガヨルンヨ一、アミユ タボラシ」と歌う。
- ⑫ 大底御嶽を見ながら「ナガ ブシクヌ ウヤダミヤヨ アミユ タボラシ」と歌
う。
- ⑬ ケーシムリ御嶽に向かって「マイバルジヌ ウヤダミヨ アミユ タボラレ」と
歌う。
- ⑭ 更に西進し、ペナーバリの方面に向かって「ペナーバリヌ ウヤダミヨ、フン
ダミヌ タミン ショールン ヨ アミユ タボラレ」と歌う。
- ⑮ 一行は2手に分かれる。ケーシムリのカンシンは先周りをして、山田家の東を待
つ。その間、他の一行は「シジルベーヌ タミ ショールン ヨ、カザルベーヌ
タミ ショールン ウヤガミヨ アミヨ タボラレ」と歌いながら進む。
- ⑯ 山田家の前を進み、昔、役人が住んでいたという場所で西に向かって「ミザシュ
ーヌ タミ ショールン、シナバグヌシューヌ タミ ショールン ヨ、アミユ
タボラレ」と歌いながら進む。
- ⑰ メナマ家に向かって「サクアタル タメン ショールン、アミユ タボラレ」と
歌う。

- ⑱ ナータヤマに向かって「ナータヤマヌ ウヤダミヨ、アミユ タボラレ」と歌う。
- ⑲ オーシャーに向かう場所でシムヤーマ（石垣島）に向かって「シム ヤーマーヌ タミ ショールン ウヤガミ ヨ、アミユ タボラレ」を歌う。
- ⑳ 場所でソコアタリに向かって「？」を歌う。
- ㉑ タカタミチィを「タカタミツィ クヤオリヨ ヤーニンユドウ ニガユルン ヨ アミユ タボラレ」と歌いながら進む。
- ㉒ ピサタヌウヤガナシに向かって「ピサタヌ ウヤガナシ アミユ タボラリ」と歌う。
- ㉓ クバスタゲーに近づきながら「クバスタゲーヌ ウヤガナシ アミユ タボラレ」と歌う
- ㉔ ゆっくりと歩き、扇を仰ぎながらマネヤマに向かって「プサタバラ タミ ショールン、マニヤマヌ ウヤガミ ヨ アミユ タボラレ」と歌う。
- ※ マネ(二) ヤマ=イッシ（石野）本家の南にある拝所（石野家は神行事の際には湯茶の接待を行っている）。
- ㉕ 大石御嶽に向って進みながら、ブナバリ方面に向かって「ブナバリヌ ウヤダミヨ、スマダミヌ タミ ショールン、フンダミヌ タミ ショールン、アミユタボラレ」と歌う。
- ㉖ 大石御嶽の神女に語りかけるようにして「シジルベーヌ タミ ショールン ウヤガミヨ、アミヨ タボラレ、カザルベーヌ タミ ショールン ウヤダミヨ アミヨ タボラレ」と歌う。
- ㉗ 大石御嶽のパナスクヌウヤガミ向かって「パナスクヌ ウヤガミヨ アミヨタボラレ」と、南のパナスクマシに向かって「パナスクバル ウヤガミヨ ヨ、アミヨタボラレ」と歌う。
- ㉘ テーレ（波照間家）とパナスクゲーの前を通り抜けながら「パナスクマス タミ ショールン ウヤガミヨ、シリミジ バ ニガヨルン ヨ アミヨ タボラレ」と歌う。
- ㉙ カンチャヤマの前を通り抜けながら「カンチ アザマナグ ウヤダミ ヨ、イスカマーリヌ アミヨ タボラレリ」と歌う。
- ㉚ 富嘉村への分岐点のヤフクマシで「ヤフクマシ クヤ オルンヨ ウヤガミヨ、ヤーニンドウ ニガユルン アミヨ タボラレ」と歌う。
- ㉛ ネーマヌコッチで「ネーマヌ コッチ タミ ショールン ウヤガミヨ、アミヨ タボラレ」を歌う。
- ㉜ サバナコッチに向かって「サバナコッチ クヤウル ウヤダミヨ アミヨ タボ

ラレ」と歌う。

- ③③ ビラツィの坂道の手前で「タカナザスヌ ウヤダミ ヨ、タカナバリ クヤオルン ウヤガミヨ アミユ タボラレ」と歌う
- ③④ 高那バリでは「三步のジャンプ」で飛び越すようにして渡り、一時休憩を取る。
- ③⑤ バシキゲーに近い低地のユナバリドに向かって「ユナバリ トウヌ タメン シヤオリ アミユ タボラレ」と歌う。
- ③⑥ ピタ村の南にある低地のタバリドウに向かって「タバリドウヌ タメン シヤオリ アミユ タボラレ」と歌う。
- ③⑦ タバリドウの東の高くなったスサンコッチに向かって「スサンコッチヌ タメン シヤオリ アミユ タボラレ」と歌う。
- ③⑧ ナイシャ マシに向かって「ナイシャ マシ タメン シヤオリ アミユタボラレ」と歌う。
- ③⑨ フネマスに向かって「フネマシ タメン シヤオリ アミユ タボラレ」と歌う。
- ④① イシュマスに向かって「イシュマス タメン シヤオリ アミユ タボラレ」と歌う。 ※ イシュマス=バシキヌケーの西にあるビラツィ（前加良）家の田
- ④② サクラマスに向かって「サクラマスヌ タメン シヤオリ アミユ タボラレ」と歌う。
- ④③ ブニヤマに向かって「ブニヤマヌ ウヤガミヌ タメン シオリチ アミユ タボラレ」と歌う。
- ④④ ブニヤマで北のフンダマスに向かって「フンダマスヌ タメン シヤオリ アミユ タボラレ」と歌う。その後、南のブニマスに向かって「ブニマスヌ タメンシヤオリ アミユ タボラレ」と歌う。

※ フンダマス=カチガレー（保田盛）家の南にあるブニ（大嶺）本家の田。この田からブニ家はヌブリのケーを作る。

※ ブニマス=カチガレー家の西のブニ家の2番目の田

- ④④ その後、ナンチ（島本）家の脇を通過してフタモリ井戸近くのケーマスで西の空に向かって

「ケーマスヌ ウヤガミヨ アミユ タボラシ、イリミョウダギヌ ウドヌシ
アミユ タボラシ ナリミョウダギ パカヌシ アミユ タボラシ クムヤバナ
アミヌシイ アミユ タボラシ カリヤバナ ミジヌシイ アミユ タボラシ
シマダミン シオリ フンダミン シオリ アミユ タボラシ シーサリバーヌ
タメン シヨオリ カザリバーヌ タメン シヨオリ」

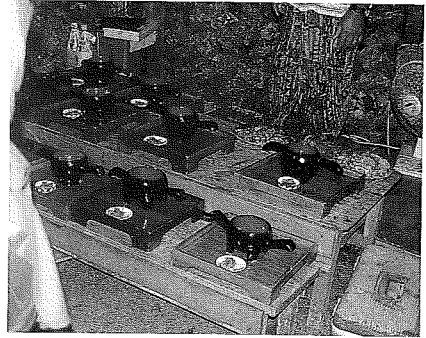
と歌って、出発地である阿底御嶽に戻る。

その間、各御嶽では司とパナヌファーがクバの葉の扇を上下に動かしながらカンシンを迎える。

カンシンは御嶽のマソーミ（イビのある小屋）で祈願をし、それが終わると、シンブリヤ（男のカンシンの接待をする人）2人とカンシンとの掛け合いで、シヌザラ、ナカザラ、ニガイヌウタが歌われる。

プーリンヌシヌザラぬアヨー（大石御嶽の場合）

- 1 キューガペエヌ クガーニペート ニガヨル
（今日の日の 黄金の日を 願う）
- 2 カンクパナ ウイクパナ ニガヨル
（神 米 上御米を 願う）
- 3 ナウリユヌ ミギリユパー タボラリ
（稔る世の 実入る世を 賜り）
- 4 ナウリユヌ ミギリユヌ メボゲニー
（稔る世の 実入る世の お陰で）
- 5 シノザラシユーヌ シイザラ メヨウヤ ウイス
（角皿の ? ? ? 拝す）
- 6 ナガムラシ パタユラシ タボラリ
（中盛らし 端漏らし 賜り）
- 7 ニゲータムチ シジタムチ タボラリ
（願ったように 祈ったように 賜り）
- 8 ウヌニガイヨヌ カフド ニガヨル
（その願い 果報 願う）
- 9 ピヤーシヨー ピヤーシヨー ユウワナウル ユウワナウル



シヌザラの器

↓
神司の言葉

↓
シンブリヤ（男の接待役） マーヌ カァージュ

↓
プウリンヌナカザラぬアヨー

- 1 ニイウスウーヌ ウミシャグヨオー ムトシイーバアドウ ユウフ ナウル
（ 粟の 御神酒 元にしてこそ 世は稔る ）
- 2 エー ナカザラヌ ウミシャグヨー ンチリバアード ユウフ ナウル
（エー 中皿の 御神酒 満たせばこそ 世は稔る ）

- 3 エー ウヤーギーヨウーナオ ピャンガヨウー ナウル
 (エー 富る世こそ 我らが世が 稔る)

カンシンの歌

- 4 エー ナガザーラヌ ウミシャグ ヨーンチリバアード ユウワナウル
 (エー 中皿の 御神酒が 盈ち溢れたら 世は稔る)

- 5 エー ウヤーギーヨウー ナオー ピャンガヨウー ナウル
 (エー 富る世こそ 我らが世が 稔る)

返しの歌 シィシィブラー (接待役)

イラーヨウーオー ウマサー カバサー

(そうだよ おいしく においも)

ミョウヌワイス ファイスーヨンナー

(香しく 頂きますよ)

御前風

キューヌ フクラシャー ナヨン ニジャーナータ テイル

..... 以下省略

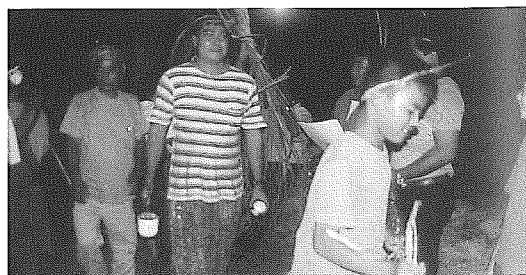
阿底御嶽に戻ると、一行九名のカンシンと司やパナヌファーたちは列座し、祝い稔りの感謝を行う。この時、神踊り(巻踊り)が行われる。この踊りを男性がみることは禁じられている。

一方、先に出たカンシン一行に少し遅れて、ウヤンシンと称する部落会長、総務、幹事などのオーシャピトゥー一行も、カンシンと同じ行程で各御嶽を回る。これらの祈願が一通り終わるころには、すっかり日も暮れ、各御嶽では盛大な巻踊りが行われる。

プリンノ期間中各ムラのトニムトウ(ナイシムラではトーニ=桃盛、イシナー=石中、ブスコイ=西波照間、フスコイ=富底?、イッシ=石野?では)「クパナ」といって今年の豊作の感謝の意を家のピナカン、ブザスケー、トウチイメー(拝所)にマンジュ(長命草、もやし、野ビル、アダンの実等で作った供え物)を九皿、七皿、五皿のセットで供えて行う。



公民館主催の巻き踊り

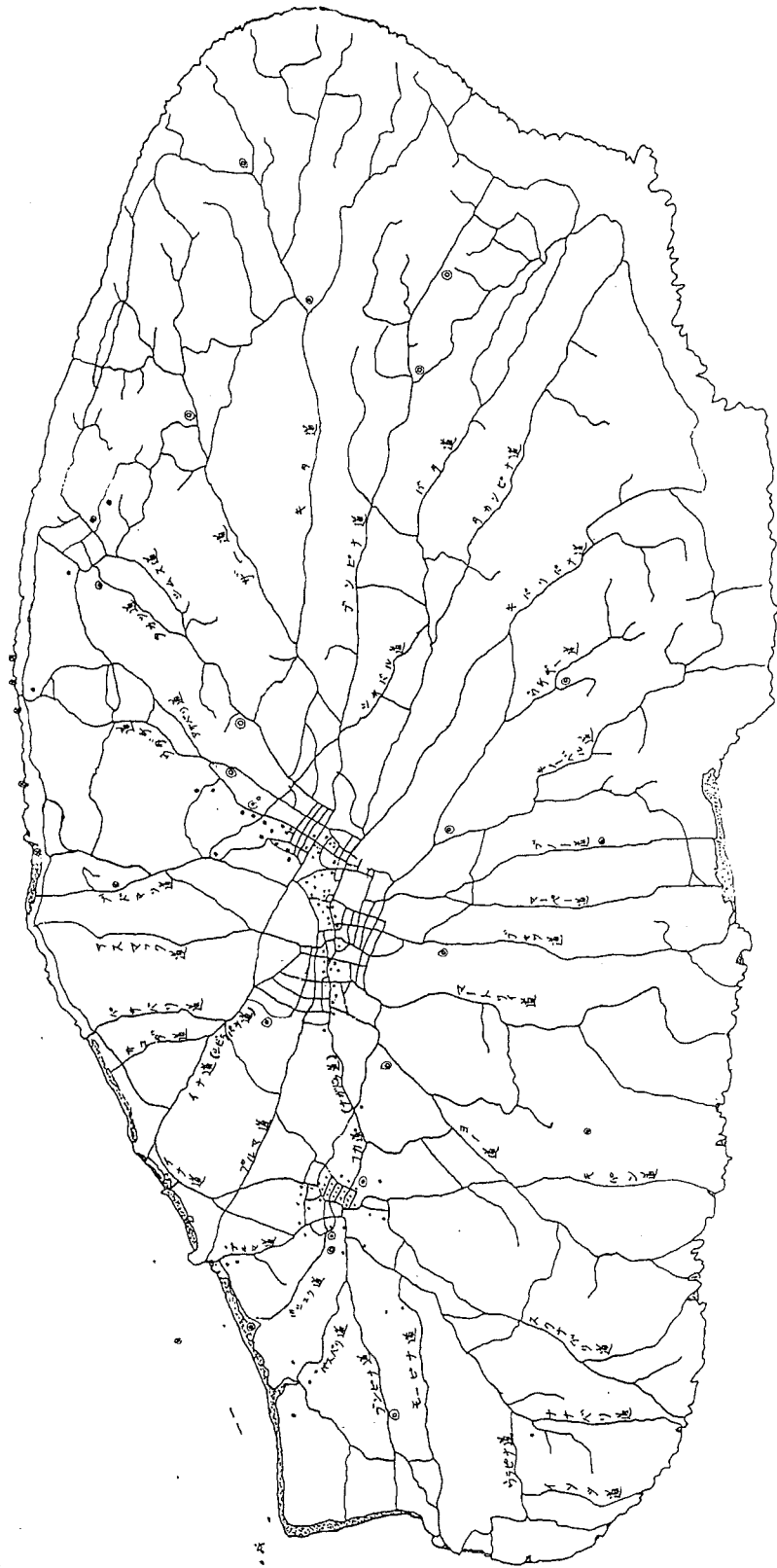


阿底御嶽での巻き踊り

図1 竹富町

波照間島
(井戸・ため池)

神野の
井戸・
民田池
ため池



4

図2 竹富町
波照間島
(併所)

- 七字ノマ
- 三ノマ
- 水ノマ

↑

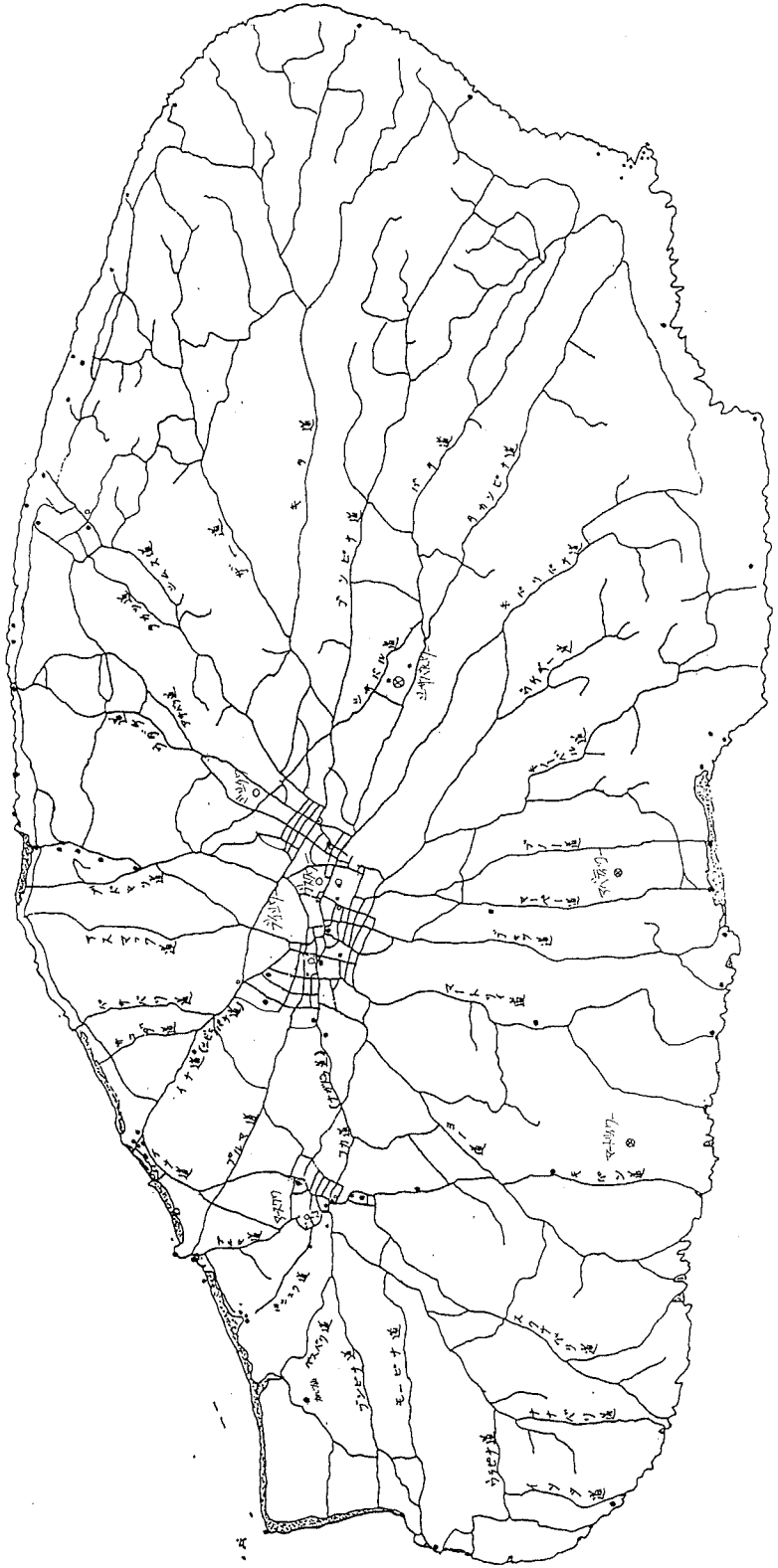
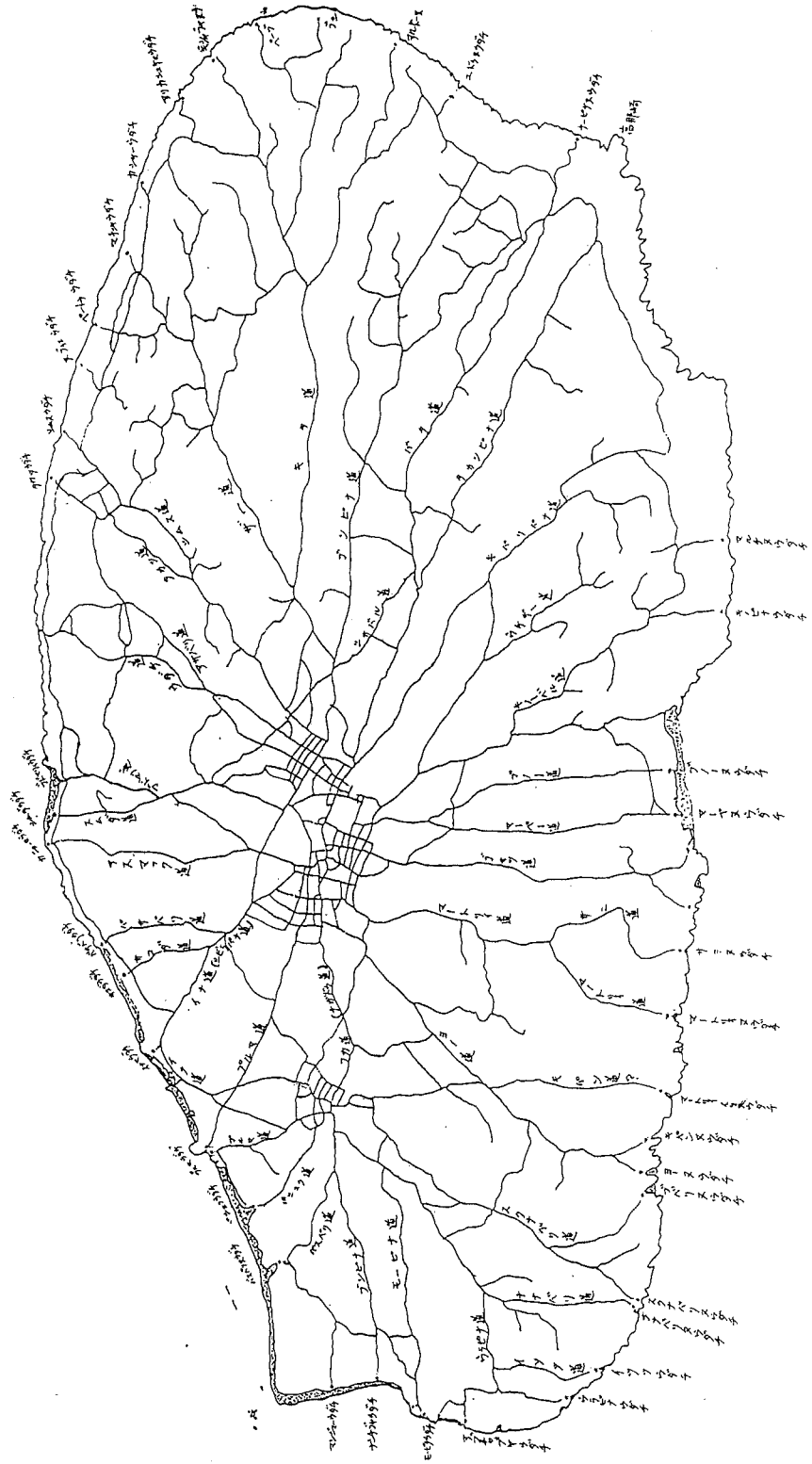


図3 竹富町

波照間島
(道・ウダチ)

4



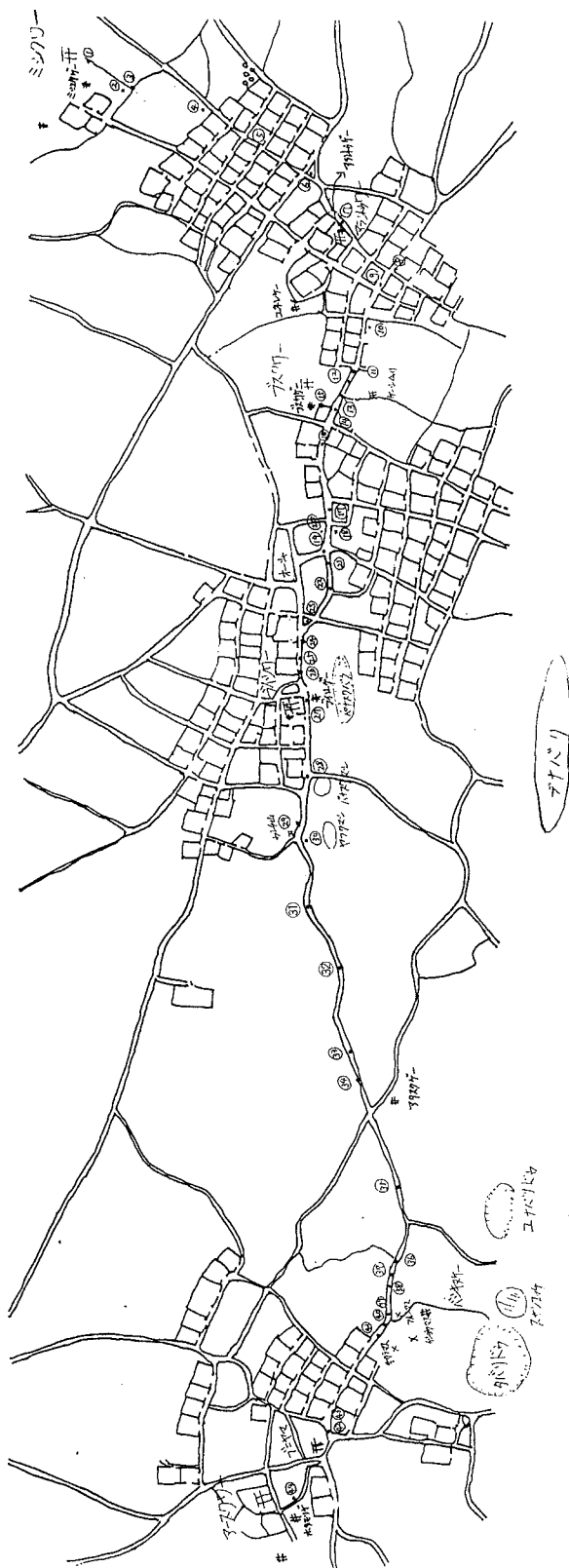


図4 アースクのカンシンの礼拝の場所

資料紹介・波照間の古墓出土の陶磁器

瑞慶山 昇・津波古聰

復帰前年度の1971年、検察庁から陶磁器類が494点ほど当館に移管された。これは復帰前に与那国・波照間等の古墓から盗掘されたものである。(以下、与那国から盗掘された陶磁器類は、与那国の古墓出土、波照間から盗掘された陶磁器類は、波照間の古墓出土と記す) これら陶磁器類は、生産地や製作年代だけみてもかなり範囲が広く、一地域にこのような陶磁器類が集まった事自体おもしろい現象である。そこで今回波照間の総合調査が平成8年度、9年度と実施されたのを機会に波照間の古墓から出土した資料に限定して紹介してみたい。

波照間の古墓は、島の北西に集中して存在し、おおむね北か西方の海に向いている。墓の構造はほぼ同一で、琉球石灰岩や珊瑚を積み上げ、上部に大きなテーブル珊瑚を数枚重ね、蓋としている。古墓の名称には、大きいとか偉大を表す「プウ」、女性を示す「パ」の言葉がつくが、埋葬されている人物は、おおかた男性のようであった⁽⁴⁾。

墓の周辺の石積みの上には、陶磁器の破片などが点在しており、墓荒らしの痕跡を示すものという。破片は、渡名喜瓶、香炉、碗などがあり、なかには当地で製作されたと見られる粗卒な陶器もあった。この陶器は波照間で戦前操業されていた瓦と一緒に製作されたものと思われる。また、骨壺に用いられたパナリ焼壺の破片が、かなり多く確認された。

この波照間の古墓出土の陶磁器類は、文末に一覧としてすべて掲載し、形態の種類別に分け、製作地と製作年代はおおざっぱではあるが、分けしてみた。なお、与那国の古墓出土の陶磁器類のうち、灰釉碗に限っては、池田栄史・津波古聰「灰釉碗の話」(『沖縄県立博物館紀要』第17号 1991)で、池田氏が紹介しているので、参照していただきたい。

当館に移管された波照間出土の陶磁器類は、総数241点になり、その内訳は表1のとおりである。発見場所の性格から酒器を中心に葬祭に関する陶磁器類が多いのは当然であるが、甕瓶や土鍋なども各1点ずつ含まれている。ちなみに与那国の古墓出土の総点数は253点である。徳利や渡名喜瓶、瓶子など対で用いる酒器がその大半をしめ、小さな油壺がそれに次ぎ多い。

波照間で出土した陶磁器類は、検察庁の記録ではすべて古墓からの出土ということから葬祭、特に副葬品に関係するものといえるであろう。パナリ焼壺は、骨壺として使用され、副葬品には、例えば、油壺(フチュクルビン)と徳利などは、棺及び墓に入れるようで、確かにそのような容器も含まれている。文献などからみると八重山の副葬品は、ハンカチ、

扇子（男）、うちわ（女）、金欄で作った煙草入れがある。また、菓子や煙草、手拭いや各種の種を一つかみと針を5・6本を入れる。波照間での副葬品は、煙草入、お茶、針（10本以上）、草履、下駄、笠があった。その他フチュクルビンも含み、死者が生前愛用したものも入れたようである。これら副葬品は洗骨のさい取り除かれ、使われないように割られたという。当館に収蔵されたものも器のどこかが破損しており、完全なもの少ない。したがって、これら陶磁器は、副葬品と思われる。しかし、墓が特定できないため、すべて副葬品かどうかは不明である。

	品名	波照間	与那国
1	徳利 (うち、古伊万里・12)	60	46
2	油壺(髪油の壺) (うち、古万里・3)	43	54
3	渡名喜瓶	27	14
4	碗	26	46
5	対瓶	21	5
6	瓶子	16	4
7	さかづき	10	34
8	からから	9	2
9	パナリ焼	9	2
10	急須	5	6
11	香炉	3	1
12	油甕	3	0
13	壺	2	6
14	花生け	2	8
15	しびん	1	0
16	土鍋	1	0
17	嘉瓶	1	10
18	皿	1	12
19	あんびん	1	0
20	火取	0	2
21	燈明	0	1
	合計	214	253

さて、241点もの陶磁器を区分けすると種類別では、徳利・渡名喜瓶・対瓶などの徳利型が大半で、ついで髪油を入れる油壺が多い。製作地は、壺屋が主で、伊万里系が数点散見される。また、なかには八重山の陶器らしきものも見受けられ、検討を要する。ちなみに同様に移管された与那国の陶磁器類の油壺を見ると徳利のような形をして

ているものが多く、大半が薩摩焼である。数量的には253点のうち54点になり、一番に多い。

灰釉碗は、素朴な鉄絵を施し、高台部分が無釉にしたものである。与那国の灰釉碗・46点にくらべ26点とすくないが、湧田及び壺屋焼と思われるもの、安南系の灰釉碗が見られる。

以上、波照間の陶磁器の生産地をみると県内及び県外・国外のものがあり、製作年では17世紀ころから近代までに区分けされると推察される。これら陶磁器類が波照間及び与那国に存在したことは、その生産地と絡めてみると直接ではないにせよ、東南アジアと沖縄・日本の流通品が沖縄各地に散らばっている現象が見られる。

移管されたこれら陶磁器類は、波照間のみならず、与那国等も合わせて検討すると葬祭に関する器の流行、沖縄の焼物の多様さに加えて、沖縄が日本と東南アジアの流通経路の要的要素が再認識させられる資料と思われる。

この資料は、十分な現地調査を踏まえたものではなく、資料紹介にとどめたのもそのた

めである。不十分な報告となったが、これら資料が今後の調査研究の一助になれば幸いである。

なお、波照間での瓦製作は、戦前から昭和30年前半までで、その後は次第に姿を消し、現在では窯後さえ残されていない。陶土は、島の黄土を使用し、瓦の他に水瓶、味噌壺、徳利等の雑器を製作していた。これら陶器は、瓦とともに



貝敷の窯にあったセメント敷の土踏み場所に焼成したらしく、釉薬は施していない。瓦は注文によって造り、発注者も窯元と一緒に作業したようである。

瓦窯は、「富底」の窯、「貝敷」（ケーサー）の窯と名称が不明の三ヶ所にあり、操業しなくなった時期もほぼおなじく昭和30年頃という。これら窯跡は、貝敷の窯にあったセメント敷の土踏みの場所がわずか残されている程度で、その姿は、全く見られない。

注 墓にまつわる伝承

1・「アラマリヌパーバカ」

伝承によると昔、島にアパーミ（油の雨）が降り、波照間の住民は男女の兄弟を除き、ほとんど全滅した。二人はミシクー（海岸）の岩影に身をかくし難を逃れた。二人はその後夫婦となり、最初にトカゲを産み、次にミノカサが産まれた。その後海へ行きリーフとリーフの間を飛び超えたとき、カタカシ（魚）を産み落とした。最後に一人の娘を産んだ。それがアラマリヌパーであり、波照間の人達の先祖となった。アラマリとは「新しい」または「最初」という意味で、パーとは女性を示す。

2・「ピタブゥバメー」

ピタブゥバメーは、一夜の恋のためにたった一人で船を漕ぎだし、他の島の女性のもとへかよった。その証拠に波照間にはない色の花を持ち帰ったと言う。墓の周辺には今でもその花が咲くと言う。二つの墓が並んであり、どの墓がピタブゥバメーの墓が確認できなかった。

3・「ヤマダブゥバメー」

ヤマダブゥバメーは、唐旅に船出する前、石に牛をつないで出かけた。長い旅から帰るとその牛はまだ生きていたという。現在、牛を繋いだ石は、港の近くに奉られている。

参考文献：

・池田栄史・津波古聰「灰釉碗の話」

『沖縄県立博物館紀要』第17号沖縄県立博物館 1991年

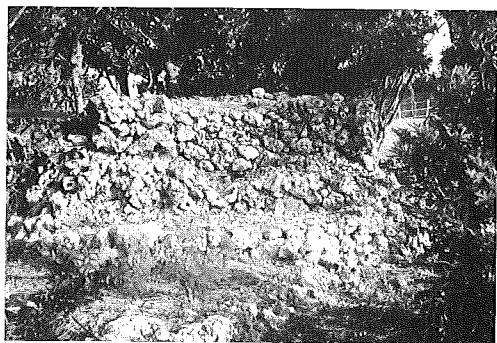
・真栄田義見・三隅治雄・源武雄編『沖縄文化辞典』東京堂出版 5版 1982年

・文化庁文化財保護部『日本民俗資料辞典』第一法規 4版 1970年

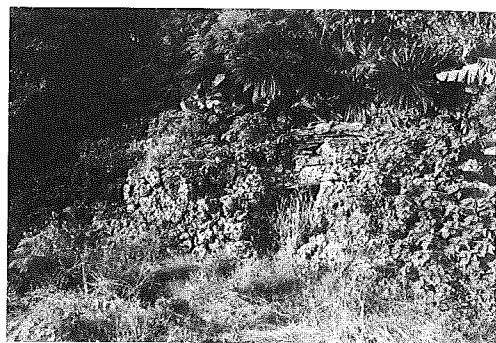
・上江洲均『沖縄の暮らしと民具』慶友社 1983年

・宮城文『八重山生活誌』宮城文 1972年

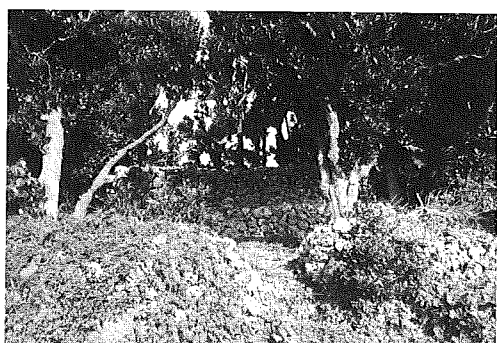
・加屋本正一『波照間島』加屋本正一 1977年



①②ピタプッパメー



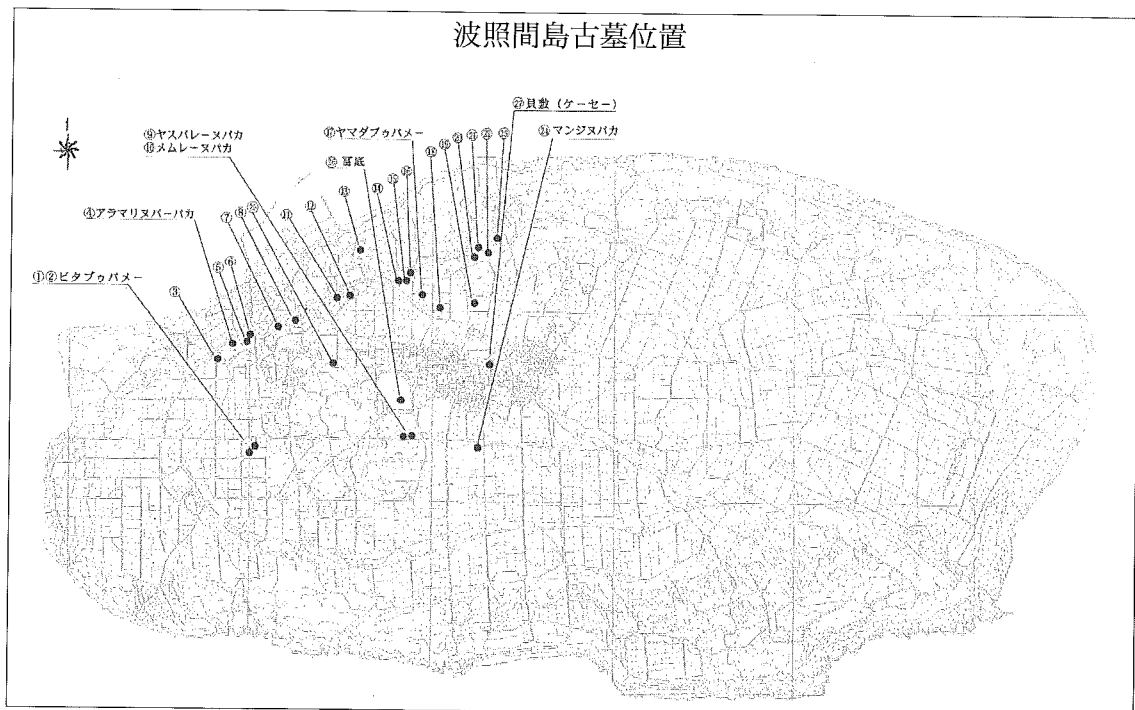
⑨ヤスパレーヌパカ、ないしは
⑩メムレーヌパカ

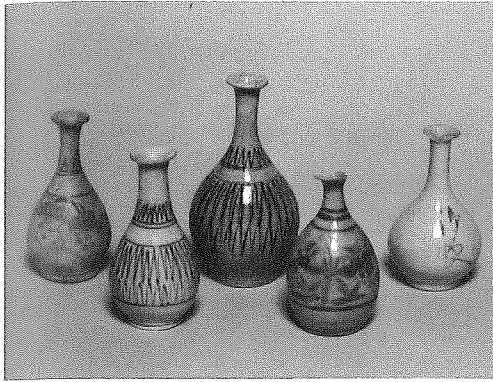


④アラマリヌパーパカ



墓の名前不明





県外産の徳利



灰釉碗—湧田焼か



壺屋焼 徳利



壺屋焼 からから



急須及土瓶—上段左は八重山か—



壺屋焼 瓶子



油壺—上段2口は伊万里系、その他は沖縄産

波照間の古墓出土の陶磁器一覽

No.	名 称	数量	法 量	No.	名 称	数量	法 量
1	飴釉対瓶	1	15.0×2.7	41	古伊万里網目染付徳利	1	17.2×3.4
2	伊万里染付徳利	1	19.3×6.0	42	飴釉流渡名喜瓶	1	14.5×5.2
3	鉄砂釉徳利	1	20.0	43	飴釉徳利	1	18.5×3.3
4	飴釉徳利	1	21.0×3.8	44	無地対瓶	1	14.0×2.3
5	黒釉渡名喜瓶	1	18.0×3.4	45	飴釉流渡名喜瓶	1	14.5×2.9
6	「御神前」銘入白磁徳利	2	13.0×2.0	46	飴釉輪模様対瓶	1	17.3×2.7
7	黒釉流渡名喜瓶	1	11.0×6.2	47	飴釉渡名喜瓶	1	20.0×3.9
8	飴釉流渡名喜瓶	1	15.5×3.2	48	磁器赤絵徳利	1	12.5
9	黒釉流渡名喜瓶	1	13.0×3.3	49	黒釉草葉文渡名喜瓶	1	18.5×3.5
10	赤絵徳利	1	15.0×5.0	50	無地徳利	1	19.4×4.8
11	焼締のこぎり歯底対瓶	1	13.0	51	飴釉渡名喜瓶	1	18.5
12	飴釉流渡名喜瓶	1	14.3×3.2	52	飴釉徳利	1	15.2×3.2
13	飴釉渡名喜瓶	1	12.0×2.7	53	飴釉輪模様対瓶	1	19.7×2.4
14	灰釉徳利	1	21.0×3.1	54	飴釉輪模様対瓶	1	17.0×2.4
15	黒釉徳利	1	15.8	55	飴釉徳利	1	21.0×3.3
16	黒釉耳付花生	1	15.7	56	灰釉瓶子	1	14.5×3.9
17	黒釉瓢形徳利	1	18.7×3.3	57	飴釉徳利	1	17.7×2.8
18	なまこ地飴釉流渡徳利	1	15.0×5.4	58	黒釉徳利	1	20.5×3.7
19	飴釉瓶子	1	17.0×3.8	59	灰釉瓶子	1	18.5×5.2
20	古伊万里網目染付徳利	1	19.0	60	飴釉徳利	1	18.5×2.8
21	コバルト釉輪模様瓶子	1	15.2×4.9	61	染付徳利	1	18.5×3.1
22	コバルト釉輪模様瓶子	2	15.3×2.8	62	赤絵輪模様徳利	1	18.0×1.8
23	緑釉徳利	1	17.0×3.6	63	緑釉徳利	1	15.7×3.3
24	黒釉渡名喜瓶	1	19.0×4.1	64	菊花染付瓶子	1	19.4×5.2
25	飴釉瓢形徳利	1	17.0×3.4	65	飴釉対瓶	1	14.5×2.4
26	緑釉瓢形徳利	1	14.5×2.5	66	黒釉対瓶	1	20.0×2.3
27	ゴス染付徳利	1	18.8×2.5	67	菖蒲文染付徳利	1	21.0×2.3
28	飴釉対瓶	1	16.0×4.4	68	古伊万里網目染付徳利	1	12.5
29	飴釉流対瓶	1	18.0×4.2	69	飴釉徳利	1	19.8×2.8
30	古伊万里網目染付徳利	1	18.5×3.9	70	古伊万里唐草文染付徳利	1	16.8×4.0
31	飴釉瓶子	1	22.5×5.1	71	緑釉徳利	2	15.0×3.3
32	古伊万里唐草染付徳利	1	14.0×3.1	72	黒釉渡名喜瓶	1	18.0×3.5
33	飴釉瓶子	1	20.0×4.8	73	緑釉徳利	1	15.3×3.4
34	無地徳利	1	20.0×2.8	74	飴釉徳利	1	17.0×5.0
35	梅釘彫染付瓶子	1	18.5×5.3	75	飴釉瓶子	1	19.0
36	飴釉飛ばし瓶子	1	17.5×5.3	76	飴釉徳利	1	15.0×3.0
37	無地徳利	1	20.5×3.1	77	菖蒲文染付対瓶	1	20.5×2.4
38	釘彫雲竜文花生	1	32.0×11.5	78	飴釉徳利	1	15.3×3.3
39	菖蒲文染付対瓶	1	21.0×3.2	79	黒釉徳利	1	17.8×3.2
40	飴釉徳利	1	14.2×4.6	80	飴釉流対瓶	1	14.8×2.0

No.	名 称	数量	法 量	No.	名 称	数量	法 量
81	鉛釉釘彫德利	1	19.8×2.5	122	黒釉渡名喜瓶	1	20.3×3.3
82	古伊万里染付德利	1	14.5×4.3	123	鉛釉流飛匏渡名喜瓶	1	14.0
83	無地德利	1	19.3×2.2	124	鉛釉流瓶子	1	20.0×5.3
84	鉛釉輪模様対瓶	1	18.6×2.4	125	鉛釉流瓢形德利	1	18.0
85	無地德利	1	21.0×2.7	126	鉄砂釉渡名喜瓶	1	19.0
86	緑釉飛匏対瓶	1	18.3×2.5	127	鉛釉渡名喜瓶	1	20.0
87	緑釉德利	1	19.0×2.9	128	古伊万里染付德利	1	14.5×4.3
88	焼締德利	1	18.0×3.2	129	鉛釉流渡名喜瓶	1	14.2×2.9
89	黒釉油壺	1	7.0×3.1	130	クワデーサー釉德利	1	15.0×3.6
90	鉛釉油壺	1	6.9×2.9	131	鉛釉流渡名喜瓶	1	14.7×3.6
91	鉛釉油壺	1	11.5×4.9	132	鉄砂釉油壺	1	9.4×4.5
92	鉛釉油壺	1	7.5×3.5	133	古伊万里「御酒入」銘入染付德利	1	13.4×4.3
93	古伊万里草花染付油壺	1	9.7×2.7	134	クワデーサー釉瓢形德利	1	13.5×3.4
94	黒釉油壺	1	8.5×4.7	135	鉛釉流渡名喜瓶	1	14.5×3.1
95	無地油壺	1	5.5×2.2	136	鉛釉輪模様対瓶	1	19.5×2.6
96	鉛釉油壺	1	8.9×4.4	137	鉛釉草葉陰刻文渡名喜瓶	1	16.5
97	鉛釉油壺	1	9.3×4.5	138	なまこ釉に鉛釉流対瓶	1	15.5
98	鉄砂釉油壺	1	12.7×5.3	139	鉛釉流瓶子	1	20.3×4.7
99	古伊万里草花染付油壺	1	11.4	140	無地对瓶	1	17.0×2.8
100	鉛釉流油壺	1	10.0×5.0	141	黒釉渡名喜瓶	1	18.0
101	灰釉油壺	1	8.5×4.4	142	鉛釉三島手渡名喜瓶	1	19.0
102	鉛釉油壺	1	10.4×5.5	143	鉛釉德利	1	17.0×3.4
103	灰釉油壺	1	5.2×1.8	144	古伊万里つる草染付德利	1	24.0×5.5
104	鉄砂釉油壺	1	9.0×5.0	145	黒釉嘉瓶	1	28.8×11.5
105	鉛釉油壺	1	8.5	146	焼締瓢形德利	1	16.0×2.1
106	鉛釉流油壺	1	8.5×4.2	147	鉛釉渡名喜瓶	1	17.0
107	鉛釉油壺	1	6.2×3.6	148	鉄砂釉油壺	1	10.0
108	鉛釉からから	1	10.0×4.1	149	黒釉油壺	1	11.5
109	灰釉からから	1	9.4×3.5	150	鉛釉油壺	1	5.5×3.3
110	鉛・コバルト釉染付からから	1	8.9×4.5	151	鉛釉油壺	1	7.4×3.6
111	染付碗	1	5.8×14.0	152	鉄砂流油壺	1	6.8×3.6
112	染付碗	1	5.3×12.4	153	鉛釉油壺	1	8.2×4.5
113	鶴丸文染付碗	1	5.0×11.7	154	無地油壺	1	6.5×3.4
114	磁器染付碗	1	4.8×11.2	155	鉛釉油壺	1	6.0×3.4
115	古伊万里梅染付碗	1	4.7×11.8	156	灰釉油壺	1	5.0×1.2
116	扇模様染付碗	1	6.5×11.3	157	鉛釉油壺	1	6.4×3.8
117	青磁さかづき	1	2.7×2.8	158	灰釉油壺	1	4.5×1.7
118	焼締さかづき	1	1.5×5.3	159	鉛釉油壺	1	8.8×4.9
119	古伊万里草花文染付德利	1	13.7	160	焼締油壺	1	6.7×4.8
120	鉛釉渡名喜瓶	1	19.5	161	黒釉油壺	1	11.4×5.4
121	鉛釉飛匏德利	1	19.5×3.2	162	鉄砂流油壺	1	14.0×7.1

No.	名 称	数量	法 量	No.	名 称	数量	法 量
163	黒釉流油壺	1	5.8×5.8	204	ばなり焼壺	1	21.5×16.0
164	古伊万里草花染付油壺	1	11.6×3.6	205	ばなり焼鉢	1	11.5×18.5
165	鉛釉油壺	1	13.2×6.6	206	ばなり焼壺	1	15.2×18.6
166	鉛釉流徳利	1	20.4×5.7	207	ばなり焼壺	1	16.8×12.0
167	黒釉油壺	1	5.6×2.1	208	焼締土鍋	1	7.2×14.0
168	黒釉油壺	1	9.7	209	焼締しびん	1	17.0
169	無地油壺	1	8.5	210	焼締香炉	1	6.7
170	なまこ釉からから	1	7.5	211	焼締香炉	1	8.0×10.2
171	鉛釉からから	1	11.5	212	焼締香炉	1	6.2×10.0
172	鉛釉釘彫からから	1	9.5	213	鉄砂釉さかづき	1	2.1×3.8
173	鉄砂釉からから	1	10.2	214	磁器染付さかづき	1	3.3×4.7
174	鉛釉からから	1	10.2	215	磁器染付さかづき	1	2.8×5.4
175	なまこ釉からから	1	7.6×3.1	216	磁器染付さかづき	1	2.6×3.9
176	染付碗	1	5.2×13.0	217	磁器さかづき	1	2.2×4.2
177	灰釉碗	1	6.0×13.0	218	磁器さかづき	1	2.0×4.1
178	灰釉碗	1	5.7×6.0	219	白薩摩さかづき	1	3.1×4.4
179	灰釉碗	1	6.0×13.1	220	磁器染付皿	1	3.2×15.5
180	磁器赤絵碗	1	5.6×13.7	221	無地面取茶碗	1	4.5×8.6
181	磁器コバルト染付碗	1	5.4×11.1	222	黒釉油壺	1	21.0×11.9
182	灰釉碗	1	5.3×14.3	223	灰釉瓶子	1	15.5×5.3
183	灰釉碗	1	5.6×13.4	224	焼締急須	1	13.2×8.9
184	灰釉碗	1	5.3×13.7	225	鉛釉渡名喜瓶	1	18.5×6.6
185	灰釉碗	1	6.3×13.6	226	鉛釉輪模様油壺	1	9.3×4.4
186	灰釉碗	1	6.1×13.2	227	黒釉対瓶	1	15.0
187	灰釉碗	1	6.2×13.5	228	鉄砂釉瓶子	1	15.5
188	磁器染付碗	1	5.6×12.8	229	黒釉対瓶	1	16.0
189	灰釉碗	1	5.2×13.4	230	灰釉対瓶	1	13.0
190	灰釉茶碗	1	5.0×9.4	231	緑釉壺	1	14.5×7.0
191	灰釉碗	1	6.0×13.6	232	焼締壺	1	16.4×10.5
192	磁器染付碗	1	5.8×10.4	233	黒釉油壺	1	18.4×10.7
193	灰釉碗	1	6.0×14.3	234	鉛釉油壺	1	28.0×14.0
194	ばなり焼蓋	1	7.0	235	黒釉あんびん	1	16.0
195	ゴスに鉛釉釘彫急須	1	7.5	236	黒釉流渡名喜瓶	1	15.1×3.2
196	焼締急須	1	8.7	237	黒釉油壺	1	7.0×3.3
197	黒釉急須	1	7.0	238	灰釉碗	1	5.7×14.0
198	焼締急須	1	8.2				
199	磁器ゴスさかづき	1	2.0×4.0				
200	ばなり焼壺	1	24.6×17.0				
201	ばなり焼壺	1	28.0×20.8				
202	ばなり焼壺	1	21.7×16.0				
203	ばなり焼壺	1	23.8×18.5				

凡例

1. 法量は高さ、口径の順である。ただし、測定が不可のものは空白とした。
2. 一覧表は、登録順にした。
3. 名称は登録時のものである。
4. 番号は登録番号ではなく、通し番号である。

昭和初期における波照間島の織物（聞き書き）

與那嶺 一 子

はじめに

波照間島の近年における衣生活や織物の詳細を記載した文献は殆どみられない。八重山の島々の中でも交通事情が悪かった事、また他島と比較して特徴のある織物がみられなかった事がその要因と考えられる。

今回の調査では、戦前から戦後にかけて島にどのような織物あったのか、主に技術面の聞き取りを行った。語り手の方々が、大正6年～15年生と同世代であったので、昭和の戦前期を中心に戦後30年代までの様子を聞き書きという形で報告することにした。

史料にみる波照間の織物

波照間島の染織については、『李朝実録』中の「成宗康靖大王実録」（1477年）（注1）と王府時代の貢布関係史料（注2）が残されている。

「成宗康靖大王実録」には「門伊島（与那国）と同じ」（注1）と述べられ、織物素材としての「苧」、染料としての「青藍」、箴と杼のある機が、波照間島にも存在していた事が推察される。貢布関係史料からは、木綿、芭蕉、藍等の植え付けが政策的に指導奨励され（注3、4）、また貢布が織られるまでの手順やそれに関わる道具、役職等が細かに取り決められていた様子が分かる（注5、6）。また、白上布、中布、下布、紺島上布、赤島上布といった貢布があったことも分かっている（注5）。

しかし、旧慣移行期以後の波照間の織物に関する報告が無いと、両史料が波照間の織物と実際にどう繋がるのか明らかにできない部分がある。しかし、今回の調査で、空白部分を埋めることができた。

波照間島の織物の概要

波照間島では前述の記録から1400年代既に機や苧布が存在した事は知られている。また、『李朝実録』中の「明宗



（写真1） 波照間島の糸芭蕉

実録」(1546年/注7)からも、早い時期に芭蕉布が織られていた事は考察できる。今回の調査で、昭和初期には芭蕉(写真1、注8)、苧麻(写真2、注9)に加えて、絹(写真3)も繊維素材として使われていた様子が分かった。沖縄県では明治30年代から養蚕が奨励され、各市町村への巡回指導が行なわれている。大正期には第一次大戦の影響で価格が暴騰し、県内各地で養蚕業が盛んになる(注10)。その影響が波照間島にも及びそれが戦後も再開し昭和30年代まで続いていた事が聞き取れた。芭蕉はどの家庭でも織られており、普段着として着用されている。その反面、苧麻は芭蕉に比較して糸作りが安易であるにも関わらず織物として使われていない例が見られる。また、貢布関係資料(注5)や明治25年の統計(注11)に掲載されている木綿布に関する事は確認できなかった。

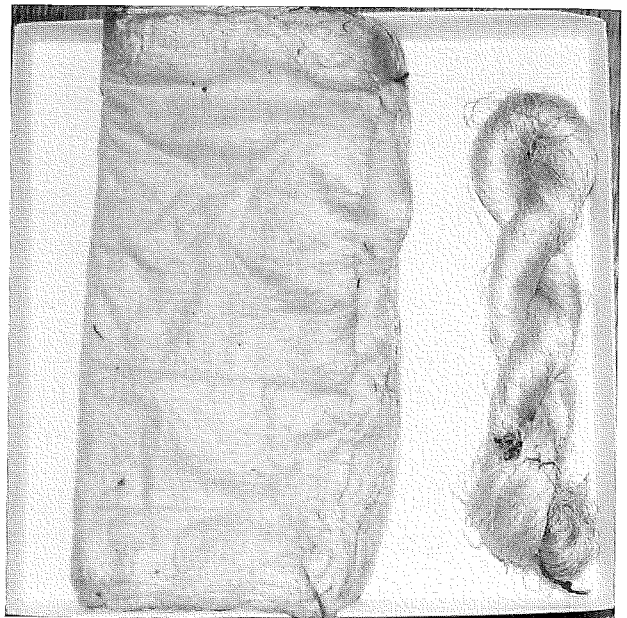
染料には当時みやこ染(注12)の染料が普及していたが、黄色や茶色は島内のフクギ(写真4、注13)やヤエヤマアオキ(注14)等の植物によって染められていた。媒染(注15)として灰汁や田泥が使われていた事や海晒し(注6)についても確認できた。藍は葉の大きな「トウ藍」(注16)と豆科植物による「台湾藍」(注17・写真5)の二種類の存在が確認できた。

織物の模様は縞模様(経縞、緯縞、格子)(写真6)が殆どで、緋を織る経験者は少なく、聞き取り及び実物から緋模様は極めて簡潔なものであったことが分かる(写真7)。

織機については、地機(図1、写真8)から高機(図2)への移行時期がおおよそ大正期と推定される。昭和初期、高齢者(語り手の祖母等)は地機を使用しているが、語り手の



(写真2) 波照間島の苧麻(カラムシ)



(写真3) 昭和初期に繰糸された絹糸と真綿



(写真4) フクギ



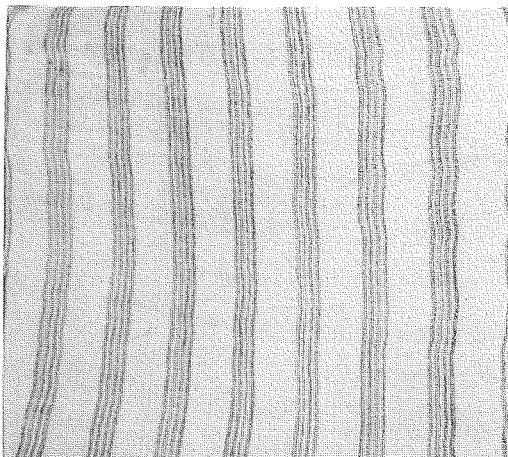
(写真5) 「台湾藍」

母親や本人達の頃から高機が主流となっている。整経に使用される「工」型の道具（注18・図3）について記憶している語り手が二人おり、杵型の整経台（注19・図4）に替わるのも高機移行時期と重なるものと思われる。

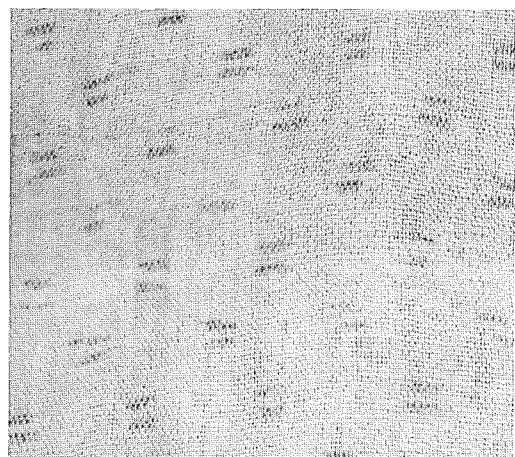
これらの織物に関する道具類は、戦時中の疎開によって、その大半が失われている。また戦後、経済事情が良くなるに連れて衣類が入手し易くなり、手作業による織物従事者が減少し現在に至ったことを書き加えておきたい。

今回の調査で、聞き取り以外に8領の衣装、2点の箆（写真11）、裂3点及び櫛状の資料（注20、写真9）が確認されたが、その詳細報告については別の機会としたい。

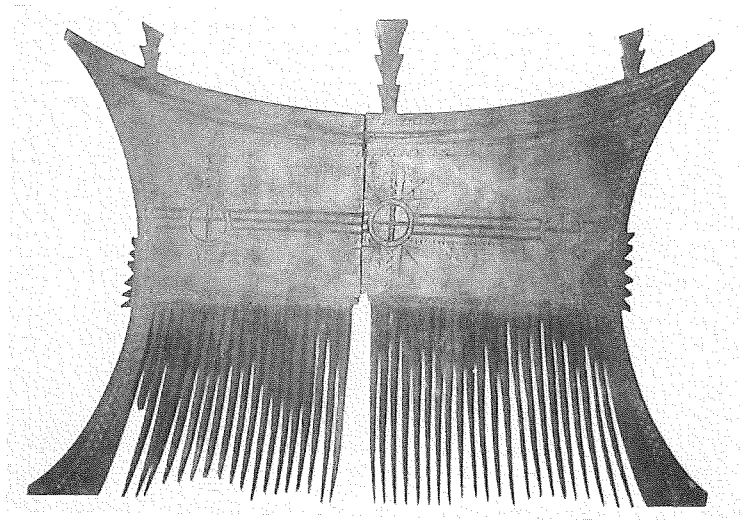
快く調査をお引き受け下さいました波照間島の皆様と、ご教示頂きました新垣幸子氏、柳悦州氏に感謝申し上げます。



(写真6) 縞模様の織物（本比田トヨ氏蔵）



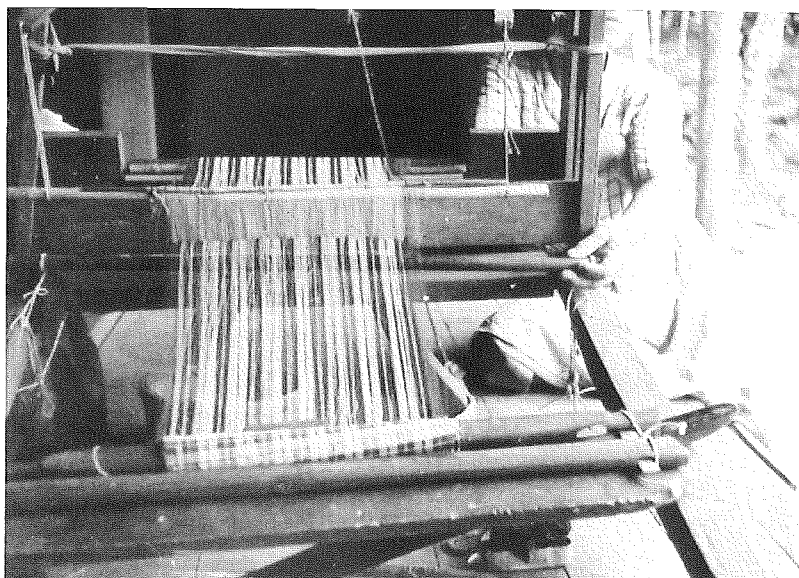
(写真7) 縞模様の着物（石野久子氏蔵）



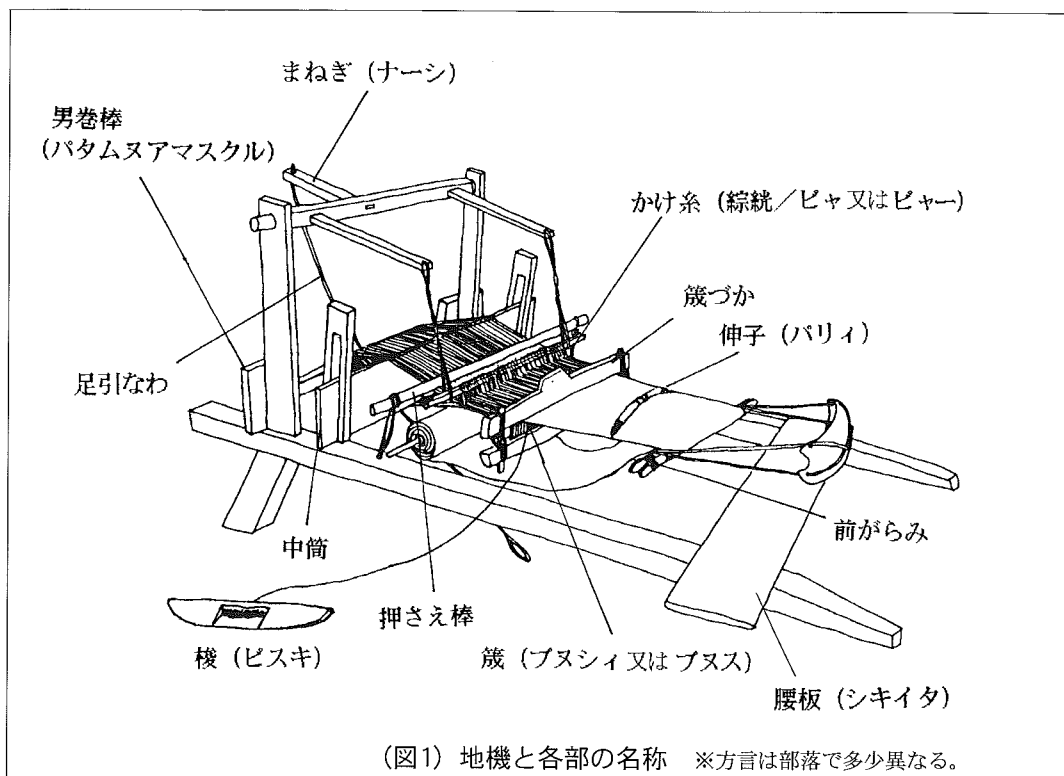
(写真9) 櫛状の資料

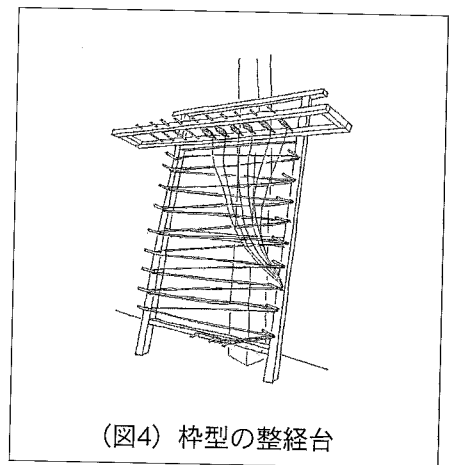
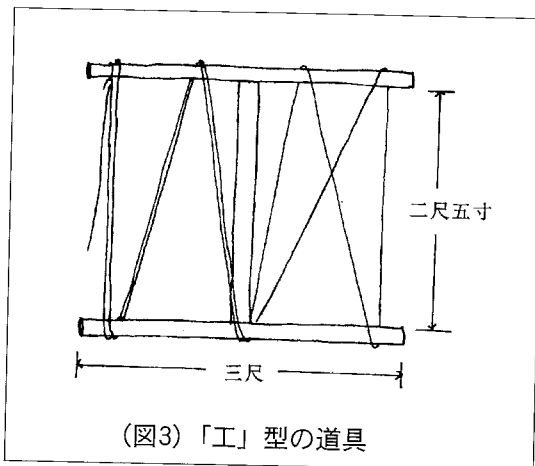
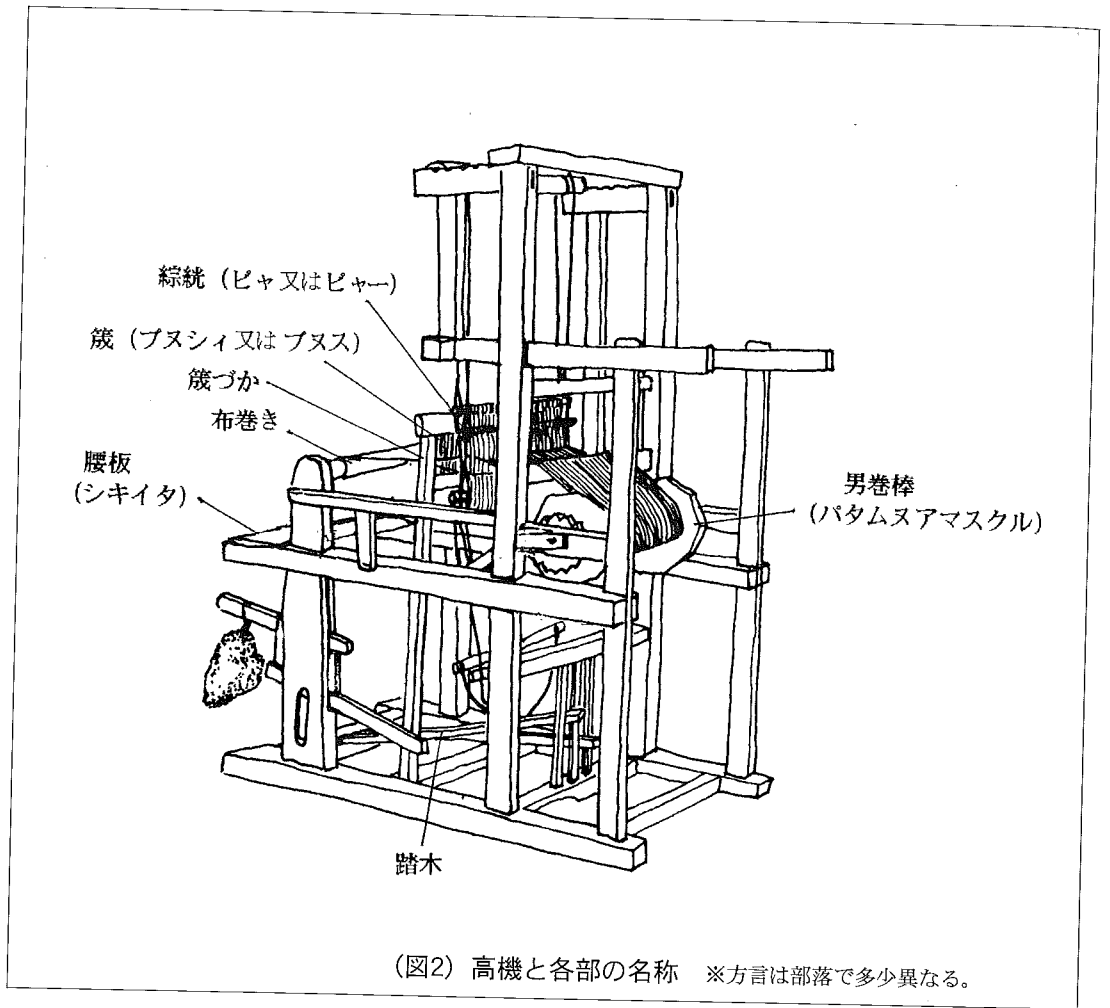
凡例

- 聞き取りは質問形式で行われたが、忠実な逐語的再現は行わず、整序の手続きを加えながら、問わず語りの形に構成した。
- 文体は各々の語り手の口調に合わせた。方言語彙または民俗語彙として扱った言葉には、原則として表音的な仮名標記を施した。
- 語り手の方々の芳名には敬称を省略した。集落名は本人が現在居住している所である。
- 聞き取りは平成9年9月17日・18日に行ったものである。



(写真8) 波照間島の地機 (1960年頃)





聞き書き 1 (本比田トヨ：大正13年生／富嘉部落)

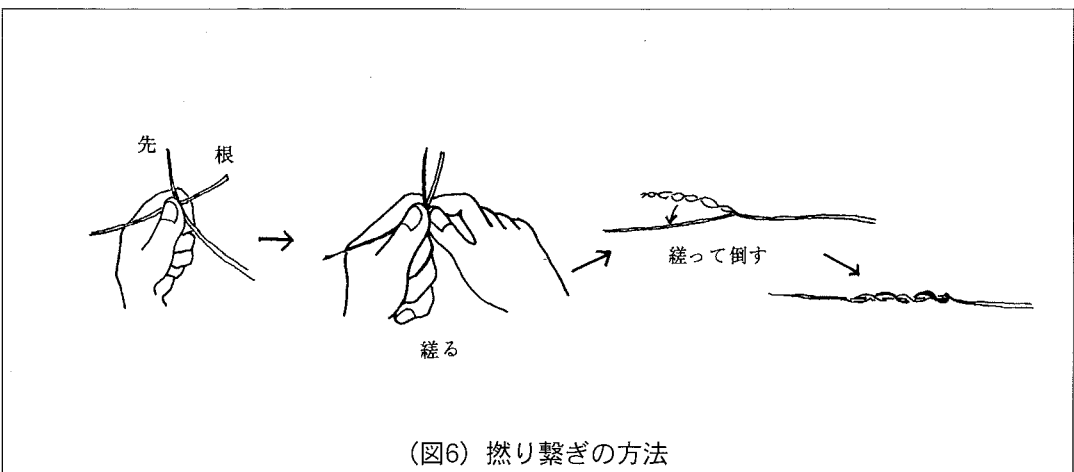
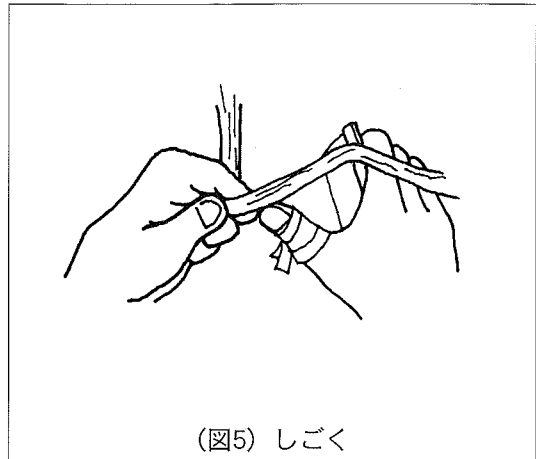
小さい頃は機織はやっていない。機織りを始めたのは、高等科(注20)を卒業した15、16歳頃と思う。本格的には20歳頃から始めた。

戦後も少しは機織りもやったよ。芭蕉も蚕もやったけれど、働かんと食われない時代だから、機織りだけはできないと言ってやめてしまった。

うちの婆さん(実父の母親)が使った地機や道具があったから、それを使った。婆さんは地機で織られていた。いつ頃から高機になったかは分からないが、私は崎枝の婆さんから機織りを習って、最初から高機だった。

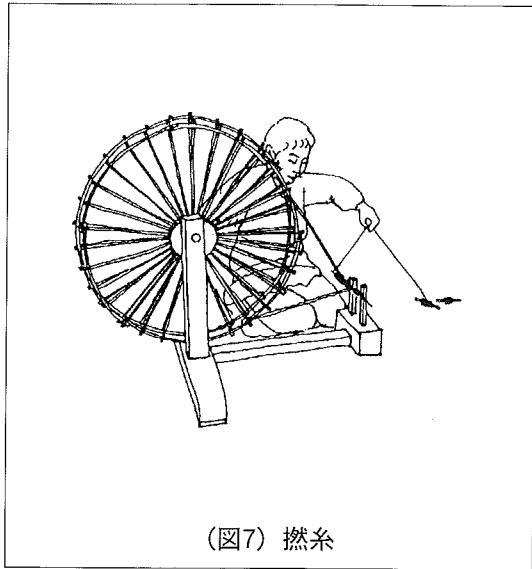
芭蕉は屋敷の中ではなく、畑のあちこちに芭蕉が植えられていた。今は土地改良で無くなっているが、村用地だったか、自然に生えていた。1m50cmぐらいになると刈る。刈り取りは、夏だったと思う。皮を剥いて、束にして、鍋に入れて炊いて、翌朝になると冷えるので、翌日はそれをしごいた(注21、図5)道具は屋久貝と言っていた。昔は芭蕉の外側ははいて捨てた(注7)。真ん中だけを使って着物を織った。

糸なす時は、手が滑るので、灰を少し持って来てからやったよ。ブー(苧麻/注22)をやったみたいに、糸の先と後をねじって繫いだ(図6)。結んだことは無い(注23)。竈の灰もやる時はやったけど唾もやったよ。うちの婆さんは、茶碗に少し水を入



れてそれを使っていた。こんな紡ぎ方は緯糸。絹糸を経糸にした。

糸は竹のカゴグワーに入れた。また、ピラと言う四角い箱(注24)があって、蓋まで閉



(図7) 撚糸

まるようになっていた。これは大工さんに板で作ってもらっていた。うちには昔お婆さんのものがあったので、それを自分は使ったよ。

経糸はモミヤマの先にかけてブンブンと回し(図7、注25)、管に巻きながら蚕のように細長く丸い形をしたフナを作った(図8)。

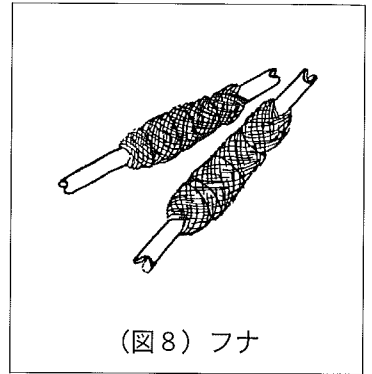
モミヤマは竹で大工さんに作らせた。フナを通すものも、これは枠に穴を開けて、フナを掛けて、10本か9本位の糸をザーラ、ザーラと引っ張る(図4)。道具にはプヌスとピャがあった。ピャは経糸を入れるもの。

プヌスは櫛状になっているもの(図2)。

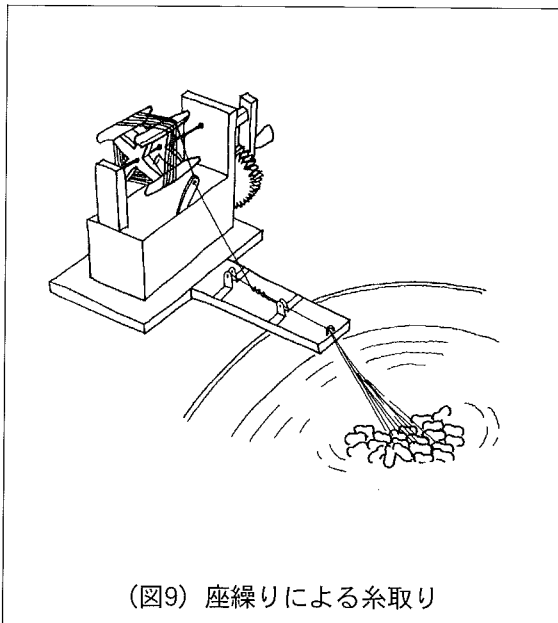
模様は、経模様や緯模様をやったりしたたよ。緋は織りなかつた。経と緯しかできなかつた。

色は、染める物を買ってきてから染めたはず(注12)。昔の人はフクギ(写真4)を使つたつて。

機織りが終わったら、アーフ(灰汁)で洗って干したよ。芭蕉はもうこれが一番であつた。米の砥汁もためて置いてから、これでも洗つたよ。



(図8) フナ



(図9) 座繰りによる糸取り

学校卒業しても、ここでは何もお金なすものも無いでしょう。蚕を養ってから繭ができたならそれを大和(日本本土)に送つたたよ。二子の繭などは自分で糸に使つたりしたよ。繭を鍋で煮たら、糸口が出てきて、それを座繰りで集めて糸にした(図9)。成虫になって飛び出して穴の空いた繭などは、藁でグルグルすると糸口が出てきたよ。二子の繭は、お湯で炊いて真綿にして丹前を作つたよ。

聞き書き 2 (西本テル：大正13年生／富嘉部落)

高等科の頃、ハトマヤーという親戚のおじさんが(東部落)、機織りしていらっしゃったんですよ。うち「機織りたい。」と言ったら、「じゃあんた手伝いに来てくれないか。」と言うことになって習ったんです。学校卒業してもおじさんの手伝いはしていました。でも、この家に嫁いできてから自分で初めて本格的に機織りをやるようになったんです。

子どもは爺ちゃん(舅)にあずけて蚕を養ったね。山の中の桑の葉を採ってきたり、蚕を養わない家の桑(写真10)を相談してもらったりして、蚕を養い、糸を自分でとって機織りました。糸の取り方は、ハトマヤーに蚕の繭を持って行って習いました。

ハトマヤーは蚕の糸取りだけでなく、芭蕉もやっていた。芭蕉はね、一人でやるのがなかなか出来ないからさ、夜はさいて置いて、昼は畑に行かない婆ちゃん達(舅の姉妹)五、六名呼んできて、紡いでもらった。これで、家族の畑に着ける夏物を、自分で縫って着けさせていたんですよ。

芭蕉はあっちこっちにの畑にありました(写真1)。今でも、この村のすぐ前、池の側にたくさんあるでしょう。うちは分家ヤーだから、土地もそう無いし、あれを刈ってきたり、人の家の芭蕉を貰ったりしたよ。

冬夏関係なく芭蕉の糸取るのはいつでもできる。でも、夏というのは、農民は冬忙しいでしょう。だから、夏しかできないわけよ。1m50位になったら刈って、上の皮は二、三枚剥いで、鎌でサーっと一枚づつこんなに裂いて置いた。また(芭蕉の)中の腸は採って捨てた。(裂いたものは)木灰の汁で炊いてよ。木灰はソテツの葉でなければ、どんな木でも燃やして使った。皮がある程度ビリっとしたらね、夜光貝でこんなに摩って、皮剥いだよ(図5)。

(繊維を裂いたら)、糸を紡ぐ時は、根の方は根、先のほうは先、こんなに並べて置いたんですよ。こうすると、夜でもランプの明りで紡がれたんですよ。紡ぐ時は、糸を結ばないで、捻ってやったんです(図6)。プー(苧麻)やるのといっしょです。芭蕉の糸を紡ぐ時には手の先がビリビリするから、灰を付けてやったんです。

あの頃は子ども寝かしてから、夜遅くまで起きて、芭蕉を裂いて置き、雨降りの時など、



(写真10) 桑の木

婆ちゃん達を呼んできて、紡がせたんです。

紡ぐ前に、丸く糸を巻くのはフナとが言って、こんな竹にグルグル8の字にして回しておった(図8)。モミヤマというのもあるしよ。また芭蕉はモミヤマに掛けて回さないと(図7)、(箆や綜統に)糸が通されないさね。織ることもできないし。

糸の染めは、染粉(注12)買ってきて、黒や黄に自分で染めた。芭蕉は黄色くしているので、ほとんど模様は入れないで、夏の上着なんかは、そのまま白生地で着けておったんですよ。

模様は縞、経か格子か緯かといったもので、緋は織らなかった。こっちは人は、あんなの(緋模様)織った人いらっしやったかね。また、それから、手の回らない時には、芭蕉ではできないと、糸を石垣から買ってきね。経糸はそれで、緯は芭蕉でやったりしました。

波照間の年寄は、地機(図1)を使っておったんです。だけど、ハトマヤーのおじさんから高機(図2)を教えてもらったもんだから、うちなんかはもう地機は使わなかった。

機織り機はうちの爺ちゃんが(西本光吉/明治23年生)作ってくれた。竹で作ったモミヤスはとてもきれいだったよ。ピヤー(図2)も自分で作ったよ。ピヤーって糸通すのがあったでしょう。プヌス(図2)の前に二つ上と下になるもの。こっちは人はこれをピヤーと言っていた。プヌスは櫛みたいにして、パタンパタンするもの。これは石垣から買ってきた。緯糸が入っているものはピスキ(図2)。

(整経する時は、手の指の間に糸を挟むけれど)四本でピトゥティーと言っておった。四本の十回でピトゥスマーリ(注26)。そうだったと思うけどね。

プー(苧麻)はやらなかったんです。プーはね、作りもしない。

蚕は買う人が石垣からいらっしやたんじゃないかね。

蚕の糸を取る時は鍋で煮て、糸口が出ると、藁の先または薄の花でもいいし、それをこんなに回してとったんですよ(糸口をすくって取ること)。(その後は)座繰りでずーっと取りました(図9)。それをまたモミヤマに掛けた(撚糸/図7)。糸はパリパリしていて、下げて置いて乾かしたら、一年立とうが、二年立とうがね、粗末にさえしなかったら大丈夫だった。

一年で、一反しか織れなかったよ。自分で紡ぐでしよ。また、もっぱらこれだけだったかね。だけど、あの時は田圃や粟も実際に作っておったもんだからね。

また、やりたくはあるよね。今でもね、うちと協力する人がおれば、やりたいという気持はあるんですよ。

聞き書き 3 (新盛ひさ子：大正14年生／前部落)

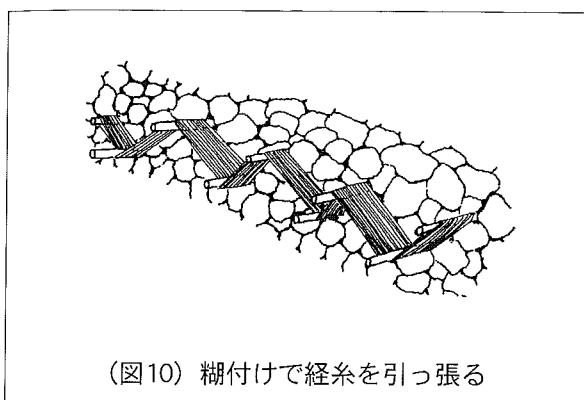
婆ちゃん(山田ヒサ：明治22年生／90歳で亡くなる)が機織りをしていたので、その手伝いをして習った。機織りは疎開する前までやっていた。

ブー(苧麻)は屋敷内には植えられていなかった。別の畑(今の学校の所)にあった。ブーは花が咲かないうちに刈る。そして、貝や庖丁の折れたものとか使って、しごいて皮取ってよ(図5)。(茎の)皮がブーだよ。(茎の)中はほね(空洞)だからよ。剥いでとって、乾かして、きれいに置いてからよ。糸にしたさ。

芭蕉はまたずっとあっちの畑で作った。そこで倒してからまた、きれいに分けて、灰汁で炊いた。引く(しごく)のは、また、庖丁の破れものや貝でもやったよ。芭蕉の糸は、

繋ぎはしなかったよ(注23)。こんなに合わしてからクチュクチュッと捻ったよ(図7)。ブーもあんなにがやったよ。芭蕉を捻る時は、手がスルスルスルするから灰もつけてやったさ。

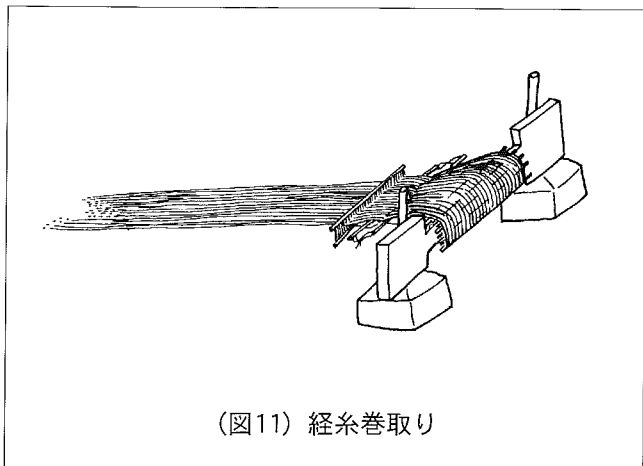
着物の長さよ(整経)。あれも木で作ってから回してやったよ(図3)。道具は誰が作ったか分からない。婆ちゃんの昔からのものがあったかもしれない。



(図10) 糊付けで経糸を引っ張る

(経糸を引っ張るのは) こっちで(石垣で)していた(図10)。また、巻く時は(経糸巻取り)、こんなに長く伸ばして昔の石臼で引っ張ってからは巻き巻き(図11)、山田の婆ちゃんはそうやっていたよ。

蚕飼うのは自分の家で養ったさ。(蚕棚が) いっぱいあってから、寝る所も無かったよ。桑は家で育てたけど、今はもうみな倒したよ。



(図11) 経糸巻取り



(図12) 繭を入れる籠
※聞き取りより作図。

育てた繭は石垣へ送った。傷物と二つ玉は自分達の着物に作った。繭を入れる物は薄を切って編んで作った。(編んだ先を折って、そのまま蓋にする。それにさらに、十字に藁を掛ける／図12)。

聞き書き 4 (新川ハツ子：大正15年生／前部落)

(機織りは)母と一緒にやっており、私は昭和38年頃まで織っていました。婆さんは糸作り等手伝ってくれました。学校におった頃は手伝いもしなかったんですが、この第二次世界大戦が始まって思うように衣類が買えなかったもんですから。戦争中、買物は切符制だったんです。切符も地方は60点で、反物一反買ったら30点ですからね。それに縫い糸もタオルもみな点数に入っていましたので、一反買ったら30点しか残っていません。また、切符持っても買えなかったですよ。それで、その頃から始めたんです。

染めには色々使いました。ハマシタン(注27)ですね。黒みがかったような茶色ですよ。フクギからも。フクギは黄色。もう一つ和名は分かりませんが、ブガキ(注14)と言っています。あれも黄色です。食べられない実がなります。藍も自分達で作っていました。町営住宅の側のうちの畑にありましたが、もう無くなっています。トウエーと言っていましたから、たぶん中国から来たんじゃないかと思います。葉っぱはギンネムみたいな、豆科植物ですね。刈って水に浸けて、腐らせて石灰を少し入れました。カメに入れて作りました(注16、17)。

泥にも染めたんですよ。昔、井戸の側はみな田圃でしたから、そこで、茶色に下染めの後、泥で染めたんです。染めた後は井戸水に晒しました。

(植物が)たくさんあるから染料になります。フクギの色は薄い黄色でしたね。ブガキというのは少し橙が混じったような色になりますね。ここで、お盆にムシャマ(注28)がありますよね。その時のミルクの着る着物は、ブー(苧麻)で、そしてフクギで染めていたんです。今は、みんな買ってきて付けています。ツカサ(注29)の着物も、昔のものはブーでした。

その頃から、みやこ染(注12)がありましたから、それも石垣から買ってきて使っていました。木綿糸も戦前には石垣から買ってきました。シルケット(注30)と言って経糸に使いました。どこで買ったのか分かりません。その頃は一週間に一度か、多くて二度ぐらいしか船が来ないものですから、船員の方に頼んで買ってきてもらうんです。

糸芭蕉は畑がありました。今もあっちこっちに残っていますよ。

ブー(苧麻)も屋敷中でなくて、それも畑の側に植えてありました。ブー(苧麻)は一年に三回から四回は刈ったでしょうね。しごく道具は、貝を使ったり、また金属、鉄(細

長い四角の鉄で長さ15~20センチ位、幅4~5センチ)の道具がありました。庖丁のかけらみたいなものでしたけど。

ブー(苧麻)の糸を取ったものは、木で作った四角い箱(注24)に入れていました。あれはペラと言っていました。籠はクロツグか竹の皮で作った物がありましたが、何と言ったか分かりません。

経糸にする時は、ムミヤマがありますので、それで、やって(ブルブルンと回して撚糸して)から(注25、図7)、緯糸はそのままフナ作って使ったんです。

経糸を整経する場合、以前は、工と言う字みたいな道具に糸を掛けていました(注18、図3)。カシカケの踊りがありますね。その大きい物。これはピスネーと言っていた。戦後には作られてないと思います。

(四角の枠に釘が打たれていたものは)道具は(注19、図4)、後になってからですね。経糸を引っ張る時は、みんな石垣に棒を通して、糊付けした糸をそれに掛けて引っ張っていた(図10)。ここでは麦も作っていたものですから、小麦粉を炊いて、糊を作って、それでやっていたね。

糸巻きも長く引っ張って道端でやりました(図11)。

高機も地機も両方使っていました(図1、図2、写真8)。でも地機は、私達は使わなかったんです。婆さん達だけです。芭蕉を経にする時はそれで織っていました。後からは高機でも織りましたけどね。

模様は縞。緋はあまり作っていませんね。でも、蚕の糸は緋も作りました。母がやっていたので手伝いました。緋は木綿の糸で縛って作りました。緋の模様は「井」と二つ並びの少しづらしたのがありました(注34)。

上納の事については、詳しいことは婆さんから聞いていないんです。上納は緋ではなく、白生地。検査の後、出来が良くなかったら、返されたようですね。

蚕は養蚕組合がありましたから、そこから卵をもらってきて育てていました(注33)。私がずっと小さい頃から蚕を飼っていたんです。悪いもの(二つ繭など)は、手で引いて糸を取りました。

芭蕉は炊いたりたいへんですが、糸にしてからは、ブー(苧麻)より芭蕉の方が織りやすかったですね。芭蕉は糸が長いけれど、ブー(苧麻)はそんなには長くできなかったから。緯糸は、水に浸けて濡らしてから織っていました。それは蚕も同じでした。糸を柔らかくする時は灰汁を入れて煮たりしましたが、仕事着の場合はそのまま織っていたんです。

材料を準備して織るのも大変ですが、それだけじゃないですからね。畑仕事の合間にですから、母と二人で芭蕉もブーもみんな合わせて一年で10反ぐらいがやっとでしたね。

聞き書き5 (仲底 信：昭和6年生／名石部落)

その当時(戦前)の人はみなもう着物が手に入らないから、自分で織っていたね。姑さん(仲底ナエ／88歳)も婆ちゃんも、里の母(波照間ヒヤカ)もね、やっていたと思うけど。蚕もやっていた。芭蕉もね。

蚕は鍋にお湯入れて炊いて、何かでかき混ぜてたくさんの繭から糸をこんなに集めて、座繰りでグルグル回して糸を取って(図9)、切れたら継いで、またやりやりしたね。

以前は地機でなかったかね。自分達が機織りするのが高機であったね。道具は買ってきただのか、こっちの大工さんが作ったのか分からない。

芭蕉は昔から植えた所があったはず。うちの母は、自然に生えた所から斬ってきて、灰汁(灰を水に浸けた上澄みの水)で、炊いたんでないかな。芭蕉を倒したら、外側から剥いで、糸の繊維だけ取ってからね。芭蕉はこんなに丸くしているでしょう。外側は捨てますよね。真ん中の丸いのが出るまで皮を剥いでからね、真ん中のは取って捨ててた(注8)。次は、炊いてから鉄の刀か何かでしごいて(図5)糸にしていたと思うけどよ。

しごいたものを、裂いてから、手でつないでいったさ。後でまたヤーマで撚り掛けてから、小さい竹に丸く巻いたんじゃないかな(図8)。

そして、蚕の糸の時は、何かの木の皮で染めて経縞や緯縞、碁盤を作ったりした。専門でないから緋はやらなかったね。芭蕉はもっぱら無地。そして、爺さんなんか短い紐つけて、畑に着ていらっしやった。芭蕉の時はまた、昔田圃だった所とかに突っ込んで浸けたりもした。お盆のミルク(注28)の着物は、ヤクンカミドゥガマ(注31)が、ハテルマアオキ(注14)の皮を取ってきて、お盆前になったら染めていた。

ブー(苧麻)も作っておった。波照間は昔から、娘が嫁いで行く時に石垣で積まれたこんな小さいブー畑を分けてもたせた。だから、こっちは誰々のブーの畑というのがあっちこっちあったそうだ。

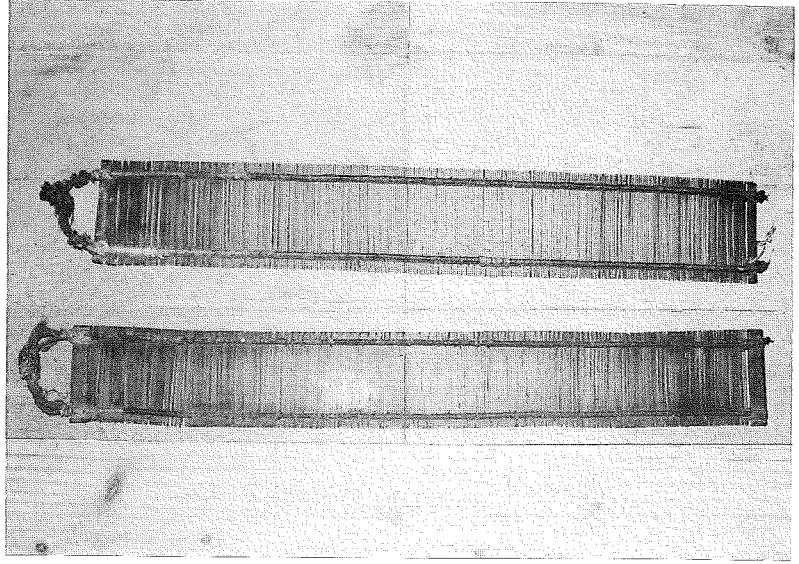
聞き書き6 (前田盛菊江：名石部落)

これは、私が自分で蚕を養って作った真綿です(写真3)。戦後すぐですから、四十年余ります。自分の結婚式の時に布団に使って、それからまた、長男が生まれて、赤ちゃんの布団を作った残りです。機織りの糸は繭から。真綿からは糸にしませんでした。

婆さんは(仲底イツキ／明治23年生)地機(図1)。うちの母はもう高機(図2)でした。婆さんがやってるのを手伝ったりして機織りは覚えました。糸を(綜統や箆から)抜いたり、織ったりして。ブー(苧麻)も、少し婆さんのいたずらして紡いでみたり。

模様は経に入れたり、緯に入れたり。色は西表から染める葉(注12)やフクギの皮とか

で染めました。ミルク
(注28)の着物はブガキ
(ハテルマアオキ)で染め
た。フクギの皮は真黄色。
ブガキは少し赤みがかつ
た黄色。それをまた、泥
に一晚浸けると、少し茶
色っぽくなる。緋は作っ
たかな。婆さんが、蚕の
糸で織った布を内地に送
って紅葉の模様つけても
らったのが一枚ありまし
た(注32)。



(写真11) 箴 (プヌシ)

機の道具は、島の大工さんが作っていました。他はみんな処分したけれど、プヌシ
(箴/写真11)だけ残してあります。曾祖母さんの頃から使っていたのではないかと思うけ
ど、婆さんが使っていたのは覚えています。荒いのと細かいのがあるでしょ。両方とも芭
蕉の着物用です。風呂敷を織るような広幅のものもありました。

仲底イツキの長男の善祥(明治37年生)が養蚕組合作って組合長していた。山田シゲさ
んが事務員をしていた。はっきり覚えていなく、昭和だったと思う。戦争が始まる頃ま
ではやった。石垣の方から卵を送って来て、あれを孵してね。一番座も二番座も柵作り蚕
養っていました。お金にするために上等の繭は集めて石垣に送りました。悪い繭は自分で
糸取って、機織りして。戦後も嫁いしてから昭和33年頃までは蚕養っていました(注33)。

藍も甕に作りました。昔、トウ藍(注16)と言って葉っぱの大きい藍もあったけど、も
うこっちでは見られない。台湾藍(注17)はまだ残っています。台湾藍は花咲かないうち
に、40cmから50cmぐらいになったら葉を刈って藍を作った。甕に葉を入れ、水いっぱい
に浸して、石灰入れて作った。石灰は屋根瓦の漆喰の為に、地元で珊瑚(ウール)を取っ
てきて乾かして焼いて作っていました。

聞き書き7（山田シゲ：大正6年生／前部落）

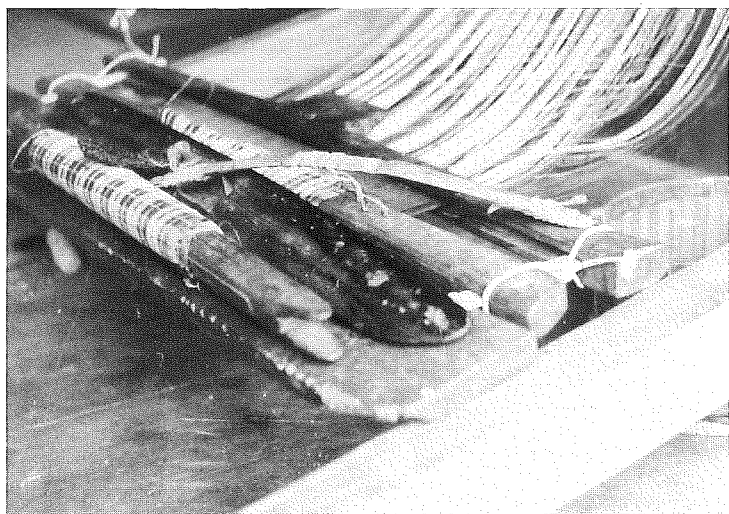
仲底さんが「あなたは事務的にできそうだね。」と言われて、卒業後と思うけれども、頼まれて一週間ぐらいかな、当時の瓦葺きの公民館で養蚕組合の手伝いをしましたが、詳しいことは覚えていませんね（注33）。

その当時は、うちのお姑さん（山田ヒサ／明治22年生）なんかが芭蕉取って紡いで着物にしたりしていました。うちはただ農業に精を出すだけで手伝いもしませんでしたね。

人頭税については、聞いたことはあまりないですね。うちの里のお婆さん（前津ナヒ／慶応3年生か）から、この今の公民館でね、反物とか米とか一所にまとめていたということは少しは聞いた覚えはありますがね。その婆さんは今居られたら150歳位かな。その方も人の話を聞かれたのか、また自分の事だったのか分かりませんが。

藍と言うんですか、糸を染めた話しも聞きました。姑はとても手が器用な人で、自分で染めて、地機で緋の様なものも織っていたんですよ。井の字みたいな模様でした（写真7／注34）。それは、プーと、蚕の糸でしたね。

染めた後、海に行くといったかな（注6）。海水に流してなんとかと話していたと思うけれど、はっきり覚えていません。



（写真12）地機の部分（1960年頃）

(注1) 「李朝実録抄」『日本庶民生活史料集成 第一巻』第一書房より p585

一、麻・木綿無し。亦蚕を養はず。唯々苧を織りて布を為る。作衣は直領の如くして領及び襷積無し。袖は短くして瀾し。染むるに藍青を用いてす。中裙は白布三幅を用ふ。統べて臀に繋ぐ。婦の服も亦同じ。但々内に裳を着して中裙無し。裳も亦青を染む。

～ 中略 ～

一、布を織るに箴・杼を用ふ。模様は我が国と同じ。其の他の機械は同じからず。升数の麤細も亦我国と同じ。

(注2) 「与世山親方八重山島規模帳」(乾隆33年) / 「翁長親方八重山島規模帳」(かん豊7年) / 「翁長親方八重山島諸締帳」(かん豊8年) / 「富川親方八重山島規模帳」(同治13年)『沖縄県史料 前近代6 首里王府仕置2』1989年2月

「富川親方八重山島御用布座公事帳」 / 「富川親方八重山島諸村公事帳」『沖縄県史料 前近代7 首里王府仕置3』1990年

(注3) 「与世山親方八重山島規模帳」(乾隆33年)『沖縄県史料 前近代6 首里王府仕置2』1989年2月 より

芭蕉植付様之事

(注4) 「富川親方八重山島農務帳」(同治13年)『沖縄県史料 前近代6 首里王府仕置2』1989年2月より

農事手入之事 / 藍仕立ならび製法之事 / 芭蕉植付様之事

(注5) 富川親方八重山島御用布座公事帳『沖縄県史料 前近代7 首里王府仕置3』1990年2月より

一諸事勤之事 / 一諸道具之事 / 一御用布取納之事 / 一御用布調方之事 / 一諸御用布櫃入ならび布丸之事 / 一御用布立長定之事 / 一御用布疋反長幅定之事 / 一毎年御用定之事 / 一御用布取納尺之事 / 一諸帳出日限之事 / 一勤星取立様之事 / 一定納布ならび御用布名定之事 / 一御用布貫ふとき目ならび長定之事

(注6) 「富川親方諸村公事帳」より

一藍遣人之儀御用布かせ貫取調部染調方相働候也 / 一布晒人之儀御用布織取次第干晒方相働候也 ～略～ 一藍遣式人正女 / 一布晒式人正女 / 右竹富島新城小浜波照間四ヶ村壱村付

(注7) 「李朝実録抄」『日本庶民生活史料集成 第一巻』第一書房より p594

草有りて芭蕉の如し。大なる者は棟柱の如く。之を刈りて外皮を去り、肉皮を取りて三等の布を為る。皮の内外を以てして布の妍細異なる。其の最内の者は極めて細潤を為し色潔にして雪の如く、妍密無比なり。女服の良き者は、此を以て最

と為すと云う。

- (注8) イトバシヨウ (*Musa Lukinensis* Makino) の事
(注9) 苧麻 (ちよま)。和名カラムシ。学名*Boehmeria nivea* Gaundich, f. *viridula* Hatusima。方言ではブー (八重山地方)、ウーと呼ぶ。
(注10) 「沖縄之蚕業」『沖縄之農業』沖縄県 昭和7年 より P665~P667
(注11) 「沖縄縣八重山嶋統計一覽略」より (明治25年/沖縄県立博物館蔵)

戸数	人口	田	畑	藍	苧布	木綿布	芭蕉布
126	665	596,222歩	2,974,001歩	4,529斤	137反	249反	383反

- (注12) 硫化染料か。薬局で販売され、昭和50年代初めまでよく利用されていた。
(注13) おとぎりそう科の常緑小高木。和名フクギ。学名*Garcinia subelliptica* Merr。防潮、防風、防火林として、また建築材としても使われる (『沖縄植物野外活用図鑑』新星図書出版 昭和54年)。黄色の染料が得られる。
(注14) ヤエヤマアオキはあかね科の植物。学名は*Morinda citrifolia* L。樹皮から赤色、根から黄色の染料が得られる (『沖縄植物野外活用図鑑』新星図書出版 昭和54年参照)。聞き取りではハテルマアオキと呼ばれていた。
(注15) 媒染剤とは繊維への染料の染着を媒介する薬剤のこと。木灰はそのアルカリ性分が田泥は鉄分が媒染剤としての役目を果たす。
(注16) トウ藍 (エー) は琉球藍のこと。爵牀科の多年生草本で、中国原産。琉球列島からインドシナ半島に分布。学名は*Strobilanthes flaccidifolius*, (Nees.)。 (『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社 1983年 参照)
(注17) 台湾藍はタイワンコマツナギやナンバンコマツナギなどの植物から採れる藍のこと。インドアイの名で知られる。
(注18) 経糸を整えるための道具。縦二尺五寸、横三尺。方言ではカシギー (宮古)、ピナシ (竹富島) と呼ばれ、沖縄全域で見られる。同型の道具は台湾のパイワン族でも見られる (田中『沖縄織物の研究』紫紅社 昭和51年 P154~P155)。ラオスでは紐を作る道具として使われる (柳悦州氏談)。宮古島では昭和50年代頃まで使用されている。
(注19) 明治末期に本土より移入された経糸を整える道具で綜台 (ヘダイ) と呼ばれるもの。現在も日本全国各地で見られる (田中『沖縄織物の研究』紫紅社 昭和51年 P155)。足の付ついた台形式のものと、枠のみで壁に立て掛ける形式のものがある (柳悦州氏より)。八重山地方では立て掛け形式のものが使われ「カシカキヤマ」と呼ばれている

(宮城文『八重山生活誌』P61、62)。

- (注20) 櫛状の資料について、1893年来沖した笹森儀助が『南島探検』(1894年)で、与那国島において同形の資料を確認している。それについて田中俊雄が「箴の遺物ではないか」と見解を述べている。ただし、田中は実物を確認していない。(『沖縄織物の研究』紫紅社 昭和51年 P142)。
- (注21) 沖縄で、学制(1872年)に定められた初等教育が出発したのは1880年。この制度は、1886年の「小学校令」により尋常小学校(4年、義務制)と高等小学校(4年)に改称。1941年には国民学校となる。(小学校『沖縄大百科事典』p411より)
- (注22) 喜如嘉の芭蕉布でいう所の「苧引き」の作業のこと。(『芭蕉布と平良敏子』沖縄県立博物館 1993年 P20)
- (注23) 沖縄本島では芭蕉の糸を機結びで繋いでゆく。(『芭蕉布と平良敏子』沖縄県立博物館 1993年 P21)
- (注24) 紡いだ糸を入れる容器には竹や藁草を編んだ籠と板作りの箱状の物が見られる。籠は地域によってウーバーラー(首里等)、ウンゾーキ(大宜味)、ウーマグ(国頭)、ミーディル(池間島)、ウンゼ(沖之永良部島)等の呼び名がある(沖縄県立博物館 民俗展示室より)。箱状の物は、蓋付きの丸形(久米島)と方形(八重山)が見られ小物を入れる引出し付きの箱は、スクイと呼ばれる。波照間では木箱は「キーペラ」、籠は、「ガイジペーラ」と呼ばれる。(上江洲均『沖縄の民具』慶友社 昭和48年)
- (注25) 撚糸はJIS紡績用語によると「一本または二本以上の糸にヨリをかける操作で、ヨリ糸ともいう」
- (注26) 糸1本は「ヒトスジ」。その四本を「ヒトティー」と言う。その10回「チュティー」の40本で、「一ユミ」となる(八重山)。人間の片手の指に挟める4本がその基本単位となったと考察されている(田中俊雄・玲子『沖縄織物の研究』紫紅社 昭和51年 P142)。波照間島ではピトゥティー(4本)、ピトゥスマーリ(40本)と言う。
- (注27) みそはぎ科のミズガンピのこと。学名*Pemphis acidula* J.R. & G Forst. ハマシタンは方言名。
- (注28) ムシャマは旧盆7月14日に行なわれる波照間島最大の祭り。島全体が東、前、西の三つの組に分かれ多彩な民俗芸能がくり広げられる。朝、夕にミルク(弥勒)を先頭にした道行列が行なわれる。
- (注29) ツカサは宮古、八重山地方における神女の一般的呼称。沖縄本島のノロにあたる。
- (注30) シルケット加工とは苛性ソーダ濃厚液の化学的処理により、綿繊維に絹艶を与える加工のこと。JIS繊維用語「セルロース繊維製品をカセイソーダの濃溶液で

処理し光沢などを与える加工」

(注31) ヤクンドウカミドゥガマとは、ムシャマの祭りの際の役割分担のことで、ミルクの衣装を整える人のこと。ミルクの衣装は前部落ではフクギで染められ、名石部落ではブガキ（ヤエヤマアオキ）で染められている。

(注32) 「織った絹布は、各家でも染色したが、殆んど京都から来島する行商人に頼み京染めにした」（『沖縄民俗 第10号』（竹富島／座間味島／喜屋武部落）琉球大学民俗研究クラブ 1965年』P37）

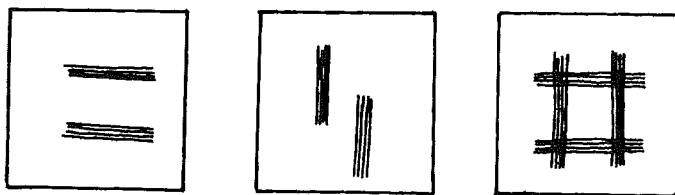
「友禅に染めて美しい柄の帯地、着物地となし」（宮城文『八重山生活誌』昭和47年 P90）

(注33) 八重山における養蚕は、1815年、粟国島から石垣善全によって蚕種と養蚕法が伝えられたことが初見と言われているが、それはうまく浸透せず自然消滅している。その後明治27年、八重山島役所時代の勸業主任中島兼次郎が郷里の鹿児島から蚕種を取りよせ養蚕を指導したのが八重山養蚕業再興となる。大正14年頃から昭和5年頃にかけて全盛時代を迎える。昭和6、7年頃、繭値の下落を契機に、郡農会を発足させ、製糸会社瑞泉社に加入し普通蚕に原蚕飼育を始めたり、繭乾燥場が設置するなどの動きがある（宮城文『八重山生活誌』昭和47年 P90）。

竹富島においては、明治34年、鹿児島より中座政太郎（竹富島巡查）が蚕種を持って渡来したのが、養蚕の始めとなる。繭のまま御倉蚕糸工場へ販売されている。（『沖縄民俗 第10号』（竹富島／座間味島／喜屋武部落）琉球大学民俗研究クラブ 1965年』P37）

波照間島で養蚕組合ができたのは、昭和12年以後のこと。仲底善祥氏（昭和12年、初代波照間郵便局長）が組合長をつとめる。（新川ハツ子氏より）

(注34) 1690（康熙29）年の参遺状に「御用布之内 上布 下布迄崩かうし色々かすり之数六ヶ敷・・・」（『石垣市史叢書8』p18参照）とあり、沖縄での文献上における具体的な緋模様についての初見となる。宮城文は『八重山生活誌』で「ジュウムンジ（+）、キタ（□）、ターフ（田）、タティンガシリ（| |）等が最初に織られた緋だと述べている。



(図13) 緋の模様

波照間島関連主要文献目録

※配列は著者別の五十音順

著書名	書名(論文名)	収録雑誌・書名	発行所	発行年
アウエハント・コ ルネリウス	波照間島における神観念と世界観の 一考察	沖縄文化の古層を 考える		1986
アウエハント・コ ルネリウス	波照間島社会宗教的構造をめぐって	人文学報 No.62		1987
アウエハント・コ ルネリウス	兄弟姉妹 (bigiri-bunari) の関係 について-波照間島の場合-	沖縄文化の源流を 考える-復帰10周 年記念行事沖縄研 究国際シンポジウ ム報告書-		1983
C. OUWEHA- ND (アウエハン ト・コルネリウス)	HATERUMA -socio-religious aspects of a South-Ryukyuan is- land culture		E.J.Bill, Leiden, The Netherla- nds	1985
アウエハント・コ ルネリウス	波照間島の雨乞い儀礼	アジア研究 No.26		1972
アウエハント・コ ルネリウス	波照間島の神行事について	沖縄文化論叢 No.3		1972
アウエハント・コ ルネリウス	波照間島の神歌	アジア民族学研究		1976
東田 盛善	沖縄県波照間島の地下水の水質	工業用水 No.418	日本工業用水協会	1993
朝日文化センター	海のシルクロード石垣島・西表島・ 与那国島・波照間島・宮古島を訪ねて-		朝日文化センター	1980
安里 長祐	「夜雨(ユルアミ)節」考	八重山毎日 12.3	八重山毎日新聞社	1995
安次富 郁哉	離島受療行動パターン-波照間島・ 西表島	沖縄公衆衛生誌		1980
安仁屋 政昭	〈書評〉沖縄戦争マラリア事件(毎 日新聞特別報道部取材班)	沖縄タイムスタ刊 7.19	沖縄タイムス社	1994
安仁屋政昭/堂前 亮平	波照間島・石垣島・西表島の共同店 と村落構造	地域研究シリーズ No.3		1982
新川 明	波照間島	新南島風土記	大和書房	1978
阿利直治/中鉢良 護	「波照間文化協会」がめざすもの 上・下	八重山毎日 8.12 ~8.13		1993
池原 真一	八重山群島波照間島の農業生産組織	琉球大学農学部学 術報告No.21		1974
石垣 繁	パイパティローマ説話の世界観①~②	八重山毎日新聞 7.22~7.29	八重山毎日新聞社	1955
石垣 久雄	波照間島から見た八重山の歴史 上 ・下	八重山日報 1.29 ~2.1		1993
石垣 博孝	石垣島の民家集落・波照間島の民家 集落	図説日本の町並み 12		1981
石堂 徳一	〈書評〉竹富町史-第十一巻資料編 (竹富町史編集室編)	沖縄タイムスタ刊 8.30	沖縄タイムス社	1994
石原ゼミナール戦 争体験記録研究会	もう一つの沖縄戦-マラリア地獄の 波照間島-		ひるぎ社	1983
石原 昌家	波照間島の地域的特徴と戦争体験	南島文化研究所所 報 No.14		1981
石原 昌家	波照間島の地域的特徴と戦争体験	地域研究シリーズ No.3		1982

著書名	書名(論文名)	収録雑誌・書名	発行所	発行年
泉水 英計	波照間島における東西双分観の批判的検討	常民民俗	成城大学	
一泉 知永	波照間・考(上)(下)	沖縄タイムス		1985
市川 重治	南島針突紀行		那覇出版社	1983
稲井 良介	ルポ 波照間(上)(中)(下)	朝日新聞 3.22~3.24	朝日新聞社	1994
伊波 龍	<其の後どうなっているのか>波照間島・孤児・壕ッ子	八重山文化 No.12		1947
岩崎 卓爾	与那国島ト波照間島及び尖閣列島	卓爾一卷全集	伝統と現代社	1974
岩崎 卓爾	<附録>与那国島と波照間及び尖閣諸島	ひるぎの一葉		1920
岩本 忠	波照間方言と関連して	京都産業大学国際言語科研究所所報 1-1		1980
岩本 忠	波照間方言の特徴的音声について	京都産業大学国際言語科研究所所報 1-1		1980
上杉 兼司	波照間島の蝶類相とその特徴	沖縄生物学会誌 No.22	沖縄生物学会	1984
上野 和男	波照間島の祖先祭祀と農耕儀礼—ムシャーマ行事を中心とする盆行事の考察—	国立歴史民俗博物館研究報告 第66集	国立歴史民俗博物館	1996
上原強/福地友紀 智/譜久村英二	波照間住民の受療パターン	特別研究小論文集 No.5	琉球大学保健学部	1978
上原強/福地友紀 智/譜久村英二	波照間住民の傷病とその処置方法—波照間島	特別研究小論文集 No.5	琉球大学保健学部	1978
浦崎 純	ああ波照間の五百人	死のエメラルドの海—八重山群島守備隊始末記	月刊沖縄社	1970
遠藤 庄治	人魚と津波	琉球新報 1.17	琉球新報社	1986
大柿哲朗/佐野一/ 杉浦正輝	波照間島の児童・生徒の発育、体格及び運動能力	九州体育抄録4-1		1978
大島 廣	南島の旅—波照間、与那国、その他(一)	「喜久里教達氏切抜集」(沖日報(42)昭和9年8月12日)		1934
大島 廣	南島の旅—波照間、与那国、その他	「喜久里教達氏切抜集」(日報(36)昭和9年8月18日)		1934
大島 廣	南島の旅—波照間、与那国、その他(五)	「喜久里教達氏切抜集」(日報(42)昭和9年8月15日)		1934
大島 廣	南島の旅—波照間、与那国、その他	「喜久里教達氏切抜集」(沖日報(38)昭和9年8月16日)		1934
大島 廣	南島の旅—波照間、与那国、その他	「喜久里教達氏切抜集」(沖日報(39)昭和9年8月17日)		1934

著書名	書名(論文名)	収録雑誌・書名	発行所	発行年
大城 学	波照間の祭祀と文芸—結願祭を中心に—	沖縄文化研究 10		1983
大竹 昭子	最果ての島—波照間島のムシャーマ	季刊銀花 第91号		1992
太田 好信	<ほん>波照間文化の構造—アウエハント著「波照間—南部琉球—島嶼文化における社会宗教的側面」	人類学 18-2		1987
太田英利/島村均/ 崎原英輝	八重山群島波照間島産サキシママダラの斑紋異常の一例	沖縄生物学会誌 No.24		1986
太田英利/山下晶子	オンナダゲヤモリの波照間島からの記録	沖縄生物学会誌 No.23		1985
大野 真男	琉球波照間方言の音対応と音変化	岩手大学教育学部 研究年報 48-2		1989
大野 眞男	琉球波照間島方言の助数詞—その形態と意味構造	琉球の方言 14 1989年度		1990
大浜 信賢	波照間逃避行	八重山の人頭税	三一書房	1971
大村 明雄	琉球列島波照間島産化石サンゴの放射年代に関する新知見	四紀研		1983
おきなわ学校劇研究会(編)	おきなわの民話劇 波照間物語(中学生)	おきなわの民話劇 沖縄時事出版		1995
沖縄県教育委員会	波照間の方言	琉球先島方言緊急 調査 第2集	沖縄県教育委員会	1975
沖縄県教育委員会	竹富町 与那国町の遺跡	沖縄県文化財調査 報告書 第29集	沖縄県教育委員会	1980
沖縄県教育委員会	下田原貝塚・大泊浜貝塚—第1・2・3次発掘調査報告—	沖縄県文化財調査 報告書 第74集	沖縄県教育委員会	1986
沖縄県教育委員会	八重山諸島の道	沖縄県歴史の道調査 報告書Ⅶ	沖縄県教育委員会	1990
沖縄県教育委員会	ぐすく—八重山諸島地域—	沖縄県文化財調査 報告書 第113集	沖縄県教育委員会	1994
沖縄国際大学南島文化研究所	第一次波照間調査に向けて	南島文化研究所所 報 No.10	沖縄国際大学南島文化研究所	1980
沖縄国際大学南島文化研究所	波照間第一次調査の概要	南島文化研究所所 報 No.10	沖縄国際大学南島文化研究所	1980
沖縄国際大学南島文化研究所	波照間島第二次調査の概要	南島文化研究所所 報 No.12	沖縄国際大学南島文化研究所	1981
沖縄国際大学南島文化研究所	波照間島第三次調査の概要	南島文化研究所所 報 No.13	沖縄国際大学南島文化研究所	1981
沖縄国際大学南島文化研究所	波照間島第四次調査の概要	南島文化研究所所 報 No.14	沖縄国際大学南島文化研究所	1981
沖縄国際大学南島文化研究所	波照間島調査報告書		沖縄国際大学南島文化研究所	1982
沖縄在波照間郷友会	創立三十周年 記念誌		沖縄在波照間郷友会	1992
沖縄総合事務局	波照間島	昭和52年度農業用水地下水調査水理解析業務報告(その3)		1978

著書名	書名(論文名)	収録雑誌・書名	発行所	発行年
沖縄大学沖縄学生文化協会	<黒島・波照間島調査報告>黒島・波照間島の父兄、児童生徒の生活及び教育環境	郷土 No.3	沖縄大学	1966
沖縄大学沖縄学生文化協会	(黒島・波照間島調査報告)	郷土 No.3	沖縄大学	1966
沖縄大学沖縄学生文化協会	<黒島・波照間島調査報告>黒島・波照間の先史遺跡概要	郷土 No.3	沖縄大学	1966
沖縄大学沖縄学生文化協会	<黒島・波照間島調査報告>島の概況行動の記録	郷土 No.3	沖縄大学	1966
沖縄大学沖縄学生文化協会	<黒島・波照間島調査報告>島の風俗・習慣	郷土 No.3	沖縄大学	1966
沖縄大学沖縄学生文化協会	<黒島・波照間島調査報告>島の伝説	郷土 No.3	沖縄大学	1966
沖縄大学沖縄学生文化協会	<黒島・波照間島調査報告>黒島・波照間の民芸品	郷土 No.3	沖縄大学	1966
沖縄タイムス	島からシリーズ・波照間島<上><中><下>	沖縄タイムス		1986
沖縄放送協会資料保存研究会	与那国島・波照間島	沖縄放送協会史	沖縄放送協会資料保存研究会	1982
沖村 雄二	波照間島の琉球層群	『琉球列島の地質学研究』No.3		1978
尾竹 俊亮	<さいはてレポート>西と南のさいはて与那国島・波照間島	青い海 No.21		1973
Omura, A	Uranium-series age of the Riukiu Limstone on Hateruma Island	south-western Ryukyus. Transactions and Proceedings of the Paleontological Society of Japan	New Series No.135	1985
海上保安庁水路部	5万分の1沿岸海の基本図説明書(波照間島)			1988
柏木 伸夫	南十字星のみえる島 波照間へ	『月刊むし』56		1975
加治工 真市	波照間方言の音韻研究	沖縄文化研究 83	法政大学沖縄文化研究所	1996
加藤 文哉	波照間に於ける神行事について	沖縄社会意識調査報告集(Ⅱ)		1982
金関 丈夫	波照間	叢書わが沖縄 No.3	木耳社	1971
金関 丈夫/國分直一	琉球波照間下田原貝塚調査報告		日本人類学会・日本民族学協会連合会大会記事9集	1955
金関 丈夫/國分直一	琉球波照間島下田原貝塚の発掘調査	台湾考古誌	法政大学出版局	1979
金関丈夫/國分直一/多和田真淳/永井正文	琉球波照間島下田原貝塚の発掘調査		水産大学校研究報告-人文学編9	1964

著書名	書名(論文名)	収録雑誌・書名	発行所	発行年
兼島 清	琉球諸島におけるリン鉱の産地と品質	『琉球大学文理学部紀要(理学)』No.6		1963
鎌倉 芳太郎	波照間島の民家	沖縄文化の遺宝	岩波書店	1982
加屋本 正一	波照間島の農耕と儀礼	八重山文化 No.4		1976
加屋本 正一	波照間島			1978
河名俊男/大城逸朗	八重山諸島・波照間島の地形と地質—平垣而の形成過程及び地殻変動についての予察—	沖縄県立博物館紀要 No.4		1978
河名俊男/大城逸朗	波照間島の地形と地質	琉球列島の地学研究 No.3	沖縄地学学会編	1978
河名俊男/中田高	サンゴ質津波堆積物の年代からみた琉球列島南部周辺海域における後期完新世の津波発生時期	『地学雑誌』Vol.103, No.4		1994
河村 只雄	<第3編 八重山文化の探究>波照間の納屋	南方文化の探究	創元社	1939
河村 只雄	<第3編 八重山文化の探究>波照間の乙女	南方文化の探究	創元社	1939
河村 只雄	<第3編 八重山文化の探究>波照間の拝所	南方文化の探究	創元社	1939
川本 純子	波照間の歴史における人頭税と移住	沖縄社会意識調査報告集(Ⅱ)		1982
岸本 義彦	南琉球の下田原式土器とその遺跡	史料編集室紀要 21	沖縄県立図書館史料編集室	1996
喜舎場 一隆	前近代における波照間島の民間療法	琉球大学法文学部紀要史学・地理学篇 No.26		1983
クライナー・ヨーゼフ	<波照間の秘密構造>神祭と神概念	日本人類学会・日本民族協会連合大会記録18集		1964
クライナー・ヨーゼフ	南西諸島における神観念・他界観の一考察	『沖縄文化』23号		1967
國分 直一	海島の思想—波照間の聖所	日本民族文化の研究		1972
酒井 卯作	波照間調査報告—沖縄八重山郡	日本民俗学 2-2		1954
酒井 卯作	波照間のお話し	民間伝承 21-5		1957
酒井 卯作	波照間のお嶽	民間伝承 21巻5号		1957
酒井 卯作	波照間島の粟の祭	南島研究 No.20		1979
酒井 卯作	八重山郡波照間島の船と気象(資料)	南島研究 No.24		1983
崎原 盛造	沖縄県における離島住民の受獄行動に関する研究—波照間島の事例—	民族衛生 47-1		1981
崎村 弘文	波照間島方言のアクセント体系	南海研紀要8-1		1987
下嶋 哲朗	波照間島	沖縄・聞き書きの旅	刊々堂出版社	1978
新城 祐吉	<沖縄通信>波照間島	えとのす No.2		1975
新城 祐吉	波照間の独特な姓氏の呼び方	えとのす No.2		1975

著書名	書名(論文名)	収録雑誌・書名	発行所	発行年
杉浦 正輝	沖縄県離島住民の保険医療情報の収集評価ならびにその対策に関する究一波照間島を事例として一		トヨタ財団助成 研究報告	1978
鈴木 正崇	波照間島の神話と儀礼	民族学研究		1977
鈴木 正崇	波照間の盆とムシャーマ	まつり通信 No.218		1979
住谷 一彦	<波照間の秘密構造>秘密集団の社会構造	日本人類学会・日本民族協会連合大会記録18集		1964
住谷 一彦/クラ イナー・ヨーゼフ	パティローマ一南海の孤島一	南西諸島の神観念	未来社	1977
住谷 一彦	波照間島の盆祭一調査日記抄一	南西諸島の神観念	未来社	1977
住谷 一彦	パティローマの神歌	文学 52巻6号		1984
関根 賢司	島に生きる不安一赤と青のフォーク ロア	琉球新報 6.4	琉球新報社	1978
タイムスリップin 琉球取材班	たいむすりっぷin琉球一「南嶋探検」 から100年一 18. パイパティロー マ南波照間伝説	琉球新報 5.2	琉球新報社	1993
高良 倉吉	パイパティローマ伝説の風景	コーラルウェイ 11・12月号	日本トランスオ ーシャン航空	1991
滝口 宏(編)	沖縄 八重山		校倉書房	1960
竹富町企画課(編)	竹富町勢要覧一大自然交響ランド一		竹富町	1995
竹富町誌編集委員 会	竹富町誌		竹富町役場	1974
竹富町史編集委員 会/町史編集室	竹富町史 第十一巻資料編 新聞集 成I		竹富町役場	1994
竹富町史編集委員 会編	竹富町史別巻三 写真集「ばいぬし まじま-写真にみる竹富町のあゆみ」	竹富町史別巻三	竹富町役場町史 編集室	1993
竹富町史編集室	竹富町史だより 第2号		竹富町史編集室	1992
嵩原 建二	波照間島の鳥類と哺乳類	沖縄県立博物館紀 要 第19号	沖縄県立博物館	1993
田畑 博子	波照間島の思想	沖縄文化 No.50		1978
多和田 真淳	八重山郡波照間島の植物	琉球政府林業試験 場研究報告 No.2	琉球政府経済局 林業試験場	1954
多和田 真淳	波照間島の植物	沖縄八重山	校倉書房	1960
千木 良芳範 宮城 邦治	波照間島および与那国島の真正クモ 類	HEPTATHELA 2(1)		1981
通商産業省英技術 院地質調査所	第5 図波照間島地質概略図	沖縄水資源開発調 査報告・八重山地 方	通商産業省英技 術院地質調査所	1973
通商産業省英技術 院地質調査所	第13 図波照間島地下水調査地点位 置図	沖縄水資源開発調 査報告・八重山地 方術院地質調査所	通商産業省英技	1973
堂前 亮平	波照間島一その地理的概況	地域研究シリーズ No.3		1982
通事 孝作	波照間の人口動態	会報 波照間文化 第3号	波照間文化協会	1994
通事 孝作	「歴史の道」を歩く 51. 祖平花道	琉球新報 12.19	琉球新報社	1993

著書名	書名(論文名)	収録雑誌・書名	発行所	発行年
登野原 武	南波照間(蘭嶼)の旅 上・下	八重山毎日 9.12 ～9.13		1993
友寄 英正	<八重山通信>ユイと若者の町-波照間島	青い海 No.68		1977
畠山 篤	波照間島のプーリン	南島文化研究所所報No.13		1981
畠山 篤	波照間島の豊年祭と祈年祭	地域研究シリーズNo.3		1982
長井 昌文	琉球波照間島々民の生体学的研究,	人類学研究 1-3, 4		1954
中川尚史/崎原永輝/島村均	キクガシラコウモリの波照間からの記録	沖縄生物学会誌 No.21		1983
仲田 善祥	波照間島の民俗芸能-ムシャーマーを中心として-	八重山の民俗芸能 No.1	沖縄県教育委員会	1979
仲地 哲夫	波照間島・戦前の暮らしと戦争体験	南島文化研究所所報 No.13		1981
仲地 哲夫	日露戦争と波照間島	地域と文化 第82号	ひるぎ社	1994
中鉢 良護	波照間の稲作覚え書き	会報 波照間文化 第3号	波照間文化協会	1994
仲村 雄二	波照間島の琉球層群	琉球列島の地学研究 No.3	沖縄地学学会編	1978
仲本 トシ	波照間の子供達	八重山文化 No.34		1949
仲本 信幸	波照間に伝わる気象予知について	八重山タイムズ 1.12～1.15	八重山タイムズ社	1965
仲本 信幸	日本最南端の波照間島 1	沖縄春秋 No.13		1974
仲本 信幸	日本最南端の波照間島 2	沖縄春秋 No.1		1974
仲本 信幸	波照間島に伝わる神話	虹 No.29		1976
仲本 信幸	回想録-ダイヤモンド婚式を記念して-		自費出版	1997
並本 浩美	波照間の人々の結びつきについて	沖縄社会意識調査報告集(II)		1982
南島研究	天皇と波照間島	No.4		1966
新納 義馬	竹富町波照間島の御嶽林	沖縄県社寺・御嶽林調査報 4	沖縄県教育委員会	1981
西澤 喜子	波照間島のムシャーマ	琉球新報 10.2		1986
西角井 正大	はてるま	芸能復興 No.11・12		1956
野原 全勝	波照間島の漁業	地域研究シリーズ No.3		1932
野原 全勝	波照間島の漁業	南島文化研究所所報 No.13		1981
野原 敏弘	波照間の水祭-ニライカナイの信仰が生きる	琉球新報 1.17		1988
畠山 篤	波照間の豊年祭と祈年祭	波照間島調査報告書		1982
波照間小学校創立百周年記念事業期成会記念誌編集委員会	創立百周年記念誌 波の子		竹富町立波照間小学校	1995

著書名	書名(論文名)	収録雑誌・書名	発行所	発行年
波照間島民俗芸能保存会	波照間のムシャーマ		波照間島民俗芸能保存会	1982
比嘉 重徳	波照間島・波照間節	八重山の研究	大城活版所	1915
比嘉 政夫	崩壊する村落社会—波照間島	新沖縄文学 No.26		1974
古川 博恭/富田 友幸	沖縄県波照間島の水質地質	琉球列島地質学研究 No.3		1978
望郷・沖縄No.3	ハテルマギリ	望郷・沖縄No.3	書籍株式会社	1981
堀信行/田村明子/太田陽子	琉球列波照間島の離水サンゴ礁地形とその変形	日本地学学会予稿集No.15		1978
毎日新聞特別報道部取材班	沖縄・戦争とマラリア事件—南の島の強制疎開—		東方出版	1994
真喜志 金造	波照間島及び久高島に関して	琉球大学保険学医学雑誌		1982
又吉 盛清	楽土・南波照間と台湾	琉球新報 4.12	琉球新報社	1989
松永 伍一	波照間島の潮騒	青い海 No.81春季号		1979
松丸 国照・瀬名波 任	波照間島の更新世有孔虫について	『琉球列島の地質学研究』No.4		1979
馬淵 東一	波照間島その他の氏子組織	日本民族学会報 No.41		1965
馬淵 東一	波照間島その他氏子組織	沖縄文化論叢 No.3	平凡社	1972
馬淵 東一	波照間島その他氏子組織	馬淵東一作集 No.1	1974	
宮城 邦治	波照間島の植生概観と動物相について	南島文化研究所所報 No.14		1981
宮城 邦治	波照間島の植生概観と動物相	地域研究シリーズ No.3		1982
宮良 當壯	波照間島の話	三田評論 No329.330		1925
宮良 當壯	波照間島の話	南島叢考	一誠社	1934
宮良 當壯	波照間島	若い人 No.1		1949
宮良 和正	<村から村>波照間島	沖縄春秋 No.21		1975
宮良作(文)/宮良 瑛子(絵)	忘れな石沖縄・戦争マラリア碑		草の根出版会	1992
宮良 高司	波照間島における御嶽の諸形態	東洋大学大学院紀要 No.1		1964
宮良 高弘	波照間島における御嶽の諸形態	日本人類学会・日本民族協会連合大会記録18集		1964
宮良 高弘	波照間島民俗誌	琉球新報 1968.9.3~69.4.2	琉球新報社	1968~69
宮良 高弘	波照間島民俗誌	叢書わが沖縄 別巻		1972
安嶺 鋭二	波照間島のこと	外語文学 No.9	大阪外国語大学内外語文学会	1972
立命館大学探検部	波照間島 1970夏	沖縄八重山郡	立命館大学探検部(京都)	1971
琉球先島方言の総合的研究	竹富町の文法—竹富・西表祖納・黒島・波照間・小浜・鳩間—	琉球先島方言の総合的研究	明治書院	1967

著書名	書名(論文名)	収録雑誌・書名	発行所	発行年
琉球政府文化財保護委員会	<指定文化財解説>下田原貝塚 文化財要覧		琉球政府文化財保護委員会	1958
琉球大学地理研究クラブ	波照間島調査報告	琉大地理 14号		1980
琉球大学保健学部	波照間島と佐敷村における65才以上令者の意識調査より	特別研究小論文集 No.5	琉球大学保健学部	1978
忘勿石之碑建立事業期成会編	記念誌 忘勿石	忘勿石之碑建立事業期成会		1993
ワッカ・モニカ	波照間島の世界観における二元論 批判的考察する			1993
ワッカ・モニカ	八重山群島波照間島における「オナリ神信仰—「オナリ神信仰」論の諸問題—	西日本宗教学雑誌第17号		1995

〔注1〕 文献目録は竹富町史編集室の協力を得て、博物館で作成した。

〔注2〕 同一著者の場合は発行年順に配列した。



波照間島総合調査報告書

発行 1998年3月31日
編集発行 沖縄県立博物館
〒903-0823 那覇市首里大中町1-1
TEL (098) 884-2243
TEL (098) 886-4353
